

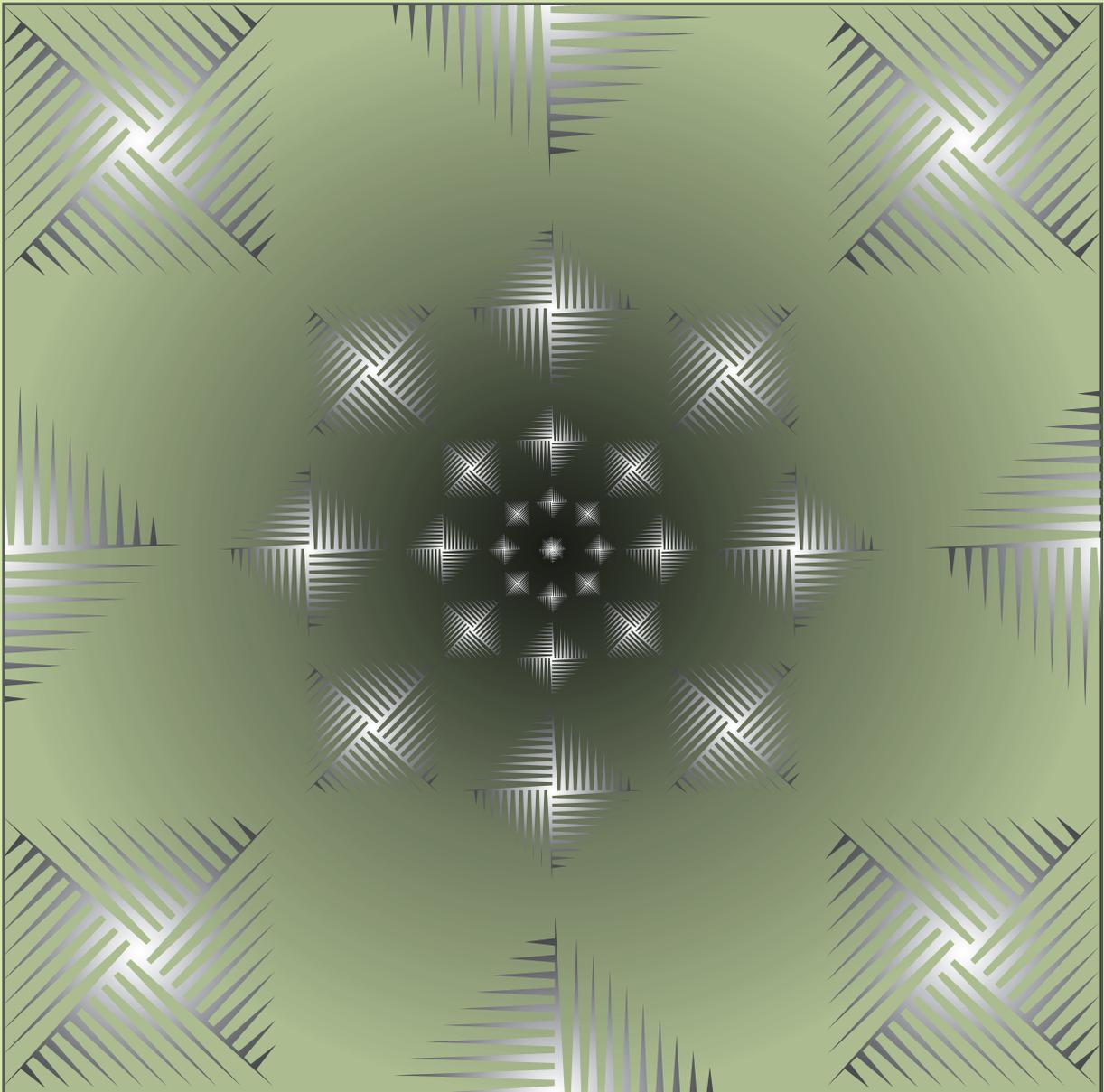
---

2010年度

---

# シラバス

# 経済学部



秋学期は配布しません。1年間必ず保管すること。

---

獨協大学

シラバスは、科目の担当教員が学期ごとの授業計画、講義概要、評価方法などを学生に周知することにより、受講する際の指針とし、授業の理解を深めることを目的に作成されたものです。

シラバスをよく読んで、計画的な履修登録をしてください。

## 【シラバスの見方】

### 1. 目次について

#### ①シラバスページの検索方法

ページ端にある**インデックス**で自分の学科に該当する目次ページを探してください。

目次の科目は、授業科目表(学則別表)と同じ順序で掲載しています。

※入学年度によっては授業科目表とシラバスの順序が一致していない場合があります。ご注意ください。

#### ②履修できない科目

「履修不可」の欄に所属学部・学科名が記されている場合は、その科目を履修することができません。

〈略称説明〉

外： 外国語学部

養： 国際教養学部

経： 経済学部

法： 法学部

独： ドイツ語学科

済： 経済学科

律： 法律学科

英： 英語学科

営： 経営学科

国： 国際関係法学科

仏： フランス語学科

総： 総合政策学科

交： 交流文化学科

言： 言語文化学科

### 2. シラバスページの見方(右図参照)

#### ①入学年度

08年度以降・・・2008～2010年度入学者

01年度以降・・・2001～2010年度入学者

03年度以降・・・2003～2010年度入学者

01～02年度・・・2001～2002年度入学者

01～04年度・・・2001～2004年度入学者

01～07年度・・・2001～2007年度入学者

①	②	担当者
講義目的、講義概要		授業計画
③	④	
<b>春学期</b>		
テキスト、参考文献		評価方法
⑤	⑥	

#### ②科目名

2003年度以降の学則別表にある名称を基本に表記してあります。

※2002年度以前入学者は、一部の「学科基礎科目群」(外国語科目含む)が「全学共通授業科目」との合併授業になります。教務課経済学部係窓口で一覧表を配布しますので、履修を希望する場合は一覧表で確認をしてください。

①	②	担当者
講義目的、講義概要		授業計画
③	④	
<b>秋学期</b>		
テキスト、参考文献		評価方法
⑤	⑥	

#### ③授業の目的や講義全体の説明、学生への要望

#### ④学期の授業計画

各回ごとの講義のテーマ、内容を記載しています。

#### ⑤授業で使用するテキスト、参考文献

#### ⑥評価方法

### 3. 注意事項

#### ①履修条件

担当教員が履修者に対して、その他の科目の履修や単位の修得などを条件としている科目があります。

必ず「講義目的、講義概要」の欄(上図③の部分)および『授業時間割表』で確認した上で、履修登録をしてください。

#### ②定員

経済学部の科目は、学習環境および防災上などの観点から、「全学共通授業科目」と同様に定員を設けています。各科目の定員は、『授業時間割表』を参照してください。

# 2003～2010年度入学者用 経済学科

## <<学科基礎科目>>

### ◇外国語◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日 時限	履修不可	ページ
インターナショナルコミュニケーションⅠa	春	各担当教員		外 養 法	15
インターナショナルコミュニケーションⅠb	秋	各担当教員		外 養 法	15
インターナショナルコミュニケーションⅡa	春	各担当教員		外 養 法	16
インターナショナルコミュニケーションⅡb	秋	各担当教員		外 養 法	16

### ◇経済・経営入門◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日 時限	履修不可	ページ
大学入門講座(経済学科)〈08～10年度入学者のみ〉	春	全 載旭	水 1	営 外 養 法	17
クラスセミナー〈08～10年度入学者のみ〉	秋	各担当教員	水 1	外 養 法	18
経済学a(経済学科生用)	春	井上 智弘	水 2	営 外 養 法	19
経済学b(経済学科生用)	秋	井上 智弘	水 2	営 外 養 法	19
経済学a(経済学科生用)	春	倉橋 透	水 2	営 外 養 法	20
経済学b(経済学科生用)	秋	倉橋 透	水 2	営 外 養 法	20
経済学b(経済学科生用)	春	小林 進	水 2	営 外 養 法	21
経済学a(経済学科生用)	秋	小林 進	水 2	営 外 養 法	21
経済学a(経済学科生用)	春	浜本 光紹	水 2	営 外 養 法	22
経済学b(経済学科生用)	秋	浜本 光紹	水 2	営 外 養 法	22
経済学a(経済学科生用)	春	益山 光央	水 2	営 外 養 法	23
経済学b(経済学科生用)	秋	益山 光央	水 2	営 外 養 法	23
経済学a(経済学科生用)	春	山本 美樹子	水 2	営 外 養 法	24
経済学b(経済学科生用)	秋	山本 美樹子	水 2	営 外 養 法	24
統計学a	春	富田 幸弘	月 2		25
統計学b	秋	富田 幸弘	月 2		25
統計学a	春	富田 幸弘	月 3		25
統計学b	秋	富田 幸弘	月 3		25
統計学a	春	本田 勝	火 2		26
統計学b	秋	本田 勝	火 2		26
統計学a	春	本田 勝	火 3		26
統計学b	秋	本田 勝	火 3		26
統計学a	春	松井 敬	火 1		27
統計学b	秋	松井 敬	火 1		27
統計学a	春	松井 敬	火 2		27
統計学b	秋	松井 敬	火 2		27
統計学b(経済学科生再履修者用)	春	富田 幸弘	月 5	営 外 養 法	28
統計学a(経済学科生再履修者用)	秋	富田 幸弘	月 5	営 外 養 法	28
コンピュータ入門a	春	各担当教員		外 養 法	29
コンピュータ入門b	秋	各担当教員		外 養 法	29
プレゼンテーション技法	秋	大和田 勇人	金 2		30
経営学a(経済学科生用)	春	上坂 卓郎	金 2	営	31
経営学b(経済学科生用)	秋	上坂 卓郎	金 2	営	31
簿記原理a	春	飯塚 由実	月 2		32
簿記原理b	秋	飯塚 由実	月 2		32
簿記原理b	春	井出 健二郎	火 2		33
簿記原理a	秋	井出 健二郎	火 2		33
簿記原理a	春	内倉 滋	月 2		34
簿記原理b	秋	内倉 滋	月 2		34
簿記原理a	春	香取 徹	月 2		35
簿記原理b	秋	香取 徹	月 2		35
簿記原理a	春	金井 繁雅	月 4		36
簿記原理b	秋	金井 繁雅	月 4		36

簿記原理a	春	中村 泰將	月	2	37
簿記原理b	秋	中村 泰將	月	2	37
簿記原理a	春	細田 哲	火	1	38
簿記原理b	秋	細田 哲	火	1	38
簿記原理a	春	百瀬 房徳	木	1	39
簿記原理b	秋	百瀬 房徳	木	1	39
簿記原理a	春	湯田 雅夫	火	1	40
簿記原理b	秋	湯田 雅夫	火	1	40

◇関連科目◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
数学a	春	高木 悟	木	3	外 養 法	41
数学b	秋	高木 悟	木	3	外 養 法	41
数学a	春	高木 悟	木	4	外 養 法	41
数学b	秋	高木 悟	木	4	外 養 法	41
高齢化社会論a	春	奥山 正司	月	1	法	42
高齢化社会論b	秋	奥山 正司	月	1	法	42
精神衛生論a	春	中野 隆史	火	4		43
精神衛生論b	秋	中野 隆史	火	4		43
医療・福祉概論a	春	石井 加代子	木	4	法	44
医療・福祉概論b	秋	石井 加代子	木	4	法	44
現代文化論a	春	柴崎 信三	金	2	外 養 法	45
現代文化論b	秋	柴崎 信三	金	2	外 養 法	45

<<学科専門科目>>

◇経済外国語◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
経済外国語 I a	春	有吉 秀樹	木	3	営 外 養 法	46
経済外国語 I b	秋	有吉 秀樹	木	3	営 外 養 法	46
経済外国語 I a	春	飯塚 由実	月	1	営 外 養 法	47
経済外国語 I b	秋	飯塚 由実	月	1	営 外 養 法	47
経済外国語 I a	春	井出 健二郎	火	1	営 外 養 法	48
経済外国語 I b	秋	井出 健二郎	火	1	営 外 養 法	48
経済外国語 I a	春	伊藤 爲一郎	木	4	営 外 養 法	49
経済外国語 I b	秋	伊藤 爲一郎	木	4	営 外 養 法	49
経済外国語 I a	春	奥山 正司	月	2	営 外 養 法	50
経済外国語 I b	秋	奥山 正司	月	2	営 外 養 法	50
経済外国語 I a	春	香取 徹	水	1	営 外 養 法	51
経済外国語 I b	秋	香取 徹	水	1	営 外 養 法	51
経済外国語 I a	春	金井 繁雅	月	5	営 外 養 法	52
経済外国語 I b	秋	金井 繁雅	月	5	営 外 養 法	52
経済外国語 I a	春	上坂 卓郎	水	1	営 外 養 法	53
経済外国語 I b	秋	上坂 卓郎	水	1	営 外 養 法	53
経済外国語 I a	春	倉橋 透	金	2	営 外 養 法	54
経済外国語 I b	秋	倉橋 透	金	2	営 外 養 法	54
経済外国語 I a	春	黒川 文子	木	4	営 外 養 法	55
経済外国語 I b	秋	黒川 文子	木	4	営 外 養 法	55
経済外国語 I a	春	黒木 亮	木	2	営 外 養 法	56
経済外国語 I b	秋	黒木 亮	木	2	営 外 養 法	56
経済外国語 I a	春	小林 進	金	2	営 外 養 法	57
経済外国語 I b	秋	小林 進	金	2	営 外 養 法	57
経済外国語 I a	春	小林 哲也	火	2	営 外 養 法	58
経済外国語 I b	秋	小林 哲也	火	2	営 外 養 法	58
経済外国語 I a	春	齋藤 正章	月	5	営 外 養 法	59
経済外国語 I b	秋	齋藤 正章	月	5	営 外 養 法	59
経済外国語 I a	春	塩田 尚樹	月	1	営 外 養 法	60
経済外国語 I b	秋	塩田 尚樹	月	1	営 外 養 法	60
経済外国語 I a	春	高安 健一	金	2	営 外 養 法	61
経済外国語 I b	秋	高安 健一	金	2	営 外 養 法	61

経済外国語 I a	春	中村 泰將	月	1	営	外	養	法	62
経済外国語 I b	秋	中村 泰將	月	1	営	外	養	法	62
経済外国語 I a	春	波形 昭一	火	1	営	外	養	法	63
経済外国語 I b	秋	波形 昭一	火	1	営	外	養	法	63
経済外国語 I a	春	浜本 光紹	月	1	営	外	養	法	64
経済外国語 I b	秋	浜本 光紹	月	1	営	外	養	法	64
経済外国語 I a	春	深江 敬志	金	3	営	外	養	法	65
経済外国語 I b	秋	深江 敬志	金	3	営	外	養	法	65
経済外国語 I a	春	藤山 英樹	木	5	営	外	養	法	66
経済外国語 I b	秋	藤山 英樹	木	5	営	外	養	法	66
経済外国語 I a	春	本田 浩邦	月	2	営	外	養	法	67
経済外国語 I b	秋	本田 浩邦	月	2	営	外	養	法	67
経済外国語 I a	春	益山 光央	木	1	営	外	養	法	68
経済外国語 I b	秋	益山 光央	木	1	営	外	養	法	68
経済外国語 I a	春	松本 栄次	火	2	営	外	養	法	69
経済外国語 I b	秋	松本 栄次	火	2	営	外	養	法	69
経済外国語 I a	春	御園生 眞	水	2	営	外	養	法	70
経済外国語 I b	秋	御園生 眞	水	2	営	外	養	法	70
経済外国語 I a	春	百瀬 房徳	火	3	営	外	養	法	71
経済外国語 I b	秋	百瀬 房徳	火	3	営	外	養	法	71
経済外国語 I a	春	森永 卓郎	木	3	営	外	養	法	72
経済外国語 I b	秋	森永 卓郎	木	3	営	外	養	法	72
経済外国語 I a	春	山越 徳	火	2	営	外	養	法	73
経済外国語 I b	秋	山越 徳	火	2	営	外	養	法	73
経済外国語 I a	春	山下 裕歩	火	3	営	外	養	法	74
経済外国語 I b	秋	山下 裕歩	火	3	営	外	養	法	74
経済外国語 I a	春	山本 美樹子	月	2	営	外	養	法	75
経済外国語 I b	秋	山本 美樹子	月	2	営	外	養	法	75
経済外国語 I a	春	湯田 雅夫	火	2	営	外	養	法	76
経済外国語 I b	秋	湯田 雅夫	火	2	営	外	養	法	76
経済外国語 I a	春	米山 昌幸	水	1	営	外	養	法	77
経済外国語 I b	秋	米山 昌幸	水	1	営	外	養	法	77
経済外国語 I a(中国語)	春	全 載旭	火	1	営	外	養	法	78
経済外国語 I b(中国語)	秋	全 載旭	火	1	営	外	養	法	78
経済外国語 I a(留学生用)	春	J. ブローガン	月	4	営	外	養	法	79
経済外国語 I b(留学生用)	秋	J. ブローガン	月	4	営	外	養	法	79
経済外国語 I a(留学生用)	春	J. ブローガン	月	5	営	外	養	法	79
経済外国語 I b(留学生用)	秋	J. ブローガン	月	5	営	外	養	法	79
経済外国語 I b(再履修者用)	春	細田 哲	水	2	営	外	養	法	80
経済外国語 I b(再履修者用)	春	本田 浩邦	月	1	営	外	養	法	81
外書講読a<08年度入学者>	春	岡村 国和	木	3		外	養	法	82
外書講読b<08年度入学者>	秋	岡村 国和	木	3		外	養	法	82
経済外国語 II a<01～07年度入学者>	春	岡村 国和	木	3	営	外	養	法	82
経済外国語 II b<01～07年度入学者>	秋	岡村 国和	木	3	営	外	養	法	82
外書講読a<08年度入学者>	春	野村 容康	金	2		外	養	法	83
外書講読b<08年度入学者>	秋	野村 容康	金	2		外	養	法	83
経済外国語 II a<01～07年度入学者>	春	野村 容康	金	2	営	外	養	法	83
経済外国語 II b<01～07年度入学者>	秋	野村 容康	金	2	営	外	養	法	83
外書講読a(中国語)<08年度入学者>	春	全 載旭	水	2		外	養	法	84
外書講読b(中国語)<08年度入学者>	秋	全 載旭	水	2		外	養	法	84
経済外国語 II a(中国語)<01～07年度入学者>	春	全 載旭	水	2	営	外	養	法	84
経済外国語 II b(中国語)<01～07年度入学者>	秋	全 載旭	水	2	営	外	養	法	84

◇経済理論・経済学史◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
マクロ経済学a	春	塩田 尚樹	火	1	営	85
マクロ経済学b	秋	塩田 尚樹	火	1	営	85
マクロ経済学a	春	山下 裕歩	月	1	営	86
マクロ経済学b	秋	山下 裕歩	月	1	営	86

ミクロ経済学a	春	小林 進	金	3	営	87
ミクロ経済学b	秋	小林 進	金	3	営	87
ミクロ経済学a	春	藤山 英樹	木	1	営	88
ミクロ経済学b	秋	藤山 英樹	木	1	営	88
経済学史a	春	黒木 亮	木	3		89
経済学史b	秋	黒木 亮	木	3		89
経済変動論a	春	山下 裕歩	金	1		90
経済変動論b	秋	山下 裕歩	金	1		90
経済社会学a	春	森永 卓郎	火	1		91
経済社会学b	秋	森永 卓郎	火	1		91
経済哲学a<01~07年度入学者>		本年度休講				
経済哲学b<01~07年度入学者>		本年度休講				
経済思想a<08年度入学者>		本年度休講				
経済思想b<08年度入学者>		本年度休講				
ゲーム理論a<08年度入学者>		本年度休講				
ゲーム理論b<08年度入学者>		本年度休講				

◇経済統計・計量経済◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
経済統計論a		本年度休講				
経済統計論b		本年度休講				
計量経済学a	春	藤山 英樹	木	4		92
計量経済学b	秋	藤山 英樹	木	4		92

◇経済政策◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
経済政策論a	春	阿部 正浩	木	2	営	法 93
経済政策論b	秋	阿部 正浩	木	2	営	法 93
経済開発論a	春	高安 健一	月	4		94
経済開発論b	秋	高安 健一	月	4		94
環境政策論a	春	塩田 尚樹	水	1		法 95
環境政策論b	秋	塩田 尚樹	水	1		法 95

◇経済史◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
日本経済史a	春	高柳 友彦	金	1	営	96
日本経済史b	秋	高柳 友彦	金	1	営	96
日本社会史a	春	新井 孝重	火	1		97
日本社会史b	秋	新井 孝重	火	1		97
東洋経済史a		本年度休講				
東洋経済史b		本年度休講				
西洋経済史a	春	御園生 眞	火	4		98
西洋経済史b	秋	御園生 眞	火	4		98

◇国際経済◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
国際経済論a	春	益山 光央	火	3	営	言 養 法 99
国際経済論b	秋	益山 光央	火	3	営	言 養 法 99
国際金融論a	春	山本 美樹子	月	3		法 100
国際金融論b	秋	山本 美樹子	月	3		法 100

◇地域経済◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
日本経済論a	春	波形 昭一	火	5	営	言 養 法 101
日本経済論b	秋	波形 昭一	火	5	営	言 養 法 101
アメリカ経済論a	春	本田 浩邦	月	3		102
アメリカ経済論b	秋	本田 浩邦	月	3		102
ラテンアメリカ経済論a	春	松本 栄次	月	2		103
ラテンアメリカ経済論b	秋	松本 栄次	月	2		103

西ヨーロッパ経済論a		本年度休講					
西ヨーロッパ経済論b		本年度休講					
東ヨーロッパ経済論a		本年度休講					
東ヨーロッパ経済論b		本年度休講					
東アジア・中国経済論a	春	全 載旭	月 2		言		104
東アジア・中国経済論b	秋	全 載旭	月 2		言		104
オセアニア経済論a		本年度休講					
オセアニア経済論b		本年度休講					
アフリカ経済論a	春	千代浦 昌道	木 2				105
アフリカ経済論b	秋	千代浦 昌道	木 2				105
東南アジア経済論a	春	高安 健一	金 1		言 養		106
東南アジア経済論b	秋	高安 健一	金 1		言 養		106
中東経済論a	春	平井 文子	金 2				107
中東経済論b	秋	平井 文子	金 2				107

◇金融経済◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日 時限	履修不可	ページ
金融経済論a	春	斉藤 美彦	金 1	営	108
金融経済論b	秋	斉藤 美彦	金 1	営	108
金融システム論a	春	斉藤 美彦	水 2		109
金融システム論b	秋	斉藤 美彦	水 2		109

◇財政◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日 時限	履修不可	ページ
財政学a	春	野村 容康	木 3	営 法	110
財政学b	秋	野村 容康	木 3	営 法	110
公共経済学a	春	伊藤 爲一郎	月 2		111
公共経済学b	秋	伊藤 爲一郎	月 2		111
日本財政論a<01～07年度入学者>	春	深江 敬志	金 4		112
日本財政論b<01～07年度入学者>	秋	深江 敬志	金 4		112
地方財政論a	春	伊藤 爲一郎	木 3		法 113
地方財政論b	秋	伊藤 爲一郎	木 3		法 113

◇環境・都市・経済地理◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日 時限	履修不可	ページ
環境経済学a	春	浜本 光紹	火 2		114
環境経済学b	秋	浜本 光紹	火 2		114
都市経済学a	春	倉橋 透	金 1		法 115
都市経済学b	秋	倉橋 透	金 1		法 115
経済地理学a	春	犬井 正	火 2		116
経済地理学b	秋	犬井 正	火 2		116
交通経済論a		本年度休講			
交通経済論b		本年度休講			

◇産業経済◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日 時限	履修不可	ページ
産業政策論a		本年度休講			
産業政策論b		本年度休講			
産業組織論a	春	井上 智弘	水 3	営	117
産業組織論b	秋	井上 智弘	水 3	営	117
産業構造論a	春	山越 徳	木 1		118
産業構造論b	秋	山越 徳	木 1		118

◇労働・社会保障◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日 時限	履修不可	ページ
社会保障論a<05年度入学者～>	春	石井 加代子	木 5		119
社会保障論b<05年度入学者～>	秋	石井 加代子	木 5		119
社会政策a<01～04年度入学者>	春	石井 加代子	木 5		119
社会政策b<01～04年度入学者>	秋	石井 加代子	木 5		119

労働経済学a	春	森永 卓郎	木	1		120
労働経済学b	秋	森永 卓郎	木	1		120

◀◀関連専門科目▶▶

◇経営・会計◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
経営学原理a	春	岡部 康弘	木	3	営	130
経営学原理b	秋	岡部 康弘	木	3	営	130
経営学原理a	春	黒川 文子	火	4	営	131
経営学原理b	秋	黒川 文子	火	4	営	131
企業論a	春	平井 岳哉	月	2	営	146
企業論b	秋	平井 岳哉	月	2	営	146
会計学a	春	内倉 滋	火	2	法	121
会計学b	秋	内倉 滋	火	2	法	121

◇統計・情報科学◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
応用統計学a	春	本田 勝	木	2	営	163
応用統計学b	秋	本田 勝	木	2	営	163
標本調査論a	春	松井 敬	月	2	営	164
標本調査論b	秋	松井 敬	月	2	営	164
データベース論a	春	堀江 郁美	月	2	営	165
データベース論b	秋	堀江 郁美	月	2	営	165
データベース論a	春	堀江 郁美	金	4	営	165
データベース論b	秋	堀江 郁美	金	4	営	165
コンピュータシミュレーション論a	春	富田 幸弘	水	1	営	166
コンピュータシミュレーション論b	秋	富田 幸弘	水	1	営	166
マルチメディア論a	春	大和田 勇人	金	3	営	167
マルチメディア論b	秋	大和田 勇人	金	3	営	167
マルチメディア論a	春	立田 ルミ	水	2	営	168
マルチメディア論b	秋	立田 ルミ	水	2	営	168
マルチメディア論a	春	森 園子	水	4	営	169
マルチメディア論b	秋	森 園子	水	4	営	169
プログラミング論a	春	加藤 尚吾	月	1	営 言	172
プログラミング論b	秋	加藤 尚吾	月	1	営 言	172
プログラミング論a	春	立田 ルミ	水	1	営 言	173
プログラミング論b	秋	立田 ルミ	水	1	営 言	173
プログラミング論a	春	堀江 郁美	金	2	営 言	174
プログラミング論b	秋	堀江 郁美	金	2	営 言	174
プログラミング論a	春	森 園子	水	3	営 言	175
プログラミング論b	秋	森 園子	水	3	営 言	175

◇政治・法律◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
法学a	春	小川 佳子	火	5	外 養 法	185
法学b	秋	小川 佳子	火	5	外 養 法	185
政治学総論a	春	杉田 孝夫	木	2	外 養 法	186
政治学総論b	秋	杉田 孝夫	木	2	外 養 法	186
民法a(bとセット履修)	春	遠藤 研一郎	木	1	法	187
民法b(aとセット履修)	春	遠藤 研一郎	木	2	法	187
商法a	春	潘 阿憲	水	5	法	188
商法b	秋	潘 阿憲	水	5	法	188

◇総合講座・特殊講義◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
総合講座a	春	経済学部	水	3		190
総合講座b	秋	経済学部	水	3		190
特殊講義a(経済学入門)	春	阿部 正浩	火	1	法	191
特殊講義b(経済学入門)	秋	阿部 正浩	火	1	法	191

特殊講義a(経営学科で何が学べるか?)	春	経営学科	水	3	192
特殊講義a(日本財政論<08年度入学者~>	春	深江 敬志	金	4	112
特殊講義b(日本財政論<08年度入学者~>	秋	深江 敬志	金	4	112
特殊講義a(金融資産運用論)	春	山崎 元	木	3	193
特殊講義a(金融資産運用論)	秋	山崎 元	木	3	193
特殊講義a(会社と社会の歩き方)	春	山崎 元	木	5	194
特殊講義a(会社と社会の歩き方)	秋	山崎 元	木	5	194
特殊講義a(モノ作りと環業革命 2010)	春	山根 一真	月	3	195
特殊講義b(モノ作りと環業革命 2010)	秋	山根 一真	月	3	195
特殊講義a(知のデジタル仕事術 2010)	春	山根 一真	月	5	196
特殊講義b(知のデジタル仕事術 2010)	秋	山根 一真	月	5	196
特殊講義b(資本市場の役割と証券投資)	秋	経済学部	水	4	197

◇留学生◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
日本事情a,b<01~07年度入学者>		守田 逸人	木	4		198
日本語 I a,b<01~07年度入学者>		各担当教員				198
日本語 II a,b<01~07年度入学者>		各担当教員				198
歴史と文化2(日本事情1,2)<08年度入学者~>		守田 逸人	木	4		198
日本語(総合 I Aa,b/総合 I Ba,b/総合 I Ca,b) <08年度入学者~>		各担当教員				198
日本語(総合 II a,b)<08年度入学者~>		各担当教員				198

# 2003～2010年度入学者用 経営学科

## <<学科基礎科目>>

### ◇外国語◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日 時限	履修不可	ページ
インターナショナルコミュニケーションⅠa	春	各担当教員		外 養 法	15
インターナショナルコミュニケーションⅠb	秋	各担当教員		外 養 法	15
インターナショナルコミュニケーションⅡa	春	各担当教員		外 養 法	16
インターナショナルコミュニケーションⅡb	秋	各担当教員		外 養 法	16

### ◇経営・経済入門◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日 時限	履修不可	ページ
大学入門講座(経営学科)〈08～10年度入学者のみ〉	春	平井 岳哉	水 2	済 外 養 法	17
クラスセミナー〈08～10年度入学者のみ〉	秋	各担当教員	水 2	外 養 法	18
経営学a(経営学科生用)	春	有吉 秀樹	水 1	済 外 養 法	122
経営学b(経営学科生用)	秋	有吉 秀樹	水 1	済 外 養 法	122
経営学a(経営学科生用)	春	岡部 康弘	水 1	済 外 養 法	123
経営学b(経営学科生用)	秋	岡部 康弘	水 1	済 外 養 法	123
経営学a(経営学科生用)	春	日下 泰夫	水 1	済 外 養 法	124
経営学b(経営学科生用)	秋	日下 泰夫	水 1	済 外 養 法	124
経営学a(経営学科生用)	春	黒川 文子	水 1	済 外 養 法	125
経営学b(経営学科生用)	秋	黒川 文子	水 1	済 外 養 法	125
経営学a(経営学科生用)	春	小林 哲也	水 1	済 外 養 法	126
経営学b(経営学科生用)	秋	小林 哲也	水 1	済 外 養 法	126
経営学a(経営学科生用)	春	平井 岳哉	水 1	済 外 養 法	127
経営学b(経営学科生用)	秋	平井 岳哉	水 1	済 外 養 法	127
簿記原理a	春	飯塚 由実	月 2		32
簿記原理b	秋	飯塚 由実	月 2		32
簿記原理b	春	井出 健二郎	火 2		33
簿記原理a	秋	井出 健二郎	火 2		33
簿記原理a	春	内倉 滋	月 2		34
簿記原理b	秋	内倉 滋	月 2		34
簿記原理a	春	香取 徹	月 2		35
簿記原理b	秋	香取 徹	月 2		35
簿記原理a	春	金井 繁雅	月 4		36
簿記原理b	秋	金井 繁雅	月 4		36
簿記原理a	春	中村 泰將	月 2		37
簿記原理b	秋	中村 泰將	月 2		37
簿記原理a	春	細田 哲	火 1		38
簿記原理b	秋	細田 哲	火 1		38
簿記原理a	春	百瀬 房徳	木 1		39
簿記原理b	秋	百瀬 房徳	木 1		39
簿記原理a	春	湯田 雅夫	火 1		40
簿記原理b	秋	湯田 雅夫	火 1		40
コンピュータ入門a	春	各担当教員		外 養 法	29
コンピュータ入門b	秋	各担当教員		外 養 法	29
プレゼンテーション技法	秋	大和田 勇人	金 2		30
経済学a(経営学科生用)	春	黒木 亮	月 1	済 外 養 法	128
経済学b(経営学科生用)	秋	黒木 亮	月 1	済 外 養 法	128
経済学a(経営学科生用)	春	米山 昌幸	木 1	済 外 養 法	129
経済学b(経営学科生用)	秋	米山 昌幸	木 1	済 外 養 法	129
統計学a	春	富田 幸弘	月 2		25
統計学b	秋	富田 幸弘	月 2		25
統計学a	春	富田 幸弘	月 3		25
統計学b	秋	富田 幸弘	月 3		25

統計学a	春	本田 勝	火	2	26
統計学b	秋	本田 勝	火	2	26
統計学a	春	本田 勝	火	3	26
統計学b	秋	本田 勝	火	3	26
統計学a	春	松井 敬	火	1	27
統計学b	秋	松井 敬	火	1	27
統計学a	春	松井 敬	火	2	27
統計学b	秋	松井 敬	火	2	27

◇関連科目◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
数学a	春	高木 悟	木	3	外 養 法	41
数学b	秋	高木 悟	木	3	外 養 法	41
数学a	春	高木 悟	木	4	外 養 法	41
数学b	秋	高木 悟	木	4	外 養 法	41
高齢化社会論a	春	奥山 正司	月	1	法	42
高齢化社会論b	秋	奥山 正司	月	1	法	42
精神衛生論a	春	中野 隆史	火	4		43
精神衛生論b	秋	中野 隆史	火	4		43
医療・福祉概論a	春	石井 加代子	木	4	法	44
医療・福祉概論b	秋	石井 加代子	木	4	法	44
現代文化論a	春	柴崎 信三	金	2	外 養 法	45
現代文化論b	秋	柴崎 信三	金	2	外 養 法	45

<<学科専門科目>>

◇経営外国語◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
経営外国語 I a	春	有吉 秀樹	木	3	済 外 養 法	46
経営外国語 I b	秋	有吉 秀樹	木	3	済 外 養 法	46
経営外国語 I a	春	飯塚 由実	月	1	済 外 養 法	47
経営外国語 I b	秋	飯塚 由実	月	1	済 外 養 法	47
経営外国語 I a	春	井出 健二郎	火	1	済 外 養 法	48
経営外国語 I b	秋	井出 健二郎	火	1	済 外 養 法	48
経営外国語 I a	春	伊藤 為一郎	木	4	済 外 養 法	49
経営外国語 I b	秋	伊藤 為一郎	木	4	済 外 養 法	49
経営外国語 I a	春	奥山 正司	月	2	済 外 養 法	50
経営外国語 I b	秋	奥山 正司	月	2	済 外 養 法	50
経営外国語 I a	春	香取 徹	水	1	済 外 養 法	51
経営外国語 I b	秋	香取 徹	水	1	済 外 養 法	51
経営外国語 I a	春	金井 繁雅	月	5	済 外 養 法	52
経営外国語 I b	秋	金井 繁雅	月	5	済 外 養 法	52
経営外国語 I a	春	上坂 卓郎	水	1	済 外 養 法	53
経営外国語 I b	秋	上坂 卓郎	水	1	済 外 養 法	53
経営外国語 I a	春	倉橋 透	金	2	済 外 養 法	54
経営外国語 I b	秋	倉橋 透	金	2	済 外 養 法	54
経営外国語 I a	春	黒川 文子	木	4	済 外 養 法	55
経営外国語 I b	秋	黒川 文子	木	4	済 外 養 法	55
経営外国語 I a	春	黒木 亮	木	2	済 外 養 法	56
経営外国語 I b	秋	黒木 亮	木	2	済 外 養 法	56
経営外国語 I a	春	小林 進	金	2	済 外 養 法	57
経営外国語 I b	秋	小林 進	金	2	済 外 養 法	57
経営外国語 I a	春	小林 哲也	火	2	済 外 養 法	58
経営外国語 I b	秋	小林 哲也	火	2	済 外 養 法	58
経営外国語 I a	春	齋藤 正章	月	5	済 外 養 法	59
経営外国語 I b	秋	齋藤 正章	月	5	済 外 養 法	59
経営外国語 I a	春	塩田 尚樹	月	1	済 外 養 法	60
経営外国語 I b	秋	塩田 尚樹	月	1	済 外 養 法	60
経営外国語 I a	春	高安 健一	金	2	済 外 養 法	61
経営外国語 I b	秋	高安 健一	金	2	済 外 養 法	61

経営外国語 I a	春	中村 泰將	月	1	済	外	養	法	62
経営外国語 I b	秋	中村 泰將	月	1	済	外	養	法	62
経営外国語 I a	春	波形 昭一	火	1	済	外	養	法	63
経営外国語 I b	秋	波形 昭一	火	1	済	外	養	法	63
経営外国語 I a	春	浜本 光紹	月	1	済	外	養	法	64
経営外国語 I b	秋	浜本 光紹	月	1	済	外	養	法	64
経営外国語 I a	春	深江 敬志	金	3	済	外	養	法	65
経営外国語 I b	秋	深江 敬志	金	3	済	外	養	法	65
経営外国語 I a	春	藤山 英樹	木	5	済	外	養	法	66
経営外国語 I b	秋	藤山 英樹	木	5	済	外	養	法	66
経営外国語 I a	春	本田 浩邦	月	2	済	外	養	法	67
経営外国語 I b	秋	本田 浩邦	月	2	済	外	養	法	67
経営外国語 I a	春	益山 光央	木	1	済	外	養	法	68
経営外国語 I b	秋	益山 光央	木	1	済	外	養	法	68
経営外国語 I a	春	松本 栄次	火	2	済	外	養	法	69
経営外国語 I b	秋	松本 栄次	火	2	済	外	養	法	69
経営外国語 I a	春	御園生 眞	水	2	済	外	養	法	70
経営外国語 I b	秋	御園生 眞	水	2	済	外	養	法	70
経営外国語 I a	春	百瀬 房徳	火	3	済	外	養	法	71
経営外国語 I b	秋	百瀬 房徳	火	3	済	外	養	法	71
経営外国語 I a	春	森永 卓郎	木	3	済	外	養	法	72
経営外国語 I b	秋	森永 卓郎	木	3	済	外	養	法	72
経営外国語 I a	春	山越 徳	火	2	済	外	養	法	73
経営外国語 I b	秋	山越 徳	火	2	済	外	養	法	73
経営外国語 I a	春	山下 裕歩	火	3	済	外	養	法	74
経営外国語 I b	秋	山下 裕歩	火	3	済	外	養	法	74
経営外国語 I a	春	山本 美樹子	月	2	済	外	養	法	75
経営外国語 I b	秋	山本 美樹子	月	2	済	外	養	法	75
経営外国語 I a	春	湯田 雅夫	火	2	済	外	養	法	76
経営外国語 I b	秋	湯田 雅夫	火	2	済	外	養	法	76
経営外国語 I a	春	米山 昌幸	水	1	済	外	養	法	77
経営外国語 I b	秋	米山 昌幸	水	1	済	外	養	法	77
経営外国語 I a(中国語)	春	全 載旭	火	1	済	外	養	法	78
経営外国語 I b(中国語)	秋	全 載旭	火	1	済	外	養	法	78
経営外国語 I a(留学生用)	春	J.ブローガン	月	4	済	外	養	法	79
経営外国語 I b(留学生用)	秋	J.ブローガン	月	4	済	外	養	法	79
経営外国語 I a(留学生用)	春	J.ブローガン	月	5	済	外	養	法	79
経営外国語 I b(留学生用)	秋	J.ブローガン	月	5	済	外	養	法	79
経営外国語 I b(再履修者用)	春	細田 哲	水	2	済	外	養	法	80
経営外国語 I b(再履修者用)	春	本田 浩邦	月	1	済	外	養	法	81
外書講読a<08年度入学者～>	春	岡村 国和	木	3		外	養	法	82
外書講読b<08年度入学者～>	秋	岡村 国和	木	3		外	養	法	82
経営外国語 II a<01～07年度入学者>	春	岡村 国和	木	3	済	外	養	法	82
経営外国語 II b<01～07年度入学者>	秋	岡村 国和	木	3	済	外	養	法	82
外書講読a<08年度入学者～>	春	野村 容康	金	2		外	養	法	83
外書講読b<08年度入学者～>	秋	野村 容康	金	2		外	養	法	83
経営外国語 II a<01～07年度入学者>	春	野村 容康	金	2	済	外	養	法	83
経営外国語 II b<01～07年度入学者>	秋	野村 容康	金	2	済	外	養	法	83
外書講読a(中国語)<08年度入学者～>	春	全 載旭	水	2		外	養	法	84
外書講読b(中国語)<08年度入学者～>	秋	全 載旭	水	2		外	養	法	84
経営外国語 II a(中国語)<01～07年度入学者>	春	全 載旭	水	2	済	外	養	法	84
経営外国語 II b(中国語)<01～07年度入学者>	秋	全 載旭	水	2	済	外	養	法	84

◇経営◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
経営学原理a	春	岡部 康弘	木	3	済	130
経営学原理b	秋	岡部 康弘	木	3	済	130
経営学原理a	春	黒川 文子	火	4	済	131
経営学原理b	秋	黒川 文子	火	4	済	131

経営戦略論a	春	和田 剛明	土	2		132
経営戦略論b	秋	和田 剛明	土	2		132
経営管理論a	春	黒川 文子	木	3		133
経営管理論b	秋	黒川 文子	木	3		133
経営組織論a	春	高松 和幸	金	2		134
経営組織論b	秋	高松 和幸	金	2		134
経営財務論a	春	細田 哲	金	4		135
経営財務論b	秋	細田 哲	金	4		135
人的資源管理論a	春	岡部 康弘	金	2		136
人的資源管理論b	秋	岡部 康弘	金	2		136
国際経営論a	春	小林 哲也	金	3	法	137
国際経営論b	秋	小林 哲也	金	3	法	137

◇経営史◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
経営史a	春	柳 敦	火	4		138
経営史b	秋	柳 敦	火	4		138
日本経営史a	春	高柳 友彦	金	2		139
日本経営史b	秋	高柳 友彦	金	2		139

◇商業◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
マーケティング論a	春	有吉 秀樹	金	3		140
マーケティング論b	秋	有吉 秀樹	金	3		140
広告論a	春	友部 孝次	土	2	外 養 法	141
広告論b	秋	友部 孝次	土	2	外 養 法	141
行動科学論a	春	有吉 秀樹	水	2		142
行動科学論b	秋	有吉 秀樹	木	4		142
保険論a	春	岡村 国和	月	3		143
保険論b	秋	岡村 国和	月	3		143
貿易論a	春	米山 昌幸	火	1		144
貿易論b	秋	米山 昌幸	火	1		144
証券市場論a	春	高橋 元	木	2		145
証券市場論b	秋	高橋 元	木	2		145

◇企業◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
企業論a	春	平井 岳哉	月	2	済	146
企業論b	秋	平井 岳哉	月	2	済	146
企業経済論a<05年度入学者~>	春	井上 智弘	水	3	済	147
企業経済論b<05年度入学者~>	秋	井上 智弘	水	3	済	147
企業形態論a<01~04年度入学者>	春	井上 智弘	水	3	済	147
企業形態論b<01~04年度入学者>	秋	井上 智弘	水	3	済	147
ベンチャービジネス論a	春	上坂 卓郎	火	1		148
ベンチャービジネス論b	秋	上坂 卓郎	火	1		148
非営利組織マネジメント論a	春	高松 和幸	火	2		149
非営利組織マネジメント論b	秋	高松 和幸	火	2		149
企業文化論a	春	齊藤 善久	水	4		150
企業文化論b	秋	齊藤 善久	水	4		150
研究・開発マネジメントa	春	日下 泰夫	金	2		151
研究・開発マネジメントb	秋	日下 泰夫	金	2		151

◇会計◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
会計学原理a	春	内倉 滋	水	1		152
会計学原理b	秋	内倉 滋	水	1		152
財務会計論a	春	中村 泰將	金	2		153
財務会計論b	秋	中村 泰將	金	2		153

管理会計論a	春	香取 徹	月	4	154
管理会計論b	秋	香取 徹	月	4	154
社会会計論a	春	湯田 雅夫	月	4	155
社会会計論b	秋	湯田 雅夫	月	4	155
原価計算論a	春	齋藤 正章	月	4	156
原価計算論b	秋	齋藤 正章	月	4	156
会計監査論a	春	福菌 健	火	1	157
会計監査論b	秋	福菌 健	火	1	157
税務会計論a	春	山田 浩一	土	2	158
税務会計論b	秋	山田 浩一	土	2	158
経営分析論a	春	百瀬 房徳	火	2	159
経営分析論b	秋	百瀬 房徳	火	2	159
上級簿記(商業)a	春	細田 哲	金	3	160
上級簿記(商業)b	秋	細田 哲	金	3	160
上級簿記(工業)a	春	香取 徹	月	3	161
上級簿記(工業)b	秋	香取 徹	月	3	161
国際会計論a		本年度休講			
国際会計論b		本年度休講			

◇情報科学◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
経営数学a	春	本田 勝	水	1		162
経営数学b	秋	本田 勝	水	1		162
応用統計学a	春	本田 勝	木	2	済	163
応用統計学b	秋	本田 勝	木	2	済	163
標本調査論a	春	松井 敬	月	2	済	164
標本調査論b	秋	松井 敬	月	2	済	164
データベース論a	春	堀江 郁美	月	2	済	165
データベース論b	秋	堀江 郁美	月	2	済	165
データベース論a	春	堀江 郁美	金	4	済	165
データベース論b	秋	堀江 郁美	金	4	済	165
コンピュータシミュレーション論a	春	富田 幸弘	水	1	済	166
コンピュータシミュレーション論b	秋	富田 幸弘	水	1	済	166
マルチメディア論a	春	大和田 勇人	金	3	済	167
マルチメディア論b	秋	大和田 勇人	金	3	済	167
マルチメディア論a	春	立田 ルミ	水	2	済	168
マルチメディア論b	秋	立田 ルミ	水	2	済	168
マルチメディア論a	春	森 園子	水	4	済	169
マルチメディア論b	秋	森 園子	水	4	済	169
情報検索論a	春	福田 求	水	1		170
情報検索論b	秋	福田 求	水	1		170
情報検索論a	春	福田 求	水	2		170
情報検索論b	秋	福田 求	水	3		170
情報システム論a	春	今福 啓	金	2		171
情報システム論b	秋	今福 啓	金	2		171
プログラミング論a	春	加藤 尚吾	月	1	済 言	172
プログラミング論b	秋	加藤 尚吾	月	1	済 言	172
プログラミング論a	春	立田 ルミ	水	1	済 言	173
プログラミング論b	秋	立田 ルミ	水	1	済 言	173
プログラミング論a	春	堀江 郁美	金	2	済 言	174
プログラミング論b	秋	堀江 郁美	金	2	済 言	174
プログラミング論a	春	森 園子	水	3	済 言	175
プログラミング論b	秋	森 園子	水	3	済 言	175
情報社会論a	春	柴崎 信三	水	1		176
情報社会論b	秋	柴崎 信三	水	1		176
情報通信ネットワークb	春	三宅 真	木	4		177
情報通信ネットワークa	秋	今福 啓	火	4		177
コンピュータネットワーク	春	大和田 勇人	金	2		178
コンピュータアーキテクチャ	春	今福 啓	火	4		179

情報と職業a	春	富田 幸弘	火	1	180
情報と職業b	秋	小林 哲也	火	4	180
アルゴリズム論a	春	木村 昌史	月	2	181
アルゴリズム論b	秋	木村 昌史	月	2	181

◇経営システム工学◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
オペレーションズ・リサーチa	春	正道寺 勉	火	4		182
オペレーションズ・リサーチb	秋	正道寺 勉	火	4		182
システムズエンジニアリングa	春	天笠 美知夫	木	4		183
システムズエンジニアリングb	秋	天笠 美知夫	木	4		183
経営システム工学a	春	日下 泰夫	火	2		184
経営システム工学b	秋	日下 泰夫	火	2		184

<<関連専門科目>>

◇経済理論・経済政策◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
マクロ経済学a	春	塩田 尚樹	火	1	済	85
マクロ経済学b	秋	塩田 尚樹	火	1	済	85
マクロ経済学a	春	山下 裕歩	月	1	済	86
マクロ経済学b	秋	山下 裕歩	月	1	済	86
ミクロ経済学a	春	小林 進	金	3	済	87
ミクロ経済学b	秋	小林 進	金	3	済	87
ミクロ経済学a	春	藤山 英樹	木	1	済	88
ミクロ経済学b	秋	藤山 英樹	木	1	済	88
経済政策論a	春	阿部 正浩	木	2	済	法 93
経済政策論b	秋	阿部 正浩	木	2	済	法 93

◇日本経済・国際経済◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
日本経済論a	春	波形 昭一	火	5	済 言 養 法	101
日本経済論b	秋	波形 昭一	火	5	済 言 養 法	101
日本経済史a	春	高柳 友彦	金	1	済	96
日本経済史b	秋	高柳 友彦	金	1	済	96
国際経済論a	春	益山 光央	火	3	済 言 養 法	99
国際経済論b	秋	益山 光央	火	3	済 言 養 法	99

◇金融・財政◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
金融経済論a	春	斉藤 美彦	金	1	済	108
金融経済論b	秋	斉藤 美彦	金	1	済	108
財政学a	春	野村 容康	木	3	済	法 110
財政学b	秋	野村 容康	木	3	済	法 110

◇政治・法律◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
法学a	春	小川 佳子	火	5	外 養 法	185
法学b	秋	小川 佳子	火	5	外 養 法	185
政治学総論a	春	杉田 孝夫	木	2	外 養 法	186
政治学総論b	秋	杉田 孝夫	木	2	外 養 法	186
民法a(bとセット履修)	春	遠藤 研一郎	木	1	法	187
民法b(aとセット履修)	春	遠藤 研一郎	木	2	法	187
商法a	春	潘 阿憲	水	5	法	188
商法b	秋	潘 阿憲	水	5	法	188
著作権法a	春	長塚 真琴	木	1	法	189
著作権法b	秋	長塚 真琴	木	1	法	189

## ◇総合講座・特殊講義◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
総合講座a	春	経済学部	水	3		190
総合講座b	秋	経済学部	水	3		190
特殊講義a(経済学入門)	春	阿部 正浩	火	1	法	191
特殊講義b(経済学入門)	秋	阿部 正浩	火	1	法	191
特殊講義a(経営学科で何が学べるか?)	春	経営学科	水	3		192
特殊講義a(日本財政論)<08年度入学者～>	春	深江 敬志	金	4		112
特殊講義b(日本財政論)<08年度入学者～>	秋	深江 敬志	金	4		112
特殊講義a(金融資産運用論)	春	山崎 元	木	3		193
特殊講義a(金融資産運用論)	秋	山崎 元	木	3		193
特殊講義a(会社と社会の歩き方)	春	山崎 元	木	5		194
特殊講義a(会社と社会の歩き方)	秋	山崎 元	木	5		194
特殊講義a(モノ作りと環業革命 2010)	春	山根 一眞	月	3		195
特殊講義b(モノ作りと環業革命 2010)	秋	山根 一眞	月	3		195
特殊講義a(知のデジタル仕事術 2010)	春	山根 一眞	月	5		196
特殊講義b(知のデジタル仕事術 2010)	秋	山根 一眞	月	5		196
特殊講義b(資本市場の役割と証券投資)	秋	経済学部	水	4		197

## ◇留学生◇

科目名	開講学期	担当教員名	曜日	時限	履修不可	ページ
日本事情a,b<01～07年度入学者>		守田 逸人	木	4		198
日本語 I a,b<01～07年度入学者>		各担当教員				198
日本語 II a,b<01～07年度入学者>		各担当教員				198
歴史と文化2(日本事情1,2)<08年度入学者～>		守田 逸人	木	4		198
日本語(総合 I Aa,b/総合 I Ba,b/総合 I Ca,b) <08年度入学者～>		各担当教員				198
日本語(総合 II a,b)<08年度入学者～>		各担当教員				198

03年度以降（春）	インターナショナルコミュニケーション I a	担当者	担当各教員
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(担当者が複数ですので、各担当教員によるクラス別ガイダンスに従ってください)</p> <p>この授業は、経済学部 1 年生のために設けられた英語ネイティブ教員による科目です。</p> <p>International Communication (IC) とは、TOEIC (Test of English for International Communication) からとったもので、国際的に通用する実用英語の習得を目指すものです。英語による日常のコミュニケーション、つまり話す (Speaking)、書く (Writing)、読む (Reading)、聞く (Listening) という 4 つの能力を高めることを目指す授業です。</p> <p>講師はすべて英語を母語とするネイティブ教員です。教員および参加者相互でコミュニケーションをとりながら、英語を学習していきます。</p>		<p>1            ガイダンス</p> <p>2 - 4        Unit 1 and teacher's own materials</p> <p>5 - 8        Unit 2 and teacher's own materials</p> <p>9 - 1 4     Unit 3 and teacher's own materials</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p><i>Business Venture I</i>, Oxford UP.  (教科書は必ず購入すること。書き込みのある中古本を使用しないこと)</p>		<p>各担当教員による。  原則として、欠席 4 回以上した場合には不可となるので、注意すること。</p>	

03年度以降（秋）	インターナショナルコミュニケーション I b	担当者	各担当教員
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>インターナショナル・コミュニケーション I a を参照してください。</p>		<p>1 - 3            Unit 4 and teacher's own materials</p> <p>4 - 6            Unit 5 and teacher's own materials</p> <p>7 - 9            Unit 6 and teacher's own materials</p> <p>1 0 - 1 4     Review and teacher's own materials</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p><i>Business Venture I</i>, Oxford UP.</p>		<p>各担当教員による。  原則として、欠席 4 回以上した場合には不可となるので、注意すること。</p>	

03年度以降（春）	インターナショナルコミュニケーションⅡa	担当者	各担当教員
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>（担当者が複数ですので、各担当教員によるクラス別ガイダンスに従ってください）</p> <p>この授業は、経済学部2年生のために設けられた英語ネイティブ教員による科目です。</p> <p>International Communication (IC) とは、TOEIC (Test of English for International Communication) からとったもので、国際的に通用する実用英語の習得を目指すものです。英語による日常のコミュニケーション、つまり話す (Speaking)、書く (Writing)、読む (Reading)、聞く (Listening) という4つの能力を高めることを目指す授業です。</p> <p>講師はすべて英語を母語とするネイティブ教員です。教員および参加者相互でコミュニケーションをとりながら、英語を学習していきます。</p>		<p>1            ガイダンス</p> <p>2－4        Unit 7 and teacher's own materials</p> <p>5－8        Unit 8 and teacher's own materials</p> <p>9－14      Unit 9 and teacher's own materials</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p><i>Business Venture I</i>, Oxford UP.  （教科書は必ず購入すること。書き込みのある中古本を使用しないこと）</p>		<p>各担当教員による。  原則として、欠席4回以上した場合には不可となるので、注意すること。</p>	

03年度以降（秋）	インターナショナルコミュニケーションⅡb	担当者	各担当教員
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>インターナショナル・コミュニケーションⅡaを参照してください。</p>		<p>1－3            Unit 10 and teacher's own materials</p> <p>4－6            Unit 11 and teacher's own materials</p> <p>7－9            Unit 12 and teacher's own materials</p> <p>10－14        Review and teacher's own materials</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p><i>Business Venture I</i>, Oxford UP.</p>		<p>各担当教員による。  原則として、欠席4回以上した場合には不可となるので、注意すること。</p>	

08年度以降（春）	大学入門講座	担当者	経済学科 全 載旭 経営学科 平井 岳哉
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義は、新入生の皆さんがスムーズに大学生活に移行できるよう、大学での勉学や生活について体系的に案内するものです。</p> <p>大学では、高校までの生活と異なり、皆さんの自主性が尊重されます。すべては、皆さんが自由に勉強したいこと、やりたいことを追求できるのです。しかし反面、誰もあの科目をとりなさい、この時点で留学を考えなさい、これから就職活動に取り組むのです、など教えてくれません。</p> <p>また、皆さんの選択の自由は責任を伴うものでもあります。学習の進展、友達とのつきあい、就職活動など、これからの大学生活は、すべて皆さんの責任の下で選び取っていくものになります。</p> <p>この講義では、大学生活を送る上での重要なポイントを説明し、皆さんが実り豊かな大学時代をすごせるようお手伝いするものです。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 科目履修のポイント</li> <li>2. 大学生活のポイント1</li> <li>3. 大学生活のポイント2</li> <li>4. 外国語学習術1</li> <li>5. 外国語学習術2</li> <li>6. キャリアガイダンス1</li> <li>7. キャリアガイダンス2</li> <li>8. 思考技術入門1</li> <li>9. 思考技術入門2</li> <li>10. 思考技術入門3</li> <li>11. 演習科目の紹介1</li> <li>12. 演習科目の紹介2</li> <li>13. 夏休みの読書 留学などの紹介</li> <li>14. 課題レポート</li> </ol> <p>（内容・順番に関して一部変更の可能性有り）</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
適宜授業中に指示する		出席とレポート（原則として欠席4回以上は不可） 評価が不可だった場合、次年度以降の履修に影響が出るので、今年度に必ず修得するよう注意すること。	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

08年度以降（秋）	クラスセミナー	担当者	各担当教員
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>この講義の目的は、大学での学習や研究の進め方について包括的に学ぶことです。クラス毎の比較的小さなまとまりの中で、教員とのやりとりを交えながら、演習に近い形で進めます。</p> <p>大学での勉強は、高校までと異なり、受け身で与えられた科目を学んでいくのではなく、科目の選択の段階から、皆さん自身がテーマを見いだして学んでいくものです。</p> <p>この講義では、皆さん自身がその学びのテーマを見つけ出し、「学問」というスタイルでその学習を進めていくための、さまざまな方法を紹介していきます。情報を集める、整理する、まとめて発表するといった、基本的なアカデミックスキルの習得をめざします。</p> <p>講義は毎回ワークおよび課題が出され、またグループでの作業を伴いますので、出席や課題の提出など平常の努力が重要となります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. プレゼンテーション・スキル 基礎編</li> <li>2. コミュニケーション・スキルを磨く</li> <li>3. 情報探索 --- キーワードを考える</li> <li>4. 情報探索 --- 「読む」力をつける</li> <li>5. 情報探索 --- 「読む」力をつける 応用編</li> <li>6. 情報探索 --- 電子情報探索法 ネットの仕組み</li> <li>7. 情報探索 --- 電子情報探索法 「探す」力をつける</li> <li>8. 学習・研究のテーマ発見 その1</li> <li>9. 学習・研究のテーマ発見 その2</li> <li>10. プレゼンテーション・スキル 情報の整理・加工</li> <li>11. プレゼンテーション・スキル 発表の実際</li> <li>12. レポート・論文の書き方</li> <li>13. レポート・論文を書く 1</li> <li>14. レポート・論文を書く 2</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
学部提供のテキストを用いる その他参考書は、適宜指示する		出席とレポート 但し、各クラスでの進捗状況により、評価方法が異なることがある	

01年度以降（春）	経済学 a （経済学科生用）	担当者	井上 智弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義概要：</b> 経済学を初めて学ぶ学生を対象として、経済学の基礎的な理論について講義する。春学期は、家計に代表される消費者と企業に代表される生産者の行動に焦点を当てるミクロ経済学の基礎理論について説明する。また、受講生の理解を測るために、講義中に問題演習や小テストを行う。講義は右の授業計画に沿って行う予定であるが、小テストの結果等を踏まえて、計画を一部変更する可能性はある。</p> <p><b>講義目的：</b> ミクロ経済分析を行う上で、必要不可欠な基礎理論の習得を目指す。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 経済学とは何か</li> <li>2. 需要と供給 ①</li> <li>3. 需要と供給 ②</li> <li>4. 消費者行動 ①</li> <li>5. 消費者行動 ②</li> <li>6. 消費者行動 ③</li> <li>7. 生産者行動 ①</li> <li>8. 生産者行動 ②</li> <li>9. 生産者行動 ③</li> <li>10. 余剰分析</li> <li>11. 価格規制、数量規制、課税の影響</li> <li>12. 不完全競争 ①</li> <li>13. 不完全競争 ②</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストは指定しない。必要に応じて資料を配布する。		定期試験と講義内で行う小テストの成績で評価する。	

01年度以降（秋）	経済学 b （経済学科生用）	担当者	井上 智弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義概要：</b> 経済学を初めて学ぶ学生を対象として、経済学の基礎的な理論について講義する。秋学期は、一国全体の経済に焦点を当てるマクロ経済学の基礎理論について説明する。また、受講生の理解を測るために、講義中に問題演習や小テストを行う。講義は右の授業計画に沿って行う予定であるが、小テストの結果等を踏まえて、計画を一部変更する可能性はある。</p> <p><b>講義目的：</b> マクロ経済分析を行う上で、必要不可欠な基礎理論の習得を目指す。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. マクロ経済学の全体像</li> <li>2. 国民経済計算と GDP（国内総生産）</li> <li>3. 国民所得の決定メカニズム ①</li> <li>4. 国民所得の決定メカニズム ②</li> <li>5. 財政政策</li> <li>6. 貨幣の機能 ①</li> <li>7. 貨幣の機能 ②</li> <li>8. 金融政策</li> <li>9. IS-LM 分析 ①</li> <li>10. IS-LM 分析 ②</li> <li>11. 物価変動と失業 ①</li> <li>12. 物価変動と失業 ②</li> <li>13. 経済成長</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストは指定しない。必要に応じて資料を配布する。		定期試験と講義内で行う小テストの成績で評価する。	

01年度以降（春）	経済学 a （経済学科生用）	担当者	倉橋 透
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>【講義目的】 本講義は、皆さんが今後経済学を深く勉強していくにあたっての基礎知識を提供し、経済学的な考え方を身に付けてもらうことを目的とする。 ただし、単に理論を学ぶのではなく、その背景の実体経済がどうなっているかを認識してもらいたい。</p> <p>【講義内容】 春学期はミクロ経済学の分野を扱う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の概要</li> <li>2. 基礎的数学の復習</li> <li>3. ミクロ経済学とは</li> <li>4. 需要と供給</li> <li>5. 需要曲線と消費者行動</li> <li>6. 費用の構造と供給行動</li> <li>7. 市場取引と資源配分</li> <li>8. 独占の理論</li> <li>9. 企業と産業の経済学</li> <li>10. 市場の失敗と補正</li> <li>11. 不完全情報の経済学</li> <li>12. 消費者行動の理論</li> <li>13. 国際貿易と海外直接投資</li> <li>14. 不況期のミクロ経済学の意義</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキスト：伊藤元重『入門 経済学』第3版（日本評論社）		定期試験による。	

01年度以降（秋）	経済学 b （経済学科生用）	担当者	倉橋 透
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>【講義目的】 本講義は、皆さんが今後経済学を深く勉強していくにあたっての基礎知識を提供し、経済学的な考え方を身に付けてもらうことを目的とする。 実体経済の認識を重視することは春学期と同様である。</p> <p>【講義内容】 秋学期はマクロ経済学の分野を扱う。 テキストに沿って講義を行うが、進度は受講者の理解度をみながら調整する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の概要</li> <li>2. 景気の現局面</li> <li>3. マクロ経済学とは</li> <li>4. マクロ経済における需要と供給</li> <li>5. 有効需要と乗数メカニズム</li> <li>6. 貨幣の機能</li> <li>7. マクロ経済政策</li> <li>8. インフレと失業</li> <li>9. 財政政策のマクロ分析</li> <li>10. 経済成長と経済発展</li> <li>11. 財政・金融政策のメカニズム：IS-LM分析</li> <li>12. 総需要と総供給：物価の決定</li> <li>13. 国際金融と国際マクロ経済学</li> <li>14. 今後の経済運営のあり方</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキスト：伊藤元重『入門 経済学』第3版（日本評論社）		定期試験による。	

01年度以降（春）	経済学 b （経済学科生用）	担当者	小林 進
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>最近では経済学の重要性が増しているにもかかわらず、たとえば多数の多重債務者の存在にみられるように経済学の基礎が十分に理解できていないことが憂慮されるので、1年生を対象にしたこの講義では特に経済理論の必要性を十分に理解できるように講義を進める。また身近な経済の話題を通じて経済学への関心を高めたい。</p>		<p>最初の講義のときにプリント配布 （マクロ経済学を中心に講義）</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
未定		学期末試験	

01年度以降（秋）	経済学 a （経済学科生用）	担当者	小林 進
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>最近では経済学の重要性が増しているにもかかわらず、たとえば多数の多重債務者の存在にみられるように経済学の基礎が十分に理解できていないことが憂慮されるので、1年生を対象にしたこの講義では特に経済理論の必要性を十分に理解できるように講義を進める。また身近な経済の話題を通じて経済学への関心を高めたい。</p>		<p>最初の講義のときにプリント配布 （ミクロ経済学を中心に講義）</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
未定		学期末試験	

01年度以降（春）	経済学 a（経済学科生用）	担当者	浜本 光紹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では、日本経済の仕組みを理解し、様々な経済現象に関して理論的に考察するうえで必要な分析道具であるマクロ経済学の基礎を習得し、経済理論を用いながら現実の経済問題の本質的要因を探り処方箋を考える力を養うことを目標とする。</p> <p>経済学 a では、まず経済学という学問が考察対象とする課題について解説しつつ、基本的概念の説明を行なう。そのうえで、国民所得の決定メカニズムおよびマクロ経済における家計・企業・政府の各部門の関係について解説する。講義においては、昨今の日本経済を取り巻く様々な出来事を取り上げることで、受講生にとって理論と現実の対応関係が理解しやすいように配慮したい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 経済学とは何か</li> <li>3. マクロ経済学の課題について</li> <li>4. 家計の消費行動と貯蓄動機</li> <li>5. 企業の投資行動</li> <li>6. 企業の資金調達と家計の資産選択</li> <li>7. 直接金融－株式市場の理論と実際－</li> <li>8. 間接金融－銀行の役割－</li> <li>9. 貨幣の需要と供給</li> <li>10. 中央銀行の役割と貨幣市場モデル</li> <li>11. ケインズ経済学－有効需要の原理－</li> <li>12. 財市場モデルと乗数効果</li> <li>13. IS-LM モデル</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
福田・照山『マクロ経済学・入門』有斐閣、および講義中に配布するプリント		定期試験による。	

01年度以降（秋）	経済学 b（経済学科生用）	担当者	浜本 光紹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済学 b では、経済学 a の講義内容を踏まえて、財政政策・金融政策の理論と現実について検討し、マクロ経済政策の効果に関する理解を深める。また、開放マクロ経済の基礎知識を習得し、グローバル化が進展する中で国際的な経済現象が日本にもたらす影響について考える能力を養う。</p> <p>続いて、ミクロ経済学の基礎理論を取り上げ、需要と供給、および余剰分析について解説する。さらに、ミクロ経済学の分析枠組を用いて、規制緩和や環境政策といった経済政策・公共政策の意義について検討しながら、政府の役割と市場の役割のあり方に関する展望を試みる。</p> <p>受講を希望する学生は、経済学 a を既習であることが望ましい（テキストを読んで経済学 a の内容を自習すれば、講義内容についていくことはできるであろう）。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 経済学 a（春学期の講義内容）の復習</li> <li>3. 財政政策・金融政策の効果</li> <li>4. 労働市場モデルと失業</li> <li>5. 開放マクロ経済－為替レートと経常収支－</li> <li>6. ミクロ経済学の課題について</li> <li>7. 需要曲線と供給曲線の意味</li> <li>8. 社会的余剰の考え方</li> <li>9. ゲーム理論を用いた経済分析 1 －寡占市場－</li> <li>10. ゲーム理論－戦略形表現と展開形表現－</li> <li>11. ゲーム理論を用いた経済分析 2 －公共財の供給問題－</li> <li>12. ゲーム理論を用いた経済分析 3 －コモンスの悲劇－</li> <li>13. 経済学の応用</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
経済学 a で用いたものを引き続き使用するほか、ミクロ経済学についてはプリントを配布する予定である。		定期試験による。	

01年度以降（春）	経済学 a （経済学科生用）	担当者	益山 光央
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済学 a ではミクロ経済学を講義します。限られた講義回数でたくさんの事柄を学べるように、講義の進行は速いと思います。受講生にとって経済学は大学ではじめて学ぶ分野なので、戸惑いがあるかもしれませんが、なるべくわかり易い講義を心がけます。受講生には毎回の予習と復習を求めます。私語厳禁。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ミクロ経済学概観</li> <li>2 消費者行動の理論 1</li> <li>3 消費者行動の理論 2</li> <li>4 消費者行動の理論 3</li> <li>5 生産者行動の理論 1</li> <li>6 生産者行動の理論 2</li> <li>7 生産者行動の理論 3</li> <li>8 生産者行動の理論 4</li> <li>9 完全競争市場 1</li> <li>10 完全競争市場 2</li> <li>11 不完全競争と独占 1</li> <li>12 不完全競争と独占 2</li> <li>13 まとめ</li> <li>14 質問</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>大山道広・伊藤元重『国際貿易』 岩波書店</p>		<p>定期試験 80%、出席 20%</p>	

01年度以降（秋）	経済学 b （経済学科生用）	担当者	益山 光央
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>春学期に扱ったミクロ経済学とともに経済学の大きな柱であるマクロ経済学を学びます。国民所得の決定というのが大きなテーマです。すべて基本的内容なので、きちんと理解する必要があります。春学期の経済学 a を履修しているほうがより理解が深まると思います。私語厳禁。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 マクロ経済学概観</li> <li>2 国民所得計算 1</li> <li>3 国民所得計算 2</li> <li>4 国民所得決定のメカニズム(消費関数)</li> <li>5 国民所得決定のメカニズム(投資関数)</li> <li>6 国民所得決定のメカニズム(乗数効果)</li> <li>7 貨幣市場(流動性選好 1)</li> <li>8 貨幣市場(流動性選好 2)</li> <li>9 貨幣市場(中央銀行と貨幣供給)</li> <li>10 IS 曲線</li> <li>11 LM 曲線</li> <li>12 財政・金融政策概観</li> <li>13 まとめ</li> <li>14 質問</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>未定</p>		<p>定期試験 80%、出席 20%</p>	

01年度以降（春）	経済学 a（経済学科生用）	担当者	山本 美樹子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>イギリスの経済学者ジョーロビンソンは「経済学は人間の行動の学問である」と述べています。この言葉は私が大学の経済学部に入學して、初めて受けて経済原論の講義で教授の口から最初に聞いた言葉です。この言葉は今も私の頭の中にしっかりとやきついています。</p> <p>経済学というと非常に敷居の高い、難しい学問だと思いがちですが、われわれは毎日経済を抜きにした生活を送ることはできません。パンを買う、本を買う、アルバイトで給料をもらう、・・・すべての行動は経済行動です。経済学は人間がごく当たり前に行っている消費活動、生産活動という各種の活動を社会科学の学問として解釈するものです。</p> <p>経済学部に入學した学生は2年、3年、4年に金融論、財政論、経済政策論、といった専門科目を学んでいきますが、これらの学問領域は（一般の）経済学を基礎にしています。その意味からも1年生に基礎をしっかりと学んでほしいと思っています。</p>		<p>春学期は経済学の中で主としてミクロ的な領域を扱っていきます。</p> <p>ミクロ経済学とマクロ経済学の違い アダム・スミスとケインズ 需要、需要曲線 正常財と劣等財 代替材と補完財の関係 供給、共有曲線 均衡、均衡価格、均衡取引量 市場の効率性と消費者余剰、生産者余剰 厚生経済学と公共政策の基礎</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>マンキュー「入門経済学」 辻 正次他「What's 経済学」 (追加は適宜講義中に指示します)</p>		<p>学期末試験 授業中随時に行う出席、平常試験</p>	

01年度以降（秋）	経済学 b（経済学科生用）	担当者	山本 美樹子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済学の取り扱う経済主体は主として家計（消費者）、企業（生産者）、政府（国家）の3つです。春学期には家計の経済行動である消費、企業の経済行動である生産をもとに導出される需要曲線、供給曲線にかかわる事象について学びましたが、秋学期は目を転じ政府（国家）が行う経済活動を主に考えていきます。</p> <p>政府がどのような経済活動をするのかを考える際に重要となるのは、この国の現実の経済がどのような状態にあるのかについての把握です。もし現実の経済が望ましくない状態にある（つまり何らかの病気である）のであれば、各種治療（政府による経済政策）が必要となり、政府の経済活動の中心はこの経済政策の運営にあります。そのためには今、一国全体の経済がどのような状態にあるのかについての把握が必要となります。一国全体の経済状態を知るために基礎的なマクロ経済学の知識が必要となるので、秋学期はマクロ経済学の基礎、この基礎的知識を前提として政府の経済政策について学んでいきます。</p>		<p>国内総生産（GDP）と国民所得 消費、 投資、 均衡国民所得 乗数の理論 貯蓄、投資、金融システム IS、LM曲線と財政、金融政策の効果</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>マンキュー「入門経済学」 伊藤 元重「入門経済学」 (追加は適宜講義中に指示します)</p>		<p>学期末試験 授業中随時行う出席および平常試験</p>	

01年度以降（春）	統計学 a	担当者	富田 幸弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>近代統計学の手法は、品質管理、種々の調査、実験データの処理などを通じて広く社会一般に受け入れられ、経済学や経営学を含む諸科学にも多くの貢献をしてきている。特に、近年のコンピュータの発達は、データの取り扱いと統計的方法への接近を容易にしている。こうしたことから、統計学の背景にある科学的方法としての理論の枠組みとその重要性を十分に理解し、応用力を身につけることを目標としている。</p> <p>その内容は、以下のとおりである。</p> <p>(1) データの整理 (2) 確率分布</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 統計学とは、評価・受講上の注意など</li> <li>2 データの整理 (1) 平均・標準偏差</li> <li>3 データの整理 (2) その他のパラメータ</li> <li>4 データの整理 (3) 度数分布表・ヒストグラム</li> <li>5 データの整理 (4) 簡便法 (仮平均法)</li> <li>6 データの整理 (5) データの視覚化</li> <li>7 データの整理 (6) 相関係数・回帰直線</li> <li>8 データの整理 (7) 計算演習</li> <li>9 確率分布 (1) 確率・二項定理</li> <li>10 確率分布 (2) 二項分布・漸化式</li> <li>11 確率分布 (3) 正規分布・標準化</li> <li>12 確率分布 (4) その他の確率分布</li> <li>13 確率分布 (5) 計算演習</li> <li>14 春学期の復習と定期試験について</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：ホームページから配布 参考書：池田・松井・富田・馬場 共著 『統計学』－データから現実をさぐる 内田老鶴圃</p>		<p>定期試験の結果により評価する。 (出席状況などを考慮する)</p>	

01年度以降（秋）	統計学 b	担当者	富田 幸弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>近代統計学の手法は、品質管理、種々の調査、実験データの処理などを通じて広く社会一般に受け入れられ、経済学や経営学を含む諸科学にも多くの貢献をしてきている。特に、近年のコンピュータの発達は、データの取り扱いと統計的方法への接近を容易にしている。こうしたことから、統計学の背景にある科学的方法としての理論の枠組みとその重要性を十分に理解し、応用力を身につけることを目標としている。</p> <p>その内容は、以下のとおりである。</p> <p>(1) 統計的推定 (2) 統計的仮説検定</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 春学期の復習、評価・受講上の注意など</li> <li>2 母集団と標本・標本調査・中心極限定理</li> <li>3 統計的推定 (1) 平均</li> <li>4 統計的推定 (2) 比率</li> <li>5 統計的仮説検定 (1) 概説</li> <li>6 統計的仮説検定 (2) 平均</li> <li>7 統計的仮説検定 (3) 平均の差</li> <li>8 統計的仮説検定 (4) 分散</li> <li>9 統計的仮説検定 (5) 比率</li> <li>10 統計的仮説検定 (6) 比率の差</li> <li>11 統計的仮説検定 (7) 分割表</li> <li>12 統計的仮説検定 (8) その他検定</li> <li>13 統計的仮説検定 (9) 計算演習</li> <li>14 秋学期の復習と定期試験について</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：ホームページから配布 参考書：池田・松井・富田・馬場 共著 『統計学』－データから現実をさぐる 内田老鶴圃</p>		<p>定期試験の結果により評価する。 (出席状況などを考慮する)</p>	

01年度以降（春）	統計学 a	担当者	本田 勝
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>我々の身の回りには大量のデータが存在する。それらは観測や測定あるいは実験のデータであったり、各種の調査から得られたデータであったり、その種類は様々である。これらのデータを解析し、推論していく、推測統計学を軸とする近代統計学の手法は、経済学や経営学の分野でもいろいろな形で応用されている。</p> <p>この講義では、統計学の基本的考え方とそれらを具体的に応用していく方法について述べていく。</p> <p>講義は以下のような内容についてテキストを中心に進めるが、スライドも使用する。</p> <p>データの整理の方法</p> <p>確率の概念</p> <p>確率分布の考え方</p> <p>特殊な確率分布</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 統計学で何を学ぶか。</li> <li>2 データの整理のしかた。平均、中央値、最頻値など。</li> <li>3 ばらつきの尺度によるデータ特性の把握。</li> <li>4 データ整理の演習。</li> <li>5 確率導入の準備（集合および事象）。</li> <li>6 確率の導入。</li> <li>7 確率変数と確率分布の考え方。</li> <li>8 確率分布の平均と分散。</li> <li>9 2項分布の性質。</li> <li>10 ポアソン分布の性質。問題演習。</li> <li>11 一様分布、指数分布、正規分布の性質。</li> <li>12 正規分布の確率の求め方と確率変数の標準化。</li> <li>13 問題演習。</li> <li>14 春学期の総レビュー。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
本田 勝、石田 崇『新版 基本統計学』 産業図書		出席調査および定期試験による総合評価	

01年度以降（秋）	統計学 b	担当者	本田 勝
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義目的は統計学 a と同じ</p> <p>講義は以下のような内容についてテキストを中心に進めるが、スライドも使用する。</p> <p>標本分布の考え方といくつかの例</p> <p>統計学における推定の問題</p> <p>統計学における仮説検定の問題</p> <p>2変量間の関係のとらえ方</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 標本分布とは。中心極限定理。</li> <li>2 標本比率の確率分布。2項分布の正規分布近似。</li> <li>3 カイ2乗分布およびt分布。標本分散の確率分布。</li> <li>4 母数の推定について。点推定、区間推定の考え方。</li> <li>5 母平均の区間推定。</li> <li>6 問題演習。</li> <li>7 母集団比率及び母分散の区間推定。</li> <li>8 仮説検定の考え方。母平均の検定法。</li> <li>9 検定に関する問題演習。</li> <li>10 2変量間の相関関係について。</li> <li>11 回帰直線とは（線形回帰、最小2乗法）。</li> <li>12 問題演習。</li> <li>13 カイ2乗検定の考え方。</li> <li>14 秋学期の総レビュー。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
本田 勝、石田 崇『新版 基本統計学』 産業図書		出席調査および定期試験による総合評価	

01 年度以降(春)	統計学 a	担当者	松井 敬
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>近代統計学の手法は、品質管理、種々の調査、実験データの処理などを通じて広く社会一般に受け入れられ、経済学、経営学を含む諸科学に大きく貢献してきた。近年は、コンピュータなどのデータ処理システムの発展もあって、人間活動のあらゆる分野で広く利用されている。本講義は、統計学の基礎的な概念と方法について正確な知識と応用能力を身につけることを目的とする。統計学は現実への応用に大きく関わった学問なので、出来るだけ具体的な問題を意識し、適宜計算演習をまじえながら進めてゆく。</p> <p>内容は記述的な統計から現代統計学の枠組み、データの得られるメカニズム（モデル）などである。</p> <p>試験問題は講義中の演習問題が中心になるので、テーマ毎に理解しておくことが大切である。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 統計学とはどんな学問か。授業の進め方。</li> <li>2. 統計的な見方、考え方。現代統計学の枠組み。</li> <li>3. 母集団と標本。データを測定する尺度。</li> <li>4. データを測定するための尺度の意味と特徴、計算法。</li> <li>5. 探索的なデータ解析の方法と考え方。</li> <li>6. 2つの変数間の関連性の尺度。相関係数。</li> <li>7. 2つの変数間の関連性を測る尺度。回帰直線。</li> <li>8. 確率—基本的な考え方、データとの関係。</li> <li>9. データの得られるしくみ。データとモデル（分布）。</li> <li>10. 離散型の分布モデル—二項分布。</li> <li>11. 連続型の分布モデル—正規分布。</li> <li>12. 正規分布モデルの特徴、標準化など。</li> <li>13. 正規分布とその周辺、二項分布との関係など。</li> <li>14. 春学期のまとめ。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：池田、松井、富田、馬場著、『統計学』、内田老鶴圃。</p> <p>参考書：松井敬著、『統計解析のきほん』、日本実業出版社</p>		<p>期末の試験による。</p>	

01 年度以降(秋)	統計学 b	担当者	松井 敬
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では、統計的応用のための様々な手法の意味や考え方を説明する。データは実験、観察、調査など社会の様々な場から得られるが、データの処理にはその背景にある諸条件を勘案しつつ、適切な統計的方法を選択する必要がある。その際に留意すべき点や問題となる点を明確にしながら説明してゆきたい。</p> <p>取り扱うのは推定、検定、分布モデルによらない方法などで、それぞれの方法が、どのような考え方で組み立てられているかを詳説したい。また、統計的概念の理解は、実際にデータを処理し、計算を行うことで（データ処理によって）深まってゆくので、随時演習を行い、各手法がより十分に理解されるようにしたい。例題や演習問題には積極的に取り組んでいただきたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 統計解析の考え方—母集団と標本の枠組み、統計的推測について。</li> <li>2. 統計的推定—点推定、最尤推定、標本分布など。</li> <li>3. 比率と母平均の推定、推定量の意味、性質、比較。</li> <li>4. 区間推定。サンプルの大きさ。</li> <li>5. 統計的仮説検定の考え方。</li> <li>6. 比率の検定—考え方と定式化。</li> <li>7. 正規分布の母平均の検定など。</li> <li>8. カテゴリカルデータの取り扱い、<math>2 \times 2</math>分割表。</li> <li>9. カテゴリカルデータの取り扱い、適合度検定。</li> <li>10. データの大小関係を利用する。符号検定。</li> <li>11. データの順位を利用する。順位和検定。</li> <li>12. データのつながりを利用する。連検定。</li> <li>13. データの度数分布を利用する。K S 検定。</li> <li>14. 秋学期のまとめ。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：池田、松井、富田、馬場著、『統計学』、内田老鶴圃。</p> <p>参考書：松井敬著、『統計解析のきほん』、日本実業出版社</p>		<p>期末の試験による。</p>	

01年度以降（春）	統計学 b（経済学科生再履修者用）	担当者	富田 幸弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>近代統計学の手法は、品質管理、種々の調査、実験データの処理などを通じて広く社会一般に受け入れられ、経済学や経営学を含む諸科学にも多くの貢献をしてきている。特に、近年のコンピュータの発達は、データの取り扱いと統計的方法への接近を容易にしている。こうしたことから、統計学の背景にある科学的方法としての理論の枠組みとその重要性を十分に理解し、応用力を身につけることを目標としている。</p> <p>その内容は、以下のとおりである。</p> <p>（1）統計的推定</p> <p>（2）統計的仮説検定</p> <p><b>【注意】</b> <u>統計学 a の単位取得者のみ</u>が履修できる。</p> <p>ただし、4年生で9月卒業見込み者は、教務課にて相談してください。</p>		<p>1 データの整理（1）</p> <p>2 データの整理（2）</p> <p>3 確率分布</p> <p>4 母集団と標本・中心極限定理</p> <p>5 統計的推定（1）平均</p> <p>6 統計的推定（2）比率</p> <p>7 統計的仮説検定（1）概説</p> <p>8 統計的仮説検定（2）平均</p> <p>9 統計的仮説検定（3）平均の差</p> <p>10 統計的仮説検定（4）比率</p> <p>11 統計的仮説検定（5）比率の差</p> <p>12 統計的仮説検定（6）分割表</p> <p>13 統計的仮説検定（7）適合度検定など</p> <p>14 推定と検定のまとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
池田・松井・富田・馬場 共著 『統計学』－データから現実をさぐる 内田老鶴圃		定期試験の結果により評価する。 出席状況・レポートなども考慮する。	

01年度以降（秋）	統計学 a（経済学科生再履修者用）	担当者	富田 幸弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>近代統計学の手法は、品質管理、種々の調査、実験データの処理などを通じて広く社会一般に受け入れられ、経済学や経営学を含む諸科学にも多くの貢献をしてきている。特に、近年のコンピュータの発達は、データの取り扱いと統計的方法への接近を容易にしている。こうしたことから、統計学の背景にある科学的方法としての理論の枠組みとその重要性を十分に理解し、応用力を身につけることを目標としている。</p> <p>その内容は、以下のとおりである。</p> <p>（1）データの整理</p> <p>（2）確率分布</p> <p><b>【注意】</b> <u>2年生以上の者のみ</u>が履修できる。</p> <p>（1年生は履修不可）</p>		<p>1 統計学とは、評価・受講上の注意など</p> <p>2 データの整理（1）平均・標準偏差</p> <p>3 データの整理（2）その他のパラメータ</p> <p>4 データの整理（3）度数分布表・ヒストグラム</p> <p>5 データの整理（4）簡便法（仮平均法）</p> <p>6 データの整理（5）データの視覚化</p> <p>7 データの整理（6）相関係数・回帰直線</p> <p>8 データの整理（7）計算演習</p> <p>9 確率分布（1）確率・二項定理</p> <p>10 確率分布（2）二項分布・漸化式</p> <p>11 確率分布（3）正規分布・標準化</p> <p>12 確率分布（4）その他の確率分布</p> <p>13 確率分布（5）計算演習</p> <p>14 春学期の復習と定期試験について</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
池田・松井・富田・馬場 共著 『統計学』－データから現実をさぐる 内田老鶴圃		定期試験の結果により評価する。 出席状況・レポートなども考慮する。	

01年以降(春)	コンピュータ入門 a	担当者	各担当教員
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義は、大学でのレポート作成や、ゼミでのプレゼンテーションにおいて必要となる、ワードプロセッサ、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトの実際的な利用方法を、実習を通して身につけることと、コンピュータの基本的な知識を身につけることを目的とする。</p> <p>コンピュータの単なるスキルではなく、社会に出てから必要となるコンピュータおよびネットワークの基礎的な知識および技能を身につけることが目的である。</p> <p>また、リレーショナルデータベースとよばれる、大規模なデータ管理の際に使用されるデータの作成についても取り扱う。</p> <p>レポート提出は、講義支援システムを利用する。</p> <p>なお、各テーマが取り扱われる順序や、時間配分については、担当教員によって異なることがある。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義概要</li> <li>2. コンピュータの基礎</li> <li>3. ネットワークの基礎</li> <li>4. ワードプロセッサの有効利用</li> <li>5. ワードプロセッサでレポートを書く</li> <li>6. 表計算ソフトの有効利用</li> <li>7. 表計算ソフトでデータ分析する</li> <li>8. 表計算ソフトの関数を活用する</li> <li>9. プレゼンテーションソフトの有効利用</li> <li>10. プレゼンテーションソフトで調査内容発表</li> <li>11. データベースの作成</li> <li>12. データベースの利用方法</li> <li>13. 外部データベースの利用</li> <li>14. ソフトの統合</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：NOA 出版、『Office 活用術』</p> <p>：立田ルミ他『ひと目で分かる最新情報モラル』日経 BP 社</p>		出席-20%、レポート-40%、試験-40%。	

01年以降(秋)	コンピュータ入門 b	担当者	各担当教員
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>コンピュータを用いて作業を行う際には、ワープロや表計算のような市販のアプリケーションソフトを使用するだけでなく、コンピュータプログラムを作成し、既存のソフトを使うだけでは出来ないことを行うことができる。コンピュータプログラムを作成する際には、プログラム言語の文法を覚えることに加えて、どのような手順（アルゴリズム）でコンピュータにより問題を解くのかを考え、それをプログラムとして表現することが重要である。</p> <p>この講義では、Java、C 言語、Visual Basic といったコンピュータ言語のひとつを使用して、プログラム作成の基礎を学ぶ。使用する言語は、担当教員ごとに異なるが、各種言語を用いたプログラム法を学び、基礎的な問題解決の手順をプログラムで表現できるようになることを目指す。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の進め方について</li> <li>2. 使用言語の特徴とプログラムの作成方法</li> <li>3. 簡単な処理</li> <li>4. 場合分け(1)</li> <li>5. 場合分け(2)</li> <li>6. 繰り返す(1)</li> <li>7. 繰り返す(2)</li> <li>8. ファイルの処理</li> <li>9. 簡単なアルゴリズム</li> <li>10. 関数を用いるアルゴリズム</li> <li>11. 複数の関数の利用</li> <li>12. 総合プログラム作成 1</li> <li>13. 総合プログラム作成 2</li> <li>14. 総合プログラム作成 3</li> </ol> <p>担当教員が指定した問題を、数回の講義に分けて作成する。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
各担当教員指定の教科書または印刷物		出席-20%、レポート-40%、試験-40%。	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

01年度以降（秋）	プレゼンテーション技法	担当者	大和田 勇人
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義目的： プレゼンテーション・スキルの向上を目指し、「デジタル・プレゼンテーション」の資料作成と発表を実践することを目的とする。プレゼンテーションとは、人前で一定の課題について説明したり、説得することである。学生時代にはレポートを書くことや、ディベートすることと並んで、プレゼンテーションをする機会が多くある。また、社会に出てもプレゼンテーションする機会は多く、いかにうまくプレゼンテーションできるかが仕事の能力の一部になっている。学生時代の早い時期にこのプレゼンテーションについて基本的なことを学ぶことは大きな意義がある。</p> <p>講義概要： 次の2項目を主軸にして、発表の実践を行う。 (1) プレゼンテーションの基本スキルとして、計画、デザイン、発表方法を学習する。 (2) 各自、登壇して発表を体験する。</p> <p>学習態度： プレゼンテーションは「伝えたいこと」が相手に伝わるのが肝要である。プレゼンテーションには発表のほかに送呈の意味がある。相手にプレゼントするような気持ちで、相手の立場になって発表しよう。</p> <p>マーケティング、広告、ネットショップなどのビジネス上でのマルチメディアの応用事例を示し、それらがどのように体系的に構成されているかを講義する。次に、そうした事例に対応して、マルチメディア作成のソフトウェアを利用して、図形・画像処理・静止画・アニメーションを実際に取り上げ、マルチメディアシステムの構成方法を実習を通じて説明していく。その際、3次元グラフィックスとビデオ画像を新たに取り上げ、ワイヤーフレームモデルやサーフェスモデルなどの3Dモデリングやレンダリングを行ったり、ビデオ取り込みのためのハード・ソフトを用いて、マルチメディア作品を作成していくプロセスを学ぶ。さらに、これらで作成したファイルをインターネット上に載せ、最終的にプレゼンテーションを行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ガイダンス</li> <li>2 プレゼンテーションの基本、準備</li> <li>3 内容構成、視覚資料、図式化</li> <li>4 印象付ける話し方 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボディランゲージとジェスチャー</li> <li>・声と話し方、リハーサルの方法</li> </ul> </li> <li>5 スライド作成（1） テーマは各自が調査して決定する。自分でテーマが見つからない学生は、2～3題のテーマを用意しておく。</li> <li>6 スライド作成（2）</li> <li>7 リハーサル（1） 各自リハーサルを行う。</li> <li>8 リハーサル（2）</li> <li>9 発表（1） 各自が登壇して、発表を行う。</li> <li>10 発表（2）</li> <li>11 発表（3）</li> <li>12 発表（4）</li> <li>13 発表（5）</li> <li>14 講評とまとめ</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
授業の資料はパソコンで閲覧できるように、Web上に掲載しておく。		出席20%、レポート30%、発表50%。テストは実施しない。	

01年度以降（春）	経営学 a （経済学科生用）	担当者	上坂 卓郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義は経済学部の学生として専門の学習を進める上で、また将来企業人として仕事をする上で必要となる「企業経営」に関する基礎的知識の習得をめざす。また諸君の企業に対する関心の惹起や見方を形成するための契機になるような講義を意図している。講義はテキスト、ハンドアウトをベースにして進める。なお講義と並行して日頃より新聞やニュース等で企業の動向に関心を持つことをこころがけてください。最近ノートをとらない、とれない学生が増えています。理解を確実にするため労をいとわずノートをとってください。<u>この経営学 a と b は内容が連続しています。両方とることが望ましい。</u></p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 経営学とはどのような学問か、経営学の歴史</li> <li>2 会社設立と形態 法人について</li> <li>3 経営理念、経営目標</li> <li>4 ヒトのマネジメント(1) モチベーション</li> <li>5 同 (2) 賃金、雇用、教育訓練</li> <li>6 同 (3) 組織の設計</li> <li>7 同 (4) 組織の管理</li> <li>8 カネのマネジメント(1) 資金調達</li> <li>9 同 (2) 資金運用</li> <li>10 同 (3) キャップロー計画と管理</li> <li>11 同 (4) 資金リスクマネジメント手法</li> <li>12 モノのマネジメント (1) 生産計画と管理</li> <li>13 モノのマネジメント(2) 投資計画の策定と意思決定</li> <li>14 補足とまとめ</li> </ol> <p>※ テキストや進捗にあわせて内容を変更する可能性がある</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
初回の講義で指示する。また参考資料を適宜配布する		試験による。追試、レポートは行わない。出席はとらないが、出席をしないと単位はとれない。	

01年度以降（秋）	経営学 b （経済学科生用）	担当者	上坂 卓郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>同一担当者の経営学 a の講義の受講を前提として進める。<u>この経営学 b は a 内容が連続しています。両方とることが望ましい。</u></p> <p>業種、経営規模や業歴などにより企業は驚くほど違う様相をみせているが、変わらない経営の基本がある。本科目では、企業経営を行う場合に必要となる考え方を体系的にわかりやすく説明していく。現実の企業経営について知識のない諸君に、経営学の主要テーマと現実の橋渡しをするような講義を実施する。最近ノートをとらない、とれない学生が増えています。理解を確実にするため労をいとわず出席しノートをとってください。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 現代の企業経営と経営学の役割</li> <li>2 会社成長のマネジメント(1) 経営戦略立案</li> <li>3 同 (2) 経営戦略立案(続)</li> <li>4 同 (3) 経営計画の策定と管理</li> <li>5 同 (4) 業績管理の設計と経営資源配分政策</li> <li>6 同 (5) 全社リスク管理体制</li> <li>7 同 (6) グループ会社政策と管理</li> <li>8 経営者論</li> <li>9 コーポレートガバナンス</li> <li>10 企業買収戦略、買収防衛</li> <li>11 企業文化の形成</li> <li>12 企業の持続的発展と社会的責任</li> <li>13 企業の衰退と再生</li> <li>14 補足とまとめ</li> </ol> <p>※ テキストや進捗にあわせて内容を変更する可能性がある</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
初回の講義で指示する。また参考資料を適宜配布する		試験による。追試、レポートは行わない。出席はとらないが、出席をしないと単位はとれない。	

01年度以降（春）	簿記原理 a	担当者	飯塚 由実
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>簿記とは、企業の日々の経営活動を記録・計算・整理して企業の経営成績と財産状態を明らかにするためのものである。本講義においては簿記初学者を対象とし、複式簿記に関する基本的な知識・記帳方法を学習していく。</p> <p>複式簿記は単式簿記とは異なり、記入を必要とする全ての行為及び事象を2つの側面から把握し、記入していくものであり、複式簿記は経営管理を行う経営者にとってはもちろん、企業に投資や融資を行う株主や債権者にとっても、そして企業で働く従業員にとっても、企業活動を理解する上で、とても重要なものである。</p> <p>授業では日商3級程度の内容を扱い、複式簿記の基本概念及び、簿記一巡の手続きの理解を促す。</p> <p>講義はテキストと毎回配布するプリントを中心に進め、授業の中では毎回練習問題も取り入れていく予定である。授業進度は学生の理解度を勘案して調節していきたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 簿記の意義とその目的</li> <li>2. 資産・負債・資本および貸借対照表</li> <li>3. 収益・費用・純損益および損益計算書</li> <li>4. 取引</li> <li>5. 勘定・勘定記入の法則・貸借平均の原理</li> <li>6. 仕訳・転記(1)</li> <li>7. 仕訳・転記(2)</li> <li>8. 決算(1)</li> <li>9. 現金・預金</li> <li>10. 有価証券</li> <li>11. 商品売買に関する処理</li> <li>12. 売掛金・買掛金</li> <li>13. 手形に関する処理</li> <li>14. その他の債券・債務</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
八田進二 橋本尚 『新版 簿記の基本を学ぶ』同文館出版		定期試験によって評価するが、平常授業における小テストなども評価対象とする。	

01年度以降（秋）	簿記原理 b	担当者	飯塚 由実
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>簿記とは、企業の日々の経営活動を記録・計算・整理して企業の経営成績と財産状態を明らかにするためのものである。本講義においては簿記初学者を対象とし、複式簿記に関する基本的な知識・記帳方法を学習していく。</p> <p>複式簿記は単式簿記とは異なり、記入を必要とする全ての行為及び事象を2つの側面から把握し、記入していくものであり、複式簿記は経営管理を行う経営者にとってはもちろん、企業に投資や融資を行う株主や債権者にとっても、そして企業で働く従業員にとっても、企業活動を理解する上で、とても重要なものである。</p> <p>授業では日商3級程度の内容を扱い、複式簿記の基本概念及び、簿記一巡の手続きを理解してもらう。</p> <p>講義はテキストと毎回配布するプリントを中心に進め、授業の中では毎回練習問題も取り入れていく予定である。授業進度は学生の理解度を勘案して調節していきたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 固定資産</li> <li>2. 資本金・引出金および個人企業の税金</li> <li>3. 貸倒れの処理と貸倒引当金</li> <li>4. 費用・収益の繰延・見越(1)</li> <li>5. 費用・収益の繰延・見越(2)</li> <li>6. 訂正仕訳</li> <li>7. 帳簿と伝票</li> <li>8. 決算(2)</li> <li>9. 決算(3)</li> <li>10. 決算(4)</li> <li>11. 決算(5)</li> <li>12. 財務諸表の作成</li> <li>13. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
八田進二 橋本尚 『新版 簿記の基本を学ぶ』同文館出版		定期試験によって評価するが、平常授業における小テストなども評価対象とする。	

01年度以降（春）	簿記原理 b	担当者	井出 健二郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義の対象者 簿記原理 a の講義をすでに習得された方を対象に講義を進めていきます。簿記原理 a を履修せずに、チャレンジしても結構ですが、6桁精算表あたりまでの範囲については独学されておくをお願いしておきます。</p> <p>講義の目的 簿記原理 b を受講終了後、日本商工会議所簿記検定 3 級にチャレンジできるレベルのチカラをつけてもらえることを目的としていきます。</p> <p>講義の概要 可能な限り平易な解説に努めながら、日本商工会議所簿記検定 3 級試験をクリアできるような内容まで取り扱っていきたくと思っています。 ということは、計画にあるような講義をすると同時に、問題等をできる限りといていくということになります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 仕訳の復習</li> <li>2 個別の取引 掛取引</li> <li>3 個別の取引 売買目的有価証券</li> <li>4 個別の取引 固定資産</li> <li>5 個別の取引 貸倒れ</li> <li>6 個別の取引 減価償却</li> <li>7 個別の取引 手形</li> <li>8 個別の取引 その他の債権・債務</li> <li>9 個別の取引 決算整理事項</li> <li>10 精算表</li> <li>11 精算表</li> <li>12 伝票・訂正の処理</li> <li>13 検定試験の傾向と対策</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
開講時に指示します。		出席 40%、試験等 40%、その他 20%(講義後のリアクションペーパー、提出物など)	

01年度以降（秋）	簿記原理 a	担当者	井出 健二郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義の対象者 初めて「簿記」を勉強する方に受講してもらいたくと思っています。「経済学部だから簿記、けれど数学かなあ、」と思っている方、大丈夫です。「他学部だけど、せめて就職のため簿記、けれどなあ…」と思っている方、大丈夫です。いずれにせよ、簿記のボの字も知らない方が対象です。(もちろん、再履修の方も歓迎です……)</p> <p>講義の目的 ① 簿記とは、こういうものか、とわかってもらうこと。 ② 簿記のやり方をマスターしてもらうこと。 ③ 簿記の検定試験、受けてみようかなあ、と思うくらいに、皆さんを後押しすること</p> <p>簿記の概要 簿記は、決算書の作り方です。ただ、皆さんの将来にも関係しています。簿記に関する資格は日本商工会議所の主催する検定試験が定評あります。さらに、公認会計士や税理士など独立開業して活躍できるものもあれば、国税専門官など公務員として、あるいは米国会計士として海外で活躍することもできることとなります。簿記が何かを知り、みなさんを喚起できればと思っています。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 講義にあたってのイントロダクション</li> <li>2 簿記とは何ですか</li> <li>3 簿記の手続 仕訳</li> <li>4 簿記の手続 仕訳</li> <li>5 簿記の手続 転記</li> <li>6 簿記の手続 試算表</li> <li>7 簿記の手続 貸借対照表</li> <li>8 簿記の手続 損益計算書</li> <li>9 簿記の手続 精算表</li> <li>10 簿記の手続 精算表</li> <li>11 簿記原理 b につなげる意味で、個別の取引 現金</li> <li>12 個別の取引 当座預金</li> <li>13 個別の取引 商品売買</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
開講時に指示します。		はじめての方ですから、出席して聞いてほしいので、出席 50%、試験 40%、その他 10%	

01年度以降（春）	簿記原理 a	担当者	内倉 滋
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>企業会計は、しばしば「事業の言語」であると言われる。言葉にはすべて文法があるように、企業会計という1つの言語にも「文法」に相当するものがある。「簿記原理」という科目は、いわば、その企業会計の「文法」に相当するものの基本的部分を純粋に形式的に解明していく分野であると言えることができる。</p> <p>会計という言葉は、今日では1つの世界共通語である。それゆえその「文法」に相当するものの中身もまた、基本的には共通的なものであろう。本講義では、そうした共通的な中身のうちの、とりわけ‘最大公約数’の部分だけを、丹念に議論していきたいと考えている。そのうち「簿記原理 a」では、‘決算整理’を含まない、「分記法」を前提とした「簿記一巡の手続き」までの内容を取り扱うこととなる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 企業の財政状態と貸借対照表……簿記の目的等</li> <li>2 企業の経営成績と損益計算書……簿記の第2目的の達成方法；損益計算書等式（損益計算書）</li> <li>3 取引と取引の分解……期首B/Sと「取引」記録からのB/S・P/Lの作成；「取引」記録のルール</li> <li>4 仕訳帳と総勘定元帳 その1：「仕訳」……設例による説明</li> <li>5 仕訳帳と総勘定元帳 その2：「勘定口座」……その必要性；勘定口座の形式；勘定口座への記入ルール</li> <li>6 仕訳帳と総勘定元帳 その3：「仕訳帳と元帳」……仕訳帳；元帳（形式、「仕丁」欄、「摘要」欄、「相手勘定科目」）</li> <li>7 春学期 中間試験</li> <li>8 試算表と精算表 その1：「試算表」……決算について；合計試算表；残高試算表；合計残高試算表</li> <li>9 試算表と精算表 その2：「精算表」……仮設例の提示（次回と共通）；精算表の原理</li> <li>10 「勘定の振替え」という技法について</li> <li>11 決算手続 その1：純損益の振替</li> <li>12 決算手続 その2：帳簿の締切りと繰越試算表……財務諸表の作成を含む</li> <li>13 決算手続の復習（第7回～第11回の復習）</li> <li>14 春学期の総復習……同形式の問題により、春学期末試験の予行演習</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
<ol style="list-style-type: none"> <li>① 中村泰将 編著、『演習 現代簿記』（中央経済社）。</li> <li>② 現代会計教育研究会 編、『簿記練習帳 3級商業簿記』（多賀出版）。</li> </ol>		<p>評価の中心は期末試験の結果である。その際には、相対評価を基本とし、絶対評価を加味したい。</p>	

01年度以降（秋）	簿記原理 b	担当者	内倉 滋
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>「簿記原理 a」の知識を前提としてこの「簿記原理 b」では、「商品3分法」や各種の「決算整理」といったディテールを内容的に付け加えていき、‘会計言語’の文法の中身を、より実際の会計実践に近い形のものに深化させていくこととしたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 現金と預金・有価証券……有価証券の評価 含む</li> <li>2 商品の3分法 その1……簡単な設例による説明</li> <li>3 商品の3分法 その2……値引、返品、諸経費 の処理</li> <li>4 仕入と売上の記帳 その1……帳簿の種類；仕入帳・売上帳；掛け売買の記帳（貸倒れの問題含む）</li> <li>5 仕入と売上の記帳 その2：商品有高帳……その必要性・位置付け；移動平均法と先入先出法</li> <li>6 受取手形と支払手形……手形の種類；簿記上の勘定と処理；手形の裏書譲渡；手形記入帳</li> <li>7 貸倒引当金繰入と貸倒引当金……貸倒れの見越しの意義；原理；償却債権の取立て</li> <li>8 秋学期 中間試験</li> <li>9 有形固定資産……固定資産の記帳；減価償却（意義、毎期の減価償却費、売却時の処理）</li> <li>10 その他の債権債務・資本金と引出金……その他の債権・債務の処理；個人企業の資本の記帳</li> <li>11 収益・費用の見越しと繰延べ……設例の提示；収益・費用の繰延べ；収益・費用の見越し</li> <li>12 決算整理と精算表の作成</li> <li>13 帳簿組織と伝票会計…3伝票制；複写式伝票の利用</li> <li>14 秋学期の総復習……同形式の問題により、秋学期末試験の予行演習</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
「簿記原理 a」と同じ。		「簿記原理 a」と同様。	

01年度以降(春)	簿記原理 a		担当者	香取 徹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>		
<p>簿記は必ず身に付けておかなければならない基本的な技術です。どのような職業についても簿記の知識は実社会で不可欠ですから、全学の学生が履修する必要があります。この講義では、日本商工会議所簿記検定3級の範囲を完全に網羅します。また、会計学原理、財務会計論、原価計算論、管理会計論などの会計に関連する科目を学ぶ上でとても重要な基礎になります。</p> <p>簿記は決して難しいものではありませんが、技術ですから、身につけるためには、練習が必要です。そのため、毎回の講義では、一つずつ項目を説明し例題の解説をしてから講義に合わせてトレーニングを練習します。講義中に練習しながら質問を受けていきます。</p>		<p>第1週 ガイダンス</p> <p>第2週 テーマ1 簿記の基礎</p> <p>第3週 テーマ2 日常の手続きⅠ</p> <p>第4週 テーマ3 日常の手続きⅡ</p> <p>第5週 同上</p> <p>第6週 小テスト</p> <p>第7週 テーマ4 商品売買Ⅰ</p> <p>第8週 テーマ5 商品売買Ⅱ</p> <p>第9週 テーマ6 現金</p> <p>第10週 テーマ7 当座預金</p> <p>第11週 テーマ8 小口現金</p> <p>第12週 テーマ9 手形Ⅰ</p> <p>第13週 同上</p> <p>第14週 テーマ10 手形Ⅱ</p>		
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>		
<p>とおるテキスト 日商簿記3級 TAC 出版</p> <p>とおるゼミ 日商簿記3級 TAC 出版</p>		5月(100)と定期試験(200)の2回の成績とトレーニング(30)		

01年度以降(秋)	簿記原理 b		担当者	香取 徹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>		
<p>簿記は必ず身に付けておかなければならない基本的な技術です。どのような職業についても簿記の知識は実社会で不可欠ですから、全学の学生が履修する必要があります。この講義では、日本商工会議所簿記検定3級の範囲を完全に網羅します。また、会計学原理、財務会計論、原価計算論、管理会計論などの会計に関連する科目を学ぶ上でとても重要な基礎になります。</p> <p>簿記は決して難しいものではありませんが、技術ですから、身につけるためには、練習が必要です。そのため、毎回の講義では、一つずつ項目を説明し例題の解説をしてから講義に合わせてトレーニングを練習します。講義中に練習しながら質問を受けていきます。</p>		<p>第1週 テーマ11 その他の期中取引Ⅰ</p> <p>第2週 テーマ12 その他の期中取引Ⅱ</p> <p>第3週 テーマ13 その他の期中取引Ⅲ</p> <p>第4週 テーマ14 その他の期中取引Ⅳ</p> <p>第5週 テーマ15 試算表の作成Ⅰ</p> <p>第6週 テーマ16 試算表の作成Ⅱ</p> <p>第7週 テーマ17 精算表</p> <p>第8週 決算の手続きⅠ</p> <p>第9週 テーマ18 決算の手続きⅡ</p> <p>第10週 テーマ19 決算の手続きⅢ</p> <p>第11週 テーマ20 決算の手続きⅣ</p> <p>第12週 テーマ21 決算の手続きⅤ・Ⅵ</p> <p>第13週 テーマ23 伝票式会計</p>		
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>		
<p>とおるテキスト 日商簿記3級 TAC 出版</p> <p>とおるゼミ 日商簿記3級 TAC 出版</p>		定期試験(100)の成績とトレーニング(10)		

01年度以降（春）	簿記原理 a	担当者	金井 繁雅
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>複式簿記の計算原理を探究することに主眼を置き、商企業の経済活動つまり取引を正確に記録・計算・整理する能力を身につけることを目的とする。</p> <p>複式簿記の原理および計算構造を学び、複式簿記の一連の手續を習得し、商企業の日常取引の記帳処理と決算処理を理解してもらう。まず、資産、負債、資本、収益および費用という5つの概念とその相互関係、資本等式や貸借対照表等式を解説し、資本をストックとして捉えて利益を計算する財産法と資本をフローとして捉えて利益を計算する損益法の計算原理を理解してもらう。さらに、簿記の対象である取引を分解し、仕訳帳に記入し、それを総勘定元帳に転記し、決算において試算表を作成し、その記録の正確性を検証し、精算表を作成し、決算本手續である帳簿決算の手續を経て、損益計算書や貸借対照表などの財務諸表を作成するという簿記手續の全体像を把握してもらう。</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>① 簿記の意義と目的</li> <li>② 資産・負債・資本の諸概念</li> <li>③ 収益・費用の諸概念</li> <li>④ 財産法と損益法</li> <li>⑤ 取引と勘定記入</li> <li>⑥ 仕訳と転記（1）</li> <li>⑦ 仕訳と転記（2）</li> <li>⑧ 試算表と精算表</li> <li>⑨ 帳簿決算手續</li> <li>⑩ 現金および現金過不足の会計処理</li> <li>⑪ 当座預金および当座借越の会計処理</li> <li>⑫ 売買目的有価証券の会計処理</li> <li>⑬ 商品勘定の3分法</li> <li>⑭ 発送費・返品・値引きの処理</li> </ul>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
中村泰將 編著『演習 現代簿記』 中央経済社		定期試験の結果に出席率を加味して、総合的に成績評価を行う。	

01年度以降（秋）	簿記原理 b	担当者	金井 繁雅
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では、基本的な簿記手續の一巡の理解を前提として、企業の複雑な日常取引の会計処理の理解を目的とするとともに、種々の計算表の作成にも習熟してもらうこととする。</p> <p>ここでは、財産法(ストック計算)や損益法(フロー計算)とよばれている複式簿記の計算構造を再確認しながら、各勘定科目毎に詳細な検討を加えていくことにする。具体的には、企業の日常の諸取引の仕訳を通して種々の会計処理を概説し、それを総勘定元帳へ転記していく主要簿の流れとともに、各勘定科目の詳細を記録する補助元帳や補助記入帳などの補助簿の流れも検討することにする。また、初級簿記の完全な理解のために、複雑な試算表や精算表の作成に多くの時間を取ることにしたい。</p> <p>簿記は数多くの練習問題を繰り返し解くという勉強態度が要求されるので、講義の前半では、各項目のポイントを説明し、後半で練習問題を解答するという形式で講義を進めることとする。</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>① 仕入帳・売上帳・商品有高帳</li> <li>② 得意先元帳と仕入先元帳</li> <li>③ 手形取引の記帳</li> <li>④ 手形取引と手形記入帳</li> <li>⑤ その他の債権・債務について</li> <li>⑥ 貸倒れと貸倒引当金</li> <li>⑦ 固定資産と減価償却</li> <li>⑧ 資本金と引出金</li> <li>⑨ 収益と費用の見越・繰延（1）</li> <li>⑩ 収益と費用の見越・繰延（2）</li> <li>⑪ 試算表の作成と伝票会計</li> <li>⑫ 8桁精算表の作成（1）</li> <li>⑬ 8桁精算表の作成（2）</li> </ul>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
中村泰將 編著 『演習現代簿記』 中央経済社		定期試験の結果に出席率を加味して総合的に成績評価を行う	

01年度以降（春）	簿記原理 a	担当者	中村 泰將 <sup>やすまさ</sup>
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>授業目的： 本講座の目的は、どのようにして一定期間の企業の利益（フロー）や、一定時点の財産の有高（ストック）を計算するかについて、記録と計算の原理（「複式簿記」という）を学ぶことである。</p> <p>授業概要： 春学期は、簿記の基本的原則である、簿記の一連のプロセス[経済活動の識別→仕訳→勘定→試算表→(精算表)→決算→B/SとP/Lの作成]を学ぶことである。これを「簿記のワン・サイクル」とよぶ。ここまでの簿記の基本的計算構造であり、春学期で学ぶ範囲である。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 簿記とは何か。</li> <li>2. 複式簿記の基本構造</li> <li>3. 簿記上の取引と種類</li> <li>4. 貸借対照表と損益計算書</li> <li>5. 勘定</li> <li>6. 仕訳</li> <li>7. 仕訳帳と総勘定元帳</li> <li>8. 試算表</li> <li>9. 精算表</li> <li>10. 決算(1)</li> <li>11. 決算(2)</li> <li>12. 演習問題</li> <li>13. 演習問題</li> <li>14. 演習問題</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
中村泰將編著『演習 現代簿記』（第2版）中央経済社		出席・宿題・小テスト（20%）、定期試験（80%）	

01年度以降（秋）	簿記原理 b	担当者	中村 泰將 <sup>やすまさ</sup>
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義目的：学期と同様。</p> <p>講義概要： 秋学期は、春学期よりも種々の新しい勘定科目や取引が登場してくる。したがって、秋学期では、春学期で学んだ「簿記の記録と計算の原理」を基礎に、それらをどのように帳簿に記録し、計算するかを学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 現金と当座預金</li> <li>2. 商品の仕入・管理・販売の処理 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 商品の売買利益の計算</li> <li>(2) 商品の3分法</li> <li>(3) 商品有高帳の作成</li> <li>(4) 仕入帳と売上帳</li> </ol> </li> <li>3. 有価証券の処理</li> <li>4. 固定資産の処理</li> <li>5. その他の債権・債務</li> <li>6. 手形の取引</li> <li>7. 資本金と引出金の処理</li> <li>8. 決算の修正手続き(1)</li> <li>9.         "          (2)</li> <li>10.        "          (3)</li> <li>11. 8桁精算表の作成(1)</li> <li>12.         "          (2)</li> <li>13. 演習問題</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
中村泰將編著『演習 現代簿記』（第2版）中央経済社		出席・宿題・小テスト（20%）、定期試験（80%）	

01年度以降（春）	簿記原理 a	担当者	細田 哲
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義の目標</p> <p>「複式簿記」の基本的仕組み、簿記一巡の手続きについて理解すること。また企業における基本的な取引について記帳し、決算手続きを遂行し、損益計算書、貸借対照表作成ができるようになることを目標とする。</p> <p>講義概要</p> <p>春学期講義は、学生諸君が複式簿記を理解し、簡単な精算表の作成、決算本手続を遂行できるようにすることを目的とする。講義の個々のテーマを列挙すると、次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 複式簿記とは</li> <li>・ 簿記の仕組み</li> <li>・ 試算表と精算表</li> <li>・ 決算(I)</li> </ul>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「1.複式簿記とは(1)」 a)簿記の目的と種類</li> <li>2. 「1.複式簿記とは(2)」 b)複式簿記の計算要素</li> <li>3. 「2.簿記の仕組み(1)」 a)取引と勘定、b)勘定記入法</li> <li>4. 「2.簿記の仕組み(2)」 a)取引と勘定、b)勘定記入法</li> <li>5. 「2.簿記の仕組み(3)」 c)仕訳と転記、d)仕訳帳と総勘定元帳</li> <li>6. 「2.簿記の仕組み(4)」 c)仕訳と転記、d)仕訳帳と総勘定元帳</li> <li>7. 「3.試算表と精算表(1)」 a)試算表の作成、b)精算表の作成</li> <li>8. 「3.試算表と精算表(2)」 a)試算表の作成、b)精算表の作成.</li> <li>9. 「4.決算(I)(1)」 a)決算の意味と手続</li> <li>10. 「4.決算(I)(2)」 b)大陸式決算法、c)英米式決算法</li> <li>11. 「4.決算(I)(3)」 b)大陸式決算法、c)英米式決算法</li> <li>12. 「4.決算(I)(4)」 d)損益計算書と貸借対照表の作成、e)開始記入</li> <li>13. 決算手続の演習 (1)</li> <li>14. 決算手続の演習 (2)</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
中村泰将（編著）「演習 現代簿記」（中央経済社）		期末試験の結果による。	

01年度以降（秋）	簿記原理 b	担当者	細田 哲
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>秋学期講義は、学生諸君が次の事項を容易に遂行できるようにすることを目的とする。個々の取引に対する記帳、8桁精算表の作成、決算本手続の遂行、損益計算書と貸借対照表の作成である。講義の個々のテーマを列挙すると、次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現金・預金取引の記帳</li> <li>・ 商品売買取引の記帳</li> <li>・ 手形取引の記帳</li> <li>・ その他の取引の記帳</li> <li>・ 決算(II)決算整理</li> <li>・ 損益計算書と貸借対照表の作成</li> </ul>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「5.現金・預金取引の記帳」</li> <li>2. 「6.商品売買取引の記帳(1)」 a)分記法、3分法</li> <li>3. 「6.商品売買取引の記帳(2)」 b)仕入帳と売上帳、c)商品有高帳</li> <li>4. 「6.商品売買取引の記帳(3)」 b)仕入帳と売上帳、c)商品有高帳、d)掛取引の記帳</li> <li>5. 「7.手形取引の記帳(1)」 a)約束手形と為替手形、b)受取手形勘定と支払手形勘定、c)手形の裏書と割引</li> <li>6. 「7.手形取引の記帳(2)」 a)受取手形記入帳と支払手形記入帳 b)不渡手形、f) 手形貸付金と手形借入金</li> <li>7. 「8.その他の取引の記帳」 a)その他の債権、債務取引、b)有価証券取引 c)固定資産取引、d)営業費等の取引</li> <li>8. 「9.決算(II)決算整理(1)」 a)決算整理の意味、b)棚卸減耗損及び商品評価損</li> <li>9. 「9.決算(II)決算整理(2)」 c)有価証券評価損、d)固定資産の減価償却</li> <li>10. 「9.決算(II)決算整理(3)」 e)費用・収益の繰延と見越、f) 8桁精算表の作成</li> <li>11. 「9.決算(II)決算整理(4)」 e)費用・収益の繰延と見越、f) 8桁精算表の作成</li> <li>12. 「損益計算書と貸借対照表の作成」</li> <li>13. 精算表作成の演習 (1)</li> <li>14. 精算表作成の演習 (2)</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
中村泰将（編著）「講座 現代簿記」（中央経済社）		期末試験の結果による。	

01年度以降（春）	簿記原理 a	担当者	百瀬 房徳
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
簿記原理では、複式簿記を内包した簿記を取り上げる。この簿記を商業簿記と称する。複式簿記は、取引の借方と貸方による仕訳に基づき勘定に分解し、元帳における勘定へ転記し、このシステムを通じて、事業の資産、負債および資本の増減を測定する。この勘定システムと事業体の組織に関連して、各勘定の意義および機能と、各勘定の具体的な処理について基本的な理解を深める。		1 複式簿記の現代における意義 2 複式簿記の体系および簿記における取引とは何か 3 仕訳の基本的原理および取引勘定への転記 4 補助簿への記入および試算表の作成 5 精算表の作成原理および損益勘定と残高勘定への転記 6 取引パターン別の仕訳例の説明 7 パターン別に仕訳された例の勘定への転記 8 例題による取引の仕訳および勘定への転記 9 大陸法と英米法による勘定の締切 10 大陸法と英米法による勘定の記入例 11 例題による精算表の作成および決済に際しての損益勘定および残高勘定の完成 12 練習問題 取引の仕訳帳記入および仕訳帳から元帳への転記 13 練習問題 試算表の作成および精算表の作成 14 練習問題 元帳の締め切りによる損益勘定および残高勘定の完成、および試算表および精算表の作成	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
百瀬 房徳「体系複式簿記」森山書店		テスト	

01年度以降（秋）	簿記原理 b	担当者	百瀬 房徳
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
複式簿記の基本的勘定システムを理解した後、各勘定について、勘定とそれに関連する補助簿の記入を具体的に理解する。そして、最終的に決算制度に関連して、試算表および精算表の作成を通じて、損益勘定から損益計算表を、残高勘定（大陸法）から貸借対照表を作成するプロセスを理解する。		1 現金勘定と現金出納帳 2 当座預金と当座預金出納帳、および小口現金と小口現金出納帳 3 商品勘定の記入方法 単純な商品勘定、混合商品勘定および商品勘定の分割 4 仕入勘定と仕入帳、商品の仕入価格および商品の返品と値引き 5 売上勘定と売上帳 6 繰越商品勘定と商品有高帳、および棚卸減耗損および商品評価損 7 売掛金勘定と得意先元帳、および買掛金勘定と仕入先元帳 8 受取手形と支払手形 9 受取手形勘定と受取手形記入帳、および支払手形勘定と支払手形記入帳 10 貸倒引当金の処理 11 その他の債権・債務の諸勘定、有価証券勘定 12 固定資産の諸勘定 特に減価償却による処理 13 決算前の諸勘定の整理について 14 決算 勘定の締め切り、損益勘定および残高勘定（大陸法）の完成、および8桁精算表の作成	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
百瀬 房徳「体系複式簿記」森山書店		テスト	

01年度以降（春）	簿記原理 a	担当者	湯田 雅夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義は、受講生全員が日本商工会議所検定3級の実力を修得するよう、初級簿記の原理と技法を懇切丁寧に解説する。</p> <p>複式簿記の基礎的な原理と技法を修得させることを主眼として、講義と記帳・計算練習を並行して行う。</p> <p>受講生は、授業の進捗度に応じて教科書の練習問題について、記帳練習を重ねる必要がある。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. インTRODakション： 講義概要ならびに授業の進め方</li> <li>2. 簿記の歴史</li> <li>3. 第1章 簿記の意義と目的； 第2章 資産・負債・資本と貸借対照表</li> <li>4. 第2章 東京商会の事例解説； 第3章 収益・費用と損益計算書</li> <li>5. 第4章 取引；第5章 勘定</li> <li>6. 第6章 仕訳と転記</li> <li>7. 第7章 帳簿</li> <li>8. 第8章 簿記一巡の手続き</li> <li>9. 小テスト</li> <li>10. 第9章 現金預金</li> <li>11. 第10章 商品売買</li> <li>12. 第10章 商品売買</li> <li>13. 第11章 有価証券</li> <li>14. 第12章 売掛金と買掛金</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>渋谷・湯田編著『ベーシック簿記（仮題）』 中央経済社 2010年</p>		<p>期末試験と授業中に行う小テスト、出席状況から総合的に評価する。</p>	

01年度以降（秋）	簿記原理 b	担当者	湯田 雅夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義は、受講生全員が日本商工会議所検定3級の実力を修得するよう、初級簿記の原理と技法を懇切丁寧に解説する。</p> <p>複式簿記の基礎的な原理と技法を完全に修得させることを主眼として、講義と記帳・計算練習を並行して行う。</p> <p>受講生は、授業の進捗度に応じて教科書の練習問題について、記帳練習を重ねる必要がある。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 第13章 その他の債権・債務</li> <li>2. 第14章 手形</li> <li>3. 第15章 貸倒れと貸倒引当金</li> <li>4. 第16章 固定資産；第17章 資本金と引出金</li> <li>5. 第18章 収益・費用の繰延と見越</li> <li>6. 第19章 決算予備手続</li> <li>7. 第19章 決算予備手続</li> <li>8. 小テスト</li> <li>9. 第20章 例題解説</li> <li>10. 第20章 決算本手続</li> <li>11. 第20章 決算本手続</li> <li>12. 総合問題①</li> <li>13. 総合問題②</li> <li>14. 総合問題③</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>渋谷・湯田編著『ベーシック簿記（仮題）』 中央経済社 2010年</p>		<p>期末試験と授業中に行う小テスト、出席状況から総合的に評価する。</p>	

01年度以降(春)	数学a	担当者	高木 悟
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済学や経営学を学習するうえで必要となる数学のうち、線形代数学(行列・連立1次方程式)について講義する。また、これらを応用した産業関連問題や線形計画問題についても解説する。この講義で得た数学の知識や論理的な思考能力は今後の人生において必ず役に立つのでしっかり勉強してほしい。最初の授業時にガイダンスとして講義内容や成績評価方法について説明し、下記「授業のページ」の資料を開くためのパスワードを述べるので、必ず出席すること(パスワードをメール等で知らせることはしない)。</p> <p>【授業のページ URL】</p> <p><a href="http://www.aoni.waseda.jp/satoru/lec/">http://www.aoni.waseda.jp/satoru/lec/</a></p> <p>または <a href="http://home.att.ne.jp/air/satorut/lec/">http://home.att.ne.jp/air/satorut/lec/</a></p> <p>から当該年度・時限の数学a「授業のページ」をクリック</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス, 基本的事項の説明</li> <li>2. 行列の定義</li> <li>3. 行列の演算</li> <li>4. 行列と連立1次方程式</li> <li>5. 行列の基本変形</li> <li>6. 行列の簡約化</li> <li>7. 連立1次方程式の解法</li> <li>8. 問題演習</li> <li>9. 行列式の定義</li> <li>10. 行列式の性質</li> <li>11. 逆行列</li> <li>12. クラームルの公式</li> <li>13. 問題演習</li> <li>14. 経済・経営学への応用</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>教科書:『経済・経営学のための数学』(高木 悟 著)</p> <p>(事前に上記「授業のページ」で購入方法を確認のこと)</p>		<p>授業中の小テスト(40%)と期末に実施するレポート(60%)により評価する。</p>	

01年度以降(秋)	数学b	担当者	高木 悟
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済学や経営学を学習するうえで必要となる数学のうち、解析学(関数・グラフ・微分・偏微分・極値問題)について講義する。また、これらを応用した損益分岐点問題や最適化問題についても解説する。この講義で得た数学の知識や論理的な思考能力は今後の人生において必ず役に立つのでしっかり勉強してほしい。最初の授業時にガイダンスとして講義内容や成績評価方法について説明し、下記「授業のページ」の資料を開くためのパスワードを述べるので、必ず出席すること(パスワードをメール等で知らせることはしない)。</p> <p>【授業のページ URL】</p> <p><a href="http://www.aoni.waseda.jp/satoru/lec/">http://www.aoni.waseda.jp/satoru/lec/</a></p> <p>または <a href="http://home.att.ne.jp/air/satorut/lec/">http://home.att.ne.jp/air/satorut/lec/</a></p> <p>から当該年度・時限の数学b「授業のページ」をクリック</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス, 基本的事項の説明</li> <li>2. 多項式関数</li> <li>3. 分数関数</li> <li>4. 指数関数</li> <li>5. 対数関数</li> <li>6. 極限と微分の定義</li> <li>7. 微分の計算</li> <li>8. 合成関数の微分</li> <li>9. 問題演習</li> <li>10. 極値とグラフ描画</li> <li>11. 多変数関数の微分(偏微分)</li> <li>12. 条件付き極値問題</li> <li>13. 問題演習</li> <li>14. 経済・経営学への応用</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>教科書:『経済・経営学のための数学』(高木 悟 著)</p> <p>(事前に上記「授業のページ」で購入方法を確認のこと)</p>		<p>授業中の小テスト(40%)と期末に実施するレポート(60%)により評価する。</p>	

01年度以降（春）	高齢化社会論 a	担当者	奥山 正司
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義では、人口高齢化がもたらす社会的インパクトや老年期における高齢者の社会生活の変化及び老人福祉、老後保障の内容及び動向などについて、理解を深めることを目的とする。</p> <p>具体的には、日本における人口高齢化、高齢化の地域的偏在、平均寿命、健康寿命、エイジズム、家族、居住形態、ライフ・サイクル、就業など高齢者の客観的な生活の様相について、諸外国との対比をふまえながら講義し、高齢（化）社会の全体像を明らかにする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業の進め方と授業内容</li> <li>2. ジェロントロジとは</li> <li>3. 離脱理論、活動理論</li> <li>4. 人口高齢化と高齢化社会</li> <li>5. エイジング(加齢、Aging)平均余命、長寿社会</li> <li>6. 敬老支配とエイジズム</li> <li>7. 高齢者と家族、老親子の居住形態</li> <li>8. ライフ・サイクル、家族周期と老年期</li> <li>9. ライフ・サイクルの過程及び高齢者の生活</li> <li>10. 高齢者と生計及び経済状況</li> <li>11. 高齢者世帯の所得水準、所得構造、消費水準</li> <li>12. 高齢者の社会活動</li> <li>13. 諸外国の高齢者生活</li> <li>14. 講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
授業時に指示する。		受講条件：bを必ず履修すること。筆記試験（70%）を基礎にして、レポート（10%）、授業中での小テスト（10%）、出席（10%）等を加味して総合的に評価する。	

01年度以降（秋）	高齢化社会論 b	担当者	奥山 正司
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義では、老人福祉法及び介護保険法、老人保健法等をふまえ、老人福祉サービスの居宅サービス及び施設サービス、老後保障の動向などについて、理解を深めることを目的とする。</p> <p>具体的には、老人福祉、老後保障、介護保険などの法的側面及び制度についてと福祉先進国であるスウェーデン、デンマーク及び自立自助の米国と比較しながら日本の高齢者福祉はどのような点に特徴がみられるのか、を講義し、高齢（化）社会の全体像を明らかにする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 老人福祉法、社会福祉法</li> <li>2. ゴールドプラン、新ゴールドプラン</li> <li>3. 介護保険法</li> <li>4. 在宅福祉サービス（1）</li> <li>5. 在宅福祉サービス（2）</li> <li>6. 在宅福祉サービス（3）</li> <li>7. 施設福祉サービス（1）</li> <li>8. 施設福祉サービス（2）</li> <li>9. 施設福祉サービス（3）</li> <li>10. 施設福祉サービス（4）</li> <li>11. 老齢保障（1）社会保障、財政支出</li> <li>12. 諸外国の高齢者福祉</li> <li>13. 講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
授業時に指示する。		受講条件：aを必ず履修すること。筆記試験（70%）を基礎にして、レポート（10%）、授業中での小テスト（10%）、出席（10%）等を加味して総合的に評価する。	

03年度以降(春) 01~02年度(春)	精神衛生論 a 精神衛生論(通年)	担当者	中野 隆史
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>現代の社会では心の健康に関連するできごとが大きな問題となっている。長引く経済不況下で中高年の自殺が増加し、好景気の時期を経た現在でも自殺者は年間2万人台から3万人台へと激増したままである。精神衛生(=精神保健=メンタルヘルス)の知識は現代を生きる上で不可欠である。本講義では精神保健と精神医学の基本的な知識を身につけることによって自己を理解し、自身の学生生活とその後的人生を豊かにし、友人・家族など身近な人、職場の同僚や部下に対する援助のできる社会人を育成することを目標とする。</p> <p>精神保健の概念とその実践の対象から講義を始める。次いで精神保健の理解に必要な精神医学の基本的知識を学ぶ。これらを踏まえてライフサイクルから見た精神保健すなわち各ライフステージにおける発達課題とその障害について考えていく。講義全体を通して自分の身の回りの実例やマスメディアの報道などを精神保健の視点からとらえ、これらの事例に関する討論を通じて精神保健の知識と理解を深めてゆく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション</li> <li>2 精神保健の実践の対象</li> <li>3 精神医学の基本的知識 (1) 精神障害の成因・分類</li> <li>4 精神医学の基本的知識 (2) 心因性精神障害</li> <li>5 精神医学の基本的知識 (3) うつ病</li> <li>6 精神医学の基本的知識 (4) 統合失調症</li> <li>7 精神医学の基本的知識 (5) 精神科の治療</li> <li>8 ライフサイクルから見た精神保健 (1) 乳幼児期</li> <li>9 ライフサイクルから見た精神保健 (2) 児童期・思春期</li> <li>10 ライフサイクルから見た精神保健 (3) 青年期</li> <li>11 ストレスとその対処法</li> <li>12 ライフサイクルから見た精神保健 (4) 成人期</li> <li>13 ライフサイクルから見た精神保健 (5) 老年期</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストはとくに指定しない。レジュメを配布する。 参考文献は講義の際に紹介する。</p>		<p>試験の成績による。 再試験・追試験は行わない。</p>	

03年度以降(秋) 01~02年度(秋)	精神衛生論 b 精神衛生論(通年)	担当者	中野 隆史
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>精神保健(=精神衛生=メンタルヘルス)や精神障害の問題は一部の特別な人だけのものではない。現代のストレスフルな社会(虐待、いじめ、リストラ……)では誰もが必ず関わることがある問題である。「明日はわが身」である。本講義では健常者の精神的健康の維持増進のためのストレス対処法やメンタルヘルス不全者への対応などの基本的な知識を身につけることによって自己を理解し、自身の学生生活とその後的人生を豊かにし、友人・家族など身近な人、職場の同僚や部下に対する援助のできる社会人を育成することを目標とする。</p> <p>精神衛生論 a を踏まえてそれぞれの生活の場から見た精神保健を考えていく。さらに、精神障害の予防と精神の健康管理(精神的健康の保持増進)、わが国の精神科医療の現状について学ぶ。講義全体を通して自分の身の回りの実例やマスメディアの報道などを精神保健の視点からとらえ、これらの事例に関する討論を通じて精神保健の知識と理解を深めてゆく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション</li> <li>2 生活の場から見た精神保健 (1) 家族の精神保健(1)</li> <li>3 生活の場から見た精神保健 (2) 家族の精神保健(2)</li> <li>4 生活の場から見た精神保健 (3) 学校の精神保健 (1)</li> <li>5 生活の場から見た精神保健 (4) 学校の精神保健 (2)</li> <li>6 ストレスとその対処法</li> <li>7 生活の場から見た精神保健 (5) 職場の精神保健 (1)</li> <li>8 生活の場から見た精神保健 (6) 職場の精神保健 (2)</li> <li>9 生活の場から見た精神保健 (7) 職場の精神保健 (3)</li> <li>10 生活の場から見た精神保健 (8) 地域の精神保健 (1)</li> <li>11 生活の場から見た精神保健 (9) 地域の精神保健 (2)</li> <li>12 わが国の精神科医療の現状</li> <li>13 医療費の抑制・市場原理の導入・混合診療の解禁の得失</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストはとくに指定しない。レジュメを配布する。 参考文献は講義の際に紹介する。</p>		<p>試験の成績による。 再試験・追試験は行わない。</p>	

01年度以降（春）	医療・福祉概論 a	担当者	石井 加代子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この授業では、医療や介護、年金、貧困対策を提供する“福祉国家”のあり方と必要性について、経済学の視点を交えて学ぶことを目的とします。</p> <p>講義は、下記に挙げた参考書に沿って進めていきますが、参考書の内容は英国の状況をもとに書かれているため、必要に応じて、日本の状況についても紹介していきます。</p> <p>春学期は、福祉国家の成立過程や、福祉国家を理解するための経済学の基礎知識など、概論的な話を中心に進めていきます。秋学期は、春学期に習得した知識を活用し、諸制度のあり方や問題点について勉強していきます。</p> <p>人口の少子高齢化が進み、国の財政が緊迫する中、医療や福祉の保障制度のあり方について昨今大きな関心を集めていますが、この授業を通して、こういった問題について自ら考える力を養ってもらうことを期待しています。</p> <p>尚、トピックスについては、やむを得ない事情から取捨選択することがあります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. 福祉政策の歴史的背景（1）</li> <li>3. 福祉政策の歴史的背景（2）</li> <li>4. 社会正義と国家（1）</li> <li>5. 社会正義と国家（2）</li> <li>6. 福祉国家の経済学的解釈（1）</li> <li>7. 福祉国家の経済学的解釈（2）</li> <li>8. 福祉国家の経済学的解釈（3）</li> <li>9. 生活水準の測り方（1）</li> <li>10. 生活水準の測り方（2）</li> <li>11. 財政（1）</li> <li>12. 財政（2）</li> <li>13. 福祉政策の現状</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>参考文献： Nicholas Barr, <i>Economics of the Welfare State</i>, Oxford University Press.</p>		出席および期末テストの総合評価	

01年度以降（秋）	医療・福祉概論 b	担当者	石井 加代子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この授業では、医療や介護、年金、貧困対策を提供する“福祉国家”のあり方と必要性を経済学の視点を交えて学ぶことを目的とします。</p> <p>講義は、下記に挙げた参考書に沿って進めていきますが、参考書の内容は英国の状況をもとに書かれているため、必要に応じて、日本の状況についても紹介していきます。</p> <p>秋学期は、春学期に習得した知識を活用し、諸制度のあり方や問題点について勉強していきます。履修に際し特に規定は設けませんが、春学期の授業を履修していることが望ましいでしょう。</p> <p>人口の少子高齢化が進み、国の財政が緊迫する中、医療や福祉の保障制度のあり方について昨今大きな関心を集めていますが、この授業を通して、こういった問題について自ら考える力を養ってもらうことを期待しています。</p> <p>尚、トピックスについては、やむを得ない事情から取捨選択することがあります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. 福祉国家について</li> <li>3. 保険について（1）</li> <li>4. 保険について（2）</li> <li>5. 保険について（3）</li> <li>6. 消費の平準化～年金～（1）</li> <li>7. 消費の平準化～年金～（2）</li> <li>8. 貧困対策（1）</li> <li>9. 貧困対策（2）</li> <li>10. 医療政策（1）</li> <li>11. 医療政策（2）</li> <li>12. 医療政策（3）</li> <li>13. 子育て政策</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>参考書： Nicholas Barr, <i>Economics of the Welfare State</i>, Oxford University Press.</p>		出席および期末テストの総合評価	

01 年度以降 (春)	現代文化論 a	担当者	柴崎 信三
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>米国のサブプライム危機に端を発した金融危機は、またたく間に世界に波及して日本や欧州、アジアなどを覆った。現代のグローバリゼーションはさまざまな国家や地域を飲みこむ大波であり、20 世紀の世界の覇権を握ってきた米国のシステムと文化がその中心にあった。</p> <p>言語、宗教、生活習慣、社会システム、人々の価値観など「文化」がかかわる領域は幅広い。20 世紀の社会はそれぞれの国や地域の固有性に根ざしながら、民主主義という統治の仕組みから市場経済システムのありかたや大量消費の文化など、米国というモデルの強い影響力の下で統合されてきたとみることもできる。</p> <p>しかし 21 世紀の今日、その米国の文化的な覇権が揺らいでいることは、9/11 事件以降の国際社会や世界を覆っている金融危機を見るまでもない。</p> <p>春学期は「米国」という歴史の浅い超大国が覇権国家として 20 世紀の世界にもたらしてきた文化的な影響力の由来とその限界を、歴史にさかのぼって考える。国家や民族、地域の文化が持つ固有性と、それを飲み込む普遍性を通してグローバリゼーションの意味を学びたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 はじめに</li> <li>2 文明のかたち</li> <li>3 「帝国」と覇権</li> <li>4 フランクリン型人間像</li> <li>5 トクヴィルが見た米国</li> <li>6 WASP と移民国家</li> <li>7 ロックフェラーと石油の世紀</li> <li>8 大量生産・大量消費の文化</li> <li>9 冷戦と「豊かな時代」</li> <li>10 「信頼」と社会</li> <li>11 「大きな政府」から「小さな政府」へ</li> <li>12 米国標準とソフトパワー</li> <li>13 アメリカンシステムと金融危機</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
各回、資料を配布する。佐伯啓思『新「帝国」アメリカを解剖する』（ちくま新書）を参考文献とする。		定期試験の成績に加えて、通常の授業で課するレポートの実績を勘案して評価する。	

01 年度以降 (秋)	現代文化論 b	担当者	柴崎 信三
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>わたしたちが生きている場は、それぞれの言語や風土、民族や宗教、伝統と文化の下に置かれている。現代社会はこうした固有の環境がグローバリズムという大きなうねりと衝突し、あるいは融合して変化しながら、新たな文化のかたちとなってあらわれる。</p> <p>中国文明の強い影響と極東の島国という地理的な条件の下で、日本は古来独特の文化を育んできた。それは外来の知識の積極的な受け入れとその固有の風土への融合による、新たなハイブリッド（混合）型の文化といえる。</p> <p>明治維新以降の日本は近代化を進めた結果、アジアの先頭を切って西欧列強へ仲間入りした。近隣の植民地と敗戦という負の遺産を超えて、戦後に果たした復興と経済大国への道には、そうした日本の文化的な特質が少なからず寄与している。</p> <p>ここでは近代の日本というモデルを通して、文芸や美術などの表象から社会システムや技術のありかたなど、その「文化」のさまざまな現れ方を探り、グローバリズムと伝統や固有の価値とのかかわりを考える。そのなかで、米国が主導してきたグローバル化の波が異文化とどのように向き合い、新たな価値を生んでいくかを問いたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 はじめに</li> <li>2 脱亜入欧とジャポニズム</li> <li>3 日本型システムの起源</li> <li>4 天皇制という仕組み</li> <li>5 敗戦と占領</li> <li>6 1955 年体制と戦後日本</li> <li>7 MADE IN JAPAN</li> <li>8 高度成長と中流社会</li> <li>9 ブランドと消費社会</li> <li>10 日本礼賛と日本たたき</li> <li>11 COOL JAPAN</li> <li>12 日本という表象</li> <li>13 グローバリズムと文化</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
各回、資料を配布する。夏目漱石『三四郎』（岩波文庫）、荒井一博『文化の経済学』（文春新書）を参考文献とする。		定期試験の成績に加えて、通常の授業で課するレポートの実績を勘案して評価する。	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	有吉 秀樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では、マーケティング戦略の外国文献の抜粋を輪読する。原書にあたることにより、マーケティングに対する理解が深まるものと確信している。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2～4. Marketing: An Overview</li> <li>5～7. Marketing Objective</li> <li>8～11. External Situation Analysis</li> <li>12～14. Internal Situation Analysis</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
適宜プリントを配布する		講義中の態度と期末レポートを中心に評価する。登録は原則としてマーケティング論を受講中、受講済みの者に限る。	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	有吉 秀樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では、マーケティング戦略の外国文献の抜粋を輪読する。原書にあたることにより、マーケティングに対する理解が深まるものと確信している。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション</li> <li>2～4. Market Segmentation</li> <li>5～7. Positioning</li> <li>8～11. Marketing Mix Strategy</li> <li>12～14. Final Report</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
適宜プリントを配布する		講義中の態度と期末レポートを中心に評価する。登録は原則としてマーケティング論を受講中、受講済みの者に限る。	

01 年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	飯塚 由実
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義の目的は、長文和訳に慣れ、正確に訳すことができる力を養うことである。講義においては、英語で書かれた経済、経営に関するテーマ及び、私たちに身近な話題を取り上げ、丁寧に読み進めていく予定である。</p>		<p>毎回担当者を決め、一定の分量を訳してもらう。授業には必ず辞書を持参し、前もってしっかりと予習しておくことを求める。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>詳細は第一回目の講義で指示する。</p>		<p>平常点（報告、出席、授業態度等）20%、定期試験 80% で評価する。</p>	

01 年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	飯塚 由実
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義の目的は、長文和訳に慣れ、正確に訳すことができる力を養うことである。講義においては、英語で書かれた経済、経営に関するテーマ及び、私たちに身近な話題を取り上げ、丁寧に読み進めていく予定である。</p>		<p>毎回担当者を決め、順次報告してもらう。授業には必ず辞書を持参し、前もってしっかりと予習しておくことを求める。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>詳細は第一回目の講義で指示する。</p>		<p>平常点（報告、出席、授業態度等）20%、定期試験 80% で評価する。</p>	

01 年度以降 (春)	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	井出 健二郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済や経営にかかわる勉強をして少しは知識がついてきたことでしょう。ただ、それらを目にするコトバは当然のことながら、日本語だったはずです。</p> <p>これからはグローバルな時代です(といってもずいぶん昔から言われてきたことですが)。</p> <p>経済、経営の専門用語は、英語で何と呼ばれているのでしょうか。それを知るだけでも大変な知識でしょう。</p> <p>また、英語で書かれた文章を読んでいく中で、実はテクニカルターム(専門用語)も知ることで、より経済、経営の知識が身に着くことになるでしょう。</p> <p>どのような教材を扱っていくかは未定ですが、さほど難しくなく読みやすいもので基礎的な経済、経営の知識が得られるものを選定するつもりです。</p> <p>過不足なく、受講者全員が講義中、発表、訳づけできるように配慮しながらの講義とします。</p> <p>また、新聞、雑誌などを利用して、現時点で話題になっている経済、経営にかかわるトピックについても確認していきます。</p>		<p>1 ガイダンス</p> <p>2 ↓ テキストに沿って訳づけ、小テストあり</p> <p>13</p> <p>14 まとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
開講時に指示します。		出席 50%、試験等 50%(小テスト、通常点、訳の提出状況を総合的に判断して評価します。) 出席が第一で、過度の遅刻は欠席とします。	

01 年度以降 (秋)	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	井出 健二郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>基本的には、a に続く講義と認識してください。</p> <p>経済や経営にかかわる勉強をして少しは知識がついてきたことでしょう。ただ、それらを目にするコトバは当然のことながら、日本語だったはずです。</p> <p>これからはグローバルな時代です(といってもずいぶん昔から言われてきたことですが)。</p> <p>経済、経営の専門用語は、英語で何と呼ばれているのでしょうか。それを知るだけでも大変な知識でしょう。</p> <p>また、英語で書かれた文章を読んでいく中で、実はテクニカルターム(専門用語)も知ることで、より経済、経営の知識が身に着くことになるでしょう。</p> <p>どのような教材を扱っていくかは未定ですが、さほど難しくなく読みやすいもので基礎的な経済、経営の知識が得られるものを選定するつもりです。</p> <p>過不足なく、受講者全員が講義中、発表、訳づけできるように配慮しながらの講義とします。</p> <p>できる限り、a に比べて多くの分量を読み込んでいただくような工夫をしていきます。</p>		<p>1 ガイダンス</p> <p>2 ↓ テキストに沿って訳づけ、小テストあり</p> <p>13</p> <p>14 まとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
開講時に指示します。		出席 50%、試験等 50%(小テスト、通常点、訳の提出状況を総合的に判断して評価します。) 出席が第一で、過度の遅刻は欠席とします。	

01年度以降（春）	経済外国語 I a ・ 経営外国語 I a	担当者	伊藤 爲一郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
公共部門に関する英語文献を用いて、公共部門の基本的役割を学ぶ。			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
プリントを配布する		期末試験・出席率等総合的に評価する	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b ・ 経営外国語 I b	担当者	伊藤 爲一郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
公共部門に関する英語文献を用いて、公共部門の基本的役割を学ぶ。			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
プリントを配布する		期末試験・出席率等総合的に評価する	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	奥山 正司
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>21世紀に入り、日本は本格的な高齢社会をむかえようとしている。高齢化や高齢者に関しては、社会福祉や保健・医療の分野だけでなく、経済学及び法律学的な問題などさまざまな視点から論ぜられるようになってきている。こうした中で、高齢者と家族、地域社会とのかかわり及び寝たきり老人や認知症高齢者など要介護高齢者を対象とした狭義の福祉や保健・医療サービスなどについては、今後どのようにしていくかというきわめて重要な課題がある。本年度はそれらの課題を視野に入れながら、高齢化について、日本及び英国を中心にした文献を読むことにするとともに、その分野について考える力を身につけさせる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業の進め方及び内容の紹介</li> <li>2. 日本を含む高齢者の5か国調査の内容 (1)</li> <li>3. 日本を含む高齢者の5か国調査の内容 (2)</li> <li>4. 日本を含む高齢者の5か国調査の内容 (3)</li> <li>5. 英国における高齢者の家族生活 (1) 全体の概観</li> <li>6. 英国における高齢者の家族生活 (2) 家庭と家族</li> <li>7. 英国における高齢者の家族生活 (3) 生活と親族</li> <li>8. 英国における高齢者の家族生活 (4) 家族と介護</li> <li>9. 英国における高齢者の家族生活 (5) 家庭経済</li> <li>10. 英国における高齢者の家族生活 (6) 息子と娘</li> <li>11. 英国における高齢者の家族生活 (7) 兄弟と姉妹</li> <li>12. 英国における高齢者の家族生活 (8) 拡大家族</li> <li>13. 英国における高齢者の家族生活 (9) 家族と地域</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>授業のはじめに、コピーした原書を配布する。 Text: Shoji Okuyama, <i>Elderly parents attitudes toward the relationship with their children</i>, 2007</p>		<p>発表（70%）を基礎にして、出席（20%）及びレポート（10%）を加味して総合的に評価する。</p>	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	奥山 正司
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>21世紀に入り、日本は本格的な高齢社会をむかえようとしている。高齢化や高齢者に関しては、社会福祉や保健・医療の分野だけでなく、経済学及び法律学的な問題などさまざまな視点から論ぜられるようになってきている。こうした中で、高齢者と家族、地域社会とのかかわり及び寝たきり老人や認知症高齢者など要介護高齢者を対象とした狭義の福祉や保健・医療サービスなどについては、今後どのようにしていくかというきわめて重要な課題がある。本年度はそれらの課題を視野に入れながら、高齢化について日本及び英国を中心にした文献を読むことにするとともに、その分野について考える力を身につけさせる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業の進め方及び内容の紹介</li> <li>2. 退職とその後の生活</li> <li>3. 貧困と経済的生活</li> <li>4. 孤独と孤立</li> <li>5. 国の高齢者への保健医療福祉サービス</li> <li>6. 国の高齢者への保健医療福祉サービス</li> <li>7. 国の高齢者へのサービス</li> <li>8. 国の高齢者への保健医療福祉サービスサービス</li> <li>9. 国の高齢者への保健医療福祉サービスサービス</li> <li>10. 家族・子どもとの接触頻度</li> <li>11. 家族と高齢者問題</li> <li>12. 家族と高齢者問題</li> <li>13. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>授業のはじめに、コピーした原書を配布する。 Text: Peter Townsend, <i>The Family Life of Old People</i>, Pelican Book 他に、奥山執筆の高齢化に関する英文論文等</p>		<p>発表（70%）を基礎にして、出席（20%）及びレポート（10%）を加味して総合的に評価する。</p>	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	香取 徹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
英語を通じて、経済、経営のことを理解することが目的です。テキストや企業のホームページの英文を読み、その企業の特徴をつかむことが重要です。毎回予習が必要です。		下記のテキストの各章をそれぞれ2回分として、①訳して理解する。②その特質を考えます。又はホームページについては、その要点をつかむことが大切です。	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
Moving ahead in the 21st Century: 12 Forward-looking Companies. 松柏社		出席状況（10）、予習の程度（10）、翻訳（20）、 小テスト（10）、期末テスト（50）	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	香取 徹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
同上			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	金井 繁雅
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済社会の変動にともなって企業を取り巻く環境は大きく変化し、会計はさまざまな問題を抱えるようになった。これらの問題の一つとして、企業活動の国際化・グローバル化を背景とした会計処理や国際会計基準の設定が問題となっている。会計基準は、それぞれの国において独自の経済・法律および文化などを背景に形成されており、各国の企業が公表する財務諸表はそれぞれの国の会計基準に基づいて作成される。したがって、それらの財務諸表を単純に比較することはできない。そこに会計基準の国際的調和化の必要性が生まれてくるわけである。</p> <p>この科目では、国際会計に関するテキストを中心に精読し、会計の国際的側面を多面的に検討することにする。</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
開講時にコピーを配布する。		定期試験の結果に出席率を加味して総合的に成績評価を行う。	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	金井 繁雅
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>「経済・経営外国語 I a」と同一内容です。</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
開講時にコピーを配布する。		試験の成績に出席率を加味して、総合的に成績評価を行う。	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	上坂 卓郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>企業金融（含むベンチャー企業）に関する英語文献の読解を行う。春学期は欧米のビジネススクール教員の手になる企業の資金調達に関するテキストを取り上げる。企業金融（含むベンチャー企業）の単語や概念になじんで、外国の経営関連の文献を読むことに慣れることを主眼にする。同時にベンチャー企業の成長に関する問題点を学んでいく。担当教員の「ベンチャービジネス論」を並行して受講するとより理解が高まる。語学の上達はかけた時間に比例するといわれる。勤勉に取り組むことが重要であり、仮にもテキストや辞書を忘れて出席することがないように。 第1回のガイダンスに必ず出席すること。</p>		受講者のレベルに応じて授業計画・ペースの調整を行う	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
関連資料を都度配布する予定。詳細は授業開始時に指示する		出席（60%程度）、発表とクイズ等（40%程度）による総合評価。	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	上坂 卓郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済・経営外国語 I a と同一のテキストを継続して使用するので経済・経営外国語 I a の履修を前提とする。</p>		受講者のレベルに応じて授業計画・ペースの調整を行う	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
関連資料を配布する予定。詳細は授業開始時に指示する		出席（60%程度）、発表とクイズ等（40%程度）による総合評価	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	倉橋 透
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>【講義目的】</b> この講義では、日本経済をオンタイムで扱ったテキストを題材に、経済英語独特の言い回し及び日本語の経済用語に慣れることを目的とする。 なお、テキストを通じて日本経済の現状についての理解が深まる点でも効果があろう。</p> <p><b>【講義概要】</b> テキストを分担して、英文を音読し和訳する。 各自が分担する範囲は前の講義の際に指定する。 2回に1回の割でディクテーションテスト（書き取り）を行う（最終成績に反映しない）。</p>		<p>各月の“Monthly Economic Report”及び“Economy Watchers Survey”等を読む。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
授業中に配布（内閣府の“Monthly Economic Report”及び“Economy Watchers Survey”等）		出席（一回2点）及び定期試験による。なお、分担しているにもかかわらず欠席した場合は5点減点する。ただし、病気等理由のある場合は出席扱いとする。	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	倉橋 透
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>【講義目的】</b> 秋学期は日本経済にとどまらず、世界の政治情勢や経済情勢が世界の指導者等によりどう認識されているかの読解を行う。</p> <p><b>【講義概要】</b> テキストを分担して、英文を音読し和訳する。 各自が分担する範囲は前の講義の際に指定する。 2回に1回の割でディクテーションテスト（書き取り）を行う（最終成績に反映しない）。</p>		<p>テキストに沿って行う。 ちなみに、2009年度はオバマ大統領のプラハ演説等を題材にした。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
授業中に配布（オバマ大統領の演説等）		出席（一回2点）及び定期試験による。なお、分担しているにもかかわらず欠席した場合は5点減点する。ただし、病気等理由のある場合は出席扱いとする。	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	黒川 文子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では、国際人として活躍するために必要である国際ビジネスに関する知識を獲得し、かつ実践的な英語能力を習得することを目標とする。</p> <p>グローバル企業で働くためには、外国人とのコミュニケーション能力が必須となる。しかし、ビジネス英語の能力には、単なる会話能力だけではなく、相手の国の文化や、習慣、エチケットに関する知識まで含まれる。異文化を理解した上で国際ビジネスに携わるならば、ビジネスで成功することがより容易となるであろう。本講義ではそのようなニーズに答えるために、ビジネスに関する英語の読解、英作文の勉強をしていきます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 講義の概要</li> <li>2 Unit 1. 美の世界基準をめざして 花王 (1)</li> <li>3 Unit 1. 美の世界基準をめざして 花王 (2)</li> <li>4 Unit 2. 世界制覇をめざしたブランド統一 パナソニック (1)</li> <li>5 Unit 2. 世界制覇をめざしたブランド統一 パナソニック (2)</li> <li>6 Unit 3. 自動車工場と自然環境の調和 トヨタ (1)</li> <li>7 Unit 3. 自動車工場と自然環境の調和 トヨタ (2)</li> <li>8 Unit 4. 創業 100 周年にむけたビジョン構築 三菱電機 (1)</li> <li>9 Unit 4. 創業 100 周年にむけたビジョン構築 三菱電機 (2)</li> <li>10 Unit 5. 本業を活かした国際貢献 コマツ (1)</li> <li>11 Unit 5. 本業を活かした国際貢献 コマツ (2)</li> <li>12 Unit 6. フリート戦略：アジア No. 1 の航空会社に向けて ANA (1)</li> <li>13 Unit 6. フリート戦略：アジア No. 1 の航空会社に向けて ANA (2)</li> <li>14 講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
Atsushi Mukuhira et al., <i>“Styling Corporate Messages”</i> , SEIBIDO, 2009.		期末試験と出席によって、総合的に評価する。	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	黒川 文子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では、経営学の入門から専門書、論文までの読解できる能力を身につけることが目標である。</p> <p>この分野の読解は、単なる表面的な語句上の意味を学ぶのではなく、その語の背景となっている経営状況を理解しなければ、正しい読解は不可能である。</p> <p>経営に関する基本的文献を、まずテキストを使って輪読する。ある程度、経営学用語を用いた英文に慣れた後に、英文雑誌や新聞から抜粋した経営に関する論文や記事を配布して、講義を進める。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 講義の概要</li> <li>2 Unit 7. 付加価値サービスとスケールメリットの自動車事業 オリックス</li> <li>3 Unit 8. 店舗の多様化による顧客拡大 ローソン</li> <li>4 Unit 9. フェアで便利なネット銀行 ソニー銀行</li> <li>5 Unit 10. 統合による相乗効果を求めて J.フロントリテイリング</li> <li>6 Unit 11 地球温暖化への挑戦 東京海上グループ</li> <li>7 Unit 12. 日本の空から世界の空へ 三菱重工業・三菱航空機</li> <li>8 Unit 13. 買収による活動基盤の拡充 京セラ</li> <li>9 Unit 14. TOPVALU:顧客の声から生まれたブランド イオン</li> <li>10 Unit 15. 先端的研究開発で業界をリードする 参天製薬</li> <li>11 Unit 16. 和風の‘うまみ’を西洋に キッコーマン</li> <li>12 Unit 17. 人材とともに成長する企業 キーエンス</li> <li>13 Unit 18. トレンドを見通す独自の視点 博報堂</li> <li>14 講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
Atsushi Mukuhira et al., <i>“Styling Corporate Messages”</i> , SEIBIDO, 2009.		期末試験と出席によって、総合的に評価する。	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	黒木 亮
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義目標</p> <p>本講義の目的は、経済英語に慣れることである。丁寧に翻訳をつけ、ゆっくりと文献を読み進めることによって、基礎的な読解力を養う。</p> <p>講義概要</p> <p>あらかじめ担当者を決めず、毎回ランダムに当て、ひとり数行ずつ、できるだけ多くの人に訳出してもらう。</p> <p>受講者への要望</p> <p>毎回しっかり予習をし、辞書（単語の使われ方や例文が数多く紹介されているもの）を持参して授業に臨んでください。</p>		<p>講義概要の通り、テキストの下記の章を読み進めていく。</p> <p>Introduction</p> <p>Chapter 1 The Power of Markets</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
Charles Wheelan <i>Naked Economics</i> , W. W. Norton, 2002.		出席状態、予習の程度、報告（翻訳）の出来、小テスト、期末テスト。	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	黒木 亮
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義目標</p> <p>本講義の目的は、経済英語に慣れることである。丁寧に翻訳をつけ、ゆっくりと文献を読み進めることによって、基礎的な読解力を養う。</p> <p>講義概要</p> <p>あらかじめ担当者を決めず、毎回ランダムに当て、ひとり数行ずつ、できるだけ多くの人に訳出してもらう。</p> <p>受講者への要望</p> <p>毎回しっかり予習をし、辞書（単語の使われ方や例文が数多く紹介されているもの）を持参して授業に臨んでください。</p>		<p>講義概要の通り、テキストの下記の章を読み進めていく。</p> <p>Chapter 1 The Power of Markets</p> <p>Chapter 2 Incentives Matter</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
Charles Wheelan <i>Naked Economics</i> , W. W. Norton, 2002.		出席状態、予習の程度、報告（翻訳）の出来、小テスト、期末テスト。	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	小林 進
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済学の文献を通じて英語の力を一層向上させたいか、または現在の英語の実力を維持したい人の受講が望ましい。英語の能力は努力を怠ると簡単に下がってしまうので、受講者は日頃の予習と復習を十分に行うことが大切である。なお再履修者及び英語の基礎力の不十分な人、特に TOEIC の点数が著しく低い人は、英語の基礎力をつけるために相当の努力が必要であり、適時課された宿題にまじめに取り組んでほしい。英語の学習に一番必要なのは<b>忍耐力</b>である。よく注意して履修登録を行ってほしい。</p>		<p>受講者のレベルを考えながら講義中に述べる</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
未定（プリント配布の予定）		平常の出欠と受講態度を重視する。さらに期末の試験(プリント持ち込み可)を幾分か味して評価する。	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	小林 進
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済学の文献を通じて英語の力を一層向上させたいか、または現在の英語の実力を維持したい人の受講が望ましい。英語の能力は努力を怠ると簡単に下がってしまうので、受講者は日頃の予習と復習を十分に行うことが大切である。なお再履修者及び英語の基礎力の不十分な人、特に TOEIC の点数が著しく低い人は、英語の基礎力をつけるために相当の努力が必要である。英語の学習に一番必要なのは<b>忍耐力</b>である。よく注意して履修登録を行ってほしい。</p>		<p>受講者のレベルを考えながら講義中に述べる</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
未定（プリント配布の予定）		平常の出欠と受講態度を重視する。さらに期末の試験を幾分か味して評価する	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	小林 哲也
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済関係のニュースや情報を、英語で収集・分析するための基礎的な英語力の養成を目的とする。</p> <p>ニュースの中には、国内（日本語）での報道と海外のメディアによる報道とで大きな視点の違いがあることが多い。歴史、文化、環境などに関する国際ニュースを思い浮かべれば、発信するメディアによって同一の事件が異なった「ニュース」として報道されることすらある。</p> <p>日本経済の位置やその分析に関しても、複数の視点による理解がどうしても必要である。しかし、一足飛びに国際的なプロの分析力を手にするわけにはいかない。基本は日本語の新聞をきちんと理解し、基礎的な英語力を身につけることから始まる。</p> <p>本講義では、英字新聞や雑誌の読解力を身につけることをめざすが、同時に単語力やリスニング力などの基本的な英語力も養成する。そのために毎時間の小テストとテキストの予習が課せられる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 英語のニュース・日本語のニュース</li> <li>2. サバイバル英語のすすめ</li> <li>3. 英語で読む 英文解釈からの解放</li> <li>4. 英語で聞く ニュースの英語 歌の英語</li> <li>5. 英語で見る ニュースやドキュメントから</li> <li>6. 英語で見る 映画やショーから</li> <li>7. News in the world business.</li> <li>8. News in the world business.</li> <li>9. News in the world business.</li> <li>10. News in the world business.</li> <li>11. News in the world business.</li> <li>12. News in the world business.</li> <li>13. News in the world business.</li> <li>14. News in the world business.</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<a href="http://www.voanews.com/specialenglish/">www.voanews.com/specialenglish/</a> <a href="http://www.democracynow.org/">www.democracynow.org/</a> 西村肇『サバイバル英語のすすめ』ちくま新書		平常点＋定期試験	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	小林 哲也
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済関係のニュースや情報を、英語で収集・分析するための基礎的な英語力の養成を目的とする。</p> <p>秋学期は、英語で読む・調べる・書く、をテーマに、プレゼンテーション演習を取り入れる。参加者は、各自テーマを設定し、英語の資料やソースにあたり、英語で発表することが課せられる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 英語で読む・書く・調べる</li> <li>2. 英語で読む 新聞</li> <li>3. 英語で読む 雑誌</li> <li>4. 英語で読む インターネット</li> <li>5. 英語で聞く ニュース番組</li> <li>6. 英語で聞く インターネットラジオ</li> <li>7. 英語で調べる 辞書の使い方 資料の調べ方</li> <li>8. 英語で調べる 検索エンジン</li> <li>9. 英語で書く 身近な文章</li> <li>10. 英語で書く 専門用語</li> <li>11. 英語で発表する プレゼンテーションとは</li> <li>12. 英語で発表する 演習</li> <li>13. 英語で発表する 演習</li> <li>14. 英語で発表する 演習</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
		平常点＋発表レポート	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	齋藤 正章
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>外国語で書かれた良書は日本語で読めることが少なくありません。最近では、海外で出版されるのと同時に翻訳本が出版されることもあります。また、インターネットの進展によって翻訳支援ツールも充実してきています。</p> <p>こうした状況を見ると、読解のための語学力は、それ程高める必要はないと感じるかもしれません。しかし、それらはあくまでも「他人の訳」であって、自分のものではありません。</p> <p>原著にある微妙なニュアンスは、原著を読んだ人にしか分からないものです。本講義では、原著の内容を自分の言葉で理解するための読解力の養成を目標としています。</p>		<p>講義では、皆さんにまず音読してもらい、次に和訳してもらいます。したがって、予習が必須となります。また予習にかかる時間に比例して読解力が向上していきます。</p> <p>講義を進めていくと、問題なのは英語力ではなく、経済や経営あるいは社会に関する問題意識の欠如や知識不足が原因で読みこなせないというケースがあります。こういう場合は、基本的事項を解説しながら内容に深く入って説明していきます。</p> <p>教材の内容ですが、現実に行われている経営や実際に動いている経済に関する記事が中心となります。</p> <p>2009年度春学期は、サブプライム問題に関するノーベル経済学者のクルーグマン教授に対するインタビュー“<i>How bad is the mortgage crisis going to get?</i>”を中心に授業を進めました。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
英文雑誌、主に『FORTUNE』から経営・経済に関する記事を選び、コピーを配布します。		試験 60 点、出席、発表などの平常点 40 点の合計 100 点で評価します。	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	齋藤 正章
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>外国語で書かれた良書は日本語で読めることが少なくありません。最近では、海外で出版されるのと同時に翻訳本が出版されることもあります。また、インターネットの進展によって翻訳支援ツールも充実してきています。</p> <p>こうした状況を見ると、読解のための語学力は、それ程高める必要はないと感じるかもしれません。しかし、それらはあくまでも「他人の訳」であって、自分のものではありません。</p> <p>原著にある微妙なニュアンスは、原著を読んだ人にしか分からないものです。本講義では、原著の内容を自分の言葉で理解するための読解力の養成を目標としています。</p>		<p>講義では、皆さんにまず音読してもらい、次に和訳してもらいます。したがって、予習が必須となります。また予習にかかる時間に比例して読解力が向上していきます。</p> <p>講義を進めていくと、問題なのは英語力ではなく、経済や経営あるいは社会に関する問題意識の欠如や知識不足が原因で読みこなせないというケースがあります。こういう場合は、基本的事項を解説しながら内容に深く入って説明していきます。</p> <p>教材の内容ですが、現実に行われている経営や実際に動いている経済に関する記事が中心となります。</p> <p>2009年度秋学期は、ソニー株式会社（Sony Corporation）における変革の苦悩を記述した“<i>Sony: Lost in transformation</i>”を中心に授業を進めました。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
英文雑誌、主に『FORTUNE』から経営・経済に関する記事を選び、コピーを配布します。		試験 60 点、出席、発表などの平常点 40 点の合計 100 点で評価します。	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	塩田 尚樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>開発経済学のテキストを使って、経済学に必要な英語の基礎力の習得を目指します。</p> <p>21世紀になって10年が過ぎようとしていますが、世界には、基本的な生活物資はおろか、安全な水にさえありつけずに困っている人々がたくさんいます。開発経済学は、豊かさとは何かという根本的な問いからはじめ、貧しい国が豊かになるためにはどうすればいいのかについての処方箋を考える学問です。</p> <p>この授業では、英文を正確に読めるようになることが何よりも重要です。したがって、文法や構文のとらえ方などにこだわりながら、読む量よりも、読み方の質を重視した授業を展開する予定です。毎回、担当者の発表と質疑応答を中心として進めていきます。</p> <p>事前に担当日を決めておいて、順番に発表してもらう予定です。担当者は必ず、発表用のハンドアウトを作成し、クラス全体に配布するようにして下さい。</p> <p>なお、授業方針の確認、担当日の確定、および、履修上の注意など重要な連絡をするため、第一回目の授業には必ず出席してください。</p>		<p>1 はじめに</p> <p>2 - 13 参加者の報告と討論、および、予備的講義</p> <p>14 まとめ</p>	
<b>テキスト</b>		<b>評価方法</b>	
<p>Todaro/Smith (2008) <i>Economic Development</i> 10<sup>th</sup> edn. Addison Wesley</p>		<p>発表、授業態度、および、出席状況で評価します。</p>	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	塩田 尚樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済外国語 I a からの継続履修を前提としますが、どうしても経済外国語 I b だけを履修したい方は、相談に応じますので事前に申し出てください。</p> <p>経済外国語 I a と同様に、開発経済学のテキストを使って、経済学に必要な英語の基礎力の習得を目指します。経済外国語 I b では特に、経済成長にかかわるトピックにこだわる予定です。</p> <p>この授業では、英文を正確に読めるようになることが何よりも重要です。したがって、文法や構文のとらえ方などにこだわりながら、読む量よりも、読み方の質を重視した授業を展開する予定です。毎回、担当者の発表と質疑応答を中心として進めていきます。</p> <p>事前に担当日を決めておいて、順番に発表してもらう予定です。担当者は必ず、発表用のハンドアウトを作成し、クラス全体に配布するようにして下さい。</p> <p>なお、授業方針の確認、担当日の確定、および、履修上の注意など重要な連絡をするため、第一回目の授業には必ず出席してください。</p>		<p>1 はじめに</p> <p>2 - 13 参加者の報告と討論、および、予備的講義</p> <p>14 まとめ</p>	
<b>テキスト</b>		<b>評価方法</b>	
<p>Todaro/Smith (2008) <i>Economic Development</i> 10<sup>th</sup> edn. Addison Wesley</p>		<p>発表、授業態度、および、出席状況で評価します。</p>	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	高安 健一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>企業では、経済外国語を自社が取るべき行動と関連させて読みこなす能力が問われます。</p> <p>春学期の目標は次の4つです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・経済英語を読みこなすために必要な文法と構文に関する知識の習得。</li> <li>・基本的な語彙の習得。</li> <li>・企業活動、マクロ経済、金融政策に関する英文読解力の向上。</li> <li>・筆者の主張の背景にある経済現象や理屈を探る習慣。</li> </ul> <p>春学期では、Japan Times など国内で発行されている英字新聞を教材として使用します。第2回と第3回の授業では、担当教員が経済英語の読み方（獨協大生の弱点）を解説します。</p> <p>授業では、一人数行ずつ、できるだけ多くの受講生に訳出してもらいます。教員は、文法と構文、訳文、背景知識などを補足します。毎回、授業で取り上げた教材を全員が精訳のうえ提出します（平常点に含まれる）。</p> <p>言うまでもなく、予習は必須です。第1回の授業に必ず出席のこと。受講生の読解力を把握するために、簡単なレベルチェックを行います。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の概要、受講生のレベルチェック</li> <li>2. 経済英語の読み方 (1)</li> <li>3. 経済英語の読み方 (2)</li> <li>4. トヨタ自動車の決算 (1)</li> <li>5. トヨタ自動車の決算 (2)</li> <li>6. 中国のマクロ経済動向 (1)</li> <li>7. 中国のマクロ経済動向 (2)</li> <li>8. 新興国の成長戦略 (1)、語彙テスト</li> <li>9. 新興国の成長戦略 (2)</li> <li>10. 主要国の金融政策 (1)</li> <li>11. 主要国の金融政策 (2)</li> <li>12. 世界経済と日本企業 (1)</li> <li>13. 世界経済と日本企業 (2)</li> <li>14. 世界経済と日本企業 (3)、語彙テスト</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
教員より授業で使用するプリントを配布。		出席 (20%)、平常点 (40%)、学期末試験 (40%)。	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	高安 健一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>企業では、経済外国語を自社が取るべき行動と関連させて読みこなす能力が問われます。</p> <p>秋学期では、国際金融経済に関する教材を読み進むことにより、次の4つの目標の達成を目指します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国際金融経済に関する基本的な英文を読みこなせるようになること。</li> <li>・外国のメディアが世界経済の動きをどのような視点から分析しているかを把握すること。</li> <li>・筆者の主張の背景にある経済現象や理屈を説明できるようになること。</li> <li>・世界経済の動向がわが国のグローバル企業に影響を及ぼす経路を理解すること。</li> </ul> <p>秋学期は、Financial Times など外国で発行されている英字新聞を教材として使用します。</p> <p>授業では、一人数行ずつ、できるだけ多くの受講生に訳出してもらいます。教員は、文法と構文、訳文、背景知識などを補足します。毎回、授業で取り上げた教材を全員が精訳のうえ提出します（平常点に含まれる）。言うまでもなく、予習は必須です。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 春学期定期試験のレビュー</li> <li>2. 国際通貨基金の役割 (1)</li> <li>3. 国際通貨基金の役割 (2)</li> <li>4. 国際収支不均衡 (1)</li> <li>5. 国際収支不均衡 (2)</li> <li>6. 日米バブル経済比較 (1)</li> <li>7. 日米バブル経済比較 (2)</li> <li>8. グローバル経済危機と金融機関 (1)、語彙テスト</li> <li>9. グローバル経済危機と金融機関 (2)</li> <li>10. 国際政策協調 (1)</li> <li>11. 国際政策協調 (2)</li> <li>12. わが国グローバル企業の動向 (1)</li> <li>13. わが国グローバル企業の動向 (2)</li> <li>14. わが国グローバル企業の動向 (3)、語彙テスト</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
教員より授業で使用するプリントを配布。		出席 (20%)、平常点 (40%)、学期末試験 (40%)。	

01 年度以降 (春)	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	中村 泰將 <small>やすまさ</small>
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義目的：</p> <p>1. 英文の意味内容を経済・経営学の理論を基本として、的確に理解できるようにすること。</p> <p>2. 専門用語をできるだけ多く習得すること。</p> <p>講義概要：</p> <p>本講座は、アメリカの代表的なビッグ・カンパニーを取り上げ、これらの企業がどのようにして世界のトップに上り詰めたか、また、これらの企業の経営戦略・経営理念はどのようなものかについて本テキストを通じて学びます。</p> <p>本書では、ファースト・フードのマクドナルド、自動車のフォード、ソフト・ドリンクのコカ・コーラ、テーマパークのディズニーランド、ディスカウント・ストアのシアーズ、コンピュータのIBM、通信のAT&amp;T などの企業を取り上げます。</p> <p>(注意点)</p> <p>1. 授業には必ず辞書を持参すること。</p> <p>2. 必ず予習をしてこること。</p>		<p>1 <b>Coca-Cola (コカコーラ)</b></p> <p>2    "</p> <p>3    "</p> <p>4    "</p> <p>5 <b>Disneyland East and West (ディズニーランド)</b></p> <p>6    "</p> <p>7    "</p> <p>8    "</p> <p>9 <b>The Automobile Industry (フォード、GM)</b></p> <p>10   "</p> <p>11   "</p> <p>12 <b>McDonald's Global Strategy (マクドナルド)</b></p> <p>13   "</p> <p>14   "</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
<p>"BIG BUSINESS in AMERICA"</p> <p>By 廣原真由子、Blake Baxter、SEIBIDO</p>		<p>出席重視(3 回以上の欠席者は認めない)。</p> <p>授業中の輪読、定期試験の総合評価。</p>	

01 年度以降 (秋)	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	中村 泰將 <small>やすまさ</small>
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義目的、講義概要は春学期と同じです。</p>		<p>1. <b>The Sears Catalog (シアーズ)</b></p> <p>2.    "</p> <p>3.    "</p> <p>4.    "</p> <p>5. <b>Xerox (ゼロックス)</b></p> <p>6    "</p> <p>7    "</p> <p>8    "</p> <p>9 <b>IBM (International Business Machines)</b></p> <p>10.   "</p> <p>11.   "</p> <p>12. <b>AT&amp;T (エーティーアンティアー)</b></p> <p>13    "</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
<p>"BIG BUSINESS in AMERICA"</p> <p>By 廣原真由子、Blake Baxter、SEIBIDO</p>		<p>出席重視(3 回以上の欠席者は認めない)。</p> <p>授業中の輪読、定期試験の総合評価。</p>	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	波形 昭一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>あらゆる分野についていえることだが、経済学・経営学についても基礎的知識の習得が重要である。基礎がしっかりしていないと、その後の進歩が望めないからである。その意味で本講義では、特に経済学の基礎を外国語（英語）で習得することに目標をおく。下記の教科書は経済学の基礎を平明な英語で解説しており、本講義の目的にかなっていると思われる。学生諸君の輪読を中心に授業を進めていきたい。当たり前のことだが、予習を必ずやること、および授業には英語辞書を必ず携帯することを義務づける。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の概要</li> <li>2. Chap.1 A Matter of Choice</li> <li>3.</li> <li>4.</li> <li>5.</li> <li>6.</li> <li>7.</li> <li>8. Chap.2 Meaning of Micro</li> <li>9.</li> <li>10.</li> <li>11.</li> <li>12.</li> <li>13.</li> <li>14. 講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
John Tilmant 著（新井恵理注解）『Economics in Our Life』成美堂		定期試験に平常授業中の熱意（出席状況、発表状況）を加味し、かつ相対評価形式で評価を下す。	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	波形 昭一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義目的およびその概要は春学期と同様。春学期授業を受けていなければ理解できないというわけではないが、春学期授業を受けておくほうが望ましい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の概要</li> <li>2. Chap.3 Meaning of Macro</li> <li>3.</li> <li>4.</li> <li>5.</li> <li>6. Chap.4 Politics &amp; Policy</li> <li>7.</li> <li>8.</li> <li>9.</li> <li>10. Chap.5 At Least in Theory</li> <li>11.</li> <li>12.</li> <li>13.</li> <li>14. 講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
春学期と同じ。継続使用。		春学期と同じ。	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	浜本 光紹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>環境問題・環境経済学にかかわる英語文献や英文記事などを中心的題材として、現代の資源・環境問題とその対策に関し、学術的アプローチを通して学習する。学生自身による訳出と内容把握に重点を置く。履修学生は毎回英和辞典を持ってくること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 英文訳出と解説 資源・環境問題（1）</li> <li>3. 英文訳出と解説 資源・環境問題（2）</li> <li>4. 英文訳出と解説 資源・環境問題（3）</li> <li>5. 英文訳出と解説 資源・環境問題（4）</li> <li>6. 英文訳出と解説 資源・環境問題（5）</li> <li>7. 英文訳出と解説 資源・環境問題（6）</li> <li>8. 英文訳出と解説 資源・環境問題（7）</li> <li>9. 英文訳出と解説 資源・環境問題（8）</li> <li>10. 英文訳出と解説 資源・環境問題（9）</li> <li>11. 英文訳出と解説 資源・環境問題（10）</li> <li>12. 英文訳出と解説 資源・環境問題（11）</li> <li>13. 英文の訳出と要約 資源・環境問題（12）</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
講義の中でプリントを配布する。		出席状況、およびレポート課題によって評価する。	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	浜本 光紹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>環境問題・環境経済学にかかわる英語文献や英文記事などを中心的題材として、現代の資源・環境問題とその対策に関し、学術的アプローチを通して学習する。学生自身による訳出と内容把握に重点を置く。履修学生は毎回英和辞典を持ってくること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 英文訳出と解説 資源・環境問題（1）</li> <li>3. 英文訳出と解説 資源・環境問題（2）</li> <li>4. 英文訳出と解説 資源・環境問題（3）</li> <li>5. 英文訳出と解説 資源・環境問題（4）</li> <li>6. 英文訳出と解説 資源・環境問題（5）</li> <li>7. 英文訳出と解説 資源・環境問題（6）</li> <li>8. 英文訳出と解説 資源・環境問題（7）</li> <li>9. 英文訳出と解説 資源・環境問題（8）</li> <li>10. 英文訳出と解説 資源・環境問題（9）</li> <li>11. 英文訳出と解説 資源・環境問題（10）</li> <li>12. 英文の訳出と要約 資源・環境問題（11）</li> <li>13. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
講義の中でプリントを配布する。		出席状況、およびレポート課題によって評価する。	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	深江 敬志
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>1. 本講義では、ミクロ経済学の基礎を英語で習得する事を目標とする。</p> <p>2. 本講義は、受講生が輪読を行い、その内容についての解説およびディスカッションを行う形で進める。</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
詳細は、開講時に指示する。		出席、定期試験(もしくはレポート)、その他により総合的に評価する。	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	深江 敬志
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>1. 本講義では、ミクロ経済学の基礎を英語で習得する事を目標とする。</p> <p>2. 本講義は、受講生が輪読を行い、その内容についての解説およびディスカッションを行う形で進める。</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
詳細は、開講時に指示する。		出席、定期試験(もしくはレポート)、その他により総合的に評価する。	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	藤山 英樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>総合的な英語力と経済知識の習得がこの授業の目的である。より具体的には下記の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <b>経済・経済学の知識を英語でつける</b>：毎回、経済・社会の時事英語、経済学の英文テキストなどの資料を配付して、その内容を理解してゆく。内容確認の小テストを行うこともある。</li> <li>2. <b>経済・経済学の単語力をつける</b>：毎回、配布資料の英単語を覚える。形式は、英文の定義を読みその単語を記すである。</li> <li>3. <b>ライティング力をつける</b>：毎回、いくつかの経済英単語について、単語を見て定義を記す。（2, 3の課題の単語と定義は事前に配付する。）</li> <li>4. <b>リスニング力をつける</b>：原則として、音声のある資料を用いて、現在実際に使われている英語を聞く。</li> <li>5. <b>リーディング力をつける</b>：配付資料の音読・和訳・要約をする。2, 3が受講生の負担となるので、なるべく授業中にできる課題をと考えている。</li> <li>6. <b>文法の力をつける</b>：授業の中で、少しずつ文法の復習をしてゆく。</li> </ol>		<p>単語や文法の確認テスト（10分） リスニング（10分） リーディング（50分） その他（20分）文法の復習解説、内容の解説。機会があれば教員による英語でのプレゼンテーションなど。</p> <p>念頭に置いている教材：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 平易な英文の経済社会の記事（なるべく、Listeningが可能で、全文も文字として得られるものを考えている。Voice of America, NPRなどのインターネットサイト, Japan Times, 茅ヶ崎式など時事英語の教材）</li> <li>・ 経済学の英文のテキスト（マイクロ経済学, マクロ経済学など。英語が非常に簡単なので読みやすい）</li> </ul>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
適宜、配付する。		出席および授業内の小テスト	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	藤山 英樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>基本的な方針は春学期と同じである。ただし、春学期の経験をふまえ、春学期からの受講生の要望も聞いて、内容のバランスを変更する可能性がある。</p>		<p>原則として、春学期と同じである。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
適宜、配付する。		出席および授業内の小テスト	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	本田 浩邦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>英語に限らず、外国語の力は人生を支える大きな武器です。自分なりの目的をみだし、楽しみながら勉強する方法を身につけることができれば、生涯をつうじて外国語に親しみ、それだけ精神的にゆたかな生活をおくることができると思います。</p> <p>この授業では、文法の復習とリスニングに重点をおいて勉強します。文法はTOE I Cの対策にもなります。リスニングは、1年間続けるだけでもかなり耳ができてくるはずで</p> <p>とくに毎週の予習を課すものではありませんが、The Voice of America のホームページの Special English などは教材として大変すぐれていますので、各自それらを利用して、リスニングとリーディングの学習を継続的に行ってください。</p> <p>第1回目から必ず辞書を持ってきて下さい。電子辞書はあまり薦めません。</p>		<p>授業は3つのパートに別れます。</p> <p>1. 文法小テスト (20分)</p> <p>2. リスニング (50分)</p> <p>3. リーディング、ボキャブラリーその他 (20分)</p> <p>学期の最後に、各自、英語に関する任意のテーマで短いプレゼンテーションを行っていただきます。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
毎回資料を配付		出席、小テスト結果、その他。(3分の1以上の欠席は自動的に不可とします。)	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	本田 浩邦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>英語に限らず、外国語の力は人生を支える大きな武器です。自分なりの目的をみだし、楽しみながら勉強する方法を身につけることができれば、生涯をつうじて外国語に親しみ、それだけ精神的にゆたかな生活をおくることができると思います。</p> <p>この授業では、文法の復習とリスニングに重点をおいて勉強します。文法はTOE I C対策にもなります。リスニングは、1年間続けるだけでもかなり耳ができてくるはずで</p> <p>とくに毎週の予習を課すものではありませんが、The Voice of America のホームページの Special English などは教材として大変すぐれていますので、各自それらを利用して、リスニングとリーディングの学習を継続的に行ってください。</p> <p>第1回目から必ず辞書を持ってきて下さい。電子辞書はあまり薦めません。</p>		<p>授業は3つのパートに別れます。</p> <p>1. 文法小テスト (20分)</p> <p>2. リスニング (50分)</p> <p>3. リーディング、ボキャブラリーその他 (20分)</p> <p>学期の最後に、各自、英語に関する任意のテーマで短いプレゼンテーションを行っていただきます。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
毎回資料を配付		出席、小テスト結果、その他。(3分の1以上の欠席は自動的に不可とします。)	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	益山 光央
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>米国の大学で使われている国際経済学のテキストを読む。          予定では <i>World Trade and Payments</i>, 2nd ed. Ronald Jones &amp; Richard Cave の貿易に関する基本的な部分を担当者が発表し、それについてディスカッションする。具体的には二つのパート、<i>The Basic Trade Model</i> と <i>Production, Income Distribution, and Trade Patterns</i> の主要部分を扱う。英文・専門用語を理解するという目標と国際経済学を学ぶという目標があるので、基本的な英単語や英文法の知識を習得しているという前提ですすめます。英語が不得意の受講者は、予習、復習を欠かさないで欲しい。一年間、落ち着いてじっくり学習する受講生、困難な事から逃げない学生を希望する。          開講時にさらに良いテキストが見つければ変更する可能性もあります。</p>		<p><b>The Basic Trade Model</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 International Exchange of Commodities</li> <li>2 International Exchange of Commodities</li> <li>3 International Exchange of Commodities</li> <li>4 International Exchange of Commodities</li> <li>5 International Exchange of Commodities</li> <li>6 Production and the Demand for Imports</li> <li>7 Production and the Demand for Imports</li> <li>8 Production and the Demand for Imports</li> <li>9 Production and the Demand for Imports</li> <li>10 Production and the Demand for Imports</li> <li>11 Applications of the Basic Trade Model</li> <li>12 Applications of the Basic Trade Model</li> <li>13 Applications of the Basic Trade Model</li> <li>14 予備</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
必要な部分を教室において配布する。		講義への貢献 40% 出席 20%、試験 40%	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	益山 光央
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>春学期の続きで、<i>Production, Income Distribution, and Trade Patterns</i> を読む。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 The Ricardian Model</li> <li>2 The Ricardian Model</li> <li>3 The Ricardian Model</li> <li>4 The Ricardian Model</li> <li>5 Factor Endowments and Multilateral Trade</li> <li>6 Factor Endowments and Multilateral Trade</li> <li>7 Factor Endowments and Multilateral Trade</li> <li>8 Factor Endowments and Multilateral Trade</li> <li>9 Factor Endowments and Multilateral Trade</li> <li>10 Patterns of Trade and Economic Change</li> <li>11 Patterns of Trade and Economic Change</li> <li>12 Patterns of Trade and Economic Change</li> <li>13 Patterns of Trade and Economic Change</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
必要な部分を教室において配布する。		講義への貢献 40% 出席 20%、試験 40%	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	松本 栄次
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済地理または環境経済関係の外国書（英文）または論文をテキストに、学術的英文の読解力を高める。とくに、単なる直訳に終わらせるのではなく、図や表を含めた内容のイメージを的確に把握する能力を養う。</p>		<p>毎回、無差別にできるだけ多数の人を指名し、訳出・内容の説明を担当してもらう。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストはプリントして配布する。</p>		<p>出席回数（20%）、授業中の発表状況（20%）、および定期試験（60%）により総合的に評価する。授業回数の1/3以上欠席した者は評価の対象外。</p>	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	松本 栄次
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>aと同じ。</p>		<p>aと同じ。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストはプリントして配布する。</p>		<p>出席回数（20%）、授業中の発表状況（20%）、および定期試験（60%）により総合的に評価する。授業回数の1/3以上欠席した者は評価の対象外。</p>	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	御園生 眞
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義の目的は、経済英語に慣れることと、英文読解力の向上です。</p> <p>授業では、毎回できるだけ多くの人に訳してもらうようにします。小テストも実施します。</p> <p>(注意)</p> <p>第1回の授業でテキスト（プリント）を配布するので、履修者（予定者も含む）は必ず出席してください。</p> <p>出席は第1回の授業からとります。授業には必ず予習をして出席し、辞書を忘れずに持ってきてください。</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストはプリントを配布して使用します。</p>		<p>評価は、出席、試験（定期・小テスト）成績、訳出状態などで行います。欠席が4回になると単位が認定されないの で注意してください。</p>	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	御園生 眞
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>春学期に同じ。</p>		<p>春学期に同じ。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>春学期に同じ。</p>		<p>春学期に同じ。</p>	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	百瀬 房徳
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>ヨーロッパ経済共同体が、1993年より形成され、現在では欧州連合（EU）として拡大している。この形成のために種々の制度が統一されてきた。そのうちの付加価値税を通じて、統一過程を理解する。</p> <p>ヨーロッパで発展した付加価値税が日本において消費税として導入された。その意味では、付加価値税について知識を得ておくことは意義があろう。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 The European Economic Community</li> <li>2 The Aims of the European Community</li> <li>3 The White Paper</li> <li>4 The Community's Institutions The European Parliament</li> <li>5 The Community's Institutions The Council of Ministers</li> <li>6 The Community's Institutions The Court of Justice</li> <li>7 The Financial Means of The Community</li> <li>8 The Value Added Tax</li> <li>9 VAT in The Community</li> </ol> <p>（上記の内容を14回に分けて講義する）</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
Ernst & Young : VAT in Europe		テスト	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	百瀬 房徳
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>付加価値税が、ヨーロッパ経済共同体の共通の税となり、かつその財源になって以来、非常に大きな役割を果たすようになってきた。付加価値税の基礎概念、計算方法、付加価値税を全加盟国に導入するための障壁の除去等について理解する。この付加価値税の考え方は、日本の消費税の基礎となっている。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 Harmonization of VAT in The European Community General</li> <li>2 Harmonization of VAT in The European EC Council Directive</li> <li>3 The Proposals for Future Harmonization</li> <li>4 Commission's Proposals for a Single Market</li> <li>5 The 1987 Proposals for The Commission Removal of Fiscal Barriers</li> <li>6 The 1987 Proposals for The Commission The Clearing System</li> <li>7 The 1987 Proposals for The Commission The Approximation of VAT Rates</li> <li>8 The 1987 Proposals of The Commission</li> <li>9 The 1989 Proposals of The Commission</li> </ol> <p>（上記の内容を14回に分けて講義する）</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
Ernst & Young : VAT in Europe		テスト	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	森永 卓郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済記事を読むためには英語の知識と経済の知識の双方が必要です。この講義では、その時どきの新聞記事を読むなかで、その背景となる経済現象を学びます。記事の英語は平易なものをを用います。</p>		<p>毎週、講義後に課題の記事を配布し、発表者を決めて、翌週その記事を訳し、その内容を議論します。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
プリントを配ります		出席、試験	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	森永 卓郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済記事を読むためには英語の知識と経済の知識の双方が必要です。この講義では、その時どきの新聞記事を読むなかで、その背景となる経済現象を学びます。記事の英語は平易なものをを用います。</p>		<p>毎週、講義後に課題の記事を配布し、発表者を決めて、翌週その記事を訳し、その内容を議論します。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
プリントを配ります		出席、試験	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	山越 徳
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この科目は外国語を通して、経済の新しい動きや姿について触れると同時に、専門用語についての知識を増して、国際化の進行に少しでも順応できるようにすることを意図している。そこで本講義ではニュービジネス、新商品、技術変化、グローバルゼーション、産業集積、地域活性化、雇用問題などの中から、幾つかのペーパーを選び出し、それを共に読み、議論し、理解を進めていくことにする。そのためより多くの課題に触れられるよう、一回につき数ページをこなし多くのペーパーに取り組みたい。</p>		<p>なるべく多くの課題、論文を読み進めるため、一回につき、4～5ページは読み進めていきたい。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>順次、ペーパーのコピーを授業で配布</p>		<p>課題ペーパー（授業で配布）を訳し、レポートを提出したものと、期末テストの結果および出席と授業の受け答えによる。</p>	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	山越 徳
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>I a の課題の関連ペーパーをさらに読み進めていく。したがって I a に引き続いて履修することが望ましい。</p>		<p>同上</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>同上</p>		<p>同上</p>	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	山下 裕歩
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済・経営分野の入門的書籍から適当な題材を選択し、それを輪読していく形で進める。</p> <p>内容を理解し、正確に日本語訳することを目標とする。あらゆる分野でいえることだが、専門書を読む場合、その専門分野以外ではほとんど使われないような語句が出てきたり、あるいは、通常とは少し意味の違う特殊な意味で用いられたりすることがある。同時に、これらの語句は専門用語として対応する日本語があり、日本語としても専門用語の意味を正しく理解する必要がある。</p>		<p>受講者にはあらかじめ担当箇所を指定し、日本語訳・内容の解説をしてもらう。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>第一回目の授業でテキストを配布する。</p>		<p>期末試験・出席・報告・小テストを合わせて総合評価する。</p>	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	山下 裕歩
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済・経営分野の入門的書籍から適当な題材を選択し、それを輪読していく形で進める。</p> <p>内容を理解し、正確に日本語訳することを目標とする。あらゆる分野でいえることだが、専門書を読む場合、その専門分野以外ではほとんど使われないような語句が出てきたり、あるいは、通常とは少し意味の違う特殊な意味で用いられたりすることがある。同時に、これらの語句は専門用語として対応する日本語があり、日本語としても専門用語の意味を正しく理解する必要がある。</p>		<p>受講者にはあらかじめ担当箇所を指定し、日本語訳・内容の解説をしてもらう。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>第一回目の授業でテキストを配布する。</p>		<p>期末試験・出席・報告・小テストを合わせて総合評価する。</p>	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	山本 美樹子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>日々変動する日本経済、世界経済を理解するうえで新聞を読むことは非常に有用なことです、残念なことに最近では日本語で書かれている新聞でも十分に利用している学生が少なくなっています。</p> <p>本演習では日々変動する日本経済、世界経済を知る上でためになると思われる英字新聞の記事を読みながら、最近の経済を理解していきたいと考えています。</p> <p>英字新聞は独自の言い回しがありますが、英文1文、1文を直訳することが重要なのではなく、全体像として何を言おうとしているのかについて把握できるようになってほしいと思っています。</p> <p>ニュースソースとして考えているのはタブロイド版のNikkei Weekly です。</p>		<p>1 全体の授業についての説明と次回に読むプリントを配布</p> <p>2 回目以降は前の授業時に配布した記事を和訳していく。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
毎回、次回に読む記事のプリントを配布		学期末試験の成績、レポート、出席回数、予習態度（演習であるので、出席回数、予習有無について重視し、成績に加味します）	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	山本 美樹子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>春学期同様に英字新聞を購読していきます。</p> <p>日々変動する日本経済、世界経済を理解するうえで新聞を読むことは非常に有用なことです、残念なことに最近では日本語で書かれている新聞でも十分に利用している学生が少なくなっています。</p> <p>本演習では日々変動する日本経済、世界経済を知る上でためになると思われる英字新聞の記事を読みながら、最近の経済を理解していきたいと考えています。</p> <p>ニュースソースは春学期と同じですが、春学期の経験で、ある程度英字新聞を読むことに慣れたと思うので、すこし長めの記事、社説等を取りあげながら、全体像として何を言おうとしているのかについて理解を深めてもらいたいと考えています。</p>		<p>1 全体の授業についての説明と次回に読むプリントを配布</p> <p>2 回目以降は前の授業時に配布した記事を和訳していく。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
毎回、次回に読む記事のプリントを配布		学期末試験の成績、レポート、出席回数、予習態度（演習であるので、出席回数、予習有無について重視し、成績に加味します）	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	湯田 雅夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>会計と経営に関わる環境領域の文献をテキストに選定する。テキストの内容を理解し、併せて、専門用語が身に付くよう、授業を進める。</p>		<p>1. オリエンテーション（テキストの概要） 2. ～14. テキストの輪読、内容の解説</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：未定（基本書を選定） 参考文献：その都度指定</p>		<p>定期試験、授業への積極的参加度、出席回数を勘案して、総合評価する。</p>	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	湯田 雅夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>会計と経営に関わる環境領域の文献をテキストに選定する。テキストの内容を理解し、併せて、専門用語が身に付くよう、授業を進める。</p>		<p>1. ～14. テキストの輪読、内容の解説</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：未定（基本書を選定） 参考文献：その都度指定</p>		<p>定期試験、授業への積極的参加度、出席回数を勘案して、総合評価する。</p>	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a	担当者	米山 昌幸
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義では、英文の読み物や国際貿易に関する教科書を用いて、<u>リカードの比較生産費説、自由貿易と保護主義、アウトソーシング、貿易赤字、グローバリゼーション</u>といった貿易論のトピックについて考えていきます。この講義の目的は、英文テキストの購読を通して、貿易論のトピックに興味を持ってもらい、その理論的背景について理解してもらうことです。英文読解よりも、むしろ経済学、貿易論としての内容把握を主眼とした授業にしたいと思っています。</p> <p>予定しているテキストは下に挙げてあります。また授業計画には目次を掲載しておきましたので、<u>必ず参照してから履修するようにしてください。</u></p> <p>できるだけ貿易論や経済学の前提知識を必要としないような読み物を選んで読みたいと思いますが、専門的な知識を深めるためには「貿易論」を同時履修された方がよいでしょう。また余裕があれば、英文の参考文献を用いて、貿易理論についての学ぶことにします。</p> <p>予習を促すために、毎週授業の冒頭で <b>Weekly Test</b> を行います。受講者は予習、復習が不可欠ですし、欠席は禁物です。</p>		<p>テキストを予定のものに決めた場合には、春学期には以下の範囲を読み進めたいと思います。</p> <p>CHAPTER 1 Minutes of the Heavenly Court: Soul of David Ricardo CHAPTER 2 The Challenge of Foreign Competition CHAPTER 3 The Roundabout Way to Wealth CHAPTER 4 Is Trade Good for America? CHAPTER 5 Are Manufacturing Jobs Better Than Service Jobs? CHAPTER 6 Is Outsourcing a Threat to American Prosperity? CHAPTER 7 Do Tariffs Protect American Jobs? CHAPTER 8 Tariffs versus Quotas</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストは第1回目の授業でプリントを配布します(次のものを予定)。 Roberts, Russell, <i>The Choice: A Fable of Free Trade and Protection (3rd Edition)</i>, Prentice Hall, 2006.</p>		<p>基本的には定期試験の得点(100点満点)を評価基準(第1回目の授業で説明する)に照らして評価する。ただし、出席点や Weekly Test の得点もサービス点として加算する予定。</p>	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b	担当者	米山 昌幸
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義では、英文の読み物や国際貿易に関する教科書を用いて、<u>リカードの比較生産費説、自由貿易と保護主義、アウトソーシング、貿易赤字、グローバリゼーション</u>といった貿易論のトピックについて考えていきます。この講義の目的は、英文テキストの購読を通して、貿易論のトピックに興味を持ってもらい、その理論的背景について理解してもらうことです。英文読解よりも、むしろ経済学、貿易論としての内容把握を主眼とした授業にしたいと思っています。</p> <p>予定しているテキストは下に挙げてあります。また授業計画には目次を掲載しておきましたので、<u>必ず参照してから履修するようにしてください。</u></p> <p>できるだけ貿易論や経済学の前提知識を必要としないような読み物を選んで読みたいと思いますが、専門的な知識を深めるためには「貿易論」を同時履修された方がよいでしょう。また余裕があれば、英文の参考文献を用いて、貿易理論についての学ぶことにします。</p> <p>予習を促すために、毎週授業の冒頭で <b>Weekly Test</b> を行います。受講者は予習、復習が不可欠ですし、欠席は禁物です。</p>		<p>テキストを予定のものに決めた場合には、春学期には以下の範囲を読み進めたいと思います。</p> <p>CHAPTER 9 Road Trip CHAPTER 10 The Case for Protection CHAPTER 11 Do Trade Deficits Hurt America? CHAPTER 12 Fair Trade versus Free Trade CHAPTER 13 Is Globalization Good for the Poor? CHAPTER 14 Self-Sufficiency Is the Road to Poverty CHAPTER 15 The Choice CHAPTER 16 A Final Word from David Ricardo</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストは第1回目の授業でプリントを配布します(次のものを予定)。 Roberts, Russell, <i>The Choice: A Fable of Free Trade and Protection (3rd Edition)</i>, Prentice Hall, 2006.</p>		<p>基本的には定期試験の得点(100点満点)を評価基準(第1回目の授業で説明する)に照らして評価する。ただし、出席点や Weekly Test の得点もサービス点として加算する予定。</p>	

01年度以降（春）	経済外国語 I a・経営外国語 I a（中国語）	担当者	全 載旭
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この授業では中国語の初級段階を終え、さらに中国語の学習を継続しようとする学生、特に中国経済に関心のある学生を対象にする。ただし授業の内容は履修者の中国語習得レベルに合わせて調整する。</p> <p>履修者のレベルによっては、中国語の発音練習や基礎的な文法から勉強する。中国語の基礎ができれば、中国経済関連記事を読み、それに沿って授業を進める。</p> <p>中国経済に強い関心を持ち、これから中国語を学ぼうとする初心者の学生の履修も歓迎する。</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
必要に応じて資料を配布する。		出席状況と筆記試験などにより総合的に評価する	

01年度以降（秋）	経済外国語 I b・経営外国語 I b（中国語）	担当者	全 載旭
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>中国語や中国経済をもっと深く勉強する。</p> <p>中国経済が抱えているいろいろな問題を、理解できるように授業を進めていきたい。</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
必要に応じて資料を配布する。		出席状況と筆記試験などにより総合的に評価する	

01 年度以降 (春)	経済外国語 I a ・ 経営外国語 I a (留学生)	担当者	J. ブローガン
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>Students joining this class will have had varied English learning experiences. The main aim of the course is to develop the ability to converse in simple, non-specialized English. The main vocabulary and grammatical structures to be used the following week will be given out at the end of each class and students will be expected to translate and add to the vocabulary list before the class. Techniques to improve the ability to keep a conversation going will be shown and emphasis will be on improving these techniques rather than just developing a large vocabulary. In this first semester we will cover the main areas of grammar by talking about things we do, have done and will do in our everyday life. The emphasis will be on spoken conversational English.</p>		<p>Week1: Self-introduction and language learning history  Week2: Describing people: physical appearances and personalities Personal information, family and friends  Week3: Describing things: physical appearances and functions  Week4: Daily routines (i): the things you do regularly  <i>Using 5W/1H questions to keep a conversation going</i>  Week5: Daily routines (ii): the things you do regularly  How often you do things in your regular routines, when and for how long each time  Week6: Daily routines (iii): the things you do regularly  <i>Talking about the past and future</i>  Week7: Complaints, offers and requests  Week8: Likes and Dislikes (i):  <i>How you feel about the things and activities</i>  Week9: Likes and Dislikes (ii):  <i>How much you like or dislike a thing or activity</i>  Week10: Abilities (i)<i>Talking about things you can do</i>  Week11: Abilities (ii)  <i>Talking about how good you, and other people, are at doing things</i>  Week12: Giving directions How to give and understand directions  Week13: Comparing simple past, habitual and future events with continuous events  Week14: Plans for the summer  <i>Talking about future definite, and not so definite, plans</i></p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>Students should have an A4 folder to hold the printouts that will be provided for each class. They must also bring a dictionary to class. An electronic dictionary is highly recommended.</p>		<p>Class participation and individual improvement will be the most important factors in grading. Final grades will be based on class work and assigned work, so good attendance is essential. Two times late will equal one time absent and more than three times absent per semester will mean a failing grade.</p>	

01 年度以降 (秋)	経済外国語 I b ・ 経営外国語 I b (留学生)	担当者	J. ブローガン
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>In this second semester we will look at some techniques for maintaining and building vocabulary and on summarising what we read and hear. In the second half of the semester students will be given short stories, which they will summarise and present to the rest of the class the following week. The emphasis will be on written English.</p>		<p>Week1: Past experiences (i)  <i>Talking about what we did this summer and planning an essay</i>  Week2: Past experiences (ii)  <i>Going over the 'What I did this summer' essay with classmates</i>  Week3: Mixing up languages  <i>A look at some of the reasons behind common mistakes</i>  Week4: Suffixes and Prefixes  How to guess the meaning of new words  Week5: How to keep and build on what we know  <i>Some techniques for reviewing and building vocabulary</i>  Week6: Retelling a story (i) <i>Creating and summarising stories</i>  Week7: Retelling a story (ii)  Week8: Retelling a story (iii)  Week9: Retelling a story (iv)  Week10: Retelling a story (v)  Week11: Retelling a story (vi)  Week11: Retelling a story (vii)  Week13: Review  <i>A look at some of the things we have learned and a plan for where to go from here</i></p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>Students should have an A4 folder to hold the printouts that will be provided for each class. They must also bring a dictionary to class. An electronic dictionary is highly recommended.</p>		<p>Class participation and individual improvement will be the most important factors in grading. Final grades will be based on class work and assigned work, so good attendance is essential. Two times late will equal one time absent and more than three times absent per semester will mean a failing grade.</p>	

01年度以降（春）	経済外国語 I b・経営外国語 I b（再履修者用）	担当者	細田 哲
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>「経営財務論」上の興味深いテーマについて、英文を通じて理解する。なお、英文読解をする前に、各テーマにつき、十分説明を行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の概要</li> <li>2. 資産の価値とは（1）</li> <li>3. 資産の価値とは（2）</li> <li>4. 株価はどのように決まるのか（1）</li> <li>5. 株価はどのように決まるのか（2）</li> <li>6. 投資意思決定の基礎（1）</li> <li>7. 投資意思決定の基礎（2）</li> <li>8. ポートフォリオ理論とは（1）</li> <li>9. ポートフォリオ理論とは（2）</li> <li>10. 効率的市場仮説とは（1）</li> <li>11. 効率的市場仮説とは（2）</li> <li>12. 企業価値とは（1）</li> <li>13. 企業価値とは（2）</li> <li>14. 総括</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
コピーを適宜、配布する。		出席状況および定期試験の結果による。	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

01年度以降（春）	経済外国語 I b・経営外国語 I b（再履修者用）	担当者	本田 浩邦
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>英語に限らず、外国語の力は人生を支える大きな武器です。自分なりの目的をみだし、楽しみながら勉強する方法を身につけることができれば、生涯をつうじて外国語に親しみ、それだけ精神的にゆたかな生活をおくることができると思います。</p> <p>この授業では、文法の復習とリスニングに重点をおいて勉強します。文法はTOEIC対策にもなります。リスニングは、1年間続けるだけでもかなり耳ができてくるはずですよ。</p> <p>とくに毎週の予習を課すものではありませんが、The Voice of America のホームページの Special English などは教材として大変すぐれていますので、各自それらを利用して、リスニングとリーディングの学習を継続的に行って下さい。</p> <p>第1回目から必ず辞書を持ってきて下さい。電子辞書はあまり薦めません。</p>		<p>授業は3つのパートに別れる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 文法小テスト（20分）</li> <li>2. リスニング（50分）</li> <li>3. リーディング、ボキャブラリーその他（20分）</li> </ol> <p>学期の最後に、各自、英語に関する任意のテーマで短いプレゼンテーションを行っていただきます。</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
毎回資料を配付		出席、小テスト結果、その他。（3分の1以上の欠席は自動的に不可とします。）	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

08年度以降(春) 01~07年度(春)	外書講読 a 経済外国語Ⅱa・経営外国語Ⅱa	担当者	岡村 国和
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>本講義の目的は、英国の福祉制度や社会保障のアウトラインを知ることにあります。できるだけ平易な文章を選びますが、福祉をめぐる一般用語は普段あまり見ない単語、あるいは知っている単語でも決まった専門訳がある単語が出てきますので、注意が必要です。内容的には我が国の制度とあまり変わりませんので、比較的とり組みやすいと思います。その理由は、日本の制度が英国の制度を模範としている点が多いからです。</p> <p>なお、適宜トピックスなどを取り入れていきますので、関連書物(邦文)を図書館などで探して予習・復習することをお勧めします。</p>		<p>①参考書などは随時紹介します。</p> <p>翻訳書がないテキストを使用しますが、関連した内容については邦文の書籍が多数ありますので、概要を知ることにはそれ程努力をしなくてもできるかと思います。</p> <p>②テキストは英国 DWP(労働年金省)の <b>Estimating economic and social welfare impacts of pension reform.</b> First Published 2006. ISBN 1 84712 118 7</p> <p>あるいは The economist (economist.com) から Business and finance のうち、最新のトピックスを選んで輪読します。</p> <p>上記テキストは配布します。</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
初回に用意しますが、履修者と相談して変更することも可能です。		出席を重視し、講義中の発表回数や小テスト等で評価します。	

08年度以降(秋) 01~07年度(秋)	外書講読 b 経済外国語Ⅱb・経営外国語Ⅱb	担当者	岡村 国和
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>秋学期も基本的には春学期と同様の方法で講義を進めます。</p> <p>ここでは特に年金問題を中心に考えていきますが、福祉全般について興味がある履修者については相談の上、プレゼンテーションを導入することも考えています。</p> <p>本講義の特徴は、英文和訳にあるのではなく、内容の理解とディスカッションにあります。英文和訳して終わる講義ではありませんので、注意してください。</p>		<p>テキストについては、履修者の状況によって春学期テキストの継続(Ⅱaを履修済み)か、新規テキスト(Ⅱbのみの履修者対象)にするかは履修者と相談して決めます。</p> <p>The economist (economist.com) から Business and finance のうち、最新のトピックスを選んで輪読することも考えています。</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
初回に用意しますが、履修者と相談して変更することも可能です。		出席を重視し、講義中の発表回数や小テスト等で評価します。	

08年度以降（春） 01～07年度（春）	外書講読 a 経済外国語Ⅱa・経営外国語Ⅱa	担当者	野村 容康
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的</b> 私たちの生活に身近な存在である税制に関する基礎的なテキストを題材にして、そうした個々の税金の仕組み、経済に与える影響、各国での実施状況などについて学んでいく。本講義を終了する頃には、英語の専門書の内容が辞書を引ながらでも何とか理解できるようになることを期待している。</p> <p><b>講義概要</b> あらかじめ報告者にその担当箇所を割当て、英文を日本語に訳してもらい、その邦訳に対してコメントを加える形で講義を進める。テキストを一区切り読み終えた段階で、それまでの内容や専門用語に関する小テストを行う。</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
未定		出席状況・発表の出来・小テストの結果を勘案して評価する。	

08年度以降（秋） 01～07年度（秋）	外書講読 b 経済外国語Ⅱb・経営外国語Ⅱb	担当者	野村 容康
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的</b> 私たちの生活に身近な存在である税制に関する基礎的なテキストを題材にして、そうした個々の税金の仕組み、経済に与える影響、各国での実施状況などについて学んでいく。本講義を終了する頃には、英語の専門書の内容が辞書を引ながらでも何とか理解できるようになることを期待している。</p> <p><b>講義概要</b> あらかじめ報告者にその担当箇所を割当て、英文を日本語に訳してもらい、その邦訳に対してコメントを加える形で講義を進める。テキストを一区切り読み終えた段階で、それまでの内容や専門用語に関する小テストを行う。</p>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
未定		出席状況・発表の出来・小テストの結果を勘案して評価する。	

08年度以降（春） 01～07年度（春）	外書講読 a（中国語） 経済外国語Ⅱa・経営外国語Ⅱa（中国語）	担当者	全 載旭
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>この授業では経済・経営外国語Ⅰ（中国語）を履修し、さらに中国経済に関心のある学生を対象にする。ただし経済・経営外国語Ⅰ（中国語）を履修しなくてもこの授業が履修できる中国語の能力があれば対象にする。授業の内容は履修者の中国語習得レベルに合わせて調整する。</p> <p>中国政治・経済及びアジア経済に関する新聞記事（中国語と日本語）を取り上げて授業を進めるが、必要に応じて講義とディスカッションもする。</p>			
テキスト、参考文献		評価方法	
必要に応じて配布する。		出席状況と筆記試験によって評価する	

08年度以降（秋） 01～07年度（秋）	外書講読 b（中国語） 経済外国語Ⅱb・経営外国語Ⅱb（中国語）	担当者	全 載旭
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>最近の中国経済の動向や日中経済関係などの経済関連記事を選び、それに沿って授業を進める。</p> <p>講読資料の選択には学生諸君の提案も可能である。</p>			
テキスト、参考文献		評価方法	
必要に応じて配布する。		出席状況と筆記試験によって評価する	

01年度以降（春）	マクロ経済学 a	担当者	塩田 尚樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>マクロ経済理論の標準的な内容の理解をめざします。新聞・雑誌などの経済記事を読むための基礎知識としても有効です。</p> <p>まず、「一国全体の経済活動をどのようにとらえるか」という問題からスタートし、GDP・国民所得・物価指数・雇用量といったマクロ経済指標を解説します。それから、これらの水準がどのような要因によって決まるのかということに目を向け、さらに貨幣や証券の需給との関係についても検討します。また、経済活動における金融機関の積極的な役割についても触れる予定です。なお、右の計画は最速の場合を想定しています。</p> <p>見慣れない記号や用語が多く登場すると思います。また内容も、はじめは抽象的に感じられるかもしれません。けれども、一度『ノル』と後は一本調子です。一気に見通しがよくなると思います。そこまで辛抱してください。</p> <p>なお、「各人の授業を受ける権利」は「他の人の授業を受ける権利」を侵害しない範囲内で行使されるべきだと考えますので、授業態度のよくない人は退出してもらいます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. マクロ経済学的な視点の必要性</li> <li>2. GDP とは？（簡単な計算例）</li> <li>3. 国民経済計算の三面等価</li> <li>4. 物価指数</li> <li>5. 雇用指標</li> <li>6. GDP 決定の理論</li> <li>7. 財政政策の効果</li> <li>8. 貨幣とは？</li> <li>9. 証券市場と利子率</li> <li>10. GDP と利子率の同時均衡</li> <li>11. 財政政策の効果の修正</li> <li>12. 金融機関の主體的行動</li> <li>13. 金融政策の効果</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト</b>		<b>評価方法</b>	
中谷武 他(2009)『新版マクロ経済学』勁草書房		定期試験で評価します。なお、講義中の私語などの迷惑行為で減点する場合があります。	

01年度以降（秋）	マクロ経済学 b	担当者	塩田 尚樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>2010年度の「マクロ経済学 a」の内容の理解を前提として進めます。履修しなかった人は独習が必要です。</p> <p>本年度の「マクロ経済学 b」では特に、今日の日本経済を理解する上で不可欠な、国際的な取引についての話題を積極的に取り上げる予定です。</p> <p>まず、外国為替市場や通貨制度について一通りのことを学んだ後、国際的な取引に関する統計を読む能力を身につけます。それから、投機や金融派生商品など比較的新しいトピックについて概観します。その後、為替レートの決定理論や主要なマクロ変数に関する決定理論を学びます。</p> <p>ただし、春学期の進度、および、春学期の定期試験の結果により、授業計画を変更する場合がありますので気をつけてください。第一回目の授業の際、詳しくお知らせします。</p> <p>なお、春学期同様、「各人の授業を受ける権利」は「他の人の授業を受ける権利」を侵害しない範囲内で行使されるべきだと考えますので、授業態度のよくない人は退出してもらいます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 春学期の概要と秋学期の授業計画の確認</li> <li>2. 対外決済と外国為替市場</li> <li>3. 国際通貨制度</li> <li>4. 国際収支統計 (1)</li> <li>5. 国際収支統計 (2)</li> <li>6. 投機とは？</li> <li>7. 先物為替市場</li> <li>8. 通貨オプションと金融派生商品</li> <li>9. 為替レート決定理論 (1)</li> <li>10. 為替レート決定理論 (2)</li> <li>11. マンデル・フレミングモデル (1)</li> <li>12. マンデル・フレミングモデル (2)</li> <li>13. 国際協調介入</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト</b>		<b>評価方法</b>	
中谷武 他(2009)『新版マクロ経済学』勁草書房		定期試験で評価します。なお、講義中の私語などの迷惑行為で減点する場合があります。	

01年度以降（春）	マクロ経済学 a	担当者	山下 裕歩
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>マクロ経済学は、国内総生産（GDP）、利子率、失業率、貨幣供給量といった変数を通じて一国の経済活動全体を考察する学問である。特に GDP 水準の決定メカニズムを考察することが主要な目的である。この講義では、ケインズ経済学と古典派経済学の対応関係を1つの視点としながら、マクロ経済学の初歩を学ぶ。マクロ経済学を学習することによって、現実経済で発生する様々な現象やそれに対する政策対応を体系的に考察できるようになる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. マクロ経済学とは？</li> <li>2. 三面等価の原則</li> <li>3. 完全雇用と不完全雇用</li> <li>4. セイ法則</li> <li>5. 有効需要原理</li> <li>6. 消費 1</li> <li>7. 消費 2</li> <li>8. 45度線モデル</li> <li>9. 投資 1</li> <li>10. 投資 2</li> <li>11. 貨幣需要</li> <li>12. 貨幣供給</li> <li>13. 貨幣市場均衡</li> <li>14. 練習問題の解説</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>講義でレジュメを配布し教科書は特に指定しないが、参考書として以下を推薦する。初級：『マクロ経済学・入門』第3版、福田・照山著、有斐閣アルマ、中級：『新経済学ライブラリ3・マクロ経済学』浅子・加納・倉澤著、新世社</p>		<p>学期末テストにより評価する。但し、講義中に2回程度のレポート提出を課し、この点数（合計20点程度）は学期末テストに加算される。</p>	

01年度以降（秋）	マクロ経済学 b	担当者	山下 裕歩
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>マクロ経済を一般均衡論的立場から考察すること、各モデル間の類似点・相違点を理解することが主要な目的となる。最も標準的なケインズ経済学のモデルである IS-LM モデルを初めとして、AD-AS モデル、古典派モデルを学ぶ。また、財政・金融政策の基本事項を上記のマクロ経済モデルに立脚しながら学習する。</p> <p>なお、春学期のマクロ経済 a と合わせて受講することが望ましい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 労働市場</li> <li>2. 生産物市場</li> <li>3. 貨幣市場</li> <li>4. IS-LM モデル 1</li> <li>5. IS-LM モデル 2</li> <li>6. 財政政策</li> <li>7. 金融政策</li> <li>8. AD-AS モデル 1</li> <li>9. AD-AS モデル 2</li> <li>10. 古典派モデル 1</li> <li>11. 古典派モデル 2</li> <li>12. 新古典派総合とマクロ経済学の新展開</li> <li>13. 練習問題の解説</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>講義でレジュメを配布し教科書は特に指定しないが、参考書として以下を推薦する。初級：『マクロ経済学・入門』第3版、福田・照山著、有斐閣アルマ、中級：『新経済学ライブラリ3・マクロ経済学』浅子・加納・倉澤著、新世社</p>		<p>学期末テストにより評価する。但し、講義中に2回程度のレポート提出を課し、この点数は学期末テストに加算される。</p>	

01年度以降（春）	ミクロ経済学 a	担当者	小林 進
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>受講者が経済理論を理解して現実の経済問題に応用できる水準に達することを目標とする。ただし受講者のすべて人のレベルが必ずしも高いとはいえないので、場合によっては初歩的な経済理論にも随時触れる予定である。参考書については(原則として本学図書館にあるものを)必要に応じて推薦し、受講者の一層の学習努力を促すようにする。</p>		<p>最初の講義のときにプリント配布 (完全競争を中心にして講義)</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
使用しない。参考文献は講義中に指示する。		学期末試験	

01年度以降（秋）	ミクロ経済学 b	担当者	小林 進
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>受講者が経済理論を理解して現実の経済問題に応用できる水準に達することを目標とする。ただし受講者のすべて人のレベルが必ずしも高いとはいえないので、場合によっては初歩的な経済理論にも随時触れる予定である。参考書については(原則として本学図書館にあるものを)必要に応じて推薦し、受講者の一層の学習努力を促すようにする。</p>		<p>最初の講義のときにプリント配布 (不完全競争を中心にして講義)</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
使用しない。参考文献は講義中に指示する。		学期末試験	

01年度以降（春）	ミクロ経済学 a	担当者	藤山 英樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>&lt;講義の概要&gt; ミクロ経済学とは、個々の最適な意思決定の仕方と、社会全体での帰結を考察する学問といえる。とくに、経済活動においては、相手との駆け引きが非常に重要な要素となってくる。1980年代以降、これらの点に関する分析が急速に深まった。春学期では、経済活動における駆け引きの帰結を中心に講義する。</p> <p>&lt;講義の目的&gt; ミクロ経済学の基礎を習得する。より具体的には、第1に諸概念の直感的な理解を得る。第2に諸概念の抽象的な記号表現をマスターする。以上は、3年生、4年生となり、更なる勉強をするときに必要不可欠となる。</p> <p>&lt;講義の方針&gt; できるだけ予備知識を前提とせず、授業内で自己完結した形で講義を行う。</p>		<p>1 イントロダクション（下記2の内容にも入ります。）</p> <p>2-3 ゲーム理論1（戦略形）：ジャンケン型のゲーム</p> <p>4-5 ゲーム理論2（展開形）：時間をともなうゲーム</p> <p>6 独占市場：利潤を最大にする価格設定</p> <p>7 最大となる利潤の求め方(微分について)</p> <p>8-9 寡占市場：数量での競争と価格での競争</p> <p>10 情報とゲーム(1)：不確実性のとらえ方</p> <p>11-12 情報とゲーム(2)：シグナリングゲーム</p> <p>13-14 情報とゲーム(3)：モラルハザード</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
参考書：『新しい教養のすすめ 経済学』大西・三土編 昭和堂		定期試験で評価する。	

01年度以降（秋）	ミクロ経済学 b	担当者	藤山 英樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>&lt;講義の概要&gt; 経済活動において、財やサービスが取引される市場の持つ意味は非常に重要である。この市場を通じた取引は社会的に望ましい状態を導くのか。また、導くとすると、どのような意味で望ましいのか。さらには、そこから、どのような政策的な含意が導かれるのか。これらの点を、講義では解説してゆく。</p> <p>講義の目的・方針ともに、前期と同じであるが、秋期は完全競争市場についての講義をする。</p>		<p>1 イントロダクション（下記2の内容にも入ります。）</p> <p>2-3 市場における需要と供給</p> <p>4-5 弾力性とその応用</p> <p>6 需要、供給、および政府の政策</p> <p>7 消費者、生産者、市場の効率性、課税の費用</p> <p>8 応用：国際貿易</p> <p>9 外部性</p> <p>10 公共財と共有資源</p> <p>11 生産費用</p> <p>12 企業と完全競争</p> <p>13-14 消費選択の理論</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
『マンキュー経済学Ⅰミクロ編』N.グレゴリー・マンキュー 東洋経済新報社		定期試験で評価する。	

01 年度以降（春）	経済学史 a	担当者	黒木 亮
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義の目的</p> <p>本講義の目的は、経済学の形成過程を追体験し、経済理論への理解を深めてゆくための手がかりとして、経済学者が実際に取り組んだ問題や社会的背景、時代的文脈を考察することにある。</p> <p>講義の概要</p> <p>近代自由主義社会の確立を基礎づけた 17 世紀の経済思想から 19 世紀末の経済思想までを通覧する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス： 経済学史とはどのような学問か</li> <li>2. ロックとヒューム 市場社会の成立を支えた思想</li> <li>3. フランソワ・ケネー 人類最初のエコノミスト</li> <li>4-5. アダム・スミス 市場社会の仕組みを解明した経済学の父</li> <li>6. ジェレミー・ベンサム 「最大多数の最大幸福」を夢想した功利主義者</li> <li>7. トーマス・ロバート・マルサス 市場社会における貧困と「人口の原理」</li> <li>8. デイビッド・リカードウ 古典派経済学の体系化</li> <li>9. 大陸の経済学者たち セー、シスモンディエー、リスト</li> <li>10. ジョン・スチュアート・ミル 功利主義思想と古典派経済学の批判的統合</li> <li>11-12. カール・マルクス 資本主義社会と古典派経済学への根源的批判</li> <li>13-14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>参考文献：</p> <p>高哲男編『自由と秩序の経済思想』名古屋大学出版会。 根井雅弘『経済学の歴史』講談社。</p>		レポート・期末試験のいずれか、ないし両方。	

01 年度以降（秋）	経済学史 b	担当者	黒木 亮
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義の目的</p> <p>本講義の目的は、経済学の形成過程を追体験し、経済理論への理解を深めてゆくための手がかりとして、経済学者が実際に取り組んだ問題や社会的背景、時代的文脈を考察することにある。</p> <p>講義の概要</p> <p>19 世紀末の経済思想から、われわれの社会を支え、その将来を基礎づけるであろう今日の経済思想までを通覧する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス： 春季から秋季への橋渡し</li> <li>2. グスタフ・シュモラー 新歴史学派の社会政策思想</li> <li>3. カール・メンガー 主観主義のミクロ経済学</li> <li>4. ジェヴォンズとワルラス 経済学の数理科学化</li> <li>5-6. アルフレッド・マーシャル 「冷静な頭脳と暖かい心」の経済学</li> <li>7-8. ソースティン・ヴェブレン 大量生産・大量消費社会の制度分析</li> <li>9. ヨゼフ・シュンペーター 企業者の創造的破壊が生み出すダイナミクス</li> <li>10-11. ジョン・メイナード・ケインズ 貨幣経済のマクロ分析</li> <li>12-13. ケインズ以降の経済学 ケインジアン、ポストケインジアン、シカゴ学派、合理的期待形成学派、ハイエク、ニューケインジアン etc.</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>参考文献：</p> <p>高哲男編『自由と秩序の経済思想』名古屋大学出版会。 根井雅弘『経済学の歴史』講談社。</p>		レポート・期末試験のいずれか、ないし両方。	

01年度以降（春）	経済変動論 a	担当者	山下 裕歩
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>入門的マクロ経済学では、ケインズ経済学と新古典派経済学の対応関係が中心的な視点である。しかし、1970年代以降、マクロ経済学は大きく変貌し、ケインズ経済学对新古典派経済学という対応関係を視点とした上でのマクロ経済論争は建設的なものではないというコンセンサスが形成されるに至った。本講義では、マクロ経済学がどのように変わってきたのか、そして何故このような変化が起こったのかなどを理解することを目的とする。また、様々なマクロ経済政策に対して、その是非を判断する際に、重要な視点を与えると考えられる経済学的論理を学ぶことも主要な目的である。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 新古典派総合（短期と長期）</li> <li>2. マネタリズム</li> <li>3. 新古典派経済学</li> <li>4. マクロ経済学のミクロ経済学的基礎</li> <li>5. 貨幣</li> <li>6. インフレーション</li> <li>7. 期待形成</li> <li>8. 資産市場と資産価格</li> <li>9. ブレトンウッズ体制と IS-LM モデル</li> <li>10. 新しい IS-LM モデル</li> <li>11. マクロ経済政策</li> <li>12. 動学的不整合性と政策のルール化</li> <li>13. 練習問題の解説</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>講義でレジュメを配布し教科書は特に指定しない。参考書は授業中に適宜紹介する。</p>		<p>学期末テストにより評価する。但し、講義中に2回程度のレポート提出を課し、この点数は学期末テストに加算される。</p>	

01年度以降（秋）	経済変動論 b	担当者	山下 裕歩
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義では、経済変動を経済成長と景気循環の2つの視点から考察する。具体的には、右の講義計画に沿って、様々な経済成長理論、景気循環理論を学ぶ。経済成長も景気循環も時間の流れを通じた経済現象であり、必然として「時間」という概念が入ってくる。時間の流れを明示的に経済理論に導入することは動学化と呼ばれている。「マクロ経済理論の動学化」という分析視点が何を意味するのか、またこの分析視点により何がもたらされるのか、これらを経済成長理論・景気循環理論を通じて理解することが本講義の主要な目的である。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 動学的マクロ経済モデルとは</li> <li>2. 経済成長論の概説</li> <li>3. 経済成長論 1</li> <li>4. 経済成長論 2</li> <li>5. 経済成長論 3</li> <li>6. 経済発展と持続的成長</li> <li>7. 所得格差と経済成長</li> <li>8. 景気循環論の概説</li> <li>9. 景気循環論 1</li> <li>10. 景気循環論 2</li> <li>11. 景気循環論 3</li> <li>12. 経済政策と景気循環</li> <li>13. 練習問題の解説</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>講義でレジュメを配布し教科書は特に指定しない。参考書は授業中に適宜紹介する。</p>		<p>学期末テストにより評価する。但し、講義中に2回程度のレポート提出を課し、この点数は学期末テストに加算される。</p>	

01年度以降（春）	経済社会学 a	担当者	森永 卓郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>我々は一人ひとりがより豊かな暮らしをするために社会を作り、経済を発展させてきました。しかし、現実にはいまでも多くの人が貧困と抑圧に苦しんでいます。この講義では、なぜ資本主義社会がすべての人を幸せにできないのかを経済社会の歴史と日本の現状を踏まえて考えていきます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 人はどうしたら幸せになれるのか</li> <li>3. 経済社会はどのように発展してきたのか</li> <li>4. 社会民主主義の興隆と変容</li> <li>5. 共産主義社会の失敗と新自由主義の台頭</li> <li>6. 遅れてやってきた日本の新自由主義</li> <li>7. 新自由主義と戦争</li> <li>8. 税制と経済社会</li> <li>9. 日本の税制</li> <li>10. 社会保障とセーフティネット</li> <li>11. 教育と格差</li> <li>12. 人はなぜ狂うのか</li> <li>13. 新自由主義と利権</li> <li>14. まとめ</li> </ol> <p>※項目は確定ではありません</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
ネット上で講義資料を公開します		試験	

01年度以降（秋）	経済社会学 b	担当者	森永 卓郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義では、いま日本で一番問題になっている「格差」をキーワードに、日本の格差の実態をみていくとともに、日本の経済社会が将来どのように変化していくのかを考えていきます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. アメリカ発の金融危機</li> <li>3. 日本の金融危機</li> <li>4. 小泉構造改革と金融資本主義</li> <li>5. バブル発生のメカニズム</li> <li>6. 所得格差拡大とライフスタイルの多様化</li> <li>7. 真の IT 革命の成果とは</li> <li>8. 市場構造の変化</li> <li>9. インターネットオークション</li> <li>10. 共同購入とモノ作りのコスト</li> <li>11. 萌えとは何なのか</li> <li>12. 萌え市場の規模と方向性</li> <li>13. 江戸時代の経済社会</li> <li>14. まとめ</li> </ol> <p>※項目は確定ではありません</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
ネット上で講義資料を公開します		試験	

01 年度以降 (春)	計量経済学 a	担当者	藤山 英樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>自学自習ではなかなか理解できない，理論的な側面を重視して，統計学の基礎から計量経済学を解説してゆく。</p> <p>春学期の目標は，計量経済学で最も基本的な考え方である，最小 2 乗法についてしっかり理解することと，秋学期で頻出する複数の確率変数の扱いに慣れることである。</p> <p>数学的な予備知識は前提としない．強いていえば，足し算と引き算と掛け算と割り算ぐらいである．もちいる数学的な概念も全て解説してゆく．したがって，進度はなるべくゆっくりとし，理解することの楽しさを求めてゆく．</p> <p>この授業で，計量経済学を学ぶ上での基礎的な素養をつけ，その後は自らの力で伸びてゆけるようになること，これが大きな意味での講義目標となる．</p>		<p>以下のトピックスを順次解説してゆく．</p> <p>平均と分散 確率変数・期待値 データと確率変数の関係 確率変数の変換 平均・分散・確率変数の行列表現 行列を用いての確率変数の変換</p> <p>最小 2 乗法 (ぴったりと線を引く方法) 残差平方和の最小の仕方 行列の計算規則 行列の微分 逆行列 決定係数 (モデルの当てはまりの良さについて) 2 変数における例</p> <p>(時間的制約も厳しいですが，適宜現実のデータも扱ってより容易に理解できるよう努めたいと思っています．)</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
藤山英樹『統計学からの計量経済学入門』昭和堂		授業のはじめにおこなう小テスト。ただし，受講生全体の状況を見て，レポートをおこなえばそれも考慮する。	

01 年度以降 (秋)	計量経済学 b	担当者	藤山 英樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>秋学期の目標は，第 1 に，確率モデルにおける最小 2 乗法の望ましい性質を確認することである．言い換えると，推定における望ましさを確認することとなる．第 2 に，検定の考え方を理解し，その具体的な方法をマスターする．</p> <p>前期に引き続き，新たにもちいる数学的な概念も全て解説してゆく．したがって，進度はなるべくゆっくりとし，理解することの楽しさを求めてゆく．</p> <p>この授業で，計量経済学を学ぶ上での，基礎的な素養をつけ，その後は自らの力で伸びてゆけるようになること，これが，大きな意味での講義目標となる．</p>		<p>確率モデルについて (計量経済学で用いられるモデル) 最小 2 乗法と推定量 (モデルをデータから明らかにする) 最小 2 乗法と不偏性 (望ましい性質 1) 最小 2 乗法と BLUE (望ましい性質 2) 最小 2 乗法と正規分布 (望ましい性質 3) F 検定について t 検定について</p> <p>その他のいろいろな推定の際の工夫.</p> <p>(時間的制約も厳しいですが，適宜現実のデータも扱ってより容易に理解できるよう努めたいと思っています．)</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
藤山英樹『統計学からの計量経済学入門』昭和堂		授業のはじめにおこなう小テスト。ただし，受講生全体の状況を見て，レポートをおこなえばそれも考慮する。	

01年度以降（春）	経済政策論 a	担当者	阿部 正浩
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>平成 14 年 4 月から『行政機関が行う政策の評価に関する法律』が施行されました。この法律では、行政機関が行う政策評価に関する基本的事項が定められ、客観的で厳格な政策評価の実施を政策当局に求めていると同時に、その評価結果の政策への適切なフィードバックについても求めています。この授業では、このように近年重要になっている政策評価の手法について講義します。</p> <p>なお、この講義ではエクセルを利用したレポートを課する予定があります。また、授業時間中の PC を持ち込み、利用することも歓迎します。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 この講義の概要(オリエンテーション)</li> <li>2 『行政機関が行う政策の評価に関する法律』について</li> <li>3 政策評価と統計(その 1)</li> <li>4 政策評価と統計(その 2)</li> <li>5 政策評価と実証経済学(その 1)</li> <li>6 政策評価と実証経済学(その 2)</li> <li>7 政策評価と実証経済学(その 3)</li> <li>8 政策評価と実証経済学(その 4)</li> <li>9 識別問題</li> <li>10 因果関係</li> <li>11 ケース・スタディー(その 1)</li> <li>12 ケース・スタディー(その 2)</li> <li>13 ケース・スタディー(その 3)</li> <li>14 ケース・スタディー(その 4)</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストはありません。参考文献は授業中に紹介します。		出席、レポート、期末テストで評価します。詳細は第 1 回目の授業で説明します。	

01年度以降（秋）	経済政策論 b	担当者	阿部 正浩
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義では、経済政策決定の過程を経済学的視点から分析します。</p> <p>経済政策が議論される時、その多くは「市場対政府」という対立軸の下でなされます。資源配分を市場に任せると失敗することが多く、市場の失敗を正すために政府があるのだという立場を取る論者がいる一方で、市場はそれなりに機能しており、政府に資源配分を任せると問題が多いという立場を取る人々もいます。しかし、現実をみると、市場が失敗することも多々あるし、それと同じくらい政府が非効率的であることも事実です。つまり、市場も政府もどちらも不完全なシステムであり、それぞれが影響し合っ機能しているというのが現実です。この講義では、こうした現実の市場と政府の関係について、取引費用の観点から分析したいと思います。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 この講義の概要(オリエンテーション)</li> <li>2 政策分析の基本的考え方(その1)</li> <li>3 政策分析の基本的考え方(その2)</li> <li>4 政策分析の基本的考え方(その3)</li> <li>5 政策分析の基本的考え方(その 4)</li> <li>6 取引費用分析の枠組み(その 1)</li> <li>7 取引費用分析の枠組み(その 2)</li> <li>8 取引費用分析の枠組み(その 3)</li> <li>9 取引費用分析の枠組み(その 4)</li> <li>10 ケース・スタディー (その 1)</li> <li>11 ケース・スタディー (その 2)</li> <li>12 ケース・スタディー (その 3)</li> <li>13 ケース・スタディー (その 4)</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストはありません。参考文献は授業中に紹介します。		出席、レポート、期末テストで評価します。詳細は第 1 回目の授業で説明します。	

01 年度以降 (春)	経済開発論 a	担当者	高安 健一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義の目的は、3つあります。第1は、開発途上国が抱えている貧困問題を理解することです。貧困層の特定、貧困の悪循環、人間開発などに焦点をあてます。</p> <p>第2は、東アジア諸国を念頭に、経済成長のメカニズムを学ぶことです。直接投資、輸出構造の変化、産業構造の高度化などが主な論点です。</p> <p>第3は、貧困問題の解決に向けた新しい取り組みについて学習することです。マイクロファイナンス (バングラデシュで農村の女性に金融サービスを提供しているグラミン銀行等)、貧困層市場を果敢に開拓する BOP ビジネス、そしてフェアトレードを取り上げます。</p> <p>受講生が講義内容を、就職活動のみならず卒業後も活用することを期待します。経済開発論 b も履修して下さい。第1回の講義に必ず出席すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の目的、成績評価等</li> <li>2. 開発経済学の潮流</li> <li>3. 貧困層とはどのような人々か</li> <li>4. 貧困のメカニズム</li> <li>5. アマルティア・センと人間開発</li> <li>6. 東アジアの経済発展</li> <li>7. キャッチアップ型工業化</li> <li>8. 直接投資と産業発展</li> <li>9. 経済発展における金融の役割</li> <li>10. マイクロファイナンス (グラミン銀行の挑戦)</li> <li>11. 貧困層向けビジネス (BOP) の拡大</li> <li>12. フェアトレード (公正貿易) の広まり</li> <li>13. ジェフリー・サックスの貧困削減策</li> <li>14. 講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
教員が作成した資料を配布する。参考文献は、最初の講義で紹介する。		出席 20%、学期末テスト 80%	

01 年度以降 (秋)	経済開発論 b	担当者	高安 健一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義の目的は、3つあります。第1は、開発途上国が抱える経済リスクを把握することです。事例として、1980年代にラテンアメリカで深刻化した累積債務問題、1990年代から国際社会が取り組んでいる重債務貧困国への支援、1997年に発生したアジア経済危機を取り上げます。</p> <p>第2は、日本企業の新興国戦略に直結する人口問題 (高齢化社会の到来) と消費市場の拡大について理解することです。</p> <p>第3は、わが国の開発途上国支援の仕組みと課題について学ぶことです。国際通貨基金 (IMF) と世界銀行の開発戦略や、国際的な貧困削減プログラムである国連ミレニアム開発目標などとの関連にも触れます。</p> <p>受講生が講義内容を、就職活動のみならず卒業後も活用することを期待します。経済開発論 a も履修して下さい。第1回の講義に必ず出席すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の目的、成績評価等</li> <li>2. 経済グローバル化と途上国</li> <li>3. カントリーリスクとその評価</li> <li>4. 1980年代の累積債務問題、重債務貧困国</li> <li>5. アジア経済危機 (背景と発展戦略の再検討)</li> <li>6. アジア経済危機 (国際的支援)</li> <li>7. 国際通貨基金 (IMF) ・世界銀行の開発戦略</li> <li>8. 人口問題、高齢化社会の到来</li> <li>9. 消費市場と経済発展</li> <li>10. 国連ミレニアム開発目標</li> <li>11. 政府開発援助 (ODA) の仕組み</li> <li>12. 我が国の開発途上国支援の課題</li> <li>13. 講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
教員が作成した資料を配布する。参考文献は、最初の講義で紹介する。		出席 20%、学期末テスト 80%	

01年度以降（春）	環境政策論 a	担当者	塩田 尚樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>地球温暖化問題のしくみと政策現場での議論について概観し、環境問題の自発的解決の困難さと公的機関による政策の必要性について経済学的に解説します。</p> <p>まず代表的な環境問題の一つである地球温暖化を取り上げ、環境問題についての具体的なイメージを深めます。本年度は京都議定書以降の温暖化対策にも焦点を当てる予定です。</p> <p>その後、多くの環境問題に共通する構造を抽象化し、非協力ゲーム理論を使って分析します。「われわれ一人ひとりにとって望ましい行動が、社会にとって望ましい行動と一致しないため、自発的解決が期待できず、政策を講じる必要がある」という環境問題の特徴が、よく理解できると思います。</p> <p>本学で開講されている「ミクロ経済学」、「公共経済学」、「環境経済学」などの科目を合わせて履修すると、相互に理解が深まると思います。強制ではありませんが、履修選択の際の参考にしてください。</p> <p>なお、「各人の授業を受ける権利」は「他の人の授業を受ける権利」を侵害しない範囲内で行使されるべきだと考えますので、授業態度のよくない人は退出してもらいます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 授業のねらいと方針</li> <li>2 地球温暖化のメカニズム</li> <li>3 地球環境の歴史</li> <li>4 化石燃料消費の歴史</li> <li>5 温暖化対策の歴史</li> <li>6 気候変動枠組条約</li> <li>7 京都議定書</li> <li>8 京都メカニズム</li> <li>9 第1約束期間以降の環境政策</li> <li>10 環境問題のモデル化</li> <li>11 個人の最適性と社会的最適性</li> <li>12 『共有地の悲劇』</li> <li>13 自発的協力の可能性</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
環境省ホームページの地球環境・国際環境協力の温暖化にあげられている行政資料が有用です。		定期試験で評価します。なお、講義中の私語などの迷惑行為で減点する場合があります。	

01年度以降（秋）	環境政策論 b	担当者	塩田 尚樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>環境政策の手段の有効性について、ミクロ経済学の立場から考察します。環境問題の具体的なトピックとしては、主として地球温暖化問題を取り上げます。</p> <p>環境税や排出量取引制度のような「経済的」手段が、固定的排出量割当などの「非経済的」手段と比べてどう優れているのが主要論点です。ミクロ経済学で学ぶ「資源配分の効率性」という概念が基礎になります。</p> <p>まず、経済学で環境問題を取り扱う際に必ず登場する「ピグー税」と呼ばれる課税ルールのしくみとその限界について解説します。その後、実際の環境政策の現場で「経済的」な政策手段が支持される最大の根拠の一つとなっている汚染削減費用の最小化特性について検討します。</p> <p>本学で開講されている「ミクロ経済学」、「公共経済学」、「環境経済学」などの科目を合わせて履修すると、相互に理解が深まると思います。強制ではありませんが、履修選択の際の参考にしてください。</p> <p>なお、「各人の授業を受ける権利」は「他の人の授業を受ける権利」を侵害しない範囲内で行使されるべきだと考えますので、授業態度のよくない人は退出してもらいます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 授業のねらいと方針</li> <li>2 環境問題の経済学的把握</li> <li>3 利潤とその平均変化率</li> <li>4 企業行動：利潤最大化</li> <li>5 環境汚染の社会的費用とその平均変化率</li> <li>6 市場均衡と社会的最適汚染量</li> <li>7 単位税の企業行動への影響</li> <li>8 ピグー税による社会的最適性の回復</li> <li>9 ピグー税の難点</li> <li>10 汚染削減費用とその最小化</li> <li>11 ボーモル・オーツ税</li> <li>12 排出量取引制度 (1)</li> <li>13 排出量取引制度 (2)</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト</b>		<b>評価方法</b>	
塩田尚樹「環境税の経済学的基礎」（講義支援システムにより配布予定）		定期試験で評価します。なお、講義中の私語などの迷惑行為で減点する場合があります。	

01 年度以降 (春)	日本経済史 a	担当者	高柳 友彦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では、近世から近代の日本における経済発展の歴史的過程について、それぞれの時代の諸産業の展開や貿易のあり方、国家政策との関わりから明らかにしていく。</p> <p>産業、貿易構造、財政政策といったマクロ的な視点に加え、当時の人々の労働や消費のあり方などミクロ的な視点に焦点をあてて論じていきます。</p> <p>テキストの第 1 章～第 3 章を中心に授業を進めていきます。(近世期から第一次大戦期まで)</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 はじめに</li> <li>2 近世社会の成立－村落と土地所有－</li> <li>3 海運の整備と全国市場の成立－</li> <li>4 「鎖国」と貿易の展開</li> <li>5 元禄～幕末期の政治・経済政策</li> <li>6 幕末開港と明治維新</li> <li>7 維新政府の国づくり</li> <li>8 近世近代移行期の諸産業の展開</li> <li>9 近代経済成長の開始</li> <li>10 産業革命期の諸産業の進展</li> <li>11 日清日露戦時の経済財政政策</li> <li>12 諸産業における労働のあり方</li> <li>13 1900 年代前後の対外関係・貿易</li> <li>14 本講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：浜野潔・井奥成彦他編『日本経済史 1600-2000』（慶應義塾大学出版会）、授業では講義資料を配布します。</p> <p>参考文献：三和良一・原朗編『近現代日本経済史要覧』（東京大学出版会）</p>		<p>期末試験で評価します また出席状況も加味します。</p>	

01 年度以降 (秋)	日本経済史 b	担当者	高柳 友彦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では、第一次大戦期以降の日本における経済発展の歴史的過程について、それぞれの時代の諸産業の展開や貿易のあり方、国家政策との関わりから明らかにしていく。</p> <p>産業、貿易構造、財政政策といったマクロ的な視点に加え、当時の人々の労働や消費のあり方などミクロ的な視点に焦点をあてて論じていきます。</p> <p>テキストの第 4 章～第 6 章を中心に授業を進めていきます。(第一次大戦期から 1980 年代まで)</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 はじめに</li> <li>2 第一次世界大戦と日本経済</li> <li>3 恐慌下での経済成長－1920 年代－</li> <li>4 都市社会と農村社会の変容</li> <li>5 金解禁と井上財政</li> <li>6 世界恐慌と昭和恐慌</li> <li>7 高橋財政</li> <li>8 戦時統制経済と戦後改革①</li> <li>9 戦時統制経済と戦後改革②</li> <li>10 戦後復興</li> <li>11 ドッジラインから特需景気</li> <li>12 高度経済成長の時代</li> <li>13 高度成長の終焉</li> <li>14 本講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：浜野潔・井奥成彦他編『日本経済史 1600-2000』（慶應義塾大学出版会）授業では講義資料を配布します。</p> <p>参考文献：三和良一・原朗編『近現代日本経済史要覧』（東京大学出版会）</p>		<p>期末試験で評価します。 また出席状況も加味します。</p>	

01年度以降（春）	日本社会史 a	担当者	新井 孝重
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>全長 40 メートルの戦艦、炸裂する火薬兵器、降りそそぐ毒矢、異形の巨大軍隊モンゴル軍に打ちのめされた日本の武者達は、かつてないストレスに悩まされ、蔓延する恐怖の念は、全土を神仏頼りの祈祷列島に変えていく。幕府は直面する危機にどう対処したのか。そして、九州の武士は…。合戦死傷者のその後までを追う。</p> <p>わが国の中世社会はモンゴル戦争を画期にして大きく変わる。この変化が歴史の発展であるのか、それとも単なる民族的に日本人の性質が変わったにすぎないのか、日本の歴史学の中では大きな問題である。本講義ではこのことを念頭において、まずはモンゴル戦争（蒙古襲来）の実相に迫っていききたい。</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>① 授業の説明</li> <li>② モンゴル帝国の「世界」</li> <li>③ 「世界」の吸引力</li> <li>④ 「世界」に身構える日本</li> <li>⑤ 文永合戦・異なる戦争の作法</li> <li>⑥ 戦力の質的違い</li> <li>⑦ 外征計画の挫折</li> <li>⑧ 日本の船は外征に耐えたか</li> <li>⑨ モンゴル帝国の海上軍事力</li> <li>⑩ イスラム商人が造った船</li> <li>⑪ 異国警固と石築地</li> <li>⑫ 有無を言わせぬ戦時統制</li> <li>⑬ モンゴル戦争期の社会状態</li> <li>⑭ 東大寺僧が見たもの</li> </ul>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>新井孝重『蒙古襲来』吉川弘文館 （教科書を必ず携えて授業にのぞむこと）</p>		<p>テストの成績による</p>	

01年度以降（秋）	日本社会史 b	担当者	新井 孝重
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>風濤に砕けるモンゴル艦船、合戦恩賞を要求する武士の訴訟、権力中枢に勃発するクーデタ、中世の日本は確実に不安と流動の時代へ入る。</p> <p>春学期の講義をうけて秋学期では弘安合戦とそれ以降の、特に日本国内の社会様相を観察する。</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>① 授業の説明</li> <li>② クビライ、第二次遠征を命ずる</li> <li>③ 艦船、激浪に覆没する</li> <li>④ 三度目の外征計画、悪党を兵力に転用</li> <li>⑤ 武士の家、討ち死にによる相続争い</li> <li>⑥ 刀創・矢傷の治療法</li> <li>⑦ 幕府はどのように武士の手柄を認めたか</li> <li>⑧ 農村領主に「国家」はあったか</li> <li>⑨ 弘安徳政の挫折、クーデタと粛清</li> <li>⑩ 祈祷の防衛体制、敵を凶にして祈り倒す</li> <li>⑪ 「軍事」と「神事」の関係</li> <li>⑫ 時代の変わり目</li> <li>⑬ 帝国主義戦争撃退のパラドックス</li> <li>⑭ 東アジアの住民として</li> </ul>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>新井孝重『蒙古襲来』吉川弘文館 （教科書を必ず携えて授業にのぞむこと）</p>		<p>テストの成績による</p>	

01年度以降（春）	西洋経済史 a	担当者	御園生 眞
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>現代経済の起点は、産業革命である。春学期では、産業革命のモデル的事例であるイギリス産業革命を対象とし、特徴と問題点を多面的に考えてみたい。この講義は、春学期・秋学期の順に履修することを前提としている。</p> <p>（注意）</p> <p>最新のシラバスは、第1回の授業で配布するので履修者は必ず出席すること。なお、シラバスの予定は変更される場合がある。</p> <p>出席を毎回取り、定期試験を実施する。試験は、持ち込み無し、論述問題でおこなう。</p> <p>教職科目として履修する場合は、3年生で履修すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス。序論：産業革命とは何か？</li> <li>2. 序論：産業革命とは何か？（続）</li> <li>3. 産業革命の前提条件（1）イギリス農業の発展</li> <li>4. 産業革命の前提条件（2）イギリス家内工業の発展</li> <li>5. 工場制生産の出現：多様な技術革新</li> <li>6. 工場制生産の出現：イギリス綿工業の発展</li> <li>7. 動力源の技術革新：蒸気機関の改良</li> <li>8. 製鉄業の技術革新</li> <li>9. 交通の技術革新：鉄道の出現</li> <li>10. 企業家と事業形態</li> <li>11. （同上）</li> <li>12. イギリス産業革命と世界市場：外国貿易の分析</li> <li>13. イギリス産業革命の波及：後発国の産業革命</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
第1回の授業で説明する。		単位認定の条件：10回以上の出席と定期試験成績60点以上の両方を満たすこと。	

01年度以降（秋）	西洋経済史 b	担当者	御園生 眞
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>イギリスに遅れて産業革命を開始した後発諸国は、イギリス産業革命をモデルとしつつ、独自の産業革命を進展させた。秋学期では、春学期での考察を基礎に、後発国の産業革命の特徴と問題点について分析する。具体的にはドイツの事例を対象とする。</p> <p>（注意）</p> <p>春学期に同じ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス。序論：後発国の産業革命の特徴</li> <li>2. 序論（続）：後発国のメリットとデメリット</li> <li>3. 産業革命前夜のドイツ：政治と経済の状況</li> <li>4. 前提条件の創出①：プロイセン改革</li> <li>5. （同上）</li> <li>6. 前提条件の創出②：統一市場の形成</li> <li>7. （同上）</li> <li>8. ドイツ産業革命の展開：綿工業</li> <li>9. ドイツ産業革命の展開：製鉄業</li> <li>10. ドイツ産業革命と産業技術教育</li> <li>11. ドイツ産業革命と鉄道</li> <li>12. （同上）</li> <li>13. ドイツ産業革命と銀行業</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
春学期に同じ。		春学期に同じ。	

01年度以降（春）	国際経済論 a	担当者	益山 光央
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>国際経済を理解するのに最低限必要と思われる基本的な考えを講義します。その中心は貿易理論、国際貿易の一般均衡、貿易政策となります。講義で扱う内容は、よりすすんだ諸理論を学ぶのに必須の基礎的事項なので厳密な展開を心がけたいと思います。受講生には予習と復習を求めます。私語厳禁。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 国際貿易概観</li> <li>2 リカード的比較優位説</li> <li>3 ヘクシャー・オリーオン定理</li> <li>4 ヘクシャー・オリーオン定理</li> <li>5 国際貿易の一般均衡</li> <li>6 国際貿易の一般均衡</li> <li>7 経済成長と貿易</li> <li>8 国際資本移動と移民</li> <li>9 国際資本移動と移民</li> <li>10 関税・輸入数量制限</li> <li>11 関税・輸入数量制限</li> <li>12 輸入補助金と輸出自主規制</li> <li>13 輸入補助金と輸出自主規制</li> <li>14 質問とまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
大山道広・伊藤元重『国際貿易』 岩波書店		定期試験80%、出席20%	

01年度以降（秋）	国際経済論 b	担当者	益山 光央
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>春学期に扱った貿易理論とともに国際経済学の大きな柱である国際収支調整メカニズムに関連する事柄を学びます。国際収支の赤字、黒字からはじまり、だんだんと高度な内容へと移行します。すべて基本的内容なので、きちんと理解する必要があります。</p> <p>春学期の国際経済論 a を履修しているほうがより理解が深まります。私語厳禁。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 国際収支と国民所得勘定</li> <li>2 国際収支と国民所得勘定</li> <li>3 外国為替市場</li> <li>4 外国為替市場</li> <li>5 外国為替市場</li> <li>6 固定相場制下の所得決定</li> <li>7 固定相場制下の所得決定</li> <li>8 変動相場制下の所得決定</li> <li>9 変動相場制下の所得決定</li> <li>10 国際収支と財政・金融政策</li> <li>11 国際収支と財政・金融政策</li> <li>12 国際資本移動と財政・金融政策</li> <li>13 国際資本移動と財政・金融政策</li> <li>14 質問とまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
未定		定期試験80%、出席20%	

01年度以降（春）	国際金融論 a	担当者	山本 美樹子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>現代の世界経済は各国の経済的相互依存を抜きにして語ることはできません。財の流れとは逆の貨幣の流れ、財の流れとは関わりのない貨幣の流れ、国際金融上のさまざまなカネの流れがあります。</p> <p>本講義では現実の国際金融的現象を理解する上で基本となる事項についての説明をしていきます。</p> <p>最低限の理論的な分析も含まれますが、あくまでも現実の経済現象を理解することを目標としています。</p> <p>春学期は国際金融論の基本的な事項についての講義を進めていきます。</p> <p>講義はパワーポイントを使います。講義概略は本学の講義支援システムを使い、講義前に公開します。必要な学生は各自プリントアウトして講義に臨んでほしいと思います。</p>		<p>1、イントロダクション</p> <p>2、国際収支の構造</p> <p>1、国際収支表</p> <p>2、経常収支が黒字であることの意味</p> <p>3、経常収支の金融的側面</p> <p>4、Jカーブ効果</p> <p>3、外国為替市場と為替レート</p> <p>1、外国為替相場</p> <p>2、為替リスクのヘッジと金利平価説</p> <p>3、投機 (1)</p> <p>投機 (2)</p> <p>4、政府による介入</p> <p>4、外国為替決定の理論</p> <p>1、購買力平価説</p> <p>2、フローアプローチ</p> <p>5、国際通貨体制</p> <p>1、固定相場制と変動相場制</p> <p>2、金本位制、IMFブレトンウッズ体制</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストは特に定めません</p> <p>参考文献は講義時、適宜指示します</p>		<p>学期末試験及び</p> <p>授業中随時行う出席</p>	

01年度以降（秋）	国際金融論 b	担当者	山本 美樹子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>秋学期の講義は国際金融論の応用編です。</p> <p>一昨年のリーマンブラザーズ倒産をきっかけとした世界経済危機は記憶に新しい経済的出来事です。秋学期は春学期に学んだ国際金融論の基礎的知識をもとにして、一昨年来まで急速に発展していった国際資本移動の波について、リーマンブラザーズの倒産を機に世界中に拡散したサブプライムローン証券問題等現実例を交えながら講義を進めていきます。</p> <p>また新しい国際通貨体制の一形態として注目を浴びている共通通貨問題についても考えていきたいと思っています。この体制を導入している欧州をケーススタディーとして、共通通貨導入のメリット、デメリット、を検討し、アジアにこれを導入することができるのだろうか、またアメリカが以前のような覇権を持たない今、これからの国際通貨体制はどのようになるのかについて考えていきます。</p>		<p>6、開放マクロ経済政策</p> <p>1、外国貿易乗数</p> <p>2、固定相場制の開放マクロ経済政策</p> <p>3、マンデルフレミングモデル</p> <p>4、変動相場制の開放マクロ経済政策</p> <p>5、国際政策協調</p> <p>7、国際資本移動</p> <p>1、 国際資本取引の拡大</p> <p>2、 金融デリバティブ取引 (1)</p> <p>3、 国際資本移動取り引きの拡大に伴い発生した問題点</p> <p>4、 サブプライムローン問題</p> <p>8、覇権とは何か？新しい国際通貨体制</p> <p>1、覇権の歴史と現実</p> <p>2、ドル基軸体制存続の可能性</p> <p>3、新しい通貨体制としての共通通貨</p> <p>4、東アジア共通通貨構想</p> <p>9、まとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストは特に定めません</p> <p>参考文献は講義時、適宜指示します</p>		<p>学期末試験</p> <p>および授業中随時行う出席</p>	

01年度以降（春）	日本経済論 a	担当者	波形 昭一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>現在の日本経済を理解するには、その生い立ちを知っておくことが重要である。とりわけ高度成長期についての知識が不可欠である。そのため「日本経済論 a」では、高度成長期における日本経済の問題を中心に講義する。</p> <p>なお、本講義は内容上、春学期・秋学期を通して聴講するのが望ましい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. はじめに</li> <li>2. 戦後民主化政策と経済改革</li> <li>3. 戦後経済復興対策</li> <li>4. ドッジ・ラインとシャウブ勸告</li> <li>5. 朝鮮戦争と日本経済</li> <li>6. 高度成長時代の到来とその時期区分</li> <li>7. 高度成長の構造(1)</li> <li>8. 高度成長の構造(2)</li> <li>9. 高度成長の結果</li> <li>10. 戦時経済と戦後高度成長の関係</li> <li>11. 高度成長の精神的土台</li> <li>12. 高度成長の終焉(1) ドル・ショック</li> <li>13. 高度成長の終焉(2) オイル・ショック</li> <li>14. 日本経済の構造転換</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
主に統計表などのプリントを配布。		学期末試験の結果（通年講義は春学期・秋学期の合計）で評価する。相対評価方法を採用。	

01年度以降（秋）	日本経済論 b	担当者	波形 昭一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>1970年代後半から日本経済をめぐる内外の諸環境は大きく変化し、その結果として現在の日本経済がある。したがって「日本経済論 b」では、春学期の講義をふまえて、70年代後半からの日本経済の構造変化、その結果としてのバブル経済と「失われた10年」について論述し、そのうえで近年たたかわされた日本経済再建論議の当否、小泉内閣の構造改革の位置づけ、さらにサブプライム問題および世界同時大不況下の日本経済を検討したい。</p> <p>なお、本講義は内容上、春学期・秋学期を通して聴講するのが望ましい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. はじめに</li> <li>2. スタグフレーションとその原因</li> <li>3. レーガノミクスとアメリカ経済</li> <li>4. プラザ合意後の経済変化</li> <li>5. バブル経済の発生とその原因</li> <li>6. バブル経済の崩壊</li> <li>7. 平成不況の特徴 ー複合不況ー</li> <li>8. 金融自由化と日本版ビッグ・バン</li> <li>9. 「失われた10年」</li> <li>10. 景気対策か構造改革か(1)</li> <li>11. 景気対策か構造改革か(2)</li> <li>12. 小泉内閣の構造改革を問う</li> <li>13. サブプライム・ローンとリーマン・ショック</li> <li>14. 世界同時大不況下の日本経済</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
春学期と同じ。		春学期と同じ。	

01年度以降（春）	アメリカ経済論 a	担当者	本田 浩邦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>春学期は1920年代から現在までの経済の発展過程を扱います。アメリカ経済の現代的な構造や機能は、1930年代の大恐慌期から第二次世界大戦後にかけて形成されたものです。講義ではその過程を歴史的にフォローし、その中からどのような経済学的な考え方が生まれてきたのかを考えます。狭い意味での経済問題だけでなく、その背景をなす国際環境の変化、政治社会的な事件をも扱いますので現代史を学ぶつもりで聞いて下さい。</p> <p>講義で出てくる専門的な用語や概念はその都度できるだけ説明しますが、経済用語辞典などで調べながら聞く習慣を身につけて下さい。また、欠席が多いと話が断片的になり脈絡がつかめませんので、注意して下さい。</p> <p>質問はメールで。hhonda@dokkyo.ac.jp</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. はじめに</li> <li>2. 理論的概観（1）</li> <li>3. 理論的概観（2）</li> <li>4. 大恐慌とニューディールⅠ—発生と展開</li> <li>5. 大恐慌とニューディールⅡ—実験的進化</li> <li>6. 大恐慌とニューディールⅢ—諸学説</li> <li>7. 冷戦と戦後経済—1950年代</li> <li>8. 「ゆたかな社会」と「もう一つのアメリカ」</li> <li>9. ヴェトナム戦争と公民権運動</li> <li>10. ケインズ経済学</li> <li>11. マネタリズム</li> <li>12. 保守派の経済政策論</li> <li>13. 「ブラザ合意」</li> <li>14. 1990年代以降—ブームとバブル</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>授業で直接は使いませんが、参考までに以下の文献を適宜読み進めて下さい。カール・ビブン『誰がケインズを殺したか』日経ビジネス人文庫</p>		<p>出席はとりません。</p>	

01年度以降（秋）	アメリカ経済論 b	担当者	本田 浩邦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>秋学期は現在のアメリカの抱える経済問題に焦点をあてます。アメリカ経済の動向は、世界のどの国・地域の経済にとっても多大なインパクトをもっていますが、逆に、国際的な条件がアメリカの経済構造や経済政策のあり方を大きく規定していますので、アメリカ経済の位置をグローバルな国際的文脈のなかでとらえることが、経済問題の意義を把握する上で不可欠です。講義全体を通じて、アメリカの経済モデルの普遍性と特殊性について考えたいと思います。</p> <p>できれば春学期から継続して履修して下さい。</p> <p>質問はメールで。hhonda@dokkyo.ac.jp</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. はじめに</li> <li>2. 経済危機の現状</li> <li>3. 金融・資本市場</li> <li>4. アメリカ財政の危機</li> <li>5. 労働市場と経済格差</li> <li>6. 貧困と社会保障政策</li> <li>7. 国際比較—戦前の日本</li> <li>8. 国際比較—戦後の日本</li> <li>9. 国際比較—現在の日本</li> <li>10. 国際比較—スウェーデンとオランダ</li> <li>11. 国際比較—ドイツとイギリス</li> <li>12. 新しい経済社会の可能性（1）</li> <li>13. 新しい経済社会の可能性（2）</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>授業で直接は使いませんが、参考までに以下の文献を適宜読み進めて下さい。萩原伸次郎・中本悟編『現代アメリカ経済』日本評論社、2005年</p>		<p>出席はとりません。</p>	

01 年度以降 (春)	ラテンアメリカ経済論 a	担当者	松本 栄次
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>自然的基盤、歴史的背景、政治的社会的特性などの分析の上に立って、ラテンアメリカ全域の経済の特性について多面的に考察する。</p> <p>ラテンアメリカ経済の特徴に関する自然的基盤と歴史的背景などについて概観したうえで、ラテンアメリカ経済の発展過程を通覧する。さらに、変革期にある現代のラテンアメリカ経済の状況、およびこの地域の社会・経済が抱える諸問題とその将来展望について考察する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の概要</li> <li>2. ラテンアメリカにおける最近の経済トピックス</li> <li>3. ラテンアメリカ (以下 LA) 地域の国々</li> <li>4. LAの住民・文化の特徴</li> <li>5. LAの社会・経済の特徴</li> <li>6. LA 経済の自然的基盤(1)土地条件と地下資源</li> <li>7. LA 経済の自然的基盤(2)農牧林業環境</li> <li>8. LA 経済の歴史的背景</li> <li>9. LA 経済の発展過程(1)植民地期の経済</li> <li>10. LA 経済の発展過程(2)輸出経済期の経済</li> <li>11. LA 経済の発展過程(3)輸入代替工業化期の経済</li> <li>12. 現代の LA 経済(1)債務危機と「失われた 10 年」</li> <li>13. 現代の LA 経済(2)新自由主義経済とラテンアメリカ</li> <li>14. LA 経済と日本</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>国本伊代・中川文雄『ラテンアメリカ研究への招待 (改訂新版)』(新評論、2005 年)</p> <p>坂井・鈴木・松本編『ラテンアメリカ』(朝倉書店、2007 年)</p>		<p>期末定期試験の成績(60%)と出席状況(40%)を総合する。</p>	

01 年度以降 (秋)	ラテンアメリカ経済論 b	担当者	松本 栄次
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>自然的基盤、歴史的背景、政治的社会的特性などの分析の上に立って、多面的に、国および地方レベルの地域経済について考察する。</p> <p>おもに、ラテンアメリカ経済の一つの中核をなすブラジルをとりあげ、その特色のある産業経済の発展過程および諸地域における経済活動の特質を考察し、同国の経済発展の現状と問題点を指摘する。また、アマゾン川流域地域(アマゾニア)を事例として、その自然環境・住民と社会・地域経済の特性、および国際的関心の高い経済開発と環境保全の調和の問題について考察する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の概要</li> <li>2. ラテンアメリカ主要国のマクロ経済</li> <li>3. 現代ラテンアメリカ経済とブラジル</li> <li>4. 現代のブラジル経済と社会</li> <li>5. ブラジルの諸地域と地域格差(1)先進地域</li> <li>6. ブラジルの諸地域と地域格差(2)発展途上地域</li> <li>7. ブラジル産業史の特質：ブーム&amp;バーストサイクル</li> <li>8. ブーム&amp;バースト舞台の現在</li> <li>9. 現在ブラジルにおけるブーム：大豆とサトウキビ</li> <li>10. ブラジルの地下資源とその開発</li> <li>11. アマゾニアの居住・開発の歴史</li> <li>12. アマゾニア地域開発と問題点</li> <li>13. アマゾニアにおける開発と環境の問題</li> <li>14. ブラジル経済と日本</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>小池洋一他編『現代ブラジル事典』(新評論、2005 年)</p> <p>ゲールディング他著(山本・松本訳)『恵みの洪水ーアマゾン沿岸の生態と経済』(同時代社、2001 年)</p>		<p>期末定期試験の成績(60%)と出席状況(40%)を総合する。</p>	

01 年度以降 (春)	東アジア・中国経済論 a	担当者	全 載旭
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>近年東アジアの急速な発展と域内諸国の相互依存関係の強化によって、東アジアは世界経済を牽引する存在になったと言われている。なかでも中国経済の動向は 21 世紀の世界経済の新たな秩序を左右する最大のファクターの一つである。この授業では東アジア全体に目を配りつつ、中国経済を中心に考察する。</p> <p>日本もまた東アジアにあって、この地域の諸国と相互に密接な関係をもっている。本科目の履修を通じて、この地域のあり方に関心を向けてもらいたい。</p> <p>この授業では中国経済の歴史、発展可能性などについて 1970 年代末から始まった改革・開放を中心に講義を進めていきたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 中国経済の全般的な動向 (1)</li> <li>2 中国経済の全般的な動向 (2)</li> <li>3 世界の工場か、世界の市場か? (1)</li> <li>4 世界の工場か、世界の市場か? (2)</li> <li>5 社会主義市場経済とは何か? (1)</li> <li>6 社会主義市場経済とは何か? (2)</li> <li>7 メイド・イン・チャイナは世界市場を席捲するか? (1)</li> <li>8 メイド・イン・チャイナは世界市場を席捲するか? (2)</li> <li>9 国有企業改革はどこまで進んだか? (1)</li> <li>10 国有企業改革はどこまで進んだか? (2)</li> <li>11 農村はいかに変化したか? (1)</li> <li>12 農村はいかに変化したか? (2)</li> <li>13 失業率は本当に低いか?</li> <li>14 金融は中国経済のアキレスけんか?</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
南亮進・牧野文夫編『中国経済入門第 2 版』日本評論社、2005 年。 その他必要に応じて資料を配布する。		出席状況と筆記試験によって評価する。	

01 年度以降 (秋)	東アジア・中国経済論 b	担当者	全 載旭
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>中国経済の発展をめぐる内的な課題と、対外貿易の発展、外資導入などの経済成長への役割、近年中国の台頭による東アジア経済の再編について論じていく。</p> <p>貿易と投資を通じて急速に緊密化している日中経済関係の現状と今後のあり方についても考察する。また東アジアにおける経済統合の実現可能性も取り上げる。</p> <p>東アジア・中国経済論 a を履修し、中国の経済発展メカニズムの基本を把握していることが望ましい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 輸出は成長のエンジンか? (1)</li> <li>2 輸出は成長のエンジンか? (2)</li> <li>3 外資は何をもたらしたか? (1)</li> <li>4 外資は何をもたらしたか? (2)</li> <li>5 中国は国際社会にとって脅威か? (1)</li> <li>6 中国は国際社会にとって脅威か? (2)</li> <li>7 日中関係はいかにあるべきか? (1)</li> <li>8 日中関係はいかにあるべきか? (2)</li> <li>9 持続成長は可能か? (1)</li> <li>10 持続成長は可能か? (2)</li> <li>11 成長の果実は誰の手に? (1)</li> <li>12 成長の果実は誰の手に? (2)</li> <li>13 21 世紀における東アジア経済と中国経済 (1)</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
南亮進・牧野文夫編『中国経済入門第 2 版』日本評論社、2005 年。 その他必要に応じて資料を配布する。		出席状況と筆記試験によって評価する。	

01年度以降（春）	アフリカ経済論 a	担当者	千代浦 昌道
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><u>講義目的</u></p> <p>現在、比較的高い経済成長率を維持しているアフリカ地域を、経済面のみならず政治・社会・文化面からも多角的に捉えて、まずこの地域に関する正確な知識により歴史と現状を十分に把握し正しく理解した後に、経済問題を中心とする現在のさまざまな問題の解決へ向けて、世界の国々に、とりわけ日本などを中心とする先進諸国がどのような関わりを持つことができ、またどのような関わりを持つのが望ましいかを探る。</p> <p><u>講義概要</u></p> <p>アフリカ大陸の全体像、アフリカ経済の歴史的背景に次いで、第二次大戦後に独立を迎えたアフリカ諸国の経済発展と経済の現状について講義する。講義の大部分はパワーポイントとビデオを使って行う。</p>		<p>1 授業の進め方、参考文献の紹介など</p> <p>2 アフリカ概観Ⅰ</p> <p>3 アフリカ概観Ⅱ</p> <p>4 アフリカ概観Ⅲ</p> <p>5 アフリカ概観Ⅳ</p> <p>6 現代アフリカ経済の歴史的背景Ⅰ</p> <p>7 現代アフリカ経済の歴史的背景Ⅱ</p> <p>8 現代アフリカ経済の歴史的背景Ⅲ</p> <p>9 現代アフリカ経済の歴史的背景Ⅳ</p> <p>10 アフリカ経済の現状Ⅰ</p> <p>11 アフリカ経済の現状Ⅱ</p> <p>12 アフリカ経済の現状Ⅲ</p> <p>13 アフリカ経済の現状Ⅳ</p> <p>14 アフリカ経済の現状Ⅴ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
参考文献：小田英郎他著『アフリカ 第2版』自由国民社、1999。宮本正興、松田素二編『新書アフリカ史』（講談社現代新書）、1997。		期末試験による。随時に出欠をとり、評価の参考資料とする。	

01年度以降（秋）	アフリカ経済論 b	担当者	千代浦 昌道
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><u>講義目的</u></p> <p>アフリカ経済論 a と同じ。</p> <p><u>講義概要</u></p> <p>アフリカ地域についての最重要課題である経済発展、貿易、農業・食糧、資源、人口、都市、難民、環境、援助と国際協力、地域統合、アフリカ連合とNEPAD、日本との関係等についてテーマ別に講義する。講義の大部分はパワーポイントを使って行う。ほぼ毎回、講義内容に関連するビデオを上映して、アフリカ経済・社会の現状を教室で実感してもらう。</p>		<p>1 アフリカの経済発展</p> <p>2 アフリカの貿易問題</p> <p>3 アフリカの農業・食糧問題</p> <p>4 アフリカの資源問題</p> <p>5 アフリカの人口問題</p> <p>6 アフリカの都市問題</p> <p>7 アフリカの難民問題</p> <p>8 アフリカの環境問題</p> <p>9 対アフリカ援助と国際協力の現状Ⅰ</p> <p>10 対アフリカ援助と国際協力の現状Ⅱ</p> <p>11 アフリカの地域経済統合</p> <p>12 AU（アフリカ連合）とNEPAD</p> <p>13 アフリカの経済発展と日本Ⅰ</p> <p>14 アフリカの経済発展と日本Ⅱ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
参考文献：『アフリカを知る事典 改訂版』平凡社、1999。北川勝彦、高橋基樹編『アフリカ経済論』、ミネルヴァ書房、2004。		期末試験による。随時に出欠をとり、評価の参考資料とする。	

01 年度以降 (春)	東南アジア経済論 a	担当者	高安 健一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義では、東南アジアで事業を展開している日本企業の視点に立って、各国の経済発展の軌跡および経済の特徴について学習します。</p> <p>講義には二つの軸があります。一つは、東南アジア諸国の多様性に焦点をあてることです。東南アジアという地域概念が定着してから半世紀も経っていません。</p> <p>もう一つは、共通の分析項目を設定することにより、各国を横並びで捉えることです。経済発展の初期条件、経済発展戦略、マクロ経済動向、産業構造の特徴、外国直接投資、日本との経済関係などについて解説します。加えて、各国が直面している経済的課題を取り上げます。</p> <p>受講生が講義内容を、就職活動のみならず卒業後も活用することを期待します。東南アジア経済論 b も履修して下さい。第 1 回の講義に必ず出席すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の目的、成績評価</li> <li>2. 東南アジア経済の概要と課題</li> <li>3. タイ：経済発展の軌跡と特徴</li> <li>4. タイ：タクシン元首相と経済的停滞</li> <li>5. シンガポール：経済発展の軌跡と特徴</li> <li>6. シンガポール：産業高度化戦略</li> <li>7. シンガポール：多国籍企業の活動</li> <li>8. マレーシア：マハティール元首相の発展戦略</li> <li>9. インドネシア：経済再生への課題</li> <li>10. ベトナム：ドイモイ（刷新）政策</li> <li>11. カンボジア：経済復興から経済成長への道筋</li> <li>12. ミャンマー：長期経済停滞の背景</li> <li>13. ラオス：対外開放戦略への転換</li> <li>14. 講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>教員が作成した資料を配布する。参考文献は、最初の講義で紹介する。</p>		出席 20%、学期末テスト 80%	

01 年度以降 (秋)	東南アジア経済論 b	担当者	高安 健一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義では、東南アジアで事業を展開している日本企業の視点に立って、地域経済共同体としての東南アジア諸国連合 (ASEAN) について学習します。</p> <p>講義の柱は 3 つです。第 1 は、1967 年に発足した ASEAN がいかなる経緯を経て地域経済共同体として発展し、多国籍企業をひきつけてきたかを学習することです。ラオス、カンボジア、タイ、ベトナムなどで構成されるメコン地域の開発構想についても解説します。</p> <p>第 2 は、ASEAN における経済発展の担い手である華僑・華人資本、日本の自動車メーカー、邦銀の活動について学ぶことです。</p> <p>第 3 は、我が国が ASEAN のさらなる経済発展のために担うべき役割を考えることです。</p> <p>受講生が講義内容を、就職活動のみならず卒業後も活用することを期待します。東南アジア経済論 a も履修して下さい。第 1 回の講義に必ず出席すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の目的、成績評価等</li> <li>2. 経済発展の軌跡と課題</li> <li>3. 地域経済共同体としての ASEAN：形成過程</li> <li>4. 地域経済共同体としての ASEAN：共同体の実現</li> <li>5. 地域経済共同体としての ASEAN：将来構想</li> <li>6. ASEAN の域外自由貿易協定 (FTA) 戦略</li> <li>7. 大メコン圏開発：開発構想と南部経済回廊</li> <li>8. 大メコン圏開発：東部経済回廊</li> <li>9. わが国自動車メーカーの事業展開</li> <li>10. 邦銀の事業展開</li> <li>11. 経済発展と華僑・華人資本</li> <li>12. わが国と東南アジアの経済関係：ASEAN の視点</li> <li>13. わが国と東南アジアの経済関係：日本政府の視点</li> <li>14. わが国と東南アジアの経済関係：日本企業の視点</li> </ol> <p>講義のまとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>教員が作成した資料を配布する。参考文献は、最初の講義で紹介する。</p>		出席 20%、学期末テスト 80%	

01年度以降（春）	中東経済論 a	担当者	平井 文子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義目的： 中東についてのイメージは近年大きく変化してきた。これまでは、石油とパレスチナ問題に代表されたが、今日では、<u>石油/オイルマネー</u>（世界金融・経済におけるオイルマネーの存在の増大化とドバイ型経済成長）と<u>イスラム</u>（イスラミズムに基づく「テロ」ないし抵抗闘争からイスラム政治・経済・文化の展開に至るまで）に代表されると言えよう。本講義では春・秋学期を通じて、これら中東イメージの実態についてやや歴史的に解説するとともに、ダイナミックに変化しつつある現代中東に肉薄する。</p> <p>講義概要： 講師が作成・配布するプリントを主なテキストにして講義を進める。テーマごとに適切な参考資料を紹介する。また、理解を深めるために、何本かの VTR の鑑賞も行う。途中でレポートの提出あり。</p>		<p>1)講義目的、講義概要の説明と受講生へのメッセージ 2) 中東に関する基礎知識 1：中東の国々とその特徴 3) 中東に関する基礎知識 2：歴史、文化 4) パレスチナ問題とは何か 1 5) パレスチナ問題とは何か 2 6) パレスチナ問題とは何か 3 7) パレスチナ問題とは何か 4 8) 中東石油について 1 9) 中東石油について 2 10) 中東石油について 3 11) 中東石油について 4 12) オイルマネーと中東政治経済変化 13) 原油価格変動の謎 14) まとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：講師配布プリント 参考文献：広河隆一『パレスチナ 新版』、岩波新書、2002、畑中美樹『オイルマネー』、講談社新書、2008</p>		<p>期末定期試験と課題レポートの双方を評価対象とする。</p>	

01年度以降（秋）	中東経済論 b	担当者	平井 文子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>中東経済論 a に続いて、<u>石油/オイルマネーとイスラム</u>というキーワードに従い、80年代以降のイラン、イラク情勢と、最近注目を集めている GCC 諸国およびトルコの政治経済について学ぶ。</p> <p>GCC 諸国は伝統的なイスラム・システムに基づく政治体制の下に、オイルマネーを梃子に経済多様化に取り組んでいることで注目を集めている。他方、西欧化と「世俗主義」を堅持し、EU 加盟を目指して輸出志向型経済の構築にある程度成功しつつも何回も経済危機に見舞われて来たトルコでは、2002年に新しいタイプのイスラムの政権が誕生して以来、経済成長が維持され続け、対内的にはアルメニア・クルド問題解決に踏み出し、対外的には従来の西側一辺倒から離脱して中東、アジアをも射程に入れた斬新な政策が展開されている。現代トルコで何が起きているのか——興味の惹かれるところである。</p> <p>講義概要： 講師が作成・配布するプリントをテキストにして講義を進める。理解を深めるために、何本かの VTR の鑑賞も行う。途中でレポートの提出あり。</p>		<p>1)講義目的、講義概要の説明と受講生へのメッセージ 2) 中東に関する基礎知識 1：中東の国々とその特徴 3) 中東に関する基礎知識 2：歴史、文化 4) オイルブームとイスラム復興 5) イラン革命とイラン・イラク戦争 6) 湾岸戦争/イラク戦争にみるアメリカの戦略 7) GCC 諸国の政治経済 1 8) GCC 諸国の政治経済 2 9) GCC 諸国の政治経済 3 10) トルコの政治経済 1 11) トルコの政治経済 2 12) トルコの政治経済 3 13) トルコの政治経済 4 14) まとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：講師配布プリント 参考文献：内藤正典編著『激動のトルコ』、明石書店、2008 他</p>		<p>期末定期試験と課題レポートの双方を評価対象とする。</p>	

01年度以降（春）	金融経済論 a	担当者	斉藤 美彦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(目的) 金融の基礎を理解し、金融に関連した新聞記事が読め、議論ができるようになるということを目的とする。</p> <p>(概要) 講義は、まずマネーと銀行業との関わり、すなわちマクロ的に貨幣供給はどのように行われているかについての解説からはじめる。そして銀行業による貨幣供給と決済システムとの関わりについても解説する。さらに金利の期間構造や銀行の収益構造についても解説する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション：銀行は特別な存在か？</li> <li>2. 支払システムの担い手としての銀行（1）</li> <li>3. 支払システムの担い手としての銀行（2）</li> <li>4. 支払システムの担い手としての銀行（3）</li> <li>5. マネー供給機関としての銀行（1）</li> <li>6. マネー供給機関としての銀行（2）</li> <li>7. マネー供給機関としての銀行（3）</li> <li>8. 金利の役割（1）</li> <li>9. 金利の役割（2）</li> <li>10. 銀行の収益構造（1）</li> <li>11. 銀行の収益構造（2）</li> <li>12. 銀行の収益構造（3）</li> <li>13. 銀行業への規制（1）</li> <li>14. 銀行業への規制（2）</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：なし 参考文献：講義中に紹介する</p>		<p>期末試験・レポートによる</p>	

01年度以降（秋）	金融経済論 b	担当者	斉藤 美彦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(目的) 金融政策についての議論が理解でき、自分なりの見解を持つことができるようになることを目的とする。</p> <p>(概要) 近年の中央銀行の金融調節方式の変化を踏まえた上で、金融政策の基本から実際の中央銀行の金融政策運営、金融危機下の金融政策についてまで講義を行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション：近年の中央銀行の金融調節方式</li> <li>2. 高度成長期の金融政策</li> <li>3. 金融自由化と金融政策の変化</li> <li>4. バブル期の金融政策（1）</li> <li>5. バブル期の金融政策（2）</li> <li>6. バブル期の金融政策（3）</li> <li>7. 1990年代の金融政策（1）</li> <li>8. 1990年代の金融政策（2）</li> <li>9. 1990年代の金融政策（3）</li> <li>10. 「量的緩和」後の金融政策（1）</li> <li>11. 「量的緩和」後の金融政策（2）</li> <li>12. 「量的緩和」後の金融政策（3）</li> <li>13. 世界金融危機下の金融政策（1）</li> <li>14. 世界金融危機下の金融政策（2）</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：斉藤美彦『金融自由化と金融政策・銀行行動』日本経済評論社、2006年 参考文献：斉藤美彦・須藤時仁『国債累積時代の金融政策』日本経済評論社、2009年</p>		<p>期末試験・レポートによる。</p>	

01年度以降（春）	金融システム論 a	担当者	斉藤 美彦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(目的) 日本の金融システムの概要、主要金融機関、問題点等について理解できるようになることを目的とする。</p> <p>(概要) 講義は、まず戦後日本の金融システムの特徴について解説した後に、金融自由化、バブル崩壊によりそれがどのように変化してきたか等について解説する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション：戦後金融規制の3本柱</li> <li>2. 日本の金融機関 (1)</li> <li>3. 日本の金融機関 (2)</li> <li>4. 日本の金融機関 (3)</li> <li>5. 日本の金融機関 (4)</li> <li>6. 金融自由化の進展と金融機関 (1)</li> <li>7. 金融自由化の進展と金融機関 (2)</li> <li>8. 金融自由化の進展と金融機関 (3)</li> <li>9. バブルの形成・崩壊と金融機関 (1)</li> <li>10. バブルの形成・崩壊と金融機関 (2)</li> <li>11. バブルの形成・崩壊と金融機関 (3)</li> <li>12. 金融における新潮流 (1)</li> <li>13. 金融における新潮流 (2)</li> <li>14. 金融における新潮流 (3)</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：斉藤美彦『金融自由化と金融政策・銀行行動』日本経済評論社、2006年</p>		<p>期末試験・レポートによる</p>	

01年度以降（秋）	金融システム論 b	担当者	斉藤 美彦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(目的) 歴史的条件等から個性的なものとして発展してきた諸外国の金融システムについて理解することを目的とする。</p> <p>(概要) 近代的金融システムの発祥の地であるイギリスの金融システムについて解説した後に、アメリカその他の諸国の金融システムについて解説する。さらに近年の世界金融危機についても解説する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション：グローバリゼーションの進展と金融システム</li> <li>2. イギリスの金融システム (1)</li> <li>3. イギリスの金融システム (2)</li> <li>4. イギリスの金融システム (3)</li> <li>5. イギリスの金融システム (4)</li> <li>6. イギリスの金融システム (5)</li> <li>7. アメリカの金融システム (1)</li> <li>8. アメリカの金融システム (2)</li> <li>9. アメリカの金融システム (3)</li> <li>10. 欧州通貨統合とユーロ圏の金融システム (1)</li> <li>11. 欧州通貨統合とユーロ圏の金融システム (2)</li> <li>12. 世界金融危機の現段階 (1)</li> <li>13. 世界金融危機の現段階 (2)</li> <li>14. 世界金融危機の現段階 (3)</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：なし 参考文献：斉藤美彦『イギリスの貯蓄金融機関と機関投資家』日本経済評論社、1999年。他は講義中に紹介する。</p>		<p>期末試験・レポートによる。</p>	

01 年度以降 (春)	財政学 a	担当者	野村 容康
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的</b> 本講義では、財政赤字、税制改革、年金改革、公共事業といったわが国の財政問題を考えていく際の手掛かりとなるように財政学の基礎的事項について概説する。本講の受講を通じて、財政の基礎的な制度とその機能について理解を深め、現実の財政問題について自分なりに考える力を身につけてほしい。</p> <p><b>講義概要</b> 前期は、どちらかと言えば政府の支出活動面に重点を置きながら、財政の機能とわが国財政の現状、公共支出に関する理論、政府債務の問題、公的年金問題等について解説する。後期は、政府収入の中で最も重要な租税に関する議論（租税理論、制度、税制改革論等）に焦点を絞って授業を進める。</p> <p><b>受講者への要望</b> 受講生は新聞などを通じてできるだけ財政制度改革、税制改正の動向についてフォローし、わが国の財政に関する問題意識を高めてほしい。なお、受講のためにはミクロ経済学の基礎的知識を習得していることが望ましい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 財政とは何か</li> <li>2. 財政学とその変遷</li> <li>3. 資源配分の調整機能</li> <li>4. 財政と所得再分配①</li> <li>5. 財政と所得再分配②</li> <li>6. 財政政策の理論①</li> <li>7. 財政政策の理論②</li> <li>8. 公共財の理論①</li> <li>9. 公共財の理論②</li> <li>10. 補助金の効果</li> <li>11. わが国財政の現状</li> <li>12. 公債の制度と理論</li> <li>13. 公的高齢年金①</li> <li>14. 公的高齢年金②</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキスト 里中恆志・八巻節夫『新財政学』文眞堂 参考書 『図説日本の財政』、『図説日本の税制』		定期試験の成績で評価する。 出席は考慮しない。	

01 年度以降 (秋)	財政学 b	担当者	野村 容康
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
(財政学 a 参照)		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 租税の意義と根拠</li> <li>2. 租税の基礎的概念①</li> <li>3. 租税の基礎的概念②</li> <li>4. 課税の公平性①</li> <li>5. 課税の公平性②</li> <li>6. 課税の中立性①</li> <li>7. 課税の中立性②</li> <li>8. 租税の転嫁と帰着</li> <li>9. 包括的所得税論</li> <li>10. 最近の税制改革論</li> <li>11. 日本の租税体系</li> <li>12. 個人所得課税</li> <li>13. 法人所得課税</li> <li>14. 間接消費課税</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
(財政学 a 参照)		(財政学 a 参照)	

01年度以降（春）	公共経済学 a	担当者	伊藤 爲一郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>わたしたちの日々の生活は公共部門の活動によって支えられています。上下水道、ゴミ処理、教育、福祉、警察、外交、国防などさまざまな公共サービスの恩恵を受けています。</p> <p>こうした公共サービスは国民が支払った税金によって支えられています。受益と負担についてもっと関心を寄せることを求められています。</p> <p>公共部門と民間部門の経済活動とはどのような関係があるのか、公的規制はどうあるべきか、公共部門の活動を活性化するにはどのように対応するべきか。</p> <p>経済の発展とともに公共部門の活動領域は量的にも質的にも大きく変動してきました。その歴史の変遷をたどりながら、現代の公共部門の諸活動の特徴を明らかにします。</p>		<p>はじめに 生活と公共サービス 生産と公共サービス 消費と公共サービス</p> <p>公共部門と市場の関係 市場の失敗をめぐる議論</p> <p>公共部門とは。 公共部門の失敗をめぐる議論</p> <p>公共部門存在の理由 公共部門の活動領域の拡大 生産と生活の社会化の進展</p> <p>公共政策の展開 公共政策の多様化と総合性 主体の多様化</p> <p>中央政府と地方政府 守備範囲の再検討 地方主権の方向に向けて</p> <p>公共部門の新しい課題 発想の転換 グローバル化・競争は続く</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
講義中文献の紹介をし、関連するプリントを配布します。		期末テストおよび小テストによって評価します	

01年度以降（秋）	公共経済学 b	担当者	伊藤 爲一郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>わたしたちの日々の生活は公共部門の活動によって支えられています。上下水道、ゴミ処理、教育、福祉、警察、外交、国防などさまざまな公共サービスの恩恵を受けています。</p> <p>こうした公共サービスは国民が支払った税金によって支えられています。受益と負担についてもっと関心を寄せることを求められています。</p> <p>公共部門と民間部門の経済活動とはどのような関係があるのか、公的規制はどうあるべきか、公共部門の活動を活性化するにはどのように対応するべきか。</p> <p>経済の発展とともに公共部門の活動領域は量的にも質的にも大きく変動してきました。その歴史の変遷をたどりながら、現代の公共部門の諸活動の特徴を明らかにします。</p>		<p>はじめに 財政の現状と課題 文献紹介</p> <p>租税国家の危機 公債の累増</p> <p>公共サービスの供給と財源調達 なぜ租税が必要か</p> <p>公平な租税とは 租税原則と租税配分</p> <p>わが国の租税構造の変遷とその特徴 所得に課せられる税 消費に課せられる税 資産に課せられる税</p> <p>少子高齢化社会の到来と財政 少子化対策と年金</p> <p>地方財政の発展 地域の経済的自立と発展</p> <p>経済再生と財政改革</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
講義中文献の紹介をし、関連するプリントを配布します。		期末テストおよび小テストによって評価します	

08年度以降（春） 01～07年度（春）	特殊講義 a（日本財政論） 日本財政論 a	担当者	深江 敬志
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>【講義目的】</b> 国と地方を通じた財政システムを理解し、財政問題への対処策に対して一定の評価を与えられる事を目的とする。</p> <p><b>【講義概要】</b> 本講義は、複雑なシステムを有する日本の財政について、各論点を丁寧に紐解く事で理解を深め、さらに国および地方における財政改革の方向性についても各自が問題意識を抱き、その課題に対する評価が行えるようになることが目標である。 本講義では、日本の財政における各論点に関し、①制度的アプローチ、②公共経済学的アプローチに基づき講義を進める予定である。公共経済学的アプローチに関しては、ミクロ経済学の基礎が必須であるが、講義にて臨機応変に対応したい。 本講義を受講する事により、日本財政が直面する課題に対し、各人が問題意識を抱き、それらの政策に対し一定の評価を与えられるようになることを望む。</p>		第1回 インTRODクシヨン 第2回 財政の働きー日本財政の現状ー 第3回 予算制度 1 第4回 予算制度 2 第5回 政府支出 1 第6回 政府支出 2 第7回 外部性の理論 1 第8回 外部性の理論 2 第9回 公共財の理論 1 第10回 公共財の理論 2 第11回 財政政策の経済効果 1 第12回 財政政策の経済効果 2 第13回 まとめ 第14回 まとめ	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
原則として講義時に、レジュメおよび参考資料を配布し、それらに沿って講義を進める。		定期試験 70%、小テスト 30%	

08年度以降（秋） 01～07年度（秋）	特殊講義 b（日本財政論） 日本財政論 b	担当者	深江 敬志
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>【講義目的】</b> 国と地方を通じた財政システムを理解し、財政問題への対処策に対して一定の評価を与えられる事を目的とする。</p> <p><b>【講義概要】</b> 本講義は、複雑なシステムを有する日本の財政について、各論点を丁寧に紐解く事で理解を深め、さらに国および地方における財政改革の方向性についても各自が問題意識を抱き、その課題に対する評価が行えるようになることが目標である。 本講義では、日本の財政における各論点に関し、①制度的アプローチ、②公共経済学的アプローチに基づき講義を進める予定である。公共経済学的アプローチに関しては、ミクロ経済学の基礎が必須であるが、講義にて臨機応変に対応したい。 本講義を受講する事により、日本財政が直面する課題に対し、各人が問題意識を抱き、それらの政策に対し一定の評価を与えられるようになることを望む。</p>		第1回 インTRODクシヨン 第2回 租税の意義と原則 第3回 租税制度（個人所得課税 1） 第4回 租税制度（個人所得課税 2） 第5回 租税制度（法人所得課税 1） 第6回 租税制度（法人所得課税 2） 第7回 租税制度（消費課税 1） 第8回 租税制度（消費課税 2） 第9回 租税制度（資産課税） 第10回 公債 1 第11回 公債 2 第12回 社会保障 1 第13回 社会保障 2 第14回 まとめ	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
原則として講義時に、レジュメおよび参考資料を配布し、それらに沿って講義を進める。		定期試験 70%、小テスト 30%	

01年度以降（春）	地方財政論 a	担当者	伊藤 爲一郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>地方財政は「行政のデパート」といわれるように、義務教育、警察、消防、上・下水道、商工政策のような地域振興政策、まちづくり等多様な公共サービスを供給しています。</p> <p>こうした公共サービスは市民が働いて得た所得から支払われた税金で賄われていますから「受益と負担」について納税者はもっと関心を寄せることが求められています。</p> <p>地方公共団体のこのような活動を金銭面からとらえたものが地方財政です。住民の日常生活と密接に関連している地方財政の役割を明らかにすることが目標です。</p> <p>自然条件、地理的要因、産業構造、人口構成等が多様な自治体がそれぞれの資源を有効に活用して、自立して生きていくことができるように知恵と工夫を凝らすことをもめられています。</p>		<p>はじめに 文献紹介 地方財政の現状 地方政府と中央政府 経済の発展と地方財政の機能の拡大 地方財政の国際比較 地方財政の多様性 地方分権の推進・町村合併 機関委任事務の廃止 地方税・財源の改革をめぐる議論 地方財政の課題 持続可能な地域経営</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
講義の中で紹介します		期末テスト及び中間での小テストの成績により評価します	

01年度以降（秋）	地方財政論 b	担当者	伊藤 爲一郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>地方財政は「行政のデパート」といわれるように、義務教育、警察、消防、上・下水道、商工政策のような地域振興政策、まちづくり等多様な公共サービスを供給しています。</p> <p>こうした公共サービスは市民が働いて得た所得から支払われた税金で賄われていますから「受益と負担」について納税者はもっと関心を寄せることが求められています。</p> <p>地方公共団体のこのような活動を金銭面からとらえたものが地方財政です。住民の日常生活と密接に関連している地方財政の役割を明らかにすることが目標です。</p> <p>自然条件、地理的要因、産業構造、人口構成等が多様な自治体がそれぞれの資源を有効に活用して、自立して生きていくことができるように知恵と工夫を凝らすことをもめられています。</p>		<p>はじめに 文献紹介 地方財政の現状 地方政府と中央政府 経済の発展と地方財政の機能の拡大 地方財政の国際比較 地方財政の多様性 地方分権の推進・町村合併 機関委任事務の廃止 地方税・財源の改革をめぐる議論 持続可能な地方財政の課題</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
講義の中で紹介します		期末テスト及び中間での小テストの成績により評価します	

01年度以降（春）	環境経済学 a	担当者	浜本 光紹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>近年の環境問題の深刻化とともに、環境保全と経済活動の調和を求めて、新たな社会経済システムの構築への模索が試みられている。本講義では、経済学の立場から、環境破壊が進行する要因を検討し、環境保全型社会経済システムの構築のために環境政策はどのように設計される必要があるのかについて考えていく。</p> <p>「環境経済学 a」では、環境経済学の理論的基礎、環境資源の貨幣的評価とその手法、および環境問題の解決において司法や行政が果たす役割について講義を行なう。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. イントロダクション：環境経済学とはどのような学問か</li> <li>3. 分析道具の解説：ミクロ経済学の基礎（1）</li> <li>4. 分析道具の解説：ミクロ経済学の基礎（2）</li> <li>5. 外部不経済論（1）</li> <li>6. 費用便益分析（1）</li> <li>7. 費用便益分析（2）</li> <li>8. 環境評価手法（1）</li> <li>9. 環境評価手法（2）</li> <li>10. 環境評価手法（3）</li> <li>11. 環境政策の規範的理論</li> <li>12. 環境政策（1）：分権的アプローチ</li> <li>13. 環境政策（2）：地方政府と司法の役割</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>バリー・C・フィールド『環境経済学入門』日本評論社、および講義中に配布するプリント</p>		<p>定期試験による。</p>	

01年度以降（秋）	環境経済学 b	担当者	浜本 光紹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>「環境経済学 b」では、日本や米国、欧州における現実の環境政策の諸事例を検討しながら、地球温暖化に代表されるような地球環境問題に対処するための環境政策の制度設計はどうあるべきか、ということに関する政策的含意を導き出していく。特に、近年関心が高まっている排出権取引制度に対する批判的検討に重点を置きながら講義を進めていく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 環境政策手段の基礎理論（1）</li> <li>3. 環境政策手段の基礎理論（2）</li> <li>4. 欧州における環境税制改革</li> <li>5. 地球温暖化問題と国際協調（1）</li> <li>6. 地球温暖化問題と国際協調（2）</li> <li>7. 京都議定書と排出権移転メカニズム（1）</li> <li>8. 京都議定書と排出権移転メカニズム（2）</li> <li>9. 米国における排出権取引制度（1）</li> <li>10. 米国における排出権取引制度（2）</li> <li>11. 米国における排出権取引制度（3）</li> <li>12. 欧州における排出権取引制度（1）</li> <li>13. 欧州における排出権取引制度（2）</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>浜本光紹『排出権取引制度の政治経済学』有斐閣、および講義中に配布するプリント</p>		<p>定期試験による。</p>	

01年度以降（春）	都市経済学 a	担当者	倉橋 透
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>【講義目的】 個人がアパートを借りたり住宅を買ったりする、企業が自分の会社のオフィスを証券化する、地方公共団体が寂れた中心市街地の活性化を図るなど都市に係る話題は我々の周りにあふれている。この講義は、こうした都市をめぐる諸問題の最新の状況を述べるとともに、ミクロ経済学を応用し分析することを目的とする。</p> <p>【講義概要】 春学期は身近なところで交通問題（主に交通渋滞）、土地、住宅、都市環境問題について述べる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の概要</li> <li>2. 交通問題（道路の混雑料金）</li> <li>3. 交通問題（道路建設のメリットと費用）</li> <li>4. 交通問題（新駅建設による地価上昇の恩恵はだれが受けるべきか）</li> <li>5. 土地市場（地代の決まり方）</li> <li>6. 土地市場（地価の決まり方、その1）</li> <li>7. 土地市場（地価の決まり方、その2）</li> <li>8. 不動産の証券化とJ-REIT</li> <li>9. 不動産金融工学（その1）</li> <li>10. 不動産金融工学（その2）</li> <li>11. 住宅ローンの現状</li> <li>12. 住宅ローンの証券化</li> <li>13. サブプライムローン問題</li> <li>14. 住宅ストック活用と高齢者住宅対策</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>プリントを配布する。参考文献は宮尾尊弘『現代都市経済学』第2版（日本評論社）、金本良嗣『都市経済学』（東洋経済新報社）、倉橋透・小林正宏『サブプライム問題の正しい考え方』（中公新書）とする。</p>		定期試験による。	

01年度以降（秋）	都市経済学 b	担当者	倉橋 透
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>【講義目的】 個人がアパートを借りたり住宅を買ったりする、企業が自分の会社のオフィスを証券化する、地方公共団体が寂れた中心市街地の活性化を図るなど都市に係る話題は我々の周りにあふれている。この講義は、こうした都市をめぐる諸問題の最新の状況を述べるとともに、ミクロ経済学を応用し分析することを目的とする。</p> <p>【講義概要】 秋学期は都市全体を対象に、その発生、発展、土地利用決定等を述べる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の概要</li> <li>2. 都市と都市問題（都市の定義）</li> <li>3. 都市と都市問題（都市の成立要因）</li> <li>4. 都市と都市問題（市場の失敗と都市問題の発生原因）</li> <li>5. 都市の発展段階（都市の発展段階）</li> <li>6. 都市の発展段階（シャッター商店街の現状と対策）</li> <li>7. 都市の発展段階（ケーススタディ）</li> <li>8. 都市と土地利用（住宅の立地決定メカニズム）</li> <li>9. 都市と土地利用（オフィスの立地決定メカニズム）</li> <li>10. 都市と土地利用（土地利用規制とその経済的影響）</li> <li>11. 都市の面的整備事業（土地区画整理事業）</li> <li>12. 最適都市規模</li> <li>13. これからの地域経済のあり方</li> <li>14. 草加のまちづくり</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>プリントを配布する。参考文献は宮尾尊弘『現代都市経済学』第2版（日本評論社）、金本良嗣『都市経済学』（東洋経済新報社）とする。</p>		定期試験による。	

01年度以降（春）	経済地理学 a	担当者	犬井 正
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済地理学は経済の諸事象の地理的配置を説明し、経済地域の成立・構造・機能を明らかにすることを目的とする。経済事象は農業、工業、商業など多岐にわたるので、本講義では農業地理学を主体にしながら、経済地理学の方法と内容を学んでいく。</p> <p>単に講義による農業地理学の理論だけでなく、フィールドワークをおこなうとともに、スライドなどを用いできるだけ農業の具体的な現実のすがたが把握できるように努める。また、適当なトピックスを選んで、受講者の意見を発表する場も設定する。さらに受講者は与えられた課題に関する小論を提出し、レポート・論文の書き方の基本を習得する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 本講義のオリエンテーション、講義方法、講義内容等</li> <li>2. 経済地理学の研究方法と研究対象について、経済学と地理学の方法の相違。</li> <li>3. 経済地理学研究のためのデータの収集とその活用方法。</li> <li>4. 農業活動と自然環境との関係を、具体的な農業地域を事例にして考察する。</li> <li>5. 農業生産と農業労働力を中心として、専業・兼業別農家の経営形態の地域的差異を考察する。</li> <li>6. 農業経営規模と土地の保有形態を中心として、農業経営形態や他産業との競合を視点として考察する。</li> <li>7. 農産物と市場・流通・輸送形態の関係について具体的な農業地域を事例として考察する。</li> <li>8. 国家と農業政策、土地利用と土地利用計画・政策について考察する。</li> <li>9. 日本と世界の諸地域の農業経営形態の差異と農業地域区分の方法を考察する。</li> <li>10・11. 東京近郊洪積台地上の農業地域のフィールドワーク実施（日曜日に振り替えて実施する）。</li> <li>12・13. 都市農業と近郊農業</li> <li>14. 春学期のまとめと評価。フィールドワークのレポート提出</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：D. グリッグ著『農業地理学』1997年、農林統計協会</p>		<p>定期試験、およびフィールドワークのレポート結果と講義への貢献度などから総合的に判定する。</p>	

01年度以降（秋）	経済地理学 b	担当者	犬井 正
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済地理学は経済の諸事象の地理的配置を説明し、経済地域の成立・構造・機能を明らかにすることを目的とする。経済事象は農業、工業、商業など多岐にわたるので、本講義では農業地理学を主体にしながら、経済地理学の方法と内容を学んでいく。</p> <p>単に講義による農業地理学の理論だけでなく、VTR やスライドなどを用いできるだけ農業の具体的な現実の姿がたが把握できるように努める。また、適当なトピックスを選んで、受講者の意見を発表する場も設定する。さらに課題テーマの小論を提出し、レポート・論文の書き方の基本を習得する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 食と農—いのちを食べる意味。</li> <li>2. 日本の食料自給率</li> <li>3. 日本の農業の特色と農業地域の概観。の構造と特色。</li> <li>4. 近郊農業地域と輸送園芸農業地域の構造と特色。</li> <li>5. 米作地域の農業経営の特色と問題点。</li> <li>6. 農産物の自由化と日本の農業の関係を文化、経済の視点からみる。</li> <li>7. イギリスの農業の特色と農業地域の概観。</li> <li>8. イギリスの LFA 地域と集約農業地域の特色を考察。</li> <li>9. イギリスの工業化する農業と農業地域の特色。</li> <li>10. イギリスの農産物の過剰生産と農業補助金政策</li> <li>11. EUのCAP政策とイギリス農業地域の対応</li> <li>12. 環境保全型農業のパネルディスカッション。</li> <li>13. 環境保全型農業パネルディスカッションのまとめ。</li> <li>14. 秋学期の講義のまとめと評価。パネルディスカッションのレポート提出。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：D. グリッグ著『農業地理学』1997年、農林統計協会</p>		<p>定期試験、およびレポート結果と講義への貢献度などから総合的に判定する。</p>	

01 年度以降 (春)	産業組織論 a	担当者	井上 智弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義概要：</b> 産業組織論は市場の構造や企業行動、政府の競争政策を分析対象とする分野であり、分析は主にミクロ経済学を用いて行われる。講義は、ミクロ経済学の基礎理論の習得を前提として、春学期は独占、寡占の市場構造に関する基礎理論の解説を行う。その際、基礎的な数学とゲーム理論を扱う。初回に受講者の数学の知識をみるためのテストを行う。第 2、3 回目の講義はテスト結果に基づいて行う予定であり、状況次第でそれ以降のスケジュールが変更される可能性がある。また、受講生の理解を測るために、講義中に問題演習や小テストを行う。講義は右の授業計画に沿って行う予定であるが、小テストの結果等を踏まえて、計画を一部変更する可能性はある。</p> <p><b>講義目的：</b> 基礎的な数学やゲーム理論を使って、独占の弊害や寡占市場における企業の戦略決定について説明することができるようになることを目指す。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 産業組織論の分析対象</li> <li>2. 基礎的な数学ツールについて ①</li> <li>3. 基礎的な数学ツールについて ②</li> <li>4. 完全競争と余剰分析 ①</li> <li>5. 完全競争と余剰分析 ②</li> <li>6. 独占 ①</li> <li>7. 独占 ②</li> <li>8. 独占 ③</li> <li>9. ゲーム理論の初歩 ①</li> <li>10. ゲーム理論の初歩 ②</li> <li>11. 寡占 ①</li> <li>12. 寡占 ②</li> <li>13. 寡占 ③</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストは指定しない。必要に応じて資料を配布する。		定期試験と講義内で行う小テストの成績で評価する（初回に行うテストの結果は評価には影響しない）。	

01 年度以降 (秋)	産業組織論 b	担当者	井上 智弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義概要：</b> 産業組織論 a をうけて、秋学期は企業の市場への参入の経済効果や企業と消費者の間の情報の非対称性、企業の戦略的行動等についての講義を行う。具体的なスケジュールは授業計画に従うが、受講者の理解に応じて、どの部分に力点を置くかなど、講義内容が一部変更される可能性もある。講義では、産業組織論 a で学ぶ独占・寡占についての基礎理論はもとより、基礎的な数学やゲーム理論も用いるため、不安のある学生は、十分な復習の上で履修することが望ましい。また、受講生の理解を測るために、講義中に問題演習や小テストを行う。講義は右の授業計画に沿って行う予定であるが、小テストの結果等を踏まえて、計画を一部変更する可能性はある。</p> <p><b>講義目的：</b> 自然独占に対する価格規制や情報の非対称性から生じる問題に対する規制など、それぞれの状況において政府が行う規制政策について説明できるようになることや、企業の戦略的行動についてゲーム理論を使って説明できるようになることを目指す。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 産業組織論 a の復習</li> <li>2. 自然独占</li> <li>3. 参入の経済効果 ①</li> <li>4. 参入の経済効果 ②</li> <li>5. カルテルと合併 ①</li> <li>6. カルテルと合併 ②</li> <li>7. カルテルと合併 ③</li> <li>8. 情報の非対称性と企業行動 ①</li> <li>9. 情報の非対称性と企業行動 ②</li> <li>10. 企業の戦略的行動 ①</li> <li>11. 企業の戦略的行動 ②</li> <li>12. 垂直統合と垂直的制限 ①</li> <li>13. 垂直統合と垂直的制限 ②</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストは指定しない。必要に応じて資料を配布する。		定期試験と講義内で行う小テストの成績で評価する。	

01年度以降（春）	産業構造論 a	担当者	山越 徳
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経済の発展、成長に伴い、様々な側面の経済構造が変化することはよく知られており、またその変化がより一層の発展、成長を促す。本講義ではそれらの構造変化の主たる産業構造の変動に注目し、近代的経済発展、産業社会の形成、生産技術構造、それらを支える経済構造、相互依存関係を考察し、高度経済成長や重化学工業化の意味を考える。そのため、その姿を捉える上で有力な分析道具の一つである産業連関表についても解説、それをういた日本経済の分析についても見ていくことにする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 経済成長、経済発展：経済成長とは、S.クズネツツの指標、経済構造の変化、工業化、高度化、多様化</li> <li>2. 近代的経済発展：一人当たり国民所得、GNP、労働生産性、産業規模、産業社会、産業革命</li> <li>3. 産業の概念：産業の経済学、生産構造、生産技術、産業分類、分業、産業統計、商品ベースと企業ベース</li> <li>4. 経済成長と産業構造Ⅰ：経済進歩の歴史過程、エネルギー集約化、基本三部門分類、ペティの法則、AMS分類</li> <li>5. 経済成長と産業構造Ⅱ：労働力構成と所得構成、成長の弾性、所得弾性、時系列データとクロスセクションデータ</li> <li>6. 経済成長と産業構造Ⅲ：発展段階説、製造業内部の構造と発展、消費財と投資財、最終財と中間財、輸入と国産化、輸入代替、生産規模</li> <li>7. 経済成長と産業構造Ⅳ：輸入指向型工業化、先進工業国とNIES、雁行形態、重化学工業化、ローマクラブ、石油危機</li> <li>8. 産業連関表とはⅠ：新SNA、投入係数、逆行列、中間投入、中間需要、最終需要、付加価値部門、直接および間接の生産波及、相互依存関係</li> <li>9. 産業連関表とはⅡ：産業特性、感応度係数と影響度係数、前方連関と後方連関、投入係数の固定性と変化、貿易構造、スカイライン分析</li> </ol>	
<ol style="list-style-type: none"> <li>10. 産業連関表による分析Ⅰ：構造変化の要因分析、投入係数の変化と技術変化、生産プロセスと産業部門、部門の再配列、ブロック化、三角形化、部門の独立性</li> <li>11. 産業連関表による分析Ⅱ：素原材料系統の転換、工業原材料と生産規模、ユニットストラクチャー、構造転換、規模別I-O表</li> <li>12. 産業連関表による分析Ⅲ：資本マトリックス、産職マトリックス</li> <li>13. 地域I-O表、国際I-O表、国際分業、公害I-O表</li> <li>14. 総括</li> </ol>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
宮沢健一『産業の経済学』第2版 東洋経済新報社 米倉誠一郎『経営革命の構造』岩波新書 鶴田俊正、伊藤元重『日本産業構造論』NTT出版		レポート（課題は講義の中で提示）と期末テストによる。	

01年度以降（秋）	産業構造論 b	担当者	山越 徳
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>産業構造論 a の講義内容を踏まえて、石油危機後の激しい構造変化、サービス経済化、ソフト化、情報化、国際化などの変動の事例の分析を通して、新しく出てきた諸問題、これまでの構造変化の指標にとってかわるべき新しい指標、産業構造の捉え方を一緒に考察していくことにする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 産業構造の新しい方向：サービス化、ソフト化、情報化、多様化、高度化、複合化、国際化、構造変化の指標</li> <li>2. 産業構造の新しい指標：財とサービス、サービスの生産物と生産性、有形財と無形財、間接労働と直接労働、労働投入と評価、構造変化の流れ</li> <li>3. 産業内部の構造変化・ケーススタディⅠ：3つのオートメーション、高度経済成長期の生産技術と80年代90年代の生産技術、技術波及</li> <li>4. 産業内部の構造変化・ケーススタディⅡ：鉄鋼、電機、時計、印刷、銀行、小売などの事例</li> <li>5. 産業内部の構造変化・ケーススタディⅢ：ロボットとコンピュータ、労働への影響分析</li> <li>6. 産業内部の構造変化・ケーススタディⅣ：ME革命とIT化、何が起きているか</li> <li>7. 構造変化と就業構造Ⅰ：労働力の需要と供給、人口構造、産業構造と職業構造、基幹労働力と縁辺労働力、性別労働力</li> <li>8. 構造変化と就業構造Ⅱ：日本の労働市場、新規学卒労働力、大企業と中小企業、雇用制度、雇用慣行、雇用調整、労働の属性</li> <li>9. 構造変化と就業構造Ⅲ：ソフト化、知識集約化と職業構造および女子労働</li> </ol>	
<ol style="list-style-type: none"> <li>10. 産業と地域Ⅰ：地域活性化と産業、国際化と地域、大企業と中小企業、地場産業</li> <li>11. 産業と地域Ⅱ：大都市産業、産業集積、地域の取り組みの事例</li> <li>12. 経済政策、産業政策、労働政策の結びつき</li> <li>13. 地域活力、インキュベータ、自治体の役割</li> <li>14. 総括</li> </ol>			
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
関満博『フルセット型産業構造を越えて』中公新書 清成忠男、橋本寿朗『日本型産業集積の未来像』日本経済新聞社 他		レポート（課題は講義の中で提示）と期末テストによる。	

05年度以降（春） 01～04年度（春）	社会保障論 a 社会政策 a	担当者	石井 加代子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この授業では、社会保障制度の基本的な構造を理解し、今後、制度がどうあるべきかについて自ら考察できる知識を習得することを目的とします。</p> <p>制度の丸暗記ではなく、体系的に社会保障制度を理解するために、歴史的背景や、社会保障が対象とする財・サービスの特性に関する説明をまじえて、授業を進めていきます。この授業を通して、テレビや新聞で報道される社会保障の話題を理解し、それらに対して自らの意見を持てるようになることを目標とします。</p> <p>社会保障論 a では、現物給付の社会保障を中心に、制度の解説を行っていきます。必要に応じて、諸外国の制度も紹介します。</p> <p>尚、トピックスについては、やむを得ない事情から取捨選択することがあります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション：社会保障とは</li> <li>2. 社会保障の形成</li> <li>3. 我が国の人口動態</li> <li>4. 我が国の社会保障の概況</li> <li>5. 医療保障（1）</li> <li>6. 医療保障（2）</li> <li>7. 医療保障（3）</li> <li>8. 医療保障（4）</li> <li>9. 高齢者福祉（1）</li> <li>10. 高齢者福祉（2）</li> <li>11. 高齢者福祉（3）</li> <li>12. 高齢者福祉（4）</li> <li>13. 予備日</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>参考文献：          椋野美智子・田中耕太郎『初めての社会保障 最新版』有斐閣アルマ</p>		出席および期末テストの総合評価	

05年度以降（秋） 01～04年度（秋）	社会保障論 b 社会政策 b	担当者	石井 加代子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この授業では、社会保障制度の基本的な構造を理解し、今後、制度がどうあるべきかについて自ら考察できる知識を習得することを目的とします。</p> <p>制度の丸暗記ではなく、体系的に社会保障制度を理解するために、歴史的背景や、社会保障が対象とする財・サービスの特性に関する説明をまじえて、授業を進めていきます。この授業を通して、テレビや新聞で報道される社会保障の話題を理解し、それらに対して自らの意見を持てるようになることを目標とします。</p> <p>社会保障論 b では、現金給付の社会保障、および、社会保障と就労の関係について解説を行っていきます。必要に応じて、諸外国の制度も紹介します。</p> <p>尚、トピックスについては、やむを得ない事情から取捨選択することがあります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. 所得について</li> <li>3. 所得格差について</li> <li>4. 公的年金（1）</li> <li>5. 公的年金（2）</li> <li>6. 公的年金（3）</li> <li>7. 公的年金（4）</li> <li>8. 公的扶助</li> <li>9. 育児支援策（1）</li> <li>10. 育児支援策（2）</li> <li>11. 育児支援策（3）</li> <li>12. 就業の多様化と社会保障</li> <li>13. 予備日</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>参考書：          椋野美智子・田中耕太郎『初めての社会保障 最新版』有斐閣アルマ</p>		出席および期末テストの総合評価	

01年度以降（春）	労働経済学 a	担当者	森永 卓郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>労働経済学は、労働分野の諸問題を経済学の枠組みで説明する学問です。</p> <p>この講義では、労働経済学の基礎理論を学びます。経済学の知識はあったほうが望ましいですが、知識がなくても理解できるように講義を進めます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 労働経済学とは何か</li> <li>3. 無差別曲線と就業選択</li> <li>4. 労働需要</li> <li>5. 失業</li> <li>6. 雇用調整</li> <li>7. 情報の役割</li> <li>8. 雇用をとりまく構造変化</li> <li>9. 賃金と労働時間</li> <li>10. 高齢者の就業促進</li> <li>11. 人事と労働インセンティブ</li> <li>12. 労働経済理論と現実の乖離</li> <li>13. 男女共同参画社会</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
清家篤「労働経済」東洋経済新報社 ネット上で講義資料を公開します		試験	

01年度以降（秋）	労働経済学 b	担当者	森永 卓郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>労働経済学は、労働分野の諸問題を経済学の枠組みで説明する学問です。</p> <p>この講義では、労働経済学の理論を現実の経済・社会に適用して、現代の雇用システムの問題点を探ります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. ジニ係数と所得格差の現状</li> <li>3. 非婚化の進展と少子化</li> <li>4. 男女雇用均等法と税制</li> <li>5. 公平な税制とは何か</li> <li>6. 日本的雇用慣行とは何か</li> <li>7. 知的創造性を育む雇用制度とは</li> <li>8. U F J 総合研究所の評価システム</li> <li>9. 自由と自己責任の評価がもたらすもの</li> <li>10. ビジョナリーカンパニーと労働</li> <li>11. イタリアはなぜ強いのか</li> <li>12. 人はなぜ働くのか</li> <li>13. 雇用安定と流動性の両立：フレキシキュリティの罨</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
ネット上で講義資料を公開します		試験	

01年度以降(春)	会計学 a	担当者	内倉 滋
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>企業会計もまた1つの言語であるとしばしば評されるが、言語を対象とした科学の分野には、その文法を純粹形式的に明らかにしていく「構文論」と、言葉の持つ意味の解明を試みる「意味論」と、社会的制度の中での言葉の用いられ方を研究する「語用論」とがある。本講義は、「簿記原理」という構文論の知識を前提に(それゆえ、少なくとも「簿記原理 a」を修得していることが望ましい)、それに内容的な意味付けを試みていくところの、会計学における「意味論」に相当するものである。その後展開される会計学における「語用論」(＝「経営分析論」等の応用・専門学科目)への1つの橋渡しとなるものだ、とも言える。</p> <p>なお授業計画は右に掲げるとおりであるが、おおむね「会計学 a」では、会社の決算書の作成にかかわる諸ルールの概要説明をしていきたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション(本講義の目的等)</li> <li>2 テキスト第1章 決算書から見える世界(①決算書とは、②会計学の2つの領域)</li> <li>3 テキスト第2章 会計と決算 その1:複式簿記の基本概念と貸借対照表,損益計算書</li> <li>4 テキスト第2章 会計と決算 その2:取引の仕訳</li> <li>5 テキスト第2章 会計と決算 その3:勘定口座への転記</li> <li>6 テキスト第2章 会計と決算 その4:決算修正</li> <li>7 テキスト第2章 会計と決算 その5:貸借対照表,損益計算書の中身について</li> <li>8 テキスト第2章 会計と決算 その5:間接法によるキャッシュフロー計算書</li> <li>9 テキスト第2章 会計と決算 その6:直接法によるキャッシュフロー計算書</li> <li>10 テキスト第2章 会計と決算 その7:グループ経営と決算書(連結財務諸表の作成)</li> <li>11 テキスト第2章 会計と決算 その8:資産,負債 定義とリース取引</li> <li>12 ①テキスト第2章第4節,②テキスト第3章 第1,2節</li> <li>13 テキスト第3章 第3節:資産評価の基礎</li> <li>14 春学期の総復習……同形式の問題により、春学期期末試験の予行演習</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
山浦久司・廣本敏郎 編著、『ガイドランス企業会計入門[第3版]』(白桃書房)		評価の中心は期末試験の結果である。その際には、相対評価を基本とし、絶対評価を加味したい。	

01年度以降(秋)	会計学 b	担当者	内倉 滋
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>「会計学 a」の知識を前提として「会計学 b」では、「会計監査論」,「管理会計論」,「経営分析論」,「税務会計論」といった領域の諸問題を、教科書に沿った形で講義していきたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 テキスト第3章 決算書のルール その1:剰余金の額,剰余金の配当</li> <li>2 テキスト第3章 決算書のルール その2:会計基準の登場,会計基準の国際的調和</li> <li>3 テキスト第4章:製造会社の決算書 第1節</li> <li>4 テキスト第4章:製造会社の決算書 第2節 その1:総合原価計算 その1</li> <li>5 テキスト第4章:製造会社の決算書 第2節 その2:総合原価計算 その2</li> <li>6 テキスト第4章:製造会社の決算書 第2節 その3:個別原価計算</li> <li>7 テキスト第4章:製造会社の決算書 第4節 標準原価計算</li> <li>8 テキスト第5章 決算書の信頼性を確かめる</li> <li>9 テキスト第6章 決算書の内部利用 第2節 CVP分析</li> <li>10 テキスト第6章 決算書の内部利用 第4節 機会原価概念,差額原価収益分析</li> <li>11 テキスト第7章 決算書を読んでみよう[≒経営分析論]</li> <li>12 テキスト第8章 決算書と税金[≒税務会計論]</li> <li>13 テキスト第8章の特論:税効果会計</li> <li>14 秋学期の総復習……同形式の問題により、秋学期期末試験の予行演習</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
「会計学 a」と同じ。		「会計学 a」と同様。	

01年度以降（春）	経営学 a （経営学科生用）	担当者	有吉 秀樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義は、会社の経営がどのように行なわれているものなのかについて、大まかに理解してもらうことを目的としている。ある会社設立のケースを想定し、グループに分かれて、ビジネスプランを立ててもらい、企業経営の面白さと難しさを体感することを通じて、今後学ぶ様々な専門科目への理解・興味の橋渡しとなれば幸いである。</p>		<p>1. オリエンテーション 2～13. グループワークによるビジネスプラン作成 14. まとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
ケーススタディと参考資料を配布する		グループワークへの参加度と期末レポートにより評価する	

01年度以降（秋）	経営学 b （経営学科生用）	担当者	有吉 秀樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義は、会社の経営がどのように行なわれているものなのかについて、大まかに理解してもらうことを目的としている。ある会社設立のケースを想定し、グループに分かれて、ビジネスプランを立ててもらい、企業経営の面白さと難しさを体感することを通じて、今後学ぶ様々な専門科目への理解・興味の橋渡しとなれば幸いである。</p>		<p>1. オリエンテーション 2～13. グループワークによるビジネスプラン作成 14. まとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
ケーススタディと参考資料を配布する。		グループワークへの参加度と期末レポートにより評価する。	

01年度以降（春）	経営学 a （経営学科生用）	担当者	岡部 康弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経営学は、かなり幅広い学問領域を含んでいる。主たるものでも、戦略論、組織論、組織行動論、人的資源論、国際経営論等がある。本講座はこれらの中で組織行動論に焦点を当てる。組織行動論とは、企業などの組織環境の中で人はなぜその行動を取るのかを理解することに主眼を置く。講義方法前半はPPTを使いなるべくわかり易く企業の実例をあげて理論の説明をする。後半はグループでのケース分析と討論と発表を行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. モチベーション</li> <li>3. グループの性質</li> <li>4. リーダーシップ</li> <li>5. コミュニケーション</li> <li>6. 紛争と対立</li> <li>7. 意思決定</li> <li>8. パワーとポリティクス</li> <li>9. 人的資源</li> <li>10. 企業文化</li> <li>11. 組織構造</li> <li>12. DVD（フラット化する世界）</li> <li>13. 復習</li> <li>14. Q&amp;A</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
講義資料は毎回配布する。		評価は学期末試験による。出席は本学の慣例による。4回以上欠席は不可、2回遅刻は1回欠席とみなす。	

01年度以降（秋）	経営学 b （経営学科生用）	担当者	岡部 康弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経営学は、かなり幅広い学問領域を含んでいる。主たるものでも、戦略論、組織論、組織行動論、人的資源論、国際経営論等がある。本講座はこれらの中で組織行動論に焦点を当てる。組織行動論とは、企業などの組織環境の中で人はなぜその行動を取るのかを理解することに主眼を置く。講義方法前半はPPTを使いなるべくわかり易く企業の実例をあげて理論の説明をする。後半はグループでのケース分析と討論と発表を行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. モチベーション</li> <li>3. グループの性質</li> <li>4. リーダーシップ</li> <li>5. コミュニケーション</li> <li>6. 紛争と対立</li> <li>7. 意思決定</li> <li>8. パワーとポリティクス</li> <li>9. 人的資源</li> <li>10. 企業文化</li> <li>11. 組織構造</li> <li>12. DVD（フラット化する世界）</li> <li>13. 復習</li> <li>14. Q&amp;A</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
講義資料は毎回配布する。		評価は学期末試験による。出席は本学の慣例による。4回以上欠席は不可、2回遅刻は1回欠席とみなす。	

01年度以降（春）	経営学 a （経営学科生用）	担当者	日下 泰夫
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>入門講座として、経営学の基本的な概念と重要なトピックスを説明します。《変化の時代》の経営学が極めて興味深い学問領域であることを理解できるような分かりやすい講義をめざしています。</p> <p>講義の前半（1～7）は経営学の基本的な概念を説明します。後半（8～14）は、近年、重要性を増している経営課題として、環境経営、イノベーション、技術経営（製品/技術/マーケティングのイノベーション）、経営のグローバル化とその課題を説明します。</p> <p>講義では、最新のトピックスを出来るだけ紹介します。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 企業と外部環境</li> <li>2 経営資源とマネジメント</li> <li>3 経営戦略 1</li> <li>4 経営戦略 2</li> <li>5 経営と情報</li> <li>6 コーポレート・ガバナンス</li> <li>7 企業組織と人材マネジメント</li> <li>8 環境経営 1</li> <li>9 環境経営 2</li> <li>10 イノベーション</li> <li>11 技術経営 1: プロダクト・イノベーション</li> <li>12 技術経営 2: テクノイノベーション</li> <li>13 技術経営 3: マーケティング・イノベーション</li> <li>14 経営のグローバル化とその課題</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
<p>テキスト：高村寿一『ベーシック経営入門』日経文庫。各回、講義資料を配布します。参考文献は各章ごとに講義時に紹介します。</p>		<p>期末試験を中心に出席状況を加味して評価します。</p>	

01年度以降（秋）	経営学 b （経営学科生用）	担当者	日下 泰夫
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>入門講座として、経営学の基本的な概念と重要なトピックスを説明します。《変化の時代》の経営学が極めて興味深い学問領域であることを理解できるような分かりやすい講義をめざしています。</p> <p>講義の前半（1～7）は経営学の基本的な概念を説明します。後半（8～14）は、環境経営、イノベーション、技術経営（プロダクト/テクノ/マーケティング・イノベーション）、経営のグローバル化とその課題を説明します。</p> <p>講義では、最新のトピックスを出来るだけ紹介します。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 企業と外部環境</li> <li>2 経営資源とマネジメント</li> <li>3 経営戦略 1</li> <li>4 経営戦略 2</li> <li>5 経営と情報</li> <li>6 コーポレート・ガバナンス</li> <li>7 企業組織と人材マネジメント</li> <li>8 環境経営 1</li> <li>9 環境経営 2</li> <li>10 イノベーション</li> <li>11 技術経営 1: プロダクト・イノベーション</li> <li>12 技術経営 2: テクノイノベーション</li> <li>13 技術経営 3: マーケティング・イノベーション</li> <li>14 グローバリゼーションと経営の課題</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
<p>テキスト：高村寿一『ベーシック経営入門』日経文庫。各回、講義資料を配布します。参考文献は各章ごとに講義時に紹介します。</p>		<p>期末試験を中心に出席状況を加味して評価します。</p>	

01年度以降（春）	経営学 a （経営学科生用）	担当者	黒川 文子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経営学が学問として認知されるようになったのは、古いことではない。20世紀に入ってから確立した領域が経営学であろう。そのため、研究対象となる分野は、細分化の方向に向かうと同時に、近年では総合化の方向に進んでいる。</p> <p>本講義では、企業の競争力の重要な源泉となっている新製品開発力について理解を深めていく。製造コストではアジア諸国に競争優位があるが、日本は高い技術力を駆使した新製品の開発に競争力がある。新製品開発のすべてのプロセスを、自動車やファッション衣料等のケースを用いて考察する。</p> <p>本講義に関心を持つならば、いかに経営学が生きた学問であるかを実感として把握できるようになるであろう。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 講義の概要</li> <li>2 新製品開発の意義</li> <li>3 新製品開発のプロセス</li> <li>4 自動車開発のケース</li> <li>5 医薬品開発のケース</li> <li>6 ファッション衣料開発のケース</li> <li>7 機会の探索とコンセプト形成</li> <li>8 ITと新製品開発</li> <li>9 社会・環境問題と新製品開発</li> <li>10 開発の組織</li> <li>11 評価の原理</li> <li>12 発売後の管理</li> <li>13 新製品の発売中止と現在製品の廃止</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
黒川文子『製品開発の組織能力』（中央経済社、2005年）		期末試験と出席によって、総合的に評価する。	

01年度以降（秋）	経営学 b （経営学科生用）	担当者	黒川 文子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経営学が学問として認知されるようになったのは、古いことではない。20世紀に入ってから確立した領域が経営学であろう。そのため、研究対象となる分野は、細分化の方向に向かうと同時に、近年では総合化の方向に進んでいる。</p> <p>本講義では、企業の競争力の重要な源泉となっている新製品開発力について理解を深めていく。製造コストではアジア諸国に競争優位があるが、日本は高い技術力を駆使した新製品の開発に競争力がある。新製品開発のすべてのプロセスを、自動車やファッション衣料等のケースを用いて考察する。</p> <p>本講義に関心を持つならば、いかに経営学が生きた学問であるかを実感として把握できるようになるであろう。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 講義の概要</li> <li>2 新製品開発の意義</li> <li>3 新製品開発のプロセス</li> <li>4 自動車開発のケース</li> <li>5 医薬品開発のケース</li> <li>6 ファッション衣料開発のケース</li> <li>7 機会の探索とコンセプト形成</li> <li>8 ITと新製品開発</li> <li>9 社会・環境問題と新製品開発</li> <li>10 開発の組織</li> <li>11 評価の原理</li> <li>12 発売後の管理</li> <li>13 新製品の発売中止と現在製品の廃止</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
黒川文子『製品開発の組織能力』（中央経済社、2005年）		期末試験と出席によって、総合的に評価する。	

01 年度以降（春）	経営学 a（経営学科生用）	担当者	小林 哲也
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>現代企業の国際化と情報化の動きを中心に、経営学の基礎的な事項の学習を進めることを目的とする。</p> <p>現代企業を取り巻く条件は、急速に変化している。新興諸国の工業化にともなって、世界の産業地図は大きく描き直されようとしているし、IT 革命の進展とともに、企業の組織や戦略にも大きな変化が見られる。</p> <p>本講義では、主として日本経済および日本企業の経験に学びながら、経営学の基礎知識および現代企業の直面する問題を議論していく。日常的な経済に関する知識を養うために、新聞を毎日読む習慣をつけてほしい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 経済学と経営学① ノートの取り方情報の集め方</li> <li>2. 経済学と経営学② 国家と市場 規制と自由</li> <li>2. 「失われた 10 年」と日本企業</li> <li>3. 経営学の再生</li> <li>4. 日本的経営とシステムとしての日本企業</li> <li>5. 日本的生産システムの進化</li> <li>6. 情報技術革命のインパクト</li> <li>7. 暴走する資本主義</li> <li>8. 世界の多国籍企業</li> <li>9. 技術革新と新しい国際分業</li> <li>10. 日本企業の海外進出</li> <li>11. グローバリゼーション</li> <li>12. グローバリゼーション賛成・反対</li> <li>13. 日本経済の行方</li> <li>14. 日本企業の行方</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>参考文献として 三橋規宏他『ゼミナール日本経済入門』日本経済新聞社</p>		出席および定期試験による	

01 年度以降（秋）	経営学 b（経営学科生用）	担当者	小林 哲也
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>現代企業の国際化と情報化の動きを中心に、経営学の基礎的な事項の学習を進めることを目的とする。</p> <p>現代企業を取り巻く条件は、急速に変化している。アジア諸国の工業化にともなって、世界の産業地図は大きく描き直されようとしているし、IT 革命の進展とともに、企業の組織や戦略にも大きな変化が見られる。</p> <p>本講義では、主として日本経済および日本企業の経験に学びながら、経営学の基礎知識および現代企業の直面する問題を議論していく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 経済学と経営学① ノートの取り方情報の集め方</li> <li>2. 経済学と経営学② 国家と市場 規制と自由</li> <li>2. 「失われた 10 年」と日本企業</li> <li>3. 経営学の再生</li> <li>4. 日本的経営とシステムとしての日本企業</li> <li>5. 日本的生産システムの進化</li> <li>6. 情報技術革命のインパクト</li> <li>7. 暴走する資本主義</li> <li>8. 世界の多国籍企業</li> <li>9. 技術革新と新しい国際分業</li> <li>10. 日本企業の海外進出</li> <li>11. グローバリゼーション</li> <li>12. グローバリゼーション賛成・反対</li> <li>13. 日本経済の行方</li> <li>14. 日本企業の行方</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
		出席および定期試験による	

01年度以降（春）	経営学 a （経営学科生用）	担当者	平井 岳哉
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経営とは、複数の人々が集まり、特定の目的を達成するために協働するもので、その場合、いい知恵を出して効率的と思われる最善の方法を講じることです。</p> <p>そこには、①組織の形成、②人を動かす仕組み、③成功の確率を高めるための戦略立案などが必要です。</p> <p>この講義では、経営学全般の事柄について、できるだけわかりやすい事例を使って、基礎的な知識の習得を図ります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション</li> <li>2 経営と組織</li> <li>3 分業と協業</li> <li>4 組織形態</li> <li>5 モチベーション</li> <li>6 リーダーシップ</li> <li>7 組織における競争と協調</li> <li>8 マーケティング①</li> <li>9 マーケティング②</li> <li>10 戦略の考え方</li> <li>11 戦略理論①</li> <li>12 戦略理論②</li> <li>13 戦略理論③</li> <li>14 経済性分析</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
特に指定しない。		期末試験の結果と講義での貢献	

01年度以降（秋）	経営学 b （経営学科生用）	担当者	平井 岳哉
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
春学期と同じ。		春学期と同じ。	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
春学期と同じ。		春学期と同じ。	

01年度以降（春）	経済学 a （経営学科生用）	担当者	黒木 亮
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義の目的</p> <p>本講義の目的は、経済学の基本的な考え方を紹介することにある。具体的な経済問題や日本経済の事例にも触れながら、複雑な経済現象を理解し、整理するための見方、すなわち経済学の基本を習得してもらいたい。</p> <p>講義の概要</p> <p>テキストに沿って下記のテーマに関する講義を行う予定である。</p> <p>I. ミクロ経済学の基本 II. ゲーム理論の考え方 III. マクロ経済学の基本 IV. 日本の経済をマクロの視点でとらえる</p> <p>（なお以上のテーマとその順番は、下記のテキスト上巻の第IV・V・II・IIIに対応している）。</p>		<p>I.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス——経済学とはどのような学問か</li> <li>2. 民営化・規制緩和の経済学的根拠</li> <li>3. 市場メカニズムを解剖する</li> <li>4. 市場はこうして失敗する</li> </ol> <p>II.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>5. ゲーム理論のエッセンス</li> <li>6. 囚人のジレンマ</li> <li>7. コミットメントとは何か</li> </ol> <p>III.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>8. GDP を中心にマクロ経済を考える</li> <li>9. 需要と供給で考える</li> <li>10. マクロ経済のコントロール——財政金融政策の役割</li> </ol> <p>IV.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>11. 日本経済の構造変化——石油ショックと変動相場制</li> <li>12. 日本経済のグローバル化——プラザ合意前後</li> <li>13. バブルの形成と崩壊後の日本経済</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
伊藤元重『はじめての経済学（上）』日本経済新聞社。		レポート・期末試験のいずれか、ないし両方。	

01年度以降（秋）	経済学 b （経営学科生用）	担当者	黒木 亮
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義の目的</p> <p>本講義の目的は、春季に習得した経済学の基本を、現実理解に即してマスターしてもらうことにある。財政や金融、企業や産業、ビジネスや労働、国際経済や為替の動き等々、具体的な事例や経済問題を通して、経済学の考え方にさらに磨きをかけてもらいたい。</p> <p>講義の概要</p> <p>テキストに沿って下記のテーマに関する講義を行う予定である。</p> <p>I. 公共部門の経済学 II. 金融システムを理解する III. 国際経済を見る目を養う</p> <p>（なお以上のテーマとその順番は、下記のテキスト下巻の第VI・VII・IX章に対応している）。</p>		<p>I.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 公共部門の三つの機能</li> <li>2. 財政支出と累進課税</li> <li>3. 自然独占と公共財</li> <li>4. 景気対策と日本の財政状況</li> <li>5. プライマリーバランス——財政の未来を考える</li> </ol> <p>II.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>6. 貨幣のもつ様々な機能</li> <li>7. マネーストックと金融政策</li> <li>8. 信用乗数と資産市場の全体像</li> <li>9. バブルの形成と崩壊が生じるメカニズム</li> </ol> <p>III.</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>10. 国際収支表の基本</li> <li>11. 為替相場の仕組みとその動向</li> <li>12. 企業の戦略および収益と為替の関係</li> <li>13. 比較優位——国際的な自由貿易の恩恵</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
伊藤元重『はじめての経済学（下）』日本経済新聞社。		レポート・期末試験のいずれか、ないし両方。	

01年度以降（春）	経済学 a（経営学科生用）	担当者	米山 昌幸
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>私たちが経済学を勉強するのは、経済学の理論的枠組みを用いて現実の経済社会についての理解を深め、さらには問題解決の手掛かりを見出すためです。</p> <p>この講義の目的は、初めて経済学を学ぶ学生に、経済学が現実経済を理解する上で、どのように有用であるかを知ってもらい経済学に興味をもってもらうこと、そして分析用具としての経済学の基礎的な考え方を理解してもらうこと、この2つです。経済学の基礎学力をつけることが、遠回りのようでじつは経済学的思考のセンスを磨くことにつながるのです。そのためには公務員試験問題のトレーニングも有益でしょう。</p> <p>この講義は、経済学を学ぼうとする初心者をおもな対象としています。経済学を学ぶ初心者としては経済学部の学生も他学部の学生も同じです。新聞記事や経済データを提示して、経済学的な考え方になれてもらうようにしたいと考えています。</p> <p>経済学の分野は、ミクロ経済学とマクロ経済学に大別されます。<u>春学期は、家計・企業・政府といった個々の経済主体の決定について考察しその相互作用を研究する、ミクロ経済学の分野を中心に講義します。</u>ビジネスの事例もできるだけ取り上げたいと思います。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 経済学の十大原理</li> <li>2. 経済学者らしく考える</li> <li>3. 経済学者らしく考える</li> <li>4. 相互依存と交易（貿易）からの利益</li> <li>5. 相互依存と交易（貿易）からの利益</li> <li>6. 相互依存と交易（貿易）からの利益</li> <li>7. 市場における需要と供給の作用</li> <li>8. 市場における需要と供給の作用</li> <li>9. 消費者、生産者、市場の効率性</li> <li>10. 消費者、生産者、市場の効率性</li> <li>11. 需要、供給、および政府の政策</li> <li>12. 需要、供給、および政府の政策</li> <li>13. 外部性</li> <li>14. 外部性</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストは第1回目の授業で指定します(次のものを予定)。 N.グレゴリー・マンキュー著、足立英之他訳『マンキュー入門経済学』東洋経済新報社、2008年。 参考文献は第1回目の授業で提示します。</p>		<p>基本的には定期試験の得点(100点満点)を評価基準(第1回目の授業で説明する)に照らして評価する。ただし、出席点や練習問題の得点もサービス点として加算する予定。</p>	

01年度以降（秋）	経済学 b（経営学科生用）	担当者	米山 昌幸
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>私たちが経済学を勉強するのは、経済学の理論的枠組みを用いて現実の経済社会についての理解を深め、さらには問題解決の手掛かりを見出すためです。</p> <p>この講義の目的は、初めて経済学を学ぶ学生に、経済学が現実経済を理解する上で、どのように有用であるかを知ってもらい経済学に興味をもってもらうこと、そして分析用具としての経済学の基礎的な考え方を理解してもらうこと、この2つです。経済学の基礎学力をつけることが、遠回りのようでじつは経済学的思考のセンスを磨くことにつながるのです。そのためには公務員試験問題のトレーニングも有益でしょう。</p> <p>この講義は、経済学を学ぼうとする初心者をおもな対象としています。経済学を学ぶ初心者としては経済学部の学生も他学部の学生も同じです。新聞記事や経済データを提示して、経済学的な考え方になれてもらうようにしたいと考えています。</p> <p>秋学期は、<u>GDP、経済成長率、物価指数、失業率といった経済全体を捉える変数の決定を考察し、労働市場・生産物市場・資本市場の相互作用について研究する、マクロ経済学の分野を中心に講義します。</u>景気指標、金融・財政政策、財政赤字、経済成長などのニュース、トピックもできるだけ取り上げたいと思います。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 経済学の十大原理</li> <li>2. 国民所得の測定</li> <li>3. 国民所得の測定</li> <li>4. 生計費の測定</li> <li>5. 生計費の測定</li> <li>6. 生産と成長</li> <li>7. 生産と成長</li> <li>8. 生産と成長</li> <li>9. 貯蓄、投資と金融システム</li> <li>10. 貯蓄、投資と金融システム</li> <li>11. 貯蓄、投資と金融システム</li> <li>12. 総需要と総供給</li> <li>13. 総需要と総供給</li> <li>14. 総需要と総供給</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストは第1回目の授業で指定します(次のものを予定)。 N.グレゴリー・マンキュー著、足立英之他訳『マンキュー入門経済学』東洋経済新報社、2008年。 参考文献は第1回目の授業で提示します。</p>		<p>基本的には定期試験の得点(100点満点)を評価基準(第1回目の授業で説明する)に照らして評価する。ただし、出席点や練習問題の得点もサービス点として加算する予定。</p>	

01年度以降（春）	経営学原理 a	担当者	岡部 康弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>春学期は主にマクロ的視点から、企業を取り巻く環境（業界分析等）、社会・経済制度、企業の枠組み（市場取引か垂直統合か、サプライチェーンなど）、企業の構成（多角化など）などに焦点を当てる。大きなテーマは、企業の活動は真空（Vacuum）の中で行われるのではなく、（内外部の）環境の制約を受けるということである。</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>1) ガイダンス</li> <li>2) 競争環境と内部資源（前期の総論）</li> <li>3) 様々な環境分析ツールの紹介</li> <li>4) 企業の競争優位を決める資源とは何か。</li> <li>5) なぜ業界により収益率に大きな差が出るのか</li> <li>6) 事業の範囲（規模の経済と範囲の経済）</li> <li>7) 市場と組織、市場のコスト、市場の失敗</li> <li>8) 多角化の要因、多角化の形態</li> <li>9) 多角化企業のユニットの自律性と統合</li> <li>10) 多角化企業での本社の役割とは</li> <li>11) ブルーオーシャン戦略とは何か</li> <li>12) DVD（ヘッジファンド、TOB、プロキシファイト）</li> <li>13) 復習</li> <li>14) Q&amp;A</li> </ul>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
毎回講義資料を配布する。		評価は学期末試験による。出席は本学の慣例による。4回以上欠席は不可、2回遅刻は1回欠席とみなす。	

01年度以降（秋）	経営学原理 b	担当者	岡部 康弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>秋学期は、主にミクロ的視点から、企業の活動に焦点を当てる。寡占市場、ニッチ市場での活動、参入障壁、バリューチェーン上の売手と買い手の交渉力、DSIR 市場、デifacto・スタンダードの獲得などである。</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>1) ガイダンス</li> <li>2) 事業戦略とは何か（ミッション、ビジョン他）</li> <li>3) 競争優位（ポジションと組織能力）</li> <li>4) 組織設計（ARC分析）</li> <li>5) 組織のタイプ（「活用型」組織と「探索型」組織）</li> <li>6) PIEの決定要因、PIEの分割、代替品と補完品</li> <li>7) 競争のスペクトラムとニッチ市場、水平的差別化と垂直的差別化</li> <li>8) 寡占市場での競争、戦略的相互作用</li> <li>9) 既存企業の優位性、参入障壁</li> <li>10) 買い手と売り手の交渉、ホールドアップ問題</li> <li>11) 産業のライフサイクル、各期の戦略</li> <li>12) DSIR市場、デifacto・スタンダード</li> <li>13) 復習</li> <li>14) Q&amp;A</li> </ul>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
毎回講義資料を配布する。		評価は学期末試験による。出席は本学の慣例による。4回以上欠席は不可、2回遅刻は1回欠席とみなす。	

01年度以降（春）	経営学原理 a	担当者	黒川 文子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経営学が他の学問領域と異なる最も基本的かつ重要な問題を中心に講義する。その上に立って、今日の問題、すなわち規制緩和、企業の国際化と空洞化、E ビジネス等をアプローチする。経営学ほど変化の激しい領域はないので、原理を把握していれば、どのような状況にもうまく対処できよう。</p> <p>講義では、経営学の理論の紹介だけでなく、実際の企業のケースを取り上げて、理解しやすいように授業を進めていく。経営学原理 a では、企業の目的、株式会社制度などの企業経営の基本的なコンセプトを理解した上で、経営戦略の策定について学習する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 講義の概要</li> <li>2 企業経営とは何か</li> <li>3 変貌する現代のビジネス</li> <li>4 企業とビジネスの関係</li> <li>5 ニュービジネスの登場と経営革新</li> <li>6 現代の会社制度と企業経営</li> <li>7 資本主義経済と株式会社</li> <li>8 経済のグローバル化と株式会社の機構改革</li> <li>9 企業の目的と業績評価</li> <li>10 業績評価尺度</li> <li>11 多角化企業と競争環境</li> <li>12 持続的競争優位と戦略</li> <li>13 職務とは何か</li> <li>14 講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
未定		期末試験と出席によって、総合的に評価する。	

01年度以降（秋）	経営学原理 b	担当者	黒川 文子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経営学原理 b では、まず経営戦略と密接な関係にある組織について講義する。最近、「アウトソーシング」や「バーチャル・コーポレーション」などで注目を浴びている「IT 革新とネットワーク組織」についても見ていく。</p> <p>次に、生産、マーケティング、人的資源等の現代的な経営オペレーション・システムについて理解を深める。最後に、経営倫理やイノベーションとベンチャーといった、現代の経営にとって重要な問題についても焦点をあてて講義していく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 講義の概要</li> <li>2 機能別組織とプロセス組織</li> <li>3 事業別組織とカンパニー制</li> <li>4 IT 革新とネットワーク組織</li> <li>5 伝統的な組織間関係</li> <li>6 日本的な企業グループと系列</li> <li>7 伝統的なジョブ・ショップと流れ作業生産</li> <li>8 モジュール組立方式とセル生産</li> <li>9 トヨタのカンバン方式とリーン生産</li> <li>10 マーケティング戦略</li> <li>11 人的資源戦略</li> <li>12 経営倫理</li> <li>13 イノベーションとベンチャー</li> <li>14 講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
未定		期末試験と出席によって、総合的に評価する。	

01年度以降（春）	経営戦略論 a	担当者	和田 剛明
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>企業が高い業績を上げるためには、自社の保有技術、ライバル企業の製品、消費者の嗜好、製品の特性などのビジネスにかかわる諸要素を考慮した上で、どのような製品・サービスを提供するか計画＝戦略が必要になります。</p> <p>戦略の概要はトップが策定するものですが、その実践には企業の従業員全員が関わります。戦略に対する知識と理解能力を身につけることは、企業に就職される学生全員に役立つものとなるでしょう。</p> <p>本講義では、戦略の定義について説明した上で、ひとつの産業・市場においてどのように競合他社に対して優位を築き、利潤を上げるか。事業戦略とポジショニング・アプローチの議論を中心として解説します。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の概要</li> <li>2. 競争優位 (1)</li> <li>3. 競争優位 (2)</li> <li>4. 競争優位 (3)</li> <li>5. 競争優位と企業のポジション</li> <li>6. コスト・リーダーシップ戦略 (1)</li> <li>7. コスト・リーダーシップ戦略 (2)</li> <li>8. 差別化戦略 (1)</li> <li>9. 差別化戦略 (2)</li> <li>10. 製品ライフサイクルと戦略の転換</li> <li>11. 業界標準</li> <li>12. 先発優位への挑戦・逆転戦略 (1)</li> <li>13. 先発優位への挑戦・逆転戦略 (2)</li> <li>14. 講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>&lt;主な参考文献&gt;          ジェイ・B・バーニー著『企業戦略論 競争優位の構築と持続』上・中・下巻ダイヤモンド社          M・E・ポーター著『競争優位の戦略』ダイヤモンド社</p>		<p>学期末試験（80%）と学期中に出題する中間課題レポート（20%）によって評価を行う。</p>	

01年度以降（秋）	経営戦略論 b	担当者	和田 剛明
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>事業戦略とポジショニング・アプローチについて解説した「経営戦略論 a」に続き、本講義の前半では複数の産業・市場へ事業を展開する際に、どのような事業を選択すると高い収益を上げられるのかを考える、全社戦略についてとりあげます。この全社戦略を考える際の視点として、企業が保有する資源には違いがあり、それをどのように事業展開へと活かすのかについて、資源依存の企業観を用いて解説します。</p> <p>ついで講義の後半では、他企業と競争するのだけではなく、協調することがどのような利益をもたらすのか。企業間の協調の戦略について解説します。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の概要</li> <li>2. 企業の資源蓄積とその展開</li> <li>3. 事業領域の拡大：多角化戦略 (1)</li> <li>4. 事業領域の拡大：多角化戦略 (2)</li> <li>5. 事業領域の拡大：垂直統合</li> <li>6. 事業領域の拡大：国際展開 (1)</li> <li>7. 事業領域の拡大：国際展開 (2)</li> <li>8. 競争と協調／企業間連携</li> <li>9. 事業システム戦略／SCM (1)</li> <li>10. 事業システム戦略／SCM (2)</li> <li>11. 業界標準獲得における協調</li> <li>12. 製品／ビジネス・アーキテクチャ</li> <li>13. 講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>&lt;主な参考文献&gt;          ジェイ・B・バーニー著『企業戦略論 競争優位の構築と持続』上・中・下巻ダイヤモンド社</p>		<p>学期末試験（80%）と学期中に出題する中間課題レポート（20%）によって評価を行う。</p>	

01年度以降（春）	経営管理論 a	担当者	黒川 文子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経営管理論ほど、時代の変化とともに進展した領域はない。古くは、単なる工場内の管理から、今日では、経営管理論は地球環境問題を含めて議論されている。アメリカでは経営学といえば経営管理論と同一視されているほど、経営学の中心領域であるので、基本的な事項を十分時間をかけて講義する。</p> <p>経営管理論 a では、まず今日の企業制度を理解してから、経営管理論の歴史的展開を考察していく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 講義の概要</li> <li>2 今日の企業制度</li> <li>3 現代企業のコーポレート・ガバナンス</li> <li>4 現代社会の変化と企業経営</li> <li>5 企業組織のマネジメント機能について</li> <li>6 現代における経営者（CEO）の機能と責任</li> <li>7 テイラーの科学的管理法</li> <li>8 ファヨールの管理論</li> <li>9 管理過程学派</li> <li>10 人間関係論とホーソン実験</li> <li>11 従来管理機能論の枠組み</li> <li>12 クーンツ理論</li> <li>13 管理機能論の新展開</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
黒川文子『21世紀の自動車産業戦略』（税務経理協会、2008年）		期末試験と出席によって、総合的に評価する。	

01年度以降（秋）	経営管理論 b	担当者	黒川 文子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経営管理論 b では、働く人の人間的側面に焦点を当てて、いかに動機づけをすべきかについて理解を深めていく。次に、目標達成に向けて、組織のメンバーに影響を及ぼすリーダーの多様なリーダーシップについても見ていく。</p> <p>最後に、変化の激しい企業環境の中で、どのような経営組織が環境に適合するかを考えた上で、経営者の役割を再確認していく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 講義の概要</li> <li>2 動機づけの諸理論</li> <li>3 マグレガーの X 理論と Y 理論</li> <li>4 マズローの欲求段階論</li> <li>5 動機づけ—衛生理論</li> <li>6 期待理論</li> <li>7 リーダーシップ論の多様な発展</li> <li>8 オハイオ州立大学・リーダーシップ・プログラム</li> <li>9 マネジリアル・グリッド論</li> <li>10 企業文化と経営</li> <li>11 経営組織の編成原理</li> <li>12 経営組織の活性化</li> <li>13 経営組織の革新</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
黒川文子『21世紀の自動車産業戦略』（税務経理協会、2008年）		期末試験と出席によって、総合的に評価する。	

01年度以降（春）	経営組織論 a	担当者	高松 和幸
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義では、伝統的組織論から近代組織論への発展を前提として、とくに近代組織論の内容について理解を深めることを目的とする。組織論においては、組織を取り巻く環境の土台のうえに、個人と組織との関わりがもっとも重要な課題であり、こうした諸問題をとりあげて論述する。</p> <p>春学期では、伝統的組織論を出発点として、人間関係論におけるモチベーション理論やコンティンジェンシー理論をとりあげ、そのうえで近代組織論として、協働システムとしての組織、意思決定システムとしての組織、生存可能システムとしての組織に重点をおいて、その周辺の諸問題をとりあげて講義する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 伝統的組織論①</li> <li>2. 伝統的組織論②</li> <li>3. 伝統的組織論③</li> <li>4. 近代組織論①</li> <li>5. 近代組織論②</li> <li>6. 経営組織モデルの発展段階①</li> <li>7. 経営組織モデルの発展段階②</li> <li>8. 組織とモチベーション理論①</li> <li>9. 組織とモチベーション理論②</li> <li>10. 組織とコンティンジェンシー理論①</li> <li>11. 協働システム①</li> <li>12. 協働システム②</li> <li>13. 意思決定システム①</li> <li>14. 意思決定システム②：まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
高松和幸著『経営組織論の展開』創成社，2009.		受講条件：bも履修すること 評価方法：出席，試験，レポートによる総合評価	

01年度以降（秋）	経営組織論 b	担当者	高松 和幸
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義では、伝統的組織論から近代組織論への発展を前提として、とくに近代組織論の内容について理解を深めることを目的とする。組織論においては、組織を取り巻く環境の土台のうえに、個人と組織との関わりがもっとも重要な課題であり、こうした諸問題をとりあげて論述する。</p> <p>秋学期では、春学期で取り上げた内容に加味して、モチベーション理論や、近代組織論の協働システム、意思決定の問題、生存可能システムに重点をおいて、その周辺の諸問題をとりあげて講義する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 組織均衡の理論①</li> <li>2. 組織均衡の理論②</li> <li>3. ゴーイング・コンサーン①</li> <li>4. ゴーイング・コンサーン②</li> <li>5. ワーク・モチベーション理論①</li> <li>6. ワーク・モチベーション理論②</li> <li>7. 組織とコンフリクト①</li> <li>8. 組織とコンフリクト②</li> <li>9. 組織とサイバネティクス①</li> <li>10. 組織とサイバネティクス②</li> <li>11. 生存可能システム①</li> <li>12. 生存可能システム</li> <li>13. 生存可能システム・モデル</li> <li>14. 組織と必要多様性の法則：まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
高松和幸著『経営組織論の展開』創成社，2009.		受講条件：aも履修すること 評価方法：出席，試験，レポートによる総合評価	

01年度以降(春)	経営財務論 a	担当者	細田 哲
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義の目的</b></p> <p>我が国において「間接金融」主導型の金融システムは崩壊しつつあり、各国資本市場は、それぞれ高度化、多様化、国際化を遂げつつある。したがって、経営者(財務担当者)は、資本市場により関心を払って財務的意思決定を行わなければならない状況となっている。そこで、「資本市場」志向の財務的意思決定のあり方について説明し、同時に、日本企業が採用してきた財務政策の特色と問題点について検討する。</p> <p><b>講義概要</b></p> <p>各週別の講義予定を見られたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「1.企業の目的と財務政策」 <ol style="list-style-type: none"> <li>a)市場型経済における消費・貯蓄・投資の決定</li> <li>b)企業による市場を通じる価値創造</li> </ol> </li> <li>2. 「1.企業の目的と財務政策」 <ol style="list-style-type: none"> <li>c)資本市場の役割</li> <li>d)企業の財務的意思決定のフレームワーク</li> </ol> </li> <li>3. 「2.資産の価値をどう評価するか」 <ol style="list-style-type: none"> <li>a)現在価値の評価</li> </ol> </li> <li>4. 「2.資産の価値をどう評価するか」 <ol style="list-style-type: none"> <li>b)債権の評価</li> </ol> </li> <li>5. 「3.株式の価値はどう決まる」 <ol style="list-style-type: none"> <li>a)配当割引モデルの考え方</li> <li>b)一定成長配当割引モデルと株価収益率</li> </ol> </li> <li>6. 「3.株式の価値はどう決まる」 <ol style="list-style-type: none"> <li>c)配当割引モデルの応用、d)日本の株価水準と期待収益率</li> </ol> </li> <li>7. 「4.リスクをどう測るか」 <ol style="list-style-type: none"> <li>a)投資リスクの尺度</li> </ol> </li> <li>8. 「4.リスクをどう測るか」 <ol style="list-style-type: none"> <li>b)ポートフォリオのリスク、</li> </ol> </li> <li>9. 「4.リスクをどう測るか」 <ol style="list-style-type: none"> <li>c)ベータ値と資本資産評価モデル</li> </ol> </li> <li>10. 「5.資本コストとは何か」 <ol style="list-style-type: none"> <li>a)資本コストとは、b)投資のキャッシュ・フロー</li> </ol> </li> <li>11. 「5.資本コストとは何か」 <ol style="list-style-type: none"> <li>c)資本コストの推計方法</li> </ol> </li> <li>12. 「5.資本コストとは何か」 <ol style="list-style-type: none"> <li>d)日本企業の資本コストの計算例</li> <li>e)資本コストと資金コスト</li> </ol> </li> <li>13. 「5.資本コストとは何か」 <ol style="list-style-type: none"> <li>f)企業価値の推計</li> </ol> </li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>・井手正介、高橋文郎著「ビジネス・ゼミナール 経営財務入門」(日本経済新聞社)</p>		<p>期末試験の結果による。</p>	

01年度以降(秋)	経営財務論 b	担当者	細田 哲
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義の目的</b></p> <p>我が国において「間接金融」主導型の金融システムは崩壊しつつあり、各国資本市場は、それぞれ高度化、多様化、国際化を遂げつつある。したがって、経営者(財務担当者)は、資本市場により関心を払って財務的意思決定を行わなければならない状況となっている。そこで、「資本市場」志向の財務的意思決定のあり方について説明し、同時に、日本企業が採用してきた財務政策の特色と問題点について検討する。</p> <p><b>講義概要</b></p> <p>各週別の講義予定を見られたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「6.投資の決定方法(1)」</li> <li>2. 「6.投資の決定方法(2)」</li> <li>3. 「6.望ましい資本構成とは」 <ol style="list-style-type: none"> <li>a)完全資本市場における資本構成と企業価値</li> </ol> </li> <li>4. 「6.望ましい資本構成とは」 <ol style="list-style-type: none"> <li>b)法人税や倒産可能性が企業価値に与える影響</li> </ol> </li> <li>5. 「6.望ましい資本構成とは」 <ol style="list-style-type: none"> <li>c)企業価値の最大化と株価の最大化</li> <li>d)資本構成決定の現実的な考慮点</li> <li>e)日本企業の資本構成の動向</li> </ol> </li> <li>6. 「7.配当政策の考え方」 <ol style="list-style-type: none"> <li>a)配当政策の理論、b)配当政策をめぐる問題点</li> </ol> </li> <li>7. 「7.配当政策の考え方」 <ol style="list-style-type: none"> <li>c)株式配当と株式分割、d)日米企業の配当政策</li> </ol> </li> <li>8. 「8.自社株取得」 <ol style="list-style-type: none"> <li>a)自社株取得の本質、b)自社株取得の利用動機</li> </ol> </li> <li>9. 「8.自社株取得」 <ol style="list-style-type: none"> <li>c)自社株取得と株価評価</li> <li>d)自社株取得をめぐる我が国の現状</li> </ol> </li> <li>10. 「9.リスク管理とデリバティブの利用」 <ol style="list-style-type: none"> <li>a)デリバティブとは何か</li> </ol> </li> <li>11. 「9.リスク管理とデリバティブの利用」 <ol style="list-style-type: none"> <li>b)デリバティブを利用した金利リスク管理</li> <li>c)企業財務とリスク管理</li> </ol> </li> <li>12. 「10.企業の合併・買収」</li> <li>13. 「11.新しい価値評価尺度(1)」</li> <li>14. 「11.新しい価値評価尺度(2)」</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>・井手正介、高橋文郎著「ビジネス・ゼミナール 経営財務入門」(日本経済新聞社)</p>		<p>期末試験の結果による。</p>	

01 年度以降（春）	人的資源管理論 a	担当者	岡部 康弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>人的資源管理（HRM）は企業の経営戦略と結びつき戦略を履行するため能動的に人材育成などの人事政策・慣行を総合的に考えるものである。学生は自分達の側から企業をみるが、HRMは企業の側から見た人材という観点で考えるので、どのような人材が企業に求められているのか、どのように職業人キャリアを形成するべきかを考える示唆となる。前半はHRMの理論的フレームワークから、キャリア計画までを行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. HRM とはなにか。</li> <li>3. 戦略的 HRM 環境</li> <li>4. 法律的环境</li> <li>5. グローバル環境</li> <li>6. 人材計画と職務分析</li> <li>7. 募集</li> <li>8. 選別と配置</li> <li>9. 評価管理</li> <li>10. 教育訓練</li> <li>11. キャリア計画と開発</li> <li>12. ゲストスピーカー</li> <li>13. 復習</li> <li>14. Q&amp;A</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>講義資料は毎回配布する。DeNish &amp; Griffin (2002) <i>Human Resource Management</i>. Houghton Mifflin Company</p>		<p>評価は学期末試験による。出席は本学の慣例による。4回以上欠席は不可、2回遅刻は1回欠席とみなす。</p>	

01 年度以降（秋）	人的資源管理論 b	担当者	岡部 康弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>後半は、報酬の話から最近のHRMの問題までを扱う。特に現在企業が変化させようとしている雇用制度、評価制度が抱える問題点を考える。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス</li> <li>2. 基本的な報酬</li> <li>3. インセンティブ</li> <li>4. 福利厚生</li> <li>5. 労務管理</li> <li>6. 労働環境の管理</li> <li>7. グローバル人事</li> <li>8. 多様性の管理</li> <li>9. 新しい労働関係の管理</li> <li>10. 日本の成果主義</li> <li>11. HRM の理論体系</li> <li>12. DVD（就職面接）</li> <li>13. 復習</li> <li>14. Q&amp;A</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>講義資料は毎回配布する。DeNish &amp; Griffin (2006) <i>Human Resource Management</i>. Houghton Mifflin Company</p>		<p>評価は学期末試験による。出席は本学の慣例による。4回以上欠席は不可、2回遅刻は1回欠席とみなす。</p>	

01年度以降（春）	国際経営論 a	担当者	小林 哲也
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>グローバリゼーションの原動力の一つは、国境を越えて活動する多国籍企業である。現代企業は、財の生産や販売だけでなく、情報や金融の世界でも、グローバル化を進めている。生産・流通・広告・金融などでの技術革新により、新しい形で国際分業が再編成されていると言える。</p> <p>本講義では、企業の国際化に伴う諸問題を包括的に議論し、グローバリゼーションを理解するための理論的枠組みを提供することを目的とする。</p> <p>前半で主として理論・歴史を取り扱い、後半でケーススタディを行うので、通年受講が望ましい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. グローバリゼーション---「フラット化する世界」</li> <li>2. 現代経済における多国籍企業</li> <li>3. 巨大企業と「豊かな社会」</li> <li>4. コーポレートガバナンスの変貌</li> <li>5. フォードシステム</li> <li>6. 日本的生産システム</li> <li>7. 情報技術革命のインパクト</li> <li>8. 企業組織とビジネス・アーキテクチャ</li> <li>9. 経営戦略の変貌</li> <li>10. イノベーションと競争優位</li> <li>11. 多国籍企業と新しい国際分業</li> <li>12. 「暴走する資本主義」</li> <li>13. 「グリーン革命」温暖化・フラット化・過密化</li> <li>14. 情報化社会と日本的経営の再審</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>トーマス・フリードマン『フラット化する世界』日本経済新聞社</p> <p>ロバート・ライシュ『暴走する資本主義』東洋経済新報社</p>		主として、定期試験による	

01年度以降（秋）	国際経営論 b	担当者	小林 哲也
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>秋学期は、多国籍企業の活動にかかわるケーススタディを中心として、グローバリゼーションの現状を分析する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 日本企業の国際化</li> <li>2. 日本企業の海外進出 戦後復興から 90年代</li> <li>3. 日本企業の海外進出 「摩擦」の政治経済学</li> <li>4. 日本企業の海外進出 アメリカ</li> <li>5. 日本企業の海外進出 ヨーロッパ</li> <li>6. 日本企業の海外進出 アジアへの進出と撤退</li> <li>7. 「世界の工場」中国の登場 長江デルタ</li> <li>8. IT革命と世界的な産業の再編成</li> <li>9. ハイテク産業の覇権をめぐる</li> <li>10. 自動車産業の再編成</li> <li>11. 新しいビジネスモデルの登場</li> <li>12. 製品および産業のアーキテクチャ</li> <li>13. 知的財産権をめぐる角逐</li> <li>14. 日本企業の課題</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>ジェフリー・ジョーンズ『国際経営講義 多国籍企業とグローバル資本主義』有斐閣</p> <p>その他、講義中に適宜、指示する</p>		主として、定期試験による	

01 年度以降 (春)	経営史 a	担当者	柳 敦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>欧米を中心とし、企業経営行動の歴史の変遷をたどる。各時期、各地域における企業行動の合理性（あるいは非合理性）を歴史的制約、文化的側面も含めて考える。近代工業化以前の企業行動を概観し、次いで、英国における産業革命の特徴と企業経営の問題を検討する。</p> <p>企業行動、企業経営が、中世から近代初期までの歴史環境の中で、どのように変化・進化をとげてきたかを理解することが講義の目的となる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 経営史の課題と問題</li> <li>2 ヨーロッパ前近代における企業と経営 (1)</li> <li>3 ヨーロッパ前近代における企業と経営 (2)</li> <li>4 ヨーロッパ前近代における企業と経営 (3)</li> <li>5 ヨーロッパ前近代における企業と経営 (4)</li> <li>6 重商主義とアダム・スミス</li> <li>7 産業革命前夜の英国消費社会</li> <li>8 資本主義とその精神</li> <li>9 英国産業革命とその特徴 (1)</li> <li>10 英国産業革命とその特徴 (2)</li> <li>11 英国産業革命期の企業経営 (1)</li> <li>12 英国産業革命期の企業経営 (2)</li> <li>13 工場制の導入と労働規律の変化</li> <li>14 講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
必要に応じて紹介する。		期末試験の成績によって評価を行う。	

01 年度以降 (秋)	経営史 b	担当者	柳 敦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>近代工業化の時代以降の欧米を中心とし、企業経営行動の歴史の変遷をたどる。各時期、各地域における企業行動の合理性（あるいは非合理性）を歴史的制約、文化的側面も含めて考える。後発工業国であるフランス、ドイツ、米国の事例を検討しながら 19 世紀における企業経営のありかたを考察し、次いで、20 世紀型企業経営の問題を考える。</p> <p>近代工業化による企業や経営の変化をとらえつつ、20 世紀米国での事例を検討することで、現在の企業経営を考える基礎を構築することが狙いである。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 後発国での工業化の特徴</li> <li>2 19 世紀フランスにおける工業化とその特徴</li> <li>3 19 世紀フランス企業経営の特徴</li> <li>4 19 世紀ドイツにおける工業化とその特徴</li> <li>5 19 世紀ドイツ企業経営の特徴</li> <li>6 19 世紀における小売業界での変化と特徴</li> <li>7 19 世紀米国における工業化とその特徴</li> <li>8 19 世紀米国企業経営の特徴</li> <li>9 ビッグビジネスの展開と独占禁止法 (1)</li> <li>10 ビッグビジネスの展開と独占禁止法 (2)</li> <li>11 科学的管理法の展開</li> <li>12 企業組織の問題</li> <li>13 フォードと GM</li> <li>14 講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
必要に応じて紹介する。		期末試験の成績によって評価を行う。	

01年度以降（春）	日本経営史 a	担当者	高柳 友彦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では近世期から1920年代にかけての代表的な企業経営をとりあげ、日本の企業組織がどのような歴史的過程を経ながら、形成・発展してきたのか明らかにしていく。</p> <p>それぞれの企業経営だけでなく、各時代における経済環境や経営者組織のあり様、同業者団体の動向といった背景にふれながら紹介していきます。</p> <p>テキストの1章から3章を中心に授業を進めていきます。（近世期から1920年代まで）</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 はじめに</li> <li>2 近世期の経済概況</li> <li>3 近世期の商家経営</li> <li>4 商家の経営システム</li> <li>5 工業化と近代産業の定着</li> <li>6 近代初期の企業家①－政商から財閥へ－</li> <li>7 近代初期の企業家②－専門経営者－</li> <li>8 近代的経営管理の担い手</li> <li>9 会社制度と会計制度</li> <li>10 国家の役割と経済団体</li> <li>11 大企業体制の到来－企業合併－</li> <li>12 財閥と持株会社</li> <li>13 外国企業の進出と日本企業の国外進出</li> <li>14 本講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：宮本又郎・阿部武司他著『日本経営史 新版』（有斐閣）、授業では講義資料を配布します。</p> <p>参考文献：宇田川、中村編『マテリアル日本経営史』、経営史学会『日本経営史の基礎知識』（有斐閣）</p>		<p>期末試験で評価します</p>	

01年度以降（秋）	日本経営史 b	担当者	高柳 友彦
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では、1930年代から1980年代にかけての代表的な企業経営をとりあげ、日本の企業組織がどのような歴史的過程を経ながら、形成・発展してきたのか明らかにしていく。</p> <p>それぞれの企業経営だけでなく、各時代における経済環境や経営者組織のあり様、同業者団体の動向といった背景にふれながら紹介していきます。</p> <p>テキストの3章から5章を中心に授業を進めていきます。（1930年代から1980年代まで）</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 はじめに</li> <li>2 恐慌期の企業合同とカルテル</li> <li>3 新興コンツェルンの躍進</li> <li>4 経営の合理化と科学的管理法</li> <li>5 戦時・戦後期の経済環境</li> <li>6 戦時・戦後期の企業経営</li> <li>7 1930年代の労務管理と労使関係</li> <li>8 技術開発と経営管理の展開</li> <li>9 戦後改革－財閥解体－</li> <li>10 企業集団の形成と二重構造</li> <li>11 高度成長期の企業経営</li> <li>12 「日本的経営」と協調的労使関係</li> <li>13 安定成長期の企業経営</li> <li>14 本講義のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：宮本又郎・阿部武司他著『日本経営史 新版』（有斐閣）、授業では講義資料を配布します。</p> <p>参考文献：宇田川、中村編『マテリアル日本経営史』、経営史学会『日本経営史の基礎知識』（有斐閣）</p>		<p>期末試験で評価します</p>	

01年度以降（春）	マーケティング論 a	担当者	有吉 秀樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>マーケティングは、消費者のニーズを企業の目標である利益獲得に結びつけるための経営上の重要なツールである。ただ単に「作れば売れる」という大量生産・大量消費の時代が終わりを告げた現在、消費者の嗜好はますます個別化してきている。どのような消費者をターゲットとするのか、そのような消費者の手元に確実に自社商品・サービスを届けるためには、どのような手段を用いたらよいかといった問題について、マーケティングは答えを与えてくれる。講義では、マーケティング戦略と企業全体の戦略との関係を常に意識しながら、論理的かつ事例を交えて具体的に解説したいと思う。</p> <p>教員による一方的な講義ではなく、双方向性やディスカッションを重視するので、教科書の該当箇所を事前に読んできていることが望ましい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス～マーケティングとは何か？</li> <li>2. 企業戦略・事業戦略とマーケティング戦略の関係</li> <li>3. 企業理念の重要性とその設定・変更</li> <li>4. 企業目標の選定①</li> <li>5. 企業目標の選定②</li> <li>6. 外部環境要因の分析①</li> <li>7. 外部環境要因の分析②</li> <li>8. 外部環境要因の分析③</li> <li>9. 内部環境要因の分析①</li> <li>10. 内部環境要因の分析②</li> <li>11. 内部環境要因の分析③</li> <li>12. 分析から戦略へ①</li> <li>13. 分析から戦略へ②</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
有吉秀樹『企業価値向上のマーケティング戦略』（中央経済社）を使用する。必要があれば適宜プリントを配布する。		授業中の発言と小テストにより評価する	

01年度以降（秋）	マーケティング論 b	担当者	有吉 秀樹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>マーケティングは、消費者のニーズを企業の目標である利益獲得に結びつけるための経営上の重要なツールである。ただ単に「作れば売れる」という大量生産・大量消費の時代が終わりを告げた現在、消費者の嗜好はますます個別化してきている。どのような消費者をターゲットとするのか、そのような消費者の手元に確実に自社商品・サービスを届けるためには、どのような手段を用いたらよいかといった問題について、マーケティングは答えを与えてくれる。講義では、マーケティング戦略と企業全体の戦略との関係を常に意識しながら、論理的かつ事例を交えて具体的に解説したいと思う。</p> <p>教員による一方的な講義ではなく、双方向性やディスカッションを重視するので、教科書の該当箇所を事前に読んできていることが望ましい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス～マーケティングとは何か？</li> <li>2. 企業戦略・事業戦略とマーケティング戦略の関係</li> <li>3. 企業戦略の立案①</li> <li>4. 企業戦略の立案②</li> <li>5. 企業戦略の立案③</li> <li>6. 市場細分化と標的市場の選定</li> <li>7. ポジショニング</li> <li>8. 製品戦略①</li> <li>9. 製品戦略②</li> <li>10. 価格戦略</li> <li>11. コミュニケーション戦略とプロモーション戦略</li> <li>12. 販売目標の設定</li> <li>13. マーケティング戦略の実行と監査</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
有吉秀樹『企業価値向上のマーケティング戦略』（中央経済社）を使用する。必要があれば適宜プリントを配布する。		授業中の発言と小テストにより評価する。	

01 年度以降 (春)	広告論 a	担当者	友部 孝次
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>「講義目的」 私たちの身の回りに溢れている広告 — その機能や企業活動における位置付け、それを担う組織や実施計画、効果測定などについて基礎知識を学んでもらいます。 基礎知識の習得と並行して、広告ビジネスの現場で何が起り、現代の広告がどのように変わりつつあるかなど、最新のトピックスも随時説明していきます。さらにゲストスピーカーをまじえた座談会なども行い、受講生の理解を深めるとともに、「生きた広告論」を学習してもらいます。</p> <p>「講義概要」 春期の講義では、広告の定義にはじまって企業活動における広告の位置付け、広告に携わる組織と様々なメディアの役割や動向などに至るまで、広告理解に必要な基礎知識を、最新の広告動向も紹介しながら解説します。 期中に広告界の第一線で活躍するアドマンによる説明会を開催する予定で、現場の息吹を感じてもらうとともに、広告業界への就職活動にも役立ててもらいます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義概要と広告トピックス</li> <li>2. 広告の定義と歴史</li> <li>3. 広告の機能と種類</li> <li>4. マーケティングと広告</li> <li>5. コミュニケーションと広告</li> <li>6. 広告主の組織と役割</li> <li>7. 最近の広告主の動向</li> <li>8. 広告会社の組織と役割</li> <li>9. 最近の広告会社の動向</li> <li>10. 最近のメディア接触状況</li> <li>11. プリントメディア</li> <li>12. 放送メディア①</li> <li>13. 放送メディア②</li> <li>14. 広告ビジネスの現場から①</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：梶山皓著『広告入門&lt;第 5 版&gt;』日経新聞出版社、日経広告研究所編『広告用語辞典&lt;第 4 版&gt;』日経新聞出版社、参考文献：日経広告研究所編『広告白書 2009』日経新聞出版社</p>		<p>出席・授業態度・試験またはレポートによる。 各期 6 回以上の欠席者は不可。初回の授業で説明します。</p>	

01 年度以降 (秋)	広告論 b	担当者	友部 孝次
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>「講義目的」 私たちの身の回りに溢れている広告 — その機能や企業活動における位置付け、それを担う組織や実施計画、効果測定などについて基礎知識を学んでもらいます。 基礎知識の習得と並行して、広告ビジネスの現場で何が起り、現代の広告がどのように変わりつつあるかなど、最新のトピックスも随時説明していきます。さらにゲストスピーカーをまじえた座談会なども行い、受講生の理解を深めるとともに、「生きた広告論」を学習してもらいます。</p> <p>「講義概要」 秋期の講義では、メディアの役割と動向から広告計画策定、広告制作、メディアプランニング、広告効果測定、広告規制など、実際の広告活動に必要な実務知識を解説、それとともに、内外の最新広告事情を紹介します。 最後の 2 回では春期同様、広告界の第一線で活躍するアドマンによる説明会を開催する予定で、春期説明会とあわせて広告理解を深めるとともに、広告業界への就職活動にも役立ててもらいます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. プロモーションメディア</li> <li>2. インターネット①</li> <li>3. インターネット②</li> <li>4. 広告計画の策定①</li> <li>5. 広告計画の策定②</li> <li>6. 広告制作</li> <li>7. メディアプランニング①</li> <li>8. メディアプランニング②</li> <li>9. 企業広告と B to B 広告</li> <li>10. 広告調査と広告効果測定</li> <li>11. 広告倫理と規制</li> <li>12. グローバリゼーションと広告 + 国際広告ビジネスの現場から</li> <li>13. 広告ビジネスの現場から②</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：梶山皓著『広告入門&lt;第 5 版&gt;』日経新聞出版社、日経広告研究所編『広告用語辞典&lt;第 4 版&gt;』日経新聞出版社、参考文献：日経広告研究所編『広告白書 2009』日経新聞出版社</p>		<p>出席・授業態度・試験またはレポートによる。 各期 6 回以上の欠席者は不可。初回の授業で説明します。</p>	

01年度以降（春）	行動科学論 a	担当者	有吉 秀樹
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>大量生産大量消費の時代が終わりを告げ、消費者は自分のニーズに合致した商品にのみ関心を示すようになっていく。そのような時代における企業が生き残るための術として、消費者の行動に対する理解は必要不可欠なものであろう。本講義では、参加者自身が企業の戦略担当の立場になったつもりで、消費者の行動を論理的・科学的に分析し、戦略を立案する。ロジックを重視し、根拠のある推測から仮説を導き出し、それを検証する力が養えれば、本講義を受講した意義は大きいであろう。</p> <p>この講義概要を見てもわかるように、本講座はマーケティング論の上位科目として位置付けられている。<u>マーケティング論に関する基本的な説明は一切行わないので、マーケティング論を受講済みの者でなければ、講義や議論についてゆくのは極めて困難である。登録の際には十分注意すること！</u></p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス（課題発表）</li> <li>2～7. 分析作業</li> <li>8. 中間プレゼン（課題の進捗状況による）</li> <li>9～13. 分析作業</li> <li>14. 最終プレゼン</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
有吉秀樹『企業価値向上のマーケティング戦略』（中央経済社）を使用。		期末（場合によっては中間も）のプレゼン、レポートにより評価する。 <u>マーケティング論を受講済みでない学生は、差所の講義の際に必ず教員に申し出ること。</u>	

01年度以降（秋）	行動科学論 b	担当者	有吉 秀樹
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>大量生産大量消費の時代が終わりを告げ、消費者は自分のニーズに合致した商品にのみ関心を示すようになっていく。そのような時代における企業が生き残るための術として、消費者の行動に対する理解は必要不可欠なものであろう。本講義では、参加者自身が企業の戦略担当の立場になったつもりで、消費者の行動を論理的・科学的に分析し、戦略を立案する。ロジックを重視し、根拠のある推測から仮説を導き出し、それを検証する力が養えれば、本講義を受講した意義は大きいであろう。</p> <p>この講義概要を見てもわかるように、本講座はマーケティング論の上位科目として位置付けられている。<u>マーケティング論に関する基本的な説明は一切行わないので、マーケティング論を受講済みの者でなければ、講義や議論についてゆくのは極めて困難である。登録の際には十分注意すること！</u></p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス（課題発表）</li> <li>2～7. 分析作業</li> <li>8. 中間プレゼン（課題の進捗状況による）</li> <li>9～13. 分析作業</li> <li>14. 最終プレゼン</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
有吉秀樹『企業価値向上のマーケティング戦略』（中央経済社）を使用。		期末（場合によっては中間も）のプレゼン、レポートにより評価する。 <u>マーケティング論を受講済みでない学生は、差所の講義の際に必ず教員に申し出ること。</u>	

01年度以降（春）	保険論 a	担当者	岡村 国和
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義の目的は、現実の保険現象を広く理解し、現在進行中の保険事業をめぐる環境変化を分析する能力を取得することにあります。</p> <p>春学期の目標は保険理論の理解であり、主として保険の技術や原則を中心に、保険システムの全体像について講義します。保険の本質的機能を十分理解すれば、隣接他業との相互関係や環境変化・市場再編の方向が理解でき、また保険における契約者保護の重要性を知ることができます。</p> <p>上記のことを理解する前提として、近代保険業がなぜ生まれたのか、またその性格はいかなるものであるのか、を理解することが重要です。</p> <p>なるべく丁寧に講義を進めることを心がけますが、進度やトピックスの挿入などによって、右記の授業計画の一部を割愛することがあります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 講義の進め方、保険学の学問的位置づけなど。</li> <li>2 リスクとリスクマネジメントの一般理論について。</li> <li>3 リスク理論と保険理論</li> <li>4 期待効用に基づく保険モデルの解説。</li> <li>5 保険の歴史(1)：原始共済について。</li> <li>6 保険の歴史(2)：近代保険について。</li> <li>7 保険の構造(1)：保険の理論的構造の概観。</li> <li>8 保険の構造(2)：主として損害保険の主要概念。</li> <li>9 保険の構造(3)：「危険負担の一般原則」および「損害填補の一般原則」とその例外について。</li> <li>10 保険の構造(4)：告知義務と通知義務について。</li> <li>11 保険各論(1)：生命保険の仕組みや機能について。</li> <li>12 保険各論(2)：自動車保険、火災保険について。</li> <li>13 保険各論(3)：第3分野保険、傷害保険について。</li> <li>14 春学期のまとめ。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>パワーポイントによる授業を行います。参考文献などは適宜指示します。</p>		<p>定期試験により評価しますが、小テストや講義感想などのミニレポートを書いていただくことがあります。</p>	

01年度以降（秋）	保険論 b	担当者	岡村 国和
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>秋学期は保険会社の経営についての講義を中心に講義を進めます。具体的には保険業の収益構造や保険市場の構造的変化について、日米の保険業を比較検討します。</p> <p>収益面では、バブル期までの生保業の中心的な収益源泉が、保険販売収益ではなく金融収益であり金融収益が保険収益を上回るという本業と副業の収益面での「ねじれ現象」が発生していたことを確認します。</p> <p>バブル崩壊後に生命保険も損害保険も保険会社の収益構造が大きく変容しましたが、重要であるにもかかわらず、一般的な教科書には余り記載されていない事実などを中心に解説します。</p> <p>また、日本の大手生保会社は、「保険業法」に基づいて設立された相互会社（非営利中間法人）であるということを知らない人が多いと思いますので、これを機会に良く理解してください。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 秋学期の講義目的や内容について</li> <li>2 保険経営の一般的特徴</li> <li>3 保険企業の形態：株式会社と相互会社</li> <li>4 保険市場の主要な問題</li> <li>5 保険経営の特殊性(1)：保険技術的危険について。</li> <li>6 保険経営の特殊性(2)：保険料の算定、アンダーライティングについて。</li> <li>7 資金調達からみた保険の限界とその拡張。</li> <li>8 保険の価格（保険料率）の構造</li> <li>9 損害保険会社の収益構造。</li> <li>10 保険収益のサイクルとコンバインドレシオ</li> <li>11 生命保険会社の収益構造。</li> <li>12 予定利率をめぐる問題。</li> <li>13 保険における消費者保護の現状。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>パワーポイントによる授業を行います。参考文献などは適宜指示します。</p>		<p>定期試験により評価しますが、小テストや講義感想などのミニレポートを書いていただくことがあります。</p>	

01年度以降（春）	貿易論 a	担当者	米山 昌幸
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>貿易論は、財・サービスの国際取引や資本・労働・経営資源の国際移動を分析対象とする学問分野です。</p> <p>この講義の目的は、国際貿易や貿易政策の基礎理論や現実の貿易、貿易実務について学んで、現実の国際貿易のテーマを考察するための経済学的な思考方法を手に入れることです。国際貿易のテーマを考察するうえで有用な貿易理論の習得とあわせて、実際のデータを提示して国際貿易の実態についての理解も深めていきたいと思ひます。</p> <p>春学期は、一般均衡分析を用いて伝統的な国際貿易の基礎理論を中心に講義します。貿易論でもっとも重要な概念である比較優位をはじめ、貿易パターン、貿易利益、比較優位の決定要因、産業内貿易と規模と経済などを取り上げます。</p> <p>ミクロ経済学の基礎的なところから貿易論の分野へつなげるように、できるだけいねいに説明していきますので、貿易理論を学ぶことで、経済学的な思考方法で貿易を捉えられるようになってもらいたいと思ひます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 戦後の日本経済と貿易の歩み</li> <li>2. 貿易の取引と決済の仕組み(1)</li> <li>3. 貿易の取引と決済の仕組み(2)</li> <li>4. リカードの比較生産費説(1)</li> <li>5. リカードの比較生産費説(2)</li> <li>6. リカードの比較生産費説(3)</li> <li>7. ヘクシャー＝オリーン理論(1)</li> <li>8. ヘクシャー＝オリーン理論(2)</li> <li>9. ヘクシャー＝オリーン理論(3)</li> <li>10. 産業内貿易と規模の経済(1)</li> <li>11. 産業内貿易と規模の経済(2)</li> <li>12. サービス貿易</li> <li>13. 貿易と経済活動・経済成長</li> <li>14. 貿易と経済発展</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストは第1回目の授業で指定します(次のものを予定)。 石川城太・菊地徹・椋寛『国際経済学をつかむ』有斐閣、2007年。</p>		<p>基本的には定期試験の得点(100点満点)を評価基準(第1回目の授業で説明する)に照らして評価する。ただし、出席点や練習問題の得点もサービス点として加算する予定。</p>	

01年度以降（秋）	貿易論 b	担当者	米山 昌幸
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>貿易論は、財・サービスの国際取引や資本・労働・経営資源の国際移動を分析対象とする学問分野です。</p> <p>この講義の目的は、国際貿易や貿易政策の基礎理論や現実の貿易、貿易実務について学んで、現実の国際貿易のテーマを考察するための経済学的な思考方法を手に入れることです。国際貿易のテーマを考察するうえで有用な貿易理論の習得とあわせて、実際のデータを提示して国際貿易の実態についての理解も深めていきたいと思ひます。</p> <p>秋学期は、部分均衡分析を用いて貿易政策の基礎理論について学んだのち、実際のトピックについて講義します。戦略的貿易政策、アンチ・ダンピング措置や緊急輸入制限措置(セーフガード)、地域貿易協定(RTA)、貿易と環境などのトピックを取り上げたいと思ひます。</p> <p>ミクロ経済学の基礎的なところから貿易論の分野へつなげるように、できるだけいねいに説明していきますので、貿易理論を学ぶことで、経済学的な思考方法で貿易を捉えられるようになってもらいたいと思ひます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 戦後の国際経済体制と世界貿易の発展</li> <li>2. 貿易政策の目的</li> <li>3. 貿易政策の手段</li> <li>4. 部分均衡分析による貿易利益</li> <li>5. 貿易政策の効果(1)―関税・生産補助金</li> <li>6. 貿易政策の効果(2)―輸入数量制限・輸出自主規制</li> <li>7. 保護貿易を擁護する主張</li> <li>8. 戦略的貿易政策</li> <li>8. アンチダンピングとセーフガード</li> <li>9. 国際貿易のルールと貿易交渉―GATTとWTOの歴史と現状</li> <li>10. 国際貿易のルールと貿易交渉―GATTとWTOの制度</li> <li>11. 地域貿易協定―FTAとCU</li> <li>12. 多国籍企業と直接投資</li> <li>13. 国際労働移動</li> <li>14. 貿易と環境</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストは第1回目の授業で指定します(次のものを予定)。 石川城太・菊地徹・椋寛『国際経済学をつかむ』有斐閣、2007年。</p>		<p>基本的には定期試験の得点(100点満点)を評価基準(第1回目の授業で説明する)に照らして評価する。ただし、出席点や練習問題の得点もサービス点として加算する予定。</p>	

01年度以降（春）	証券市場論 a	担当者	高橋 元
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>近年、わが国は「貯蓄から投資へ」という流れの中で、証券市場が身近な存在になりつつある。グローバリゼーションや自由化の進展に伴い、好むと好まざるとに関わらず、証券や証券市場が内外の経済社会に多大な影響を与える時代を招来しているのである。</p> <p>本講義では、こうした時代背景を踏まえて、証券と証券市場を巡る制度、歴史、理論などを体系的に学ぶことにより、その国民経済的な意義を明らかにする事を目的とする。また、日々の出来事などについて実践的な解説を適宜実施することで、より理解を深めるよう臨みたい。これらを通じて、自己責任原則の下で多様なリスクに曝される個人が、それらを制御するための必要最低限の知識涵養も目指していく。</p> <p>証券市場 a では、証券の定義や証券市場のメカニズムなど、基本的な領域について幅広く学習する。講義は口述と板書を中心に、必要に応じてプリント類を配布する。授業は、原則として計画に沿って進行するが、金融資本市場の変化などに応じて、流動的に対応していく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の概要——進め方、評価方法等のガイダンス</li> <li>2. 戦後の経済発展と証券市場</li> <li>3. 証券の意義と種類（その1）</li> <li>4.         "                  （その2）</li> <li>5. 証券市場の機能と沿革（その1）</li> <li>6.         "                  （その2）</li> <li>7. 証券業務と証券会社</li> <li>8. 証券市場の構成者</li> <li>9. 機関投資家と個人投資家</li> <li>10. 投資信託の仕組み</li> <li>11. 証券化の仕組みとその功罪</li> <li>12. 新しい金融商品の基礎</li> <li>13. 証券市場の現状と課題</li> <li>14. 総括——まとめと期末試験へのアナウンス</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストは特に指定しないが、参考文献として下記を挙げる。『ベーシック証券市場論（改訂版）』福光寛・高橋元／編、同文館／刊、2007年</p>		<p>出席状況、授業中に実施するレポートの提出状況と内容、試験結果などを総合的に勘案し評価する。</p>	

01年度以降（秋）	証券市場論 b	担当者	高橋 元
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>近年、わが国は「貯蓄から投資へ」という流れの中で、証券市場が身近な存在になりつつある。グローバリゼーションや自由化の進展に伴い、好むと好まざるとに関わらず、証券や証券市場が内外の経済社会に多大な影響を与える時代を招来しているのである。</p> <p>本講義では、こうした時代背景を踏まえて、証券と証券市場を巡る制度、歴史、理論などを体系的に学ぶことにより、その国民経済的な意義を明らかにする事を目的とする。また、日々の出来事などについて実践的な解説を適宜実施することで、より理解を深めるよう臨みたい。これらを通じて、自己責任原則の下で多様なリスクに曝される個人が、それらを制御するための必要最低限の知識涵養も目指していく。</p> <p>証券市場論 b では、株式を中心に証券価格の評価などに関わる理論的な考察を行い、専門的且つ高度な知識の習得を図る。講義は口述と板書を中心に、必要に応じてプリント類を配布する。授業は、原則として計画に沿って進行するが、金融資本市場の変化などに応じて、流動的に対応していく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義の概要——進め方、評価方法等のガイダンス</li> <li>2. 証券の価格形成</li> <li>3. 証券投資理論の基礎</li> <li>4. 株式と株式会社</li> <li>5. 金利の意義と債券投資理論</li> <li>6. 配当割引モデル（その1）</li> <li>7.         "                  （その2）</li> <li>8. 株式投資尺度（その1）</li> <li>9.         "                  （その2）</li> <li>10. ポートフォリオ理論の基礎</li> <li>11. ポートフォリオ理論の発展形態</li> <li>12. デリバティブズ</li> <li>13. 新しい投資理論の展開</li> <li>14. 総括——まとめと期末試験へのアナウンス</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストは特に指定しないが、参考文献として下記を挙げる。『ベーシック証券市場論（改訂版）』福光寛・高橋元／編、同文館／刊、2007年</p>		<p>出席状況、授業中に実施するレポートの提出状況と内容、試験結果などを総合的に勘案し評価する。</p>	

01年度以降（春）	企業論 a	担当者	平井 岳哉
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>大学卒業後の進路として、就労の場である企業の存在は無視できないものがあります。しかし、学生の企業に対する問題意識は総じて希薄であり、企業に関する情報や知識も断片的・表層的なものでしかないものと考えられます。</p> <p>本講義では、企業に関する諸項目の概要説明を通じて、企業の多面的な性格を論じていきたいと思ひます。特に昨今、日本型経営システムは大きな転換期を迎えていると言われています。今後の方向性についても、最新の企業情報を織りまぜながら、ともに考えていきたいと思ひます。</p> <p>春学期は、人事関連の諸制度や勤労環境に、秋学期は、企業の構造や外部主体（ステークホルダー）との関係にそれぞれ焦点を当てます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション</li> <li>2 会社の種類・形態</li> <li>3 終身雇用</li> <li>4 高齢者雇用・定年</li> <li>5 女性雇用</li> <li>6 年功賃金</li> <li>7 人事異動</li> <li>8 昇進</li> <li>9 キャリアツリー</li> <li>10 採用</li> <li>11 教育・研修、人事評価</li> <li>12 福利厚生</li> <li>13 労働組合</li> <li>14 労働時間、休暇</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
教科書は特に指定しない。		期末試験の結果と講義での貢献	

01年度以降（秋）	企業論 b	担当者	平井 岳哉
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
春学期に同じ。		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 トップマネジメントと取締役会</li> <li>2 家族経営者と専門経営者</li> <li>3 家族企業</li> <li>4 横の企業グループ</li> <li>5 縦の企業グループ</li> <li>6 コーポレートガバナンス</li> <li>7 系列取引</li> <li>8 トヨタ生産方式</li> <li>9 中小企業</li> <li>10 ベンチャー企業</li> <li>11 社会貢献</li> <li>12 企業リスク</li> <li>13 企業と政府</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
春学期と同じ。		春学期と同じ。	

05年度以降(春) 01~04年度(春)	企業経済論 a 企業形態論 a	担当者	井上 智弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義概要：</b> この講義は市場の構造や企業行動、政府の競争政策を分析対象とする分野であり、分析は主にミクロ経済学を用いて行われる。講義は、ミクロ経済学の基礎理論の習得を前提として、春学期は独占、寡占の市場構造に関する基礎理論の解説を行う。その際、基礎的な数学とゲーム理論を扱う。初回に受講者の数学の知識をみるためのテストを行う。第2、3回目の講義はテスト結果に基づいて行う予定であり、状況次第でそれ以降のスケジュールが変更される可能性がある。また、受講生の理解を測るために、講義中に問題演習や小テストを行う。講義は右の授業計画に沿って行う予定であるが、小テストの結果等を踏まえて、計画を一部変更する可能性はある。</p> <p><b>講義目的：</b> 基礎的な数学やゲーム理論を使って、独占の弊害や寡占市場における企業の戦略決定について説明することができるようになることを目指す。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>この講義の分析対象</li> <li>基礎的な数学ツールについて ①</li> <li>基礎的な数学ツールについて ②</li> <li>完全競争と余剰分析 ①</li> <li>完全競争と余剰分析 ②</li> <li>独占 ①</li> <li>独占 ②</li> <li>独占 ③</li> <li>ゲーム理論の初歩 ①</li> <li>ゲーム理論の初歩 ②</li> <li>寡占 ①</li> <li>寡占 ②</li> <li>寡占 ③</li> <li>まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストは指定しない。必要に応じて資料を配布する。		定期試験と講義内で行う小テストの成績で評価する(初回に行うテストの結果は評価には影響しない)。	

05年度以降(秋) 01~04年度(秋)	企業経済論 b 企業形態論 b	担当者	井上 智弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義概要：</b> 春学期をうけて、秋学期は企業の市場への参入の経済効果や企業と消費者の間の情報の非対称性、企業の戦略的行動等についての講義を行う。具体的なスケジュールは授業計画に従うが、受講者の理解に応じて、どの部分に力点を置くかなど、講義内容が一部変更される可能性もある。講義では、春学期で学ぶ独占・寡占についての基礎理論はもとより、基礎的な数学やゲーム理論も用いるため、不安のある学生は、十分な復習の上で履修することが望ましい。また、受講生の理解を測るために、講義中に問題演習や小テストを行う。講義は右の授業計画に沿って行う予定であるが、小テストの結果等を踏まえて、計画を一部変更する可能性はある。</p> <p><b>講義目的：</b> 自然独占に対する価格規制や情報の非対称性から生じる問題に対する規制など、それぞれの状況において政府が行う規制政策について説明できるようになることや、企業の戦略的行動についてゲーム理論を使って説明できるようになることを目指す。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>春学期の復習</li> <li>自然独占</li> <li>参入の経済効果 ①</li> <li>参入の経済効果 ②</li> <li>カルテルと合併 ①</li> <li>カルテルと合併 ②</li> <li>カルテルと合併 ③</li> <li>情報の非対称性と企業行動 ①</li> <li>情報の非対称性と企業行動 ②</li> <li>企業の戦略的行動 ①</li> <li>企業の戦略的行動 ②</li> <li>垂直統合と垂直的制限 ①</li> <li>垂直統合と垂直的制限 ②</li> <li>まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストは指定しない。必要に応じて資料を配布する。		定期試験と講義内で行う小テストの成績で評価する。	

01年度以降（春）	ベンチャービジネス論 a	担当者	上坂 卓郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>ベンチャー企業も一つの企業であるという基本認識に立って、企業の役割や機能をトータルに把握できるようにする。その理解の上に立ち、ベンチャー企業特有の問題や政策支援の内容などを理解していく。今年度はテキストに準拠してすすめる。</p> <p>この講義を受講してすぐ起業できるわけではない。しかし将来起業したり、独立する際に知っておくべき基礎的な知識を習得する。また起業に関心はなくても、意識の高い企業人や社会人になろうとする人は受講してほしい。他学部の学生も歓迎する。</p> <p>経験則として単位取得と講義の受講は強い正の相関関係にある。各自判断のうえ受講すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 会社とはなにか</li> <li>2 会社の誕生（1）</li> <li>3 会社の誕生（2）</li> <li>4 会社の設立</li> <li>5 会社の成長と組織</li> <li>6 会社の資金調達</li> <li>7 ベンチャー企業支援政策</li> <li>8 ベンチャー企業と知財（特許）戦略</li> <li>9 資本市場の仕組み</li> <li>10 ベンチャー企業と上場市場の活用</li> <li>11 ベンチャー企業の内部管理体制</li> <li>12 日本の起業風土</li> <li>13 ベンチャー起業家の講演</li> <li>14 まとめと課題</li> </ol> <p>※ 進捗にあわせて内容を変更する可能性がある</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：上坂卓郎『ベンチャー企業入門』中央経済社（2006）に準拠してすすめる。追加して毎回関連資料を配布する</p>		<p>定期試験を行う。なお追試、レポートは実施しないので注意すること（特に4年生）。授業中はノートをとることをすすめる</p>	

01年度以降（秋）	ベンチャービジネス論 b	担当者	上坂 卓郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>ベンチャービジネス論 a と同様だが、より専門的な話題を盛り込んだ内容とする。また最近の盛んになっている企業買収など組織再編の関連テーマについても、ベンチャー企業の成長政策の一つとして触れていく。秋学期はビジネススクールで取り扱うベンチャー企業的话题を平易に解説していくつもりである。</p> <p>今年度はテキストに準拠してすすめる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ベンチャー企業と資金繰り</li> <li>2 ベンチャーキャピタルの役割（1）</li> <li>3 ベンチャーキャピタルの役割（2）</li> <li>4 ベンチャー企業評価</li> <li>5 起業家にとっての資本政策</li> <li>6 ベンチャー企業とビジネスリスク</li> <li>7 プライベートエクイティとM&amp;A、MBO</li> <li>8 ベンチャー企業の成長戦略</li> <li>9 産業動向とベンチャー企業戦略立案</li> <li>10 ビジネスエンジェルの役割</li> <li>11 新しい出口戦略</li> <li>12 経営再起とベンチャー企業</li> <li>13 ベンチャーキャピタリストの講演</li> <li>14 まとめと課題</li> </ol> <p>※ 進捗にあわせて内容を変更する可能性がある</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：上坂卓郎『ベンチャー企業入門』中央経済社（2006）。追加して毎回関連資料を配布する</p>		<p>定期試験を行う。なお追試、レポートはないので注意すること（特に4年生）。授業中はノートをとることをすすめる</p>	

01年度以降（春）	非営利組織マネジメント論 a	担当者	高松 和幸
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義概要：非営利組織（NPO）マネジメント論では、NPOの事業・活動に関する、その運営の多様性について講義する。春学期では、授業計画にあるように、基礎的な知識習得に努める。</p> <p>NPOなどで活躍が期待される人材や組織運営に関する基礎を理解すると同時に、事例を取り上げる。NPOは地域・企業・行政によって支えられているが、その活動も多岐にわたるため、本講義の内容も多岐に亘るため、年間を通じて授業を受けることが望ましい。</p> <p>講義目標：この講義は、NPO活動を、マネジメントの視点から取り上げることで、健全な活動ができることを学ぶことにある。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. NPOとは何か：ボランティア組織・フィランソロピー・NGO・市民セクター</li> <li>2. NPOの成立：ランティア活動・NPOの萌芽</li> <li>3. NPOの成立②</li> <li>4. NPOの発展：ボランティア革命</li> <li>5. NPOの規模：構造・分類・公益法人制度</li> <li>6. NPOの規模②</li> <li>7. NPOの形態：制度・市民活動団体</li> <li>8. NPOの成立基盤：制度化・活動資金</li> <li>9. NPOの経営環境：外部環境・政府との関係</li> <li>10. NPOの経営管理：管理機構・意思決定</li> <li>11. NPOの管理手法：経営戦略・業績管理</li> <li>12. NPOの会計制度：会計書類・会計基準</li> <li>13. NPOの予算管理：予算制度・収支計算書</li> <li>14. NPOの経営：まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>適宜、プリント配布 参考：伊佐 淳著『NPOを考える』創成社、2008.</p>		<p>受講条件：bも履修すること 評価方法：出席，試験，レポートによる総合評価</p>	

01年度以降（秋）	非営利組織マネジメント論 b	担当者	高松 和幸
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義概要：非営利組織（NPO）マネジメント論では、非営利組織の事業・活動、評価に関して取り上げる。</p> <p>秋学期では、NPOで活躍が期待される人材や組織運営での事例に基づく学習と共に、NPOが地域・企業・行政によって支えられていること、その活動もフィランソロピーやボランティアと共に注目されていることを通じて、地域や社会を変えようと、ボランティアの基礎を理解するためにも、地域や社会を理解するためにも、現在のNPO活動を理解することが大切であることは言うまでもない。</p> <p>講義目標：春学期と同じ</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. NPOの業績評価</li> <li>2. NPOの経営分析</li> <li>3. NPOの業績評価方法</li> <li>4. NPOの財務と非財務情報</li> <li>5. NPOの国際比較：世界のNPO</li> <li>6. アメリカのNPO</li> <li>7. イギリスのNPO</li> <li>8. ドイツのNPO</li> <li>9. フランスのNPO</li> <li>10. 中国のNPO</li> <li>11. その他の国のNPO</li> <li>12. NPOのIT化</li> <li>13. NPOの変化・価値</li> <li>14. NPOの今後：まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>プリント配布</p>		<p>受講条件：aを履修していること 評価方法：出席，試験，レポートによる総合評価</p>	

01年度以降（春）	企業文化論 a	担当者	斉藤 善久
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>1、この授業では「企業の創業者」が持っている発想力と、それを実現する情熱・行動力を自分の体で感じ取っていきます。</p> <p>2、8人ほどのグループ・ディスカッションによりアイデアを共同で見つけていく作業が中心となります。</p> <p>3、個人の発想力を鍛えるため数回テーマを出します。レポートをまとめることで発想のヒントをつかみます。</p> <p>※2年生と3年生の受講を特に勧めます</p>		<p>1、オリエンテーション</p> <p>2、ブ레인・ストーミングのやり方</p> <p>3、いい企業とは</p> <p>4、演習</p> <p>5、発想法とは、ラディカル思考</p> <p>6、演習</p> <p>7、優れた創業者・経営者の課題解決の方法</p> <p>8、演習</p> <p>9、CSR（企業の社会的責任）、</p> <p>10、演習</p> <p>11、発想法とは、五感で感じる</p> <p>12、演習</p> <p>13、総合演習とまとめ</p> <p>14、発表と審査、表彰と講評、</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストとして『ひらめきのマジック』さいとうぜんきゅう著ボージャー社 1400円を使います</p>		<p>数回のレポート、試験による</p>	

01年度以降（秋）	企業文化論 b	担当者	斉藤 善久
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>1、企業文化を学ぶために秋期は企業の不祥事について考えます。</p> <p>犯罪や事故を起こす企業について何が問題なのか考えます。</p> <p>2、そのため企業体質、企業風土、組織心理などについて考察します。</p> <p>3、春期と秋期をつうじて、自分と企業の関係についてキャリアイメージを考えます。</p> <p>4、自分の課題を見つけ、さらにそれを解決に導くアイデアの発見の仕方を学びます。</p> <p>5、それは「自分の人生を切り開くヒント」をつかみとる練習になります</p> <p>※2年生と3年生の受講を特に勧めます</p>		<p>1、オリエンテーション</p> <p>2、課題の発見と解決の方法</p> <p>3、よくない企業とは</p> <p>4、演習</p> <p>5、企業犯罪と企業事故の原因</p> <p>6、演習</p> <p>7、発想法、異能人とは</p> <p>8、演習</p> <p>9、ラブストーリーのある企業</p> <p>10、演習</p> <p>11、アイデアを企画書に落とし込む</p> <p>12、演習</p> <p>13、総合演習とまとめ</p> <p>14、発表と審査、表彰と講評</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキストとして『ひらめきのマジック』さいとうぜんきゅう著ボージャー社 1400円を使います</p>		<p>数回のレポート、試験による</p>	

01年度以降（春）	研究・開発マネジメント a	担当者	日下 泰夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>情報ネットワーク技術、環境技術、バイオテクノロジー、新素材、ナノテクノロジー等の技術革新は、社会・経済、産業、経営、個人に大きな影響を与えています。企業の発展はこうした技術革新の原動力となる企業の研究開発（R&amp;D）によって支えられており、いかに競争力のある効果的な研究開発マネジメント・システムを構築するかは、企業経営の重大な関心事です。</p> <p>本講義では、技術革新をはじめとするイノベーションを引き起こすための研究開発マネジメントの基本的な視点を、事例をまじえて学習します。講義では最新のトピックスも出来るだけ紹介します。</p> <p>将来、社会人として新商品、新サービス、新事業の開発に関わりたいと考えている人は、技術に関わる経営の戦略的マネジメント（技術経営（MOT）：Management of Technology）の理解は必須となるでしょう。この領域では文系の方々の柔軟かつ斬新な発想を必要としています。“研究開発は理系の分野”という先入観に捉われず、文系の皆さんがこの新しい領域に積極的に挑戦されることを期待しています。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ガイダンス、企業の未来と研究開発</li> <li>2 イノベーション</li> <li>3 環境変化と研究開発マネジメント 1</li> <li>4 環境変化と研究開発マネジメント 2</li> <li>5 技術革新の潮流 1：技術の未来ロードマップ</li> <li>6 技術革新の潮流 2:技術のライフサイクルとマネジメント</li> <li>7 経営戦略と技術戦略 1</li> <li>8 経営戦略と技術戦略 2</li> <li>9 事業創造：事業のライフサイクルと技術・商品開発</li> <li>10 商品開発 1：新しいパラダイム、プロダクト・イノベーション</li> <li>11 商品開発 2:革新的な商品開発とコンセプト創造</li> <li>12 研究開発とマーケティング</li> <li>13 研究開発と人材育成</li> <li>14 企業における技術経営の取り組み（講演予定）</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：各回、講義資料を配布します。参考文献は、ガイダンス時と各章の講義時に紹介します。</p>		<p>期末試験を中心に、出席を加味して評価します。</p>	

01年度以降（秋）	研究・開発マネジメント b	担当者	日下 泰夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義目的は春期と同じ。</p> <p>秋期は、研究開発に関わる重要なトピックスについて、その現状と課題を事例をまじえて説明します。</p> <p>講義は春学期講義 a での基礎概念の履修を前提に進めます。講義では最新のトピックスを出来るだけ紹介します。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 研究開発と環境マネジメント 1：研究開発における環境マネジメントの視点</li> <li>2 研究開発と環境マネジメント 2:自動車産業の環境経営</li> <li>3 研究開発と産学協同</li> <li>4 研究開発と地域産業</li> <li>5 研究開発と知財管理 1</li> <li>6 研究開発と知財管理 2</li> <li>7 研究開発とグローバリゼーション 1</li> <li>8 研究開発とグローバリゼーション 2</li> <li>9 研究開発と情報システム 1</li> <li>10 研究開発と情報システム 2</li> <li>11 研究開発とアライアンス 1</li> <li>12 研究開発とアライアンス 2</li> <li>13 研究開発と意思決定</li> <li>14 企業における技術経営の取り組み（講演予定）</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：各回、講義資料を配布します。参考文献は各章の講義時に紹介します。</p>		<p>期末試験を中心に、出席を加味して評価します。</p>	

01年度以降（春）	会計学原理 a	担当者	内倉 滋
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義は、‘制度としての会計’の解明を目的とする。その目的のため、我が国における企業会計に関する慣習的な諸ルールを直接の分析対象に選び、その規定している内容と、それを支えている理論的な背景の紹介をしていきたい。</p> <p>講義計画は右に掲げるとおりであるが、おおむね「会計学原理 a」では、会計学の領域のうちで従来から議論されてきた伝統的な部分の概要を紹介していく予定である。</p> <p>なお、複式簿記の基本的知識を前提に議論を出発させるため、「簿記原理 a, b」を修得していること、または同等の知識のあることを履修の条件とする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 本講義の目的等</li> <li>2 テキスト第1章 会計と会計理論</li> <li>3 テキスト第2章 企業会計と関係法規</li> <li>4 テキスト第3章 企業会計原則</li> <li>5 テキスト第4章 貸借対照表</li> <li>6 テキスト第5章 損益計算書 その1</li> <li>7 テキスト第5章 損益計算書 その2: ‘顧客との契約による収益’の認識ルールについて</li> <li>8 テキスト第6章 その1: 間接法によるキャッシュ・フロー計算書の作成</li> <li>9 テキスト第6章 その2: 直接法によるキャッシュ・フロー計算書の作成</li> <li>10 テキスト第8章 有価証券</li> <li>11 テキスト第9章 固定資産</li> <li>12 テキスト第10章 固定資産の減損と時価評価</li> <li>13 テキスト第11章 繰延資産</li> <li>14 春学期の総復習……同形式の問題により、春学期末試験の予行演習</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
平井克彦・石津寿恵、『損益計算と情報開示』（白桃書房）		評価の中心は期末試験の結果である。その際には、相対評価を基本とし、絶対評価を加味したい。	

01年度以降（秋）	会計学原理 b	担当者	内倉 滋
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>「会計学原理 a」の伝統的な会計学領域に関する知識を前提として、この「会計学原理 b」では、‘連結財務諸表’，‘税効果会計’，‘外貨換算’，‘デリバティブ’といった比較的新しい問題（ないし、最近においてその制度的中身が大幅に改変された領域）を講義の対象としたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 テキスト第12章 負債</li> <li>2 テキスト第13章 引当金</li> <li>3 テキスト第14章 資本 その1: 株主持分額の中身について</li> <li>4 テキスト第14章 資本 その2: 株式報酬, ストック・オプション</li> <li>5 テキスト第14章 資本 その3: 吸収型組織再編行為について</li> <li>6 テキスト第14章 資本 その4: 剰余金の配当</li> <li>7 テキスト第14章 資本 その5: 「純資産の部」の表示, 株主資本等変動計算書</li> <li>8 テキスト第17章 連結会計 その1: ‘基本の基’</li> <li>9 テキスト第17章 連結会計 その2: 会社法のもとでの 連結精算表, 連結株主資本等変動計算書の作成</li> <li>10 テキスト第18章 税務会計</li> <li>11 テキスト第19章 税効果会計</li> <li>12 テキスト第20章 外貨換算会計</li> <li>13 テキスト第21章 デリバティブ会計</li> <li>14 秋学期の総復習……同形式の問題により、秋学期末試験の予行演習</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
「会計学原理 a」と同じ。		「会計学原理 a」と同様。	

01年度以降（春）	財務会計論 a	担当者	中村 泰將 <small>やすまさ</small>
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>企業会計の中でも、財務会計は、企業の経済的活動を貨幣でもって測定し、その結果を財務諸表にまとめて外部のステークホルダー(利害関係者)に伝達するシステムである。</p> <p>本講座の目的は、複雑な企業における財務会計の構造を、春学期 14 回、秋学期 14 回に分けて詳しく説明し、企業の経済内容を把握できるようにすることである。</p> <p>日本では、国際会計基準（IFRS という）が 2010 年 3 月期から任意適用が開始され、2012 年にわが国に IFRS を強制適用するかどうかを金融庁が決定し、適用の決定がされたならば、3、4 年の準備期間を置き、2015、6 年頃から強制適用になるといわれている。</p> <p>日本では、それに向けて会社法と金融商品取引法の法的措置の整備が現在図られつつある。世界的には、EU 域内では、2005 年から IFRS が強制適用になっており、世界でも 100 カ国以上が IFRS を適用し、また適用予定とされている。</p> <p>米国も 2011 年に IFRS を強制適用にするかどうかを判断し、2015 年にも強制適用に踏み切る予定である。</p> <p>このような状況にあって、わが国の会計基準も IFRS をできる限り受け入れて、コンバージェンス(「収斂」といい、両者の会計基準の差異を解消することをいう。)にむかって加速化している。</p>		<p>&lt; 総論 &gt;</p> <p><b>第 1 章 財務会計の基礎概念</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 会計の定義、会計の役割、会計の領域</li> <li>2. 企業会計の計算構造</li> <li>3. 企業会計の理論構造</li> <li>4. 日本の会計基準設定主体と基準設定プロセス</li> <li>5. 米国および国際会計基準の会計基準設定主体と基準設定プロセス</li> </ol> <p><b>第 2 章 財務会計制度</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>6. 日本の財務会計制度と概念フレームワーク</li> <li>7. 米国の財務会計制度と概念フレームワーク</li> <li>8. 国際会計基準の財務会計制度と概念フレームワーク</li> </ol> <p>&lt; 財務会計の構成要素 &gt;</p> <p><b>第 3 章 資産会計</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>9. 資産の概念、資産の分類、資産の評価</li> <li>10. 流動資産</li> <li>11. 〃</li> <li>12. 固定資産</li> <li>13. 〃</li> <li>14. 繰延資産</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
中村泰將編著『財務会計論』税務経理協会 参考：『会計法規集』（出版社問わず）		レポート、定期試験の総合評価	

01年度以降（秋）	財務会計論 b	担当者	中村 泰將 <small>やすまさ</small>
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講座では、このような国際会計基準の動向にも目を向けてわが国の財務会計基準を解説していくつもりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 毎回講義のレジュメを配布する。</li> <li>2. 毎回会計に関する新聞記事のトピックスを取り上げ解説する。</li> </ol> <p>講義目標、講義概要は、基本的には両学期同じである。</p> <p>&lt; 講義の範囲 &gt;</p> <p>春学期：会計の基礎概念、貸借対照表の借方 秋学期：貸借対照表の貸方、損益計算書の借方・貸方</p>		<p><b>第 4 章 負債会計</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 負債の意義、負債の分類、負債の評価</li> <li>2. 流動負債</li> <li>3. 固定負債、引当金、その他の負債</li> </ol> <p><b>第 5 章 純資産会計</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>4. 純資産の概念、分類、資本金の増減</li> <li>5. 資本剰余金、その他資本剰余金、利益剰余金、その他利益剰余金</li> <li>6. 剰余金の配当、分配可能額の算定</li> <li>7. 株主資本等変動計算書、自己株式</li> </ol> <p><b>第 6 章 損益会計</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>8. 損益会計の諸原則</li> <li>9. 収益の認識基準</li> <li>10. 費用の認識基準</li> <li>11. 損益計算書の構成</li> </ol> <p><b>第 7 章 財務諸表の表示</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>12. 会社法の計算書類・連結計算書類</li> <li>13. 金融商品取引法の財務諸表・連結財務諸表</li> <li>14. 財務報告の開示</li> </ol> <p>その他の「個別問題」は各章の関連において説明する。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
中村泰將編著『財務会計論』税務経理協会 参考：『会計法規集』（出版社問わず）		レポート、定期試験の総合評価	

01年度以降（春）	管理会計論 a	担当者	香取 徹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>日本の企業には今、経営管理における経済性・効率性が強く求められています。経済的意思決定はキャッシュフローの考え方を基本に行います。この講座では、有効なコスト削減の考え方、原価改善や生産性向上のためのコストデータの使い方、有利な製品や生産物流の方法の選び方、設備投資や事業選択、限られた資源の有効な配分などのキャッシュフロー情報の使い方をなどのケースで学習します。</p> <p>春期は、キャッシュフローによる経済的な意思決定の基本的な考え方、意思決定のタイプと判断基準についてケース・スタディをします。</p>		<p>第1週 管理会計とは？ 最近のトピックスから</p> <p>第2週 意思決定とは？ キャッシュフローとは？</p> <p>第3週 関連原価・無関連原価 (1)</p> <p>第4週 関連原価・無関連原価 (2)</p> <p>第5週 貢献利益とは？</p> <p>第6週 赤字製品、黒字製品</p> <p>第7週 減価償却費はキャッシュフロー</p> <p>第8週 Constraints の話。</p> <p>第9週 KAIZEN(改善)の効果。</p> <p>第10週 意思決定の問題タイプ。</p> <p>第11週 意思決定の問題タイプ(1) 独立案</p> <p>第12週 意思決定の問題タイプ(2) 排反案</p> <p>第13週 意思決定の問題タイプ(3) 混合案</p> <p>第14週 意志決定のまとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
『キャッシュフロー管理会計』伊藤・香取、中央経済社		定期試験	

01年度以降（秋）	管理会計論 b	担当者	香取 徹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>日本の企業には今、経営管理における経済性・効率性が強く求められています。経済的意思決定はキャッシュフローの考え方を基本に行います。この講座では、有効なコスト削減の考え方、原価改善や生産性向上のためのコストデータの使い方、有利な製品や生産物流の方法の選び方、設備投資や事業選択、限られた資源の有効な配分などのキャッシュフロー情報の使い方をなどのケースで学習します。</p> <p>秋期は、フリー・キャッシュフローと企業価値、投資計画の評価基準について検討します。Excel を使ってキャッシュフロー計算書やシミュレーション・モデルを作成して、分析します。</p>		<p>第1週 管理会計の最近のトピックス</p> <p>第2週 フリー・キャッシュフロー 1.資金の時間価値</p> <p>第3週 現在価値と年価(NAV)</p> <p>第4週 企業価値 FCFと企業価値</p> <p>第5週 連結キャッシュフロー計算書</p> <p>第6週 フリーキャッシュフロー</p> <p>第7週 在庫投資とキャッシュフロー</p> <p>第8週 リストラとキャッシュフロー</p> <p>第9週 事業計画から投資案の評価まで</p> <p>第10週 Excel による実習 1</p> <p>第11週 Excel による実習 2</p> <p>第12週 投資案の評価基準</p> <p>第13週 投資の業績評価 EVA</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
『キャッシュフロー管理会計』伊藤・香取、中央経済社		定期試験	

01年度以降（春）	社会会計論 a	担当者	湯田 雅夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>大企業、公営企業で普及している環境経営、環境会計を社会会計の視点から講義します。</p> <p>環境経営、環境会計および CSR 会計は、21 世紀の企業経営において必要不可欠のものです。環境経営と環境会計および CSR 会計の内容を出来るだけわかりやすく、講義していきます。</p> <p>皆さんも、新聞や雑誌で取り上げている環境問題に関する記事を出来るだけ読むように心がけてください。</p> <p><b>「社会会計論 a」と「社会会計論 b」は、連続した講義なので、「春学期」「秋学期」共履修すること。</b></p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション</li> <li>2 社会会計、環境会計、環境会計の学び方、研究対象</li> <li>3 環境経営、環境会計、CSR 会計の研究手法と関連領域</li> <li>4 人類の歴史と環境問題</li> <li>5 地球環境問題ならびに国際的取組み</li> <li>6 国連の環境への取り組み①</li> <li>7 国連の環境への取り組み②</li> <li>8 循環型経済社会構築と諸課題</li> <li>9 持続可能性と企業活動の 3 つの領域</li> <li>10 環境会計の体系 3 つのアプローチ</li> <li>11 環境会計アプローチの事例①</li> <li>12 環境会計アプローチの事例②</li> <li>13 環境会計アプローチの事例③</li> <li>14 環境会計アプローチに対する批判的考察</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>湯田雅夫『講義ノート』 参考文献はその都度指示します。</p>		<p>期末試験により評価します。</p>	

01年度以降（秋）	社会会計論 b	担当者	湯田 雅夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>春学期に引き続き、環境経営、環境会計および CSR 会計の具体的内容を講義します。</p> <p>物量計算としての環境負荷計算と貨幣計算としての環境原価計算、そしてその組み合わせから環境効率を明らかにすることが出来ます。地球の環境容量との関連で、この環境効率を高めることは、大変重要です。</p> <p>皆さん一人一人は、この講義で得た知識と技術を、是非、社会で実践してください。</p> <p><b>「社会会計論 a」と「社会会計論 b」は、連続した講義なので、「春学期」「秋学期」共履修すること。</b></p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 秋学期オリエンテーション</li> <li>2 環境負荷計算 物量計算</li> <li>3 環境原価計算 貨幣計算</li> <li>4 環境原価と環境負荷を統合する環境経営</li> <li>5 国際標準 ISO と EMAS の内容と課題</li> <li>6 環境監査 内部監査と外部監査 環境審査員の役割</li> <li>7 環境効率 環境効率革命に向けて</li> <li>8 環境効率 企業の事例</li> <li>9 環境報告書の基本構造ならびに入手方法</li> <li>10 環境報告書の評価方法</li> <li>11 CSR および CSR 会計</li> <li>12 持続可能性報告書および CSR 報告書</li> <li>13 授業のまとめと講評</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>湯田雅夫『講義ノート』 参考文献はその都度指示します。</p>		<p>期末試験により評価します。</p>	

01 年度以降（春）	原価計算論 a	担当者	齋藤 正章
<b>講義目的, 講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>○講義の目的</p> <p>原価計算には、大きく分けて、財務会計目的と管理会計目的という2つの目的があります。</p> <p>財務会計目的のための原価計算を「制度原価計算」といいます。これは財務諸表作成のために必要な原価数値を計算する手続き全般を指します。</p> <p>他方、管理会計目的の原価計算は、経営管理のための原価計算で、企業の生産システム、製造技術、情報技術などの進歩や市場環境の変化に伴い、従来のシステムからの変革を迫られています。</p> <p>本講義は、この2つの視点から企業における原価計算の役割や手続きについて理解を深めることを目標としています。</p> <p>○講義概要</p> <p>「原価計算基準」にもとづく原価計算制度の枠内の個別原価計算を中心に講義を行います。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 原価計算総説</li> <li>2. 原価とは何か</li> <li>3. 原価計算の基礎手続き</li> <li>4. 原価の費目別計算（1）材料費</li> <li>5. 原価の費目別計算（2）労務費・経費</li> <li>6. 原価の費目別計算（3）製造間接費</li> <li>7. 原価の部門別計算（1）第1次集計</li> <li>8. 原価の部門別計算（2）第2次集計</li> <li>9. 原価の部門別計算（3）第3次集計</li> <li>10. 個別原価計算（1）</li> <li>11. 個別原価計算（2）</li> <li>12. 個別原価計算（3）</li> <li>13. 活動基準原価計算（1）</li> <li>14. 活動基準原価計算（1）</li> </ol>	
<b>テキスト, 参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
『原価計算』奥村輝夫・齋藤正章・井出健二郎, 新世社, 2008年.		出席 20%, 定期試験の結果 80%で評価します。	

01 年度以降（秋）	原価計算論 b	担当者	齋藤 正章
<b>講義目的, 講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>○講義の目的</p> <p>原価計算には、大きく分けて、財務会計目的と管理会計目的という2つの目的があります。</p> <p>財務会計目的のための原価計算を「制度原価計算」といいます。これは財務諸表作成のために必要な原価数値を計算する手続き全般を指します。</p> <p>他方、管理会計目的の原価計算は、経営管理のための原価計算で、企業の生産システム、製造技術、情報技術などの進歩や市場環境の変化に伴い、従来のシステムからの変革を迫られています。</p> <p>本講義は、この2つの視点から企業における原価計算の役割や手続きについて理解を深めることを目標としています。</p> <p>○講義概要</p> <p>「原価計算基準」にもとづく原価計算制度の枠内の総合原価計算、標準原価計算、枠外の直接原価計算および CVP 分析を中心に講義を行います。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 総合原価計算（1）概説</li> <li>2. 総合原価計算（2）平均法・先入先出法</li> <li>3. 総合原価計算（3）後入先出法</li> <li>4. 総合原価計算（4）工程別計算</li> <li>5. 総合原価計算（5）等級別計算</li> <li>6. 総合原価計算（6）組別計算</li> <li>7. 総合原価計算（7）副産物と連産品</li> <li>8. 中間試験</li> <li>9. 標準原価計算（1）</li> <li>10. 標準原価計算（2）</li> <li>11. 直接原価計算（1）</li> <li>12. 直接原価計算（2）</li> <li>13. CVP 分析</li> </ol>	
<b>テキスト, 参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
『原価計算』奥村輝夫・齋藤正章・井出健二郎, 新世社, 2008年.		出席 20%, 中間試験 40%, 定期試験の結果 40%で評価します（ <u>秋学期は中間試験があるので注意して下さい。</u> ）	

01年度以降（春）	会計監査論 a	担当者	福菌 健
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(講義目的)</p> <p>1998年以降、財務諸表の透明性や国際的な比較可能性の確保を企図した会計ビックバンと称した会計制度の変革も、昨今のIFRSのコンバージェンスからアドプションへの流れで一応の結論を見ようとしている。</p> <p>また、それらと軌を一にして、ここ数年ディスクロージャーの信頼性を脅かす問題が複数明らかになったこともあり、監査制度の変革もすすめられ、内部統制監査制度の導入等新たな制度・視点での実務が推進されている。</p> <p>公認会計士・監査法人による財務諸表監査制度は、財務諸表の適正表示についての意見を表明することを通じて投資家保護を目的としているが、それを通じて証券市場の信頼性の確立という重大な目的を有している。</p> <p>本講義では、理論的な背景を説明するが、実際の監査実務の事例をもとに、監査基準及び監査手続の理解を深めることを目的とする。また、後半では、監査事例研究として、実際の監査事例について紹介とシミュレーション等を行う。</p> <p>(講義概要)</p> <p>本講義は、基本的にはテキストを使用する。このため、予習を確実にすることが望まれる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 財務諸表監査の意義と目的</li> <li>2. 財務諸表監査の生成と発展、日本における監査制度の発展</li> <li>3. 監査基準、監査の目的と二重責任</li> <li>4. 監査人の資質と適格性</li> <li>5. 監査の実施～リスク・アプローチ</li> <li>6. 監査の実施～監査計画と内部統制</li> <li>7. 監査の実施～監査調書</li> <li>8. 監査の実施～監査判断と監査証拠、合理的保証概念</li> <li>9. 監査の実施～監査手続1</li> <li>10. 監査の実施～監査手続2</li> <li>11. 監査報告～監査報告書の内容</li> <li>12. 監査報告～監査意見</li> <li>13. 監査事例研究1</li> <li>14. 監査事例研究2</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：小関・柳田著『監査総論』東京経済情報出版</p> <p>サブテキスト：赤岩・福菌著『監査論の基礎～理論と実務』DTP出版</p>		出席（30点）と試験（70点）による。	

01年度以降（秋）	会計監査論 b	担当者	福菌 健
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>(講義目的)</p> <p>1998年以降、財務諸表の透明性や国際的な比較可能性を企図した会計制度の変革や、昨今のIFRSのコンバージェンスからアドプションへの流れ等会計基準の国際標準化への流れが着実に進んでいる。</p> <p>また、監査制度も、ここ数年ディスクロージャーの信頼性を脅かす問題が複数明らかになったこともあり、内部統制監査制度の導入等新たな制度・視点での実務が推進されている。</p> <p>公認会計士・監査法人による財務諸表監査制度は、財務諸表の適正表示についての意見を表明することを通じて投資家保護を目的としているが、それを通じて証券市場の信頼性の確立という重大な目的を有している。</p> <p>本講義では、前期に習得した知識をもとに監査報告の内容を理解する。現在では、企業だけでなく、被監査組織体や監査対象も拡大している。そこで、非営利法人等の監査等関連問題も幅広く紹介することとする。また、後半では、監査事例研究として、実際の監査事例について紹介とシミュレーション等を行う。</p> <p>(講義概要)</p> <p>本講義は、基本的にはテキストを使用する。ただし7回目以降は別途参考文献を指定する場合がある。前期に引き続き予習を確実にすることが望まれる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 監査関連問題～四半期レビュー</li> <li>2. 監査関連問題～内部統制監査、システム監査</li> <li>3. 監査関連問題～連結財務諸表監査</li> <li>4. 監査関連問題～内部監査と監査役監査</li> <li>5. 監査関連問題～監査委員監査と外部監査人監査、非営利法人等に関する監査</li> <li>6. 監査関連問題～会社法監査と会計参与</li> <li>7. 監査関連問題～監査の国際的動向及び監査周辺の職業</li> <li>8. 監査事例研究3</li> <li>9. 監査事例研究4</li> <li>10. 監査事例研究5</li> <li>11. 監査事例研究6</li> <li>12. 監査事例研究7</li> <li>13. 監査事例研究8</li> <li>14. 監査事例研究9</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：小関・柳田著『監査総論』東京経済情報出版</p> <p>サブテキスト：赤岩・福菌著『監査論の基礎～理論と実務』DTP出版</p>		出席（30点）と試験（70点）による。	

01年度以降（春）	税務会計論 a	担当者	山田 浩一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では企業課税の中心となる法人税の考え方を企業会計との対比を行いながら概観する。</p> <p>企業の財政状態、経営成績、キャッシュフローの状況等を適切に表現することを使命とする企業会計に対して、税務会計としては、その中心的役割として企業が負担する法人税とその計算基礎である課税所得の計算に焦点が当てられる。</p> <p>他方、法人税が会計処理に与える影響を無視しては会計実践として成立せず、租税負担が経営に与える影響を考慮しつつ会計上の諸要請に伝えていくことが必要である。</p> <p>財務会計の考え方と税務の考え方の違いを具体的な項目に即して解説していきたいと考える。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 制度会計の構造</li> <li>2. 法人税法の課税所得の計算構造</li> <li>3. 販売・請負等の収益</li> <li>4. 棚卸資産と売上原価、</li> <li>5. 有価証券の譲渡損益および時価評価損益</li> <li>6. 固定資産と減価償却、特別償却</li> <li>7. 繰延資産の償却、</li> <li>8. 営業費用と損失、営業外収益</li> <li>9. 引当金と準備金</li> <li>10. 圧縮記帳と圧縮損</li> <li>11. 借地権・国際課税・リース取引</li> <li>12. 欠損金等</li> <li>13. 資本金等の額と利益積立金</li> <li>14. 税務上の P/L と B/S</li> </ol> <p>上記内容については講義の進行により変更します。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
『税務会計要論』中田信正（同文館出版社）『会計税務便覧』日本公認会計士協会東京会（清文社）他関連法規・通達集		授業出席および定期試験によって評価する。	

01年度以降（秋）	税務会計論 b	担当者	山田 浩一
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義では春期で行った企業課税と会計制度の考え方を踏まえ企業課税と会計制度をめぐる様々な論点を概観する。</p> <p>企業の財政状態、経営成績、キャッシュフローの状況等を適切に表現することを使命とする企業会計が国際会計基準の進展等に伴い、大幅に変化しつつある状況の中にあるのに対して、公平な企業課税を実現するための租税制度は国家等の財政制度を支えるため、保守的な中にも徐々に対応を進めている。これらの動向を多方面から把握したい。</p> <p>会計処理の法人税に与える影響を無視しては会計実践は成立しない。租税負担が経営に与える影響を考慮しつつ会計上の諸要請に伝えていくことが必要である。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義概要、対象と方法</li> <li>2. 租税制度の意義</li> <li>3. 租税制度の沿革</li> <li>4. 企業課税の体系</li> <li>5. 非営利法人課税</li> <li>6. 国際課税</li> <li>7. 企業組織の変更と課税</li> <li>8. 企業集団課税</li> <li>9. 税効果会計</li> <li>10. 消費税</li> <li>11. 租税の確定と徴収</li> <li>12. 納税者の権利救済</li> <li>13. 税務行政組織</li> </ol> <p>上記内容については講義の進行により変更します。</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
『税務会計要論』中田信正（同文館出版社）『会計税務便覧』日本公認会計士協会東京会（清文社）他関連法規・通達集		出席および定期試験の成績により評価する。	

01年度以降（春）	経営分析論 a	担当者	百瀬 房徳
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経営分析は、財務諸表分析として発展してきた。そして、このためには、統一した財務諸表の作成方法を促進させてきた。財務諸表の分析の始まりは、金融機関が貸付金の返済能力を診断したところにある。その後、証券市場では、収益性の分析を進展させてきた。現在では、特定の実体（例えば企業）の評価または診断、当該実体の属する産業の動向、国民経済の動向を分析するまでに発展している。歴史的発展過程をふまえる形で、経済環境と分析技法の二面により考察し、全体像の理解を深めることにする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 経営分析の現代における意義</li> <li>2 米国の経済環境における手形市場の形成過程</li> <li>3 手形市場、特に手形の割引に際しての銀行から見た信用分析の形成過程。</li> <li>4 信用分析の側面から見た財務諸表 特に貸借対照表を中心に</li> <li>5 信用分析における2対1の原則から体系的な分析への過程</li> <li>6 信用分析におけるキャッシュフローの意義</li> <li>7 信用分析のケーススタディ ウォール、ブリス</li> <li>8 信用分析のケーススタディ ギルマン、ウォール、シュマルツ</li> <li>9 信用分析の新展開</li> <li>10 収益性の分析および、その他の分析への発展</li> <li>11 生産性の分析とその応用</li> <li>12 経営分析の意義とその限界</li> <li>13 経営分析の主体とその目的</li> <li>14 経営分析の種類</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
前林 和寿「経営分析の基礎」森山書店		テスト	

01年度以降（秋）	経営分析論 b	担当者	百瀬 房徳
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>代表的企業の有価証券報告書総覧に記載されている財務諸表を資料として、体系的な分析をする。特に、安全性、収益性、生産性について、解説しながら分析数値を算出する。そして、この分析数値が何を意味するかを考察する。この分析をテーマごとにレポートを完成させ、提出してもらおう。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 全般の解説</li> <li>2 安全性の分析(1) 比率分析 (レポート提出)</li> <li>3 安全性の分析(2) 資金移動表の解説</li> <li>4 安全性の分析(3) 資金移動表の作成 (レポート提出)</li> <li>5 収益性の分析(1) 各種資本利益率</li> <li>6 収益性の分析(2) 資本利益率とレバレッジ効果</li> <li>7 収益性の分析(3) 売上高利益率 (レポート提出)</li> <li>8 収益性の分析(4) 利益増減の原因分析 (レポート提出)</li> <li>9 生産性の分析(1) 付加価値の意義</li> <li>10 生産性の分析(2) 付加価値の計算と数値の意味</li> <li>11 生産性の分析(3) 付加価値表の作成 (レポート提出)</li> <li>12 損益分岐点分析(1) 損益分岐点と意義</li> <li>13 損益分岐点分析(2) 損益分岐点の計算と数値の意味</li> <li>14 損益分岐点分析(3) 損益分岐点の計算 (レポート提出)</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
前林 和寿「経営分析の基礎」森山書店		テスト	

01年度以降（春）	上級簿記（商業）a	担当者	細田 哲
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義の目標</p> <p>「簿記原理」履修者あるいは「日商簿記検定」3級以上の合格者が、複式簿記に関するさらに高度の知識・技術を習得すること。また、近年続々と公表されている新会計基準の内容について理解を深めることを目標とする。</p> <p>講義概要</p> <p>春学期講義の内容</p> <p>主たる講義テーマを列挙すると、次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○銀行勘定調整表の作成</li> <li>○手形取引の記帳</li> <li>○特殊商品売買取引に関する記帳</li> <li>○株式会社会計</li> <li>○本支店会計</li> <li>○帳簿組織</li> </ul>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「1.銀行勘定調整表の作成」</li> <li>2. 「2.手形取引の記帳(1)」 <ul style="list-style-type: none"> <li>a)手形裏書譲渡・割引に関する偶発債務についての記帳</li> </ul> </li> <li>3. 「手形取引の記帳(2)」 <ul style="list-style-type: none"> <li>a)手形裏書譲渡・割引に関する偶発債務についての記帳</li> <li>b)荷為替手形</li> </ul> </li> <li>4. 「3.特殊商品売買取引(1)」 <ul style="list-style-type: none"> <li>a)未着品売買、b)委託販売、c)受託販売</li> </ul> </li> <li>5. 「特殊商品売買取引(2)」 <ul style="list-style-type: none"> <li>a)未着品売買、b)委託販売、c)受託販売</li> </ul> </li> <li>6. 「特殊商品売買取引(3)」 d)割賦販売</li> <li>7. 「4.株式会社会計(1)」 <ul style="list-style-type: none"> <li>a)株式会社の資本金、b)資本剰余金、c)利益剰余金</li> </ul> </li> <li>8. 「株式会社会計(2)」 <ul style="list-style-type: none"> <li>d)剰余金の配当など e)社債の発行、利払、償還</li> </ul> </li> <li>9. 「株式会社会計(3)」 <ul style="list-style-type: none"> <li>f)繰延資産、g)引当金、h)法人税等、i)会社の合併</li> </ul> </li> <li>10. 「5.本支店会計(1)」 <ul style="list-style-type: none"> <li>a)本店集中会計制度と支店独立会計制度、</li> <li>b)支店分散会計制度と本店集中計算制度</li> </ul> </li> <li>11. 「5.本支店会計(2)」 <ul style="list-style-type: none"> <li>c)未達事項の整理、d)内部利益の控除と合併財務諸表</li> </ul> </li> <li>12. 「5.本支店会計(3)」 <ul style="list-style-type: none"> <li>c)未達事項の整理、d)内部利益の控除と合併財務諸表</li> </ul> </li> <li>13. 「6.帳簿組織(1)」 a)普通仕訳帳と特殊仕訳帳</li> <li>14. 「6.帳簿組織(2)」 b)伝票式会計</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
TAC 簿記検定講座 「合格テキスト日商簿記2級商業簿記」(TAC 出版)		期末試験の結果による。	

01年度以降（秋）	上級簿記（商業）b	担当者	細田 哲
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>秋学期講義の内容</p> <p>主たる講義テーマを列挙すると、次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○リース会計</li> <li>○デリバティブ取引についての会計</li> <li>○退職給付会計</li> <li>○外貨換算会計</li> <li>○税効果会計</li> <li>○純資産（資本）についての会計</li> </ul>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「7.リース会計(1)」</li> <li>2. 「7.リース会計(2)」</li> <li>3. 「8.デリバティブ取引についての会計(1)」</li> <li>4. 「8.デリバティブ取引についての会計(2)」</li> <li>5. 「8.デリバティブ取引についての会計(3)」</li> <li>6. 「9.退職給付会計(1)」</li> <li>7. 「9.退職給付会計(2)」</li> <li>8. 「10.外貨換算会計(1)」</li> <li>9. 「10.外貨換算会計(2)」</li> <li>10. 「10.外貨換算会計(3)」</li> <li>11. 「11.税効果会計(1)」</li> <li>12. 「11.税効果会計(2)」</li> <li>13. 「11.税効果会計(3)」</li> <li>14. 「12.純資産（資本）についての会計」</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
TAC 簿記検定講座 「合格テキスト 日商簿記1級商業簿記会計学Ⅱ,Ⅲ」 (TAC 出版)		期末試験の結果による。	

01年度以降(春)	上級簿記(工業)a	担当者	香取 徹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この上級簿記論は、日商簿記検定2級の試験範囲のうち<u>工業簿記</u>を1年間かけて完全に制覇することを目的としています。日商簿記検定の2級の試験は、商業簿記と工業簿記の2種類の簿記の検定試験です。工業簿記は製造業で行われる簿記のことで、原価計算や管理会計論の基礎として重要な技術であるので、是非習得してほしいと思います。</p> <p>簿記は難しいものではありませんが、技術ですから、身につけるためには、練習が必要です。そのため、毎回の講義では、一つずつ項目を説明し例題の解説をしてから講義に合わせてトレーニングを練習します。講義中に練習しながら質問を受けていきます。</p>		<p>第1週 ガイダンス</p> <p>第2週 テーマ1 工業簿記の基礎</p> <p>第3週 テーマ2 工業簿記の勘定連絡</p> <p>第4週 テーマ3 材料費(1)</p> <p>第5週 テーマ4 材料費(2)</p> <p>第6週 テーマ5 労務費(1)</p> <p>第7週 テーマ6 労務費(2)</p> <p>第8週 テーマ7 経費</p> <p>第9週 テーマ8 個別原価計算(1)</p> <p>第10週 テーマ9 個別原価計算(2)</p> <p>第11週 テーマ10 部門別個別原価計算(1)</p> <p>第12週 テーマ11 部門別個別原価計算(2)</p> <p>第13週 同上</p> <p>第14週 練習問題</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>合格テキスト日商簿記2級 工業簿記 TAC 出版</p> <p>合格トレーニング日商簿記2級 工業簿記 TAC 出版</p>		定期試験 90、トレーニング 10	

01年度以降(秋)	上級簿記(工業)b	担当者	香取 徹
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この上級簿記論は、日商簿記検定2級の試験範囲のうち<u>工業簿記</u>を1年間かけて完全に制覇することを目的としています。日商簿記検定の2級の試験は、商業簿記と工業簿記の2種類の簿記の検定試験です。工業簿記は製造業で行われる簿記のことで、原価計算や管理会計論の基礎として重要な技術であるので、是非習得してほしいと思います。</p> <p>簿記は難しいものではありませんが、技術ですから、身につけるためには、練習が必要です。そのため、毎回の講義では、一つずつ項目を説明し例題の解説をしてから講義に合わせてトレーニングを練習します。講義中に練習しながら質問を受けていきます。</p>		<p>第1週 テーマ12 総合原価計算(1)</p> <p>第2週 テーマ13 総合原価計算(2)</p> <p>第3週 テーマ14 総合原価計算(3)</p> <p>第4週 テーマ15 総合原価計算(4)</p> <p>第5週 テーマ16 総合原価計算(5)</p> <p>第6週 テーマ17 財務諸表</p> <p>第7週 テーマ18 標準原価計算(1)</p> <p>第8週 テーマ19 標準原価計算(2)</p> <p>第9週 同上</p> <p>第10週 テーマ20 直接原価計算(1)</p> <p>第11週 テーマ21 直接原価計算(2)</p> <p>第12週 同上</p> <p>第13週 テーマ22 本社工場会計</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>合格テキスト日商簿記2級 工業簿記 TAC 出版</p> <p>合格トレーニング日商簿記2級 工業簿記 TAC 出版</p>		定期試験 90,プリントとトレーニング 10	

01年度以降（春）	経営数学 a	担当者	本田 勝
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義は「経営数学」という名前になってはいるが、経済学や経営学とその周辺の学問を学ぶにあたって必要な数学の基本的な部分を習得することを目的とする。</p> <p>回帰分析の手法や目的関数の最適化などを行うには微分や行列の概念が必要であるし、産業構造の把握に欠かせない産業連関分析にも行列論の概念が使われる。</p> <p>講義ではテキストを中心に進めるが、プリントを配布することもある。参考書については講義の際に紹介する。</p> <p>また理解を深めてもらうために、受講者自身の演習を取り入れたり、受講者の黒板での演習もしてもらう。</p> <p>なおこの講義では、数式処理ソフトを用いてコンピュータによる考え方の提示も取り入れる予定である。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 講義をはじめるとにあたって</li> <li>2 ベクトルの演算</li> <li>3 行列の定義と演算</li> <li>4 逆行列</li> <li>5 行列の基本変形について</li> <li>6 連立方程式を解く 1</li> <li>7 連立方程式を解く 2</li> <li>8 ここまでのまとめと演習</li> <li>9 行列式の定義と演算 1</li> <li>10 行列式の定義と演算 2</li> <li>11 行列式を用いて連立方程式を解く</li> <li>12 固有値と固有ベクトル</li> <li>13 固有値の応用</li> <li>14 ここまでのまとめと演習</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
石田 望 ほか『経済・経営のための基礎数学 新版』実教出版		演習、レポート、出席調査および定期試験による総合評価	

01年度以降（秋）	経営数学 b	担当者	本田 勝
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
経営数学 a と同じ		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 講義を始めるにあたって</li> <li>2 関数、数列の極限</li> <li>3 特殊な関数</li> <li>4 微分の定義</li> <li>5 微分法</li> <li>6 微分のまとめと演習</li> <li>7 微分の応用（極大極小）</li> <li>8 関数の最適化と偏微分</li> <li>9 条件付きの極大極小問題</li> <li>10 差分と微分</li> <li>11 微分方程式とその応用</li> <li>12 不定積分</li> <li>13 定積分と面積</li> <li>14 積分のまとめと演習</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
石田 望 ほか『経済・経営のための基礎数学 新版』実教出版		演習、レポート、出席調査および定期試験による総合評価	

01年度以降（春）	応用統計学 a	担当者	本田 勝
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義では「統計学」で学んだ1変量統計学の知識をもとにして、多変量統計解析の考え方を習得する。</p> <p>多変量統計解析とは、お互いに何らかの関係を持つ多変量データを用いて、その背後にある総合特性を探り、判断あるいは評価の道具に利用することである。この解析にはコンピュータの利用が不可欠であり、本講義では最初はEXCEL統計関数を使用するが、そのあとは今年度から情報センターに導入されたSPSSというプログラムパッケージを使用する。</p> <p>受講者は<u>統計学の既習者</u>に限るし、<u>コンピュータの操作はもちろんのことEXCELについても熟達している</u>必要がある。したがって<u>安易な気持ちで履修しないで欲しい</u>。<u>最初の講義ではガイダンスを行なうので、これに出席しない受講希望者には受講を許可しないこともある。</u></p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 多変量解析とは何か（ガイダンス）。</li> <li>2 データの入力とEXCEL関数。</li> <li>3 SPSSでのデータ入力と基本統計量。</li> <li>4 グラフおよび度数分布表、散布図の作成。</li> <li>5 データの行列表現。</li> <li>6 回帰分析の考え方（単回帰分析）。</li> <li>7 例題による単回帰分析。</li> <li>8 回帰係数の評価方法。</li> <li>9 回帰分析における推定と検定</li> <li>10 重回帰分析の考え方。</li> <li>11 例題による重回帰分析。</li> <li>12 分析結果の回帰係数の検討。</li> <li>13 回帰分析演習（結果の解釈）</li> <li>14 実例データを各自用意し、演習を行う。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
未定 講義時に指示		定期試験、レポートおよび出席調査による総合評価	

01年度以降（秋）	応用統計学 b	担当者	本田 勝
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>応用統計学 a と同じ</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 主成分分析とは。</li> <li>2 多変量データの主成分分析の考え方。</li> <li>3 実例データを用いた例題と主成分の解釈-1。</li> <li>4 実例データを用いた例題と主成分の解釈-2。</li> <li>5 実例データを各自用意し、演習を行う。</li> <li>6 主成分分析結果の解釈および検討。</li> <li>7 判別分析とは。</li> <li>8 多変量データの判別分析の考え方。</li> <li>9 実例データによる多変量判別分析の演習。</li> <li>10 実例データを各自用意し、演習を行なう。</li> <li>11 時系列データの分析-1。</li> <li>12 時系列データの分析-2。</li> <li>13 時系列データを各自用意し、演習を行なう。</li> <li>14 クラスタ分析とは。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
未定 講義時に指示		定期試験、レポートおよび出席調査による総合評価	

01年度以降（春）	標本調査論 a	担当者	松井 敬
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>新聞、TVなどのメディア、官庁、企業など様々な機関から私たちの生活や社会にかかわる数多くの調査結果とその分析が公表されています。多くの場合、それらはあたかも私たちの総意であるかのように扱われていますが、調査の実態はどんなもののでしょうか。本講義では抽出の方法という観点から標本調査の問題点を整理してみます。</p> <p>（注）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・数値計算用の数式はかなり多く、演習も面倒な内容のものが多い。それらを厭わない学生の受講を望みます。</li> <li>・受講希望者は必ず第1回の講義から出席のこと。</li> <li>・できるだけ現実性を高めるため、理論内容を演習で補完しています。そのため、出席と演習への貢献を大きく評価するので、受講を考える学生はその点に十分留意しておいてください。</li> </ul>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義概要</li> <li>2. 標本調査とは何か、その意味や方法、問題点など。</li> <li>3. 良いサンプルとは何か、そのための歴史的な試み。</li> <li>4. 母集団と標本の枠組み。無作為抽出法の意味。</li> <li>5. 単純無作為抽出法と標本のつくり方。乱数。</li> <li>6. 推定量と標本分布。推定量の性質。</li> <li>7. 応用事例。</li> <li>8. 母平均と母集団総計の推定量。誤差の評価。</li> <li>9. 標準誤差、推定量の精度、推定量の相互比較。</li> <li>10. 標本の大きさを決める際の考え方。</li> <li>11. 系統抽出法。意味と方法。推定量とその分散。</li> <li>12. 系統抽出法が有効な事例。他の抽出法との関連。</li> <li>13. 応用事例。</li> <li>14. 抽出法のまとめ、相互比較。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>プリントを配布。</p> <p>参考書：松井敬『標本調査論』、内田老鶴圃。</p>		<p>講義中の演習と出席。期末のレポート。</p>	

01年度以降（秋）	標本調査論 b	担当者	松井 敬
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義の目的は、「標本調査論 a」で述べたことと同じです。本講義でも、現在実際に行われている幾つかの抽出法を取り上げ、その方法や特徴を説明していきます。</p> <p>基本的な概念や用語などの説明はすでに「標本調査論 a」で済んでいる上、春・秋学期間の講義の接続性も高いので、「標本調査論 b」のみの受講は「a」の基本的な内容について十分に理解しておく必要があります。</p> <p>受講希望者は必ず第1回の講義から出席のこと。また、演習も多く、出席と演習への貢献を大きく評価するので受講を考える学生はその点に十分留意しておいてください。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 講義概要、抽出法の概要。</li> <li>2. 抽出法の考え方と方法。</li> <li>3. 層化無作為抽出法。構造模型。抽出の方法。</li> <li>4. 同上。比例配分と最適配分。誤差評価と比較。</li> <li>5. 層化抽出法における層の作り方、層の数。</li> <li>6. 層化抽出法で、調査項目が複数個の場合。</li> <li>7. 比推定の考え方と推定量。抽出法の実際。</li> <li>8. 回帰推定の考え方と実際。抽出法の例。</li> <li>9. 抽出確率が一定でない抽出法。究極の抽出法は？</li> <li>10. 1段クラスターサンプリング。</li> <li>11. 2段クラスターサンプリング。</li> <li>12. 同上、1段目が等確率と確率比例の場合。</li> <li>13. 標本調査関連のQ &amp; A。（期間中適宜）</li> <li>14. 標本調査論のまとめ。課題。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>プリントを配布。</p> <p>参考書：松井敬『標本調査論』、内田老鶴圃。</p>		<p>講義中の演習と出席。期末のレポート。</p>	

01年度以降(春)	データベース論 a	担当者	堀江 郁美
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>はじめに、データベースの歴史を概観し、データベースの仕組みを学習する。</p> <p>その後、関係データベースのもっとも単純な例として、表計算ソフト(MS-Excel)のデータベース機能を利用し、実習をしながらデータベースおよびその検索の基礎を学ぶ。</p> <p>実際のデータとして国勢調査の結果の人口情報と、百人一首を利用し、それらの取り扱いを通じて数値中心のデータベースと文字列中心のデータベースの扱いの基礎を学ぶ。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 データベース理論(1)：データベース概観</li> <li>2 データベース理論(2)：データモデル(1)</li> <li>3 データベース理論(3)：データモデル(2)</li> <li>4 データベース理論(4)：データベースの三層スキーマ</li> <li>5 データベース理論(5)：データベース管理システム</li> <li>6 データベース実習(1)：MS-Excelの基礎知識</li> <li>7 データベース実習(2)：レコードの分類と集計</li> <li>8 データベース実習(3)：レコードの抽出</li> <li>9 データベース実習(4)：論理関係、比較・照合関係</li> <li>10 データベース実習(5)：条件検索(1) 文字列データの条件設定</li> <li>11 データベース実習(6)：条件検索(2) 数値データの条件設定</li> <li>12 データベース実習(7)：条件検索演習</li> <li>13 データベース実習(8)：クロス集計</li> <li>14 総合問題、まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：前田、和高、石田、松山、高柳共著『Windows Vistaと情報活用・MS - Office2007 対応』共立出版、2009</p> <p>参考書：鈴木健司『データベースがわかる本』オーム社、1998</p>		出席、定期試験、レポートを加味して評価する。	

01年度以降(秋)	データベース論 b	担当者	堀江 郁美
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>現在最も普及している関係データベースに焦点をあて、データベースの理論と実践を学習する。</p> <p>理論としては、関係データベースの特徴からはじめ、順に、関係代数やデータ構造、問い合わせ言語 SQL について学習する。</p> <p>実践としては、MS-Access を使用し、「データベース論 a」で MS-Excel 上に作成したデータを用い、データベース作成や問い合わせなどの実際の操作を学ぶ。</p> <p>なお、この講義は「データベース論 a」の既習が前提となる。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 関係データベース理論(1)：関係モデルと SQL</li> <li>2 関係データベース理論(2)：キー、関数従属、整合性制約</li> <li>3 関係データベース理論(3)：正規化</li> <li>4 関係データベース実習(1)：Access へのインポート</li> <li>5 関係データベース実習(2)：主キーの設定、関係間の関連付け</li> <li>6 関係データベース実習(3)：QBE による検索</li> <li>7 関係データベース理論(4)：関係代数の演算</li> <li>8 関係データベース理論(5)：関係代数と SQL</li> <li>9 関係データベース理論(6)：SQL の構文と演算子(1)</li> <li>10 関係データベース理論(7)：SQL の構文と演算子(2)</li> <li>11 関係データベースの実践(4)：QBE と SQL</li> <li>12 関係データベースの実践(5)：SQL による検索</li> <li>13 関係データベースの実践(6)：データベース定義、更新処理</li> <li>14 総合問題、まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>参考書：芝野耕司『SQL がわかる本』オーム社、1998</p>		出席、定期試験、レポートを加味して評価する。	

01年度以降（春）	コンピュータシミュレーション論 a	担当者	富田 幸弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>情報処理の応用コースとして開設されている科目である。「コンピュータ入門」で学習した <u>Excel</u> をより高度に利用し、「プログラミング論」で学習した <u>Visual Basic</u> などのプログラミング言語も利用する。</p> <p>さらに、経営科学の考え方とその分析方法を学習するとともに、コンピュータシミュレーションの技法についても学習する。</p> <p>また、パソコンのより高度な利用法について学習するとともに、各自の興味に従ったコンピュータシミュレーションを作成する。</p> <p>必ず、第一回目の講義に出席して、自分が履修可能であるかどうかを判断すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 必要な基礎知識・評価・受講上の注意など</li> <li>2 シミュレーションを必要とする経営科学と利用例</li> <li>3 統計データの読み方</li> <li>4 時系列データと経済変動</li> <li>5 時系列分析と需要予測とシミュレーション</li> <li>6 在庫の種類と費用</li> <li>7 在庫管理とABC分析</li> <li>8 在庫管理シミュレーション</li> <li>9 日程管理とPERT</li> <li>10 日程管理シミュレーション</li> <li>11 待ち行列問題</li> <li>12 待ち行列シミュレーション</li> <li>13 意思決定理論</li> <li>14 経営科学とシミュレーションのまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
参考文献などは、必要に応じて紹介する。 毎回の講義については、プリントを配布する。		数回のレポート、各自の作成したデータ処理の内容、出席状況などを考慮して総合評価する。	

01年度以降（秋）	コンピュータシミュレーション論 b	担当者	富田 幸弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>情報処理の応用コースとして開設されている科目である。「コンピュータ入門」で学習した <u>Excel</u> をより高度に利用し、「プログラミング論」で学習した <u>Visual Basic</u> などのプログラミング言語も利用する。</p> <p>さらに、経営科学の考え方とその分析方法を学習するとともに、コンピュータシミュレーションの技法についても学習する。</p> <p>また、パソコンのより高度な利用法について学習するとともに、各自の興味に従ったコンピュータシミュレーションを作成する。</p> <p>必ず、第一回目の講義に出席して、自分が履修可能であるかどうかを判断すること</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 必要な基礎知識・評価・受講上の注意など</li> <li>2 一様乱数列とその発生法・検定</li> <li>3 その他の乱数とモンテカルロシミュレーション</li> <li>4 経営シミュレーション概説</li> <li>5 シミュレーションモデルの作成手順</li> <li>6 各経営部門などの要因関連構造</li> <li>7 価格戦略シミュレーション</li> <li>8 生産戦略シミュレーション</li> <li>9 販売戦略シミュレーション</li> <li>10 シミュレーションゲームと競争力決定構造</li> <li>11 部門管理ゲームの例（1）</li> <li>12 部門管理ゲームの例（2）</li> <li>13 ビジネスゲームの例</li> <li>14 コンピュータシミュレーションのまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
参考文献などは、必要に応じて紹介する。 毎回の講義については、プリントを配布する。		各自の作成したシミュレーションゲームの内容・レポートなどを考慮して総合評価する。	

01年度以降（春）	マルチメディア論 a	担当者	大和田 勇人
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>マルチメディアは従来のコンピュータで扱われていたテキスト、数値に加えて画像、音声、動画などの様々な情報形式を指すが、現在はインターネット閲覧ソフトで完全に統合されている。したがって、マルチメディアの作成は一見簡単そうに思えるが、実は対象とする情報形式によって様々なソフトウェアやハードウェアを用いていく必要がある。本授業では、マルチメディアの元になっている情報形式を講義し、情報圧縮などを含めた内部の構造について講義する。次に、そうした構造に対応して、マルチメディア作成のソフトウェアを利用して、図形・画像処理・静止画・アニメーションを実際に取り上げ、マルチメディアシステムがどのように構成されていくかを実習を通じて説明していく。具体的には、図形・画像作成のためのソフトウェアを利用し、画像編集などの機能を学ぶ。次に、アニメーション作成のためのソフトウェアを用いて、作成に至るまでのプロセスを学ぶ。さらに、これらで作成したファイルを Word や PowerPoint で利用し、最終的にプレゼンテーションを行う。授業では講義と実習を組み合わせ、基礎となる理論を学びながら、実習を通じて、そうした理論が実際にどのように適用されているかを示す。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 マルチメディアの基礎：その特徴、利用方法を講義</li> <li>2 情報のデジタル表現：アナログ情報からデジタル情報への変換等を講義</li> <li>3 静止画：ラスター形式、ベクター形式などの様々な情報形式を講義</li> <li>4 画像ソフトとファイル形式：ドロー系、ペイント系などの様々なソフトウェアを講義・実習</li> <li>5 静止画の作成：具体的に静止画を作成する実習</li> <li>6 スキャナーによる画像取り込み：画像取り込みのプロセスを講義・実習</li> <li>7 デジカメによる画像取り込み：解像度、画像の合成、Web へのアップを講義・実習</li> <li>8 ワープロにおける画像処理：講義と実習</li> <li>9 アニメーションの作成（1）：講義と実習</li> <li>10 アニメーションの作成（2）：実習</li> <li>11 プレゼンテーションツールの利用（1）：講義と実習</li> <li>12 プレゼンテーションツールの利用（2）：実習</li> <li>13 マルチメディア作品作成（1）：実習</li> <li>14 マルチメディア作品作成（2）：実習</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>授業中に資料を配布する。 各種ソフトの参考文献については、授業時に紹介する。</p>		出席20%、試験40%、レポート40%	

01年度以降（秋）	マルチメディア論 b	担当者	大和田 勇人
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>マルチメディアは、現在インターネット閲覧ソフトで完全に統合されており、マルチメディアの作成は一見簡単そうに思えるが、実は対象とする情報形式によって様々なソフトウェアやハードウェアを用いていく必要がある。本授業では、インターネット上でのマルチメディアシステムがどのような構成になっており、それをどのように作成していくかを、実例を挙げて講義しながら、それらを作成するために様々なソフトウェアを用いて実習を行う。具体的には、マーケティング、広告、ネットショップなどのビジネス上でのマルチメディアの応用事例を示し、それらがどのように体系的に構成されているかを講義する。次に、そうした事例に対応して、マルチメディア作成のソフトウェアを利用して、図形・画像処理・静止画・アニメーションを実際に取り上げ、マルチメディアシステムの構成方法を実習を通じて説明していく。その際、ビデオ画像を新たに取り上げ、動画作成におけるオーサリングツールなど、ビデオ取り込みのためのハード・ソフトを用いて、マルチメディア作品を作成していくプロセスを学ぶ。さらに、これらで作成したファイルをインターネット上に載せ、最終的にプレゼンテーションを行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 インターネットとマルチメディア：その特徴、利用方法を講義</li> <li>2 インターネットとマルチメディアの具体的な作成方法を講義・実習（1）</li> <li>3 インターネットとマルチメディアの具体的な作成方法を講義・実習（2）</li> <li>4 マルチメディアの実例：インターネット電話、ビジネスにおける実例を講義・実習</li> <li>5 ホームページ作成（1）：静止画の掲載方法を講義・実習</li> <li>6 ホームページ作成（2）：ページリンクの貼り方を講義・実習</li> <li>7 ホームページ作成（3）：ページレイアウトの方法を講義・実習</li> <li>8 アニメーション作成：講義と実習（1）</li> <li>9 アニメーション作成：講義と実習（2）</li> <li>10 3Dソフトの利用方法：講義と実習</li> <li>11 ビデオ画像：ビデオ画像の取り込みと合成を講義・実習</li> <li>12 動画処理：動画編集、音声貼り付け、エフェクト、テロップを講義・実習</li> <li>13 ネット上でのマルチメディア作成（1）：実習</li> <li>14 ネット上でのマルチメディア作成（2）：実習</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>授業中に資料を配布する。 各種ソフトの参考文献については、授業時に紹介する。</p>		出席20%、試験40%、レポート40%	

01年度以降（春）	マルチメディア論 a	担当者	立田 ルミ
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
この授業では、マルチメディア作成のソフトウェアを利用して図形・画像処理、静止画、アニメーションに関する講義と実習を行う。ここでは、マルチメディアシステムがどのようなものかを、実例を挙げながら実習する。また図形・画像作成のためのソフトウェアを利用し、画像編集などの機能を学ぶ。さらに音声とアニメーション作成のためのソフトウェアを用いて実習する。これらで作成したファイルを、Word やPower Point で利用し、プレゼンテーションを行う。また、静止画面作成のために必要なハードウェアとソフトウェアについて講義し、画像取り込みや合成方法について実習する。また、これらのマルチメディアに対するファイルと圧縮方法についても講義とデモンストレーション並びに実習すると共に、最終レポートとしてマルチメディア作品を制作する。		1 マルチメディアの基礎：講義 2 情報のデジタル表現：講義 3 静止画像の作成：講義と実習 4 画像ソフトとファイル形式：講義 5 静止画の作成：講義と実習 6 静止画の編集：講義と実習 7 スキャナーの利用：講義と実習 8 デジカメ取り込みと画像処理：講義と実習 9 マルチメディアの処理：実習 10 画像のアニメーション作成：講義と実習 11 文字のアニメーション：講義と実習 12 プレゼンテーションツールの利用：講義と実習 13 マルチメディアの統合：講義と実習 14 マルチメディア作品作成：実習	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
立田ルミ他『情報メディア入門』実教出版		出席 20%、試験 40%、レポート 40%	

01年度以降（秋）	マルチメディア論 b	担当者	立田 ルミ
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
この授業では、インターネット上でのマルチメディアシステムがどのようなものかを、実例を挙げながら講義し、それらを作成するためにいくつかのソフトウェアを用いて実習を行なう。また、先輩たちの作成したマルチメディア作品を紹介する。ここでは、音声の取り込みおよび編集について講義と実習を行なう。またアニメーション作成のためのソフトウェアを用いて、アニメーション作成および音声入力を行なう。3Dに関しては、ワイヤフレームモデルやサーフェスモデルなどのモデリングを行い、レンダリングを行なって作品を作成する。また、ビデオの取り込みのために必要なハードウェアとソフトウェアと、これらのマルチメディアに対するファイルと圧縮方法について講義とデモンストレーションを行い、ビデオクリップを用いて動画編集を行なう。最後レポートとして、受講生が独自の作品を制作しインターネット上に発表する。		1 インターネットとマルチメディア：講義 2 音声取り込みと処理：実習 3 音楽作成と編集—テキストファイル：講義と実習 4 音楽作成と編集—MIDI ファイル：講義と実習 5 ホームページ作成—静止画：講義と実習 6 ホームページ作成—リンク：講義と実習 7 ホームページ作成—レイアウト：講義と実習 8 Flash アニメーション作成—画像：講義と実習 9 Flash アニメーション作成—文字：講義と実習 10 複数のアニメーション：講義と実習 11 ビデオ画像編集：講義と実習 12 3D 作成：講義と実習 13 3D 合成：実習 14 マルチメディア作品アップ・実習	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
立田ルミ他『情報メディア入門』実教出版		出席 20%、試験 40%、レポート 40%	

01 年度以降 (春)	マルチメディア論 a	担当者	森 園子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的:</b> 現在, インターネット上で利用されているマルチメディア表現及び, その技術を知り, それらの構造を理解する。そのために, デジタルカメラ, スキャナ, ビデオカメラ等のマルチメディア機器を利用する。また, PhotoShop, PowerPoint, VideoStudio等いくつかのソフトウェアを通して, 図形・画像処理・静止画・動画・音声処理に関する実習を行う。さらに, インターネットを用いてアメリカなどの大学にアクセスし, マルチメディア技術がどのように利用されているか, 最新の図形・画像処理・静止画・動画・音声の表現を紹介し, マルチメディアの動向を探る。</p> <p>それらを通して, マルチメディアの利用と技術を習得し, マルチメディアとは何かを考えるものである。</p> <p><b>講義概要:</b> 春学期は, マルチメディアシステムがどのようなものかを, CD-ROM などを実例を挙げながら実習する。また, PhotoShop等, 図形・画像作成のためのソフトウェアを利用し, フォトレタッチなどの機能を学ぶ。さらに, サウンド編集や, アニメーション作成を通して, 音声及び, 動画に関する構造や技術を理解する。これらで作成したファイルを, Word やPowerPoint を用いてまとめる。また, 静止画面画作成のために必要なハードウェアとソフトウェアについての事例を通して, 色彩変換や合成方法, これらのマルチメディアに対するファイルと圧縮方法についても講義とデモンストレーションを通して実習すると共に, マルチメディア作品を制作する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. マルチメディアの基礎:年間予定、授業方法についての説明。マルチメディアとは何か、マルチメディアで使う用語、マルチメディアの利用、情報メディアについての解説。</li> <li>2. 情報のデジタル表現: アナログとデジタル、デジタル化のメリット、2進文字の表現</li> <li>3. 静止画:ラスターグラフィック、ベクターグラフィック、ファイル形式</li> <li>4. 画像ソフトとファイル形式:マルチメディアを扱うソフトとファイル形式の解説。ドロー系ソフト、ペイント系ソフト及び、解像度、画像圧縮について解説。</li> <li>5. 静止画の作成:大学にある画像作成ソフトウェアを用い、静止画像を作成。ファイル形式と記憶容量の確認。</li> <li>6. スキャナー取り込みと画像処理:スキャナーのタイプ、解像度、カラーとグレイスケールの解説。スキャナーから画像を取り込み、加工。</li> <li>7. デジカメ取り込みと画像処理:デジカメによる画像取り込みと処理、画像の合成、効果の処理</li> <li>8. ワープロによる画像処理:ワープロで静止画を扱う。ファイル形式と記憶容量の確認。</li> <li>9. アニメーション作成(1):静止画像とアニメーション、GIF アニメーション、ソフトウェアの解説と実習</li> <li>10. アニメーションの作成(2):バナー作成、写真の効果、トランジションなど。</li> <li>11. プレゼンテーションツールでマルチメディアを扱う(1):プレゼンテーションツールで図形、静止画を扱う。</li> <li>12. プレゼンテーションツールでマルチメディアを扱う(2):プレゼンテーションツールで図形、静止画、アニメーションを扱う。</li> <li>13. マルチメディア作品作成:マルチメディア作品を作成する。</li> <li>14. まとめとプレゼンテーション:マルチメディア作品を作成し、プレゼンテーションを行う。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
立田ルミ他『情報メディア入門』実教出版 各種ソフトの参考文献については、授業時に紹介する。		春学期:定期試験を行い、それを40%の評価とする。各実習でネットワーク上にレポートを提出してもらい、それを60%の評価とする。	

01 年度以降 (秋)	マルチメディア論 b	担当者	森 園子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的:</b> 現在, インターネット上で利用されているマルチメディア表現及び, その技術を知り, それらの構造を理解する。そのために, デジタルカメラ, スキャナ, ビデオカメラ等のマルチメディア機器を利用する。また, PhotoShop, PowerPoint, VideoStudio等いくつかのソフトウェアを通して, 図形・画像処理・静止画・動画・音声処理に関する実習を行う。さらに, インターネットを用いてアメリカなどの大学にアクセスし, マルチメディア技術がどのように利用されているか, 最新の図形・画像処理・静止画・動画・音声の表現を紹介し, マルチメディアの動向を探る。</p> <p>それらを通して, マルチメディアの利用と技術を習得し, マルチメディアとは何かを考えるものである。</p> <p><b>講義概要:</b> 後期は, インターネット上でのマルチメディアシステムがどのようなものかを, インターネット上で実例を挙げながら講義し, それらを作成するために, いくつかのソフトウェアを用いて実習を行う。</p> <p>具体的には, 図形・画像作成のためのソフトウェアを利用し, 三次元空間や画像変換などの機能を学ぶ。さらに, ワイヤフレームモデル及びサーフェスモデルなどのモデルレンダリングなどを実習する。また, 3D やビデオ画面作成のために必要なハードウェアとソフトウェアについて事例を通して学び, これらのマルチメディアに対するファイルと圧縮方法についても, 講義とデモンストレーションを行う。これらの技術を総合させ, 受講生が独自の作品を制作し, インターネット上に発表する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. インターネットとマルチメディア: インターネットの概説とマルチメディア作品の紹介と解説。</li> <li>2. Webページ作成言語HTMLの解説と作成(1)</li> <li>3. Webページ作成言語HTMLの解説と作成(2)</li> <li>4. 音声取り込みと処理:オーディオファイル作成、ワープロで音声出力</li> <li>5. 音楽作成と編集:音楽作成ソフトウェアの解説、音階、音の長さ、音色、音声ファイルの種類。</li> <li>6. ネットワークとマルチメディア:ネットワークについての理論的な説明</li> <li>7. オーサリングソフトウェア(1):プレゼンテーション向きソフトウェア、カードベース・アイコンベースオーサリングプログラムの紹介と解説。</li> <li>8. オーサリングソフトウェア(2):大学にあるオーサリングソフトウェアを使って、簡単なマルチメディア作品を作成する。</li> <li>9. ネットワーク:ネットワーク対応のマルチメディア素材がどのように出来ているかを解説。</li> <li>10. 3D の概要:3D ソフトウェアの解説と利用。インターネット上で3Dを用いた作品の紹介。Java, JavaScript を用いたWeb ページの紹介。</li> <li>11. 動画取り込みと編集:ビデオ標準、ビデオボード、デジタルビデオカメラの紹介と解説。</li> <li>12. 動画処理:動画編集、音声貼り付け、エフェクト、テロップ作成</li> <li>13. 作品作成:静止画、音声、3D、アニメーション、動画を統合させ、ネットワークに載せる。</li> <li>14. 作品発表:受講生の作成したマルチメディア作品を発表し、ディスカッションを行う。</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
立田ルミ他『情報メディア入門』実教出版 各種ソフトの参考文献については、授業時に紹介する。		秋学期:定期試験を行い、それを40%の評価とする。各実習でネットワーク上にレポートを提出してもらい、それを60%の評価とする。	

01 年度以降 (春)	情報検索論 a	担当者	福田 求
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【目的】 必要な情報を効果的に選択・入手する行為としての情報検索について理解を深める。特に、コンピュータ技術に基づく情報検索システムの知識を、解説および実習を通して体得する。</p> <p>【概要】 本講義ではまず、情報検索に関する基礎的な概念について解説し、情報検索を取り巻くシステムの仕組みを概観する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション；情報検索の定義</li> <li>2 情報検索の種類，歴史</li> <li>3 データベースの定義，意義，構成要素，種類，歴史</li> <li>4 学内で行える情報検索（基礎編）</li> <li>5 索引語</li> <li>6 シソーラス</li> <li>7 前半部分のまとめ；質問受付</li> <li>8 情報検索関連作業のプロセス</li> <li>9 検索式(1)：論理演算子</li> <li>10 検索式(2)：トランケーション</li> <li>11 検索式(3)：位置演算子，フィールド演算子</li> <li>12 就職に役立つ情報検索</li> <li>13 検索結果の評価</li> <li>14 授業全体のまとめ；質問受付</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
適宜指示する。		期末試験（筆記試験またはレポート）。これに平常点を加味する。	

01 年度以降 (秋)	情報検索論 b	担当者	福田 求
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>【目的】 必要な情報を効果的に選択・入手する行為としての情報検索について理解を深める。特に、コンピュータ技術に基づく情報検索システムの知識を、解説および実習を通して体得する。</p> <p>【概要】 情報検索論 a での知識を踏まえた上で、実際の情報検索技術に慣れ、習熟するために、CD-ROM データベースや WWW の検索エンジン，商用オンラインデータベースを用いた情報検索の実習を行う。実習では可能なかぎり，受講者が今後の調査／研究活動で利用できるような情報源を紹介する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション</li> <li>2 CD-ROM 検索(1)</li> <li>3 CD-ROM 検索(2)</li> <li>4 学内で行える情報検索（応用編 1）</li> <li>5 WWW の検索エンジン(1):インターネット／WWW の基礎</li> <li>6 WWW の検索エンジン(2)：種類</li> <li>7 前半部分のまとめ；質問受付</li> <li>8 WWW の検索エンジン(3)：ロボット</li> <li>9 WWW の検索エンジン(4)：インデックス</li> <li>10 WWW の検索エンジン(5)：検索結果の表示</li> <li>11 検索という観点からのウェブサイト構築</li> <li>12 学内で行える情報検索（応用編 2）</li> <li>13 最新の検索サービス</li> <li>14 授業全体のまとめ；質問受付</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
適宜指示する。		期末試験（筆記試験またはレポート）。これに平常点を加味する。	

01年度以降（春）	情報システム論 a	担当者	今福 啓
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>コンピュータを使った問題解決の処理は、基本的な処理を複数組み合わせることで実現しています。その際、各処理の計算手順を減らし、無駄な処理を行わないことが効率的となります。そのため、問題の特徴を知り、問題に適した形でデータを配置して基本的な処理を効率化することが重要となります。</p> <p>この講義では、さまざまなデータ構造の特徴と、コンピュータを用いた問題解決で頻繁に使用される基本的な処理手順を学びます。それらの知識を通じて、コンピュータにおける効率的な処理とはどのようなものであるのかについて理解することを目標とします。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. コンピュータのハードウェアと命令</li> <li>2. コンピュータ内部でのデータ表現</li> <li>3. データ構造 1-配列</li> <li>4. データ構造 2-リスト</li> <li>5. データ構造 3-木</li> <li>6. データ構造 4-ハッシュ</li> <li>7. 問題処理の手順-アルゴリズム</li> <li>8. フローチャートによるアルゴリズムの表現</li> <li>9. コンピュータによる処理 1-整列</li> <li>10. コンピュータによる処理 2-探索</li> <li>11. コンピュータによる処理 3-文字列処理</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
なし		授業時間内の課題と期末試験により総合的に判断します	

01年度以降（秋）	情報システム論 b	担当者	今福 啓
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>時々刻々と状況が変化していく実社会では、あらかじめ解決する手順を決めておくことのできない問題が多くあります。そのような問題をコンピュータによって解くためには、コンピュータ内部で変化に適応した解決手順を作り出していく必要があります。</p> <p>この講義では「進化的計算手法」と「強化学習」という、コンピュータ自身が問題の変化に応じて解決手順を構築する手法について学びます。これらの手法は、人があらかじめ与えたことを実行するのではなく、問題解決の途中で得られる結果にもとづいて、徐々にコンピュータ内部の解決手順が変化していく点が特徴です。変化への適応がどのように行われているのかを知り、コンピュータによる問題解決手法の知識を広げることを目標とします。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 進化的計算手法 1-遺伝的アルゴリズム</li> <li>2. 遺伝的アルゴリズムによる問題解決の例</li> <li>3. 進化的計算手法 2-遺伝的プログラミング</li> <li>4. 強化学習-教師あり学習、教師なし学習</li> <li>5. 教師あり学習 1-人工パーセプトロンと学習</li> <li>6. 教師あり学習 2-人工パーセプトロンによるネットワーク</li> <li>7. 教師あり学習 3-ニューラルネットワーク</li> <li>8. 教師なし学習 1-ランダムから効率的な行動へ</li> <li>9. 教師なし学習 2-Q 学習</li> <li>10. さまざまな問題における強化学習の応用例</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
なし		授業時間内の課題と期末試験により総合的に判断します	

01年度以降（春）	プログラミング論 a	担当者	加藤 尚吾
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>Windows の機能をフルに活用できるイベントドリブン型言語である Visual Basic 2010 をプログラミング言語としてとりあげ、様々なソフトウェアがどのように開発されているかを理解することを目的とする。また、同時に実際にプログラミングをどのようにすればよいかを理解することを目的とする。</p> <p>基本的な命令から、その組み合わせまでを、例をあげて講義する。その後、ひとつひとつの命令に関して実際に Visual Basic 2010 でプログラミングの演習を行う。</p> <p>ほぼ毎回、演習課題を行ってもらう。最後に自分でテーマを決めて、ソフトウェアの製作を行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業のガイダンスとコンピュータ概説</li> <li>2. Visual Basic 2010 の概略</li> <li>3. 簡単なプログラム作成（1）</li> <li>4. 簡単なプログラム作成（2）：四則演算</li> <li>5. 簡単なプログラム作成（3）：キャッシュレジスター</li> <li>6. 選択のあるプログラム作成（1）</li> <li>7. 選択のあるプログラム作成（2）</li> <li>8. 選択のあるプログラム作成（3）：オプションボタン、チェックボタンの利用</li> <li>9. 選択のあるプログラム作成（4）：リストボックス、ドラッグアンドドロップの利用</li> <li>10. 繰り返しのあるプログラム作成（1）：If と Go To、For Next を用いた繰り返し</li> <li>11. 繰り返しのあるプログラム作成（2）：Case 文、While 文</li> <li>12. 総合問題作成</li> <li>13. 総合問題作成</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
立田ルミ著：文科系大学生のための Visual Basic プログラミング、創成社、2010		出席、演習、レポートで総合的に評価する。	

01年度以降（秋）	プログラミング論 b	担当者	加藤 尚吾
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>プログラム論 a で学んだ基礎的なプログラム作成方法を用いて、より複雑なプログラムを作成できることを目標とする。画像や音声などのマルチメディアがファイルとしてどのように扱われているかも理解することを目的としている。また、ファイルや Windows の他のアプリケーションとの連携についても理解し、さらにネットワーク対応のプログラムを作成することを目的とする。</p> <p>本講義では、プログラム論 a と同様に、Windows の機能をフルに活用できるイベントドリブン型言語である Visual Basic 2010 をプログラミング言語としてとりあげる。</p> <p>ほぼ毎回、演習課題を行ってもらう。最後に自分でテーマを決めて、ソフトウェアの製作を行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業のガイダンスとプログラミング論 a の復習</li> <li>2. プログラミング論 a の復習</li> <li>3. 図形の処理（1）：直線を描く、曲線を描く</li> <li>4. 図形の処理（2）：円を描く、色を塗る</li> <li>5. 図形の処理（3）：Windows の画像処理</li> <li>6. 図形の処理（4）：ドラッグアンドドロップの利用</li> <li>7. 音声、動画の処理：音声を録音する、音声を再生する</li> <li>8. 配列とコントロール配列：一元配列、コントロール配列の利用</li> <li>9. プルダウンメニュー：コンボボックス、プルダウンメニューの利用</li> <li>10. ファイルの利用（1）：テキストファイルの読み込み</li> <li>11. ファイルの利用（2）：画像ファイルの読み込み</li> <li>12. ファイルの利用（3）：シーケンスファイルの作成</li> <li>13. ファイルの利用（4）：シーケンスファイルの読み込みと利用</li> <li>14. インターネットの利用：Visual Basic 2010 とホームページとのリンク</li> </ol>	
テキスト、参考文献		評価方法	
立田ルミ著：文科系大学生のための Visual Basic プログラミング、創成社、2010		出席、演習、レポートで総合的に評価する。	

01年度以降（春）	プログラミング論 a	担当者	立田 ルミ
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この授業では、Visual Basic をプログラミング言語として採りあげ、様々なソフトウェアがどのように開発されているかを理解し、実際にどのようにプログラミングすればよいかを理解する事を目標としている。</p> <p>そのために、Windows の機能をフルに活用できるオブジェクト記述型言語である Visual Basic で実際にプログラミングを行うことにより、プログラミングとはどういうことかを体得してもらうことを目的とする。</p> <p>基本的な命令から始め、それらを組み合わせてどのようにプログラミングすればよいかを、例を挙げて講義し、それらの1つ1つの命令に対して解説と演習を行う。演習の課題として、1週間に1度の課題を講義支援システムで提出する。最後に自分でテーマを決めて、ソフトウェアの製作を行う。授業の最初に、先輩たちの作成したプログラムを紹介する。また、同じクラスの人たちの作ったプログラムも紹介する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 授業のガイダンスとコンピュータ概説:講義</li> <li>2 Visual Basic.NET の概略:講義と実習</li> <li>3 文字の表示: 講義と実習</li> <li>4 簡単な計算: 講義と実習</li> <li>5 関数の利用: 講義と実習</li> <li>6 飛び越し命令: 講義と実習</li> <li>7 条件判断による分岐: 講義と実習</li> <li>8 複数判断による分岐: 講義と実習</li> <li>9 選択用コントロールによる分岐: 実習</li> <li>10 回数指定による繰り返し: 講義と実習</li> <li>11 条件指定による繰り返し: 講義と実習</li> <li>12 多重ループ: 講義と実習</li> <li>13 総合問題作成1: 実習</li> </ol> <p>いろいろなオブジェクトを組み合わせて作成する</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>14 総合問題作成2: 実習</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
立田ルミ著：文科系大学生のための Visual Basic プログラミング、創成社、2010		出席 20%、レポート 40%、試験 40%	

01年度以降（秋）	プログラミング論 b	担当者	立田 ルミ
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この授業では、プログラミング論 a で学んだ基礎的なプログラム作成方法を用いて、より複雑なプログラムを作成できることを目的とする。ここでは、様々なソフトウェアがどのように開発されているかを理解し、実際にどのようにプログラミングすればよいかを理解する事を目標としている。そのために、Windows の機能を活用して Visual Basic.Net で実際にプログラミングを行う。また、画像や音声などのマルチメディアがファイルとしてどのように扱われているかも理解することを目的としている。また、ファイルや Windows の他のアプリケーションとの連携についても理解し、さらにネットワーク対応のプログラムを作成するにはどのような命令が必要かを理解することを目的とする。最後に自分でテーマを決めてソフトウェアの製作を行い、最終のレポートとする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 プログラムの分割: 講義と実習</li> <li>2 プログラムの構造化: 講義と実習</li> <li>3 配列の処理: 講義と実習</li> <li>4 配列の入出力: 講義と実習</li> <li>5 文字列の処理: 講義と実習</li> <li>6 文字列の演算: 講義と実習</li> <li>7 図形の描画: 講義と実習</li> <li>8 画像の取り扱い: 実習</li> <li>9 ファイル処理と記憶装置: 講義と実習</li> <li>10 シーケンシャルファイルの処理: 講義と実習</li> <li>11 ランダムファイルの処理: 講義と実習</li> <li>12 ファイルダイアログコントロール: 講義と実習</li> <li>13 インターネットの利用: 講義と実習</li> </ol> <p>Visual Basic とホームページとのリンク</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>14 総合問題作成: 実習</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
立田ルミ著：文科系大学生のための Visual Basic プログラミング、創成社、2010		出席 20%、レポート 40%、試験 40%	

01年度以降（春）	プログラミング論 a	担当者	堀江 郁美
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>Java 言語を用い、コンピュータープログラミングの基礎を学びます。</p> <p>コンピューターの仕組・操作や、プログラムを作る際の考え方を学習するところからはじめ、簡単な問題であれば、独力で Java のプログラムが書けるようになることを目指します。</p> <p>課題として、実際にプログラムを作成してもらい、動作させることにより、講義内容の理解を深めます。</p>		<p>1: ガイダンス：コンピュータの仕組・操作法</p> <p>2: プログラムとは、考え方</p> <p>3: 変数・演算子・式</p> <p>4: 入出力</p> <p>5: 条件判断・分岐(1)</p> <p>6: 条件判断・分岐(2)</p> <p>7: 繰り返し(1)</p> <p>8: 繰り返し(2)</p> <p>9: 型と演算</p> <p>10: 配列</p> <p>11: メソッド(1)</p> <p>12: メソッド(2)</p> <p>13: 文字と文字列</p> <p>14: 総合問題、まとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
明解 Java 入門編, 柴田望洋著, SoftBank Creative, 2009		出席、定期試験、レポートを総合的に評価する。	

01年度以降（秋）	プログラミング論 b	担当者	堀江 郁美
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>「プログラミング論 a」で学習したことをベースにして、Java の特徴であるオブジェクト指向に焦点をあてて、オブジェクト指向を用いたプログラムの作成方法を学習します。最終的には、やや難しい問題やオブジェクト指向を用いた問題でも、独力で Java プログラムが書けるようになることを目指します。</p> <p>課題として、実際にプログラムを作成してもらい、動作させることにより、講義内容の理解を深めます。</p>		<p>1: ガイダンス、オブジェクト指向とは</p> <p>2: Java の基本的な構文の復習</p> <p>3: クラスの概要</p> <p>4: クラスとインスタンス</p> <p>5: フィールドとローカル変数</p> <p>6: コンストラクタ</p> <p>7: クラス変数とクラスメソッド</p> <p>8: 継承 (1)</p> <p>9: 継承 (2)</p> <p>10: メソッドのオーバーライド</p> <p>11: ポリモーフィズム</p> <p>12: 例外処理とファイル入出力</p> <p>13: GUI ツールキット</p> <p>14: 総合問題、まとめ</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
明解 Java 入門編, 柴田望洋著, SoftBank Creative, 2009		出席、定期試験、レポートを総合的に評価する。	

01 年度以降 (春)	プログラミング論 a	担当者	森 園子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的:</b> 現在、ワープロや表計算ソフト等、様々なソフトウェアが開発されている。本講座では、それらのソフトウェアが、どのように開発されているかを理解し、実際にプログラムを組むことを通して、その根本となる論理的な思考、即ちアルゴリズムについて習得する。使用言語は、Visual Basic.Net である。プログラミングの過程で、画像や音声などのマルチメディアファイルの取り扱い、Windows の他のアプリケーションとの連携、さらに、ネットワーク対応のプログラムの作成方法等についても理解する。</p> <p><b>講義概要:</b> コンピュータの構造を概説し、最新のソフトウェアに関してコンピュータとネットワークを用いて紹介する。さらに基本的な情報処理の手順について概説し、それらをどのようにプログラミングすればよいかを、イベントドリブン型の言語の1つである Visual Basic .Net を用いて解説し、演習を行う。さらにインターネットやマルチメディアについても、デモンストレーションを行うと共に、それらのプログラミングについても、自分でテーマを決めて製作する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 授業のガイダンスとコンピュータシステムの概説: ハードウェア及び、システムの構成と概略</li> <li>2. ソフトウェアの分類、OS、ネットワークの概略</li> <li>3. プログラム開発手順: PCと通信の結合、マルチメディアとしてのコンピュータ</li> <li>4. Visual Basic の概略: イベント、フォーム、プロジェクト、プロパティ等の概略</li> <li>5. 簡単なプログラム作成(1): アプリケーション開発手順、文字の入出力</li> <li>6. 簡単なプログラム作成(2): 四則演算、変数のまとめ</li> <li>7. 選択のあるプログラム作成(1): アプリケーションの設計、コントロールの扱い方</li> <li>8. 選択のあるプログラム作成(2): 分岐するプログラムの処理、選択ステートメントのまとめ</li> <li>9. 選択のあるプログラム作成(3): オプションボタンの利用、チェックボタンの利用</li> <li>10. 選択のあるプログラム作成(4): リストボックスの利用、ドラッグアンドドロップの利用</li> <li>11. 繰り返しのあるプログラム作成: If と Go To を用いた繰り返し、For Next を用いた繰り返し(1)</li> <li>12. 繰り返しのあるプログラム作成: If と Go To を用いた繰り返し、For Next を用いた繰り返し(2)</li> <li>13. 総合問題作成: いろいろなコントロールを用いて問題を作成する。</li> <li>14. 総合問題作成: まとめとプレゼンテーション</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
立田ルミ著：文科系大学生のための Visual Basic プログラミング、創成社、2010		<b>春学期:</b> リポート：70% ネットワーク上に提出 <b>定期試験:</b> 30%	

01 年度以降 (秋)	プログラミング論 b	担当者	森 園子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p><b>講義目的:</b> 現在、ワープロや表計算ソフト等、様々なソフトウェアが開発されている。本講座では、それらのソフトウェアが、どのように開発されているかを理解し、実際にプログラムを組むことを通して、その根本となる論理的な思考、即ちアルゴリズムについて習得する。使用言語は、Visual Basic.Net である。プログラミングの過程で、画像や音声などのマルチメディアファイルの取り扱い、Windows の他のアプリケーションとの連携、さらに、ネットワーク対応のプログラムの作成方法等についても理解する。</p> <p><b>講義概要:</b> コンピュータが現在どのように使われているかを概説し、最新のソフトウェア開発についてネットワークを用いて紹介する。</p> <p>さらに基本的な情報処理の手順について概説し、それらのプログラミングについて、イベントドリブン型の言語の1つである Visual Basic.Net を用いて解説し、演習を行う。また、インターネットやマルチメディアについてもデモンストレーションを行い、それらを踏まえたプログラミングについて講義と演習を行う。</p> <p>最後に、自分でテーマを決めてソフトウェアの製作を行う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 図形の処理(1): 講義と実習 コンピュータグラフィックスの基礎</li> <li>2. 図形の処理(2): 講義と実習 点・直線・円を描く、色を塗る</li> <li>3. 図形の処理(3): 講義と実習 Windows の画像処理ソフトを使う、タイマーの利用(1)</li> <li>4. 図形の処理(4): 講義と実習 タイマーの利用(2)</li> <li>5. プログラムの構造化(1): プログラムの分割と構造化</li> <li>6. プログラムの構造化(2): Sub プロシージャと Function プロシージャ</li> <li>7. 音声・動画の処理: 講義と実習 音声の録音と再生、動画再生のデモンストレーション</li> <li>8. 配列とコントロール配列: 講義と実習 一次元配列、コントロール配列、二次元配列</li> <li>9. プルダウンメニュー: 実習 コンボボックス、プルダウンメニューの利用</li> <li>10. メニューエディタの利用: メニューエディタの編集と利用</li> <li>11. ファイルの利用(1): 講義と実習 コントロールの利用、シーケンスファイルの利用</li> <li>12. ファイルの利用(2): 講義と実習 ランダムファイルの利用とアクセスファイルの利用:</li> <li>13. インターネットの利用: 講義と実習 Visual Basic.Net とホームページとのリンク</li> <li>14. まとめ: 講義と実習 課題の説明と作成</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
立田ルミ著：文科系大学生のための Visual Basic プログラミング、創成社、2010		<b>秋学期:</b> リポート: 60% ネットワーク上に提出 <b>定期試験:</b> 40%	

01 年度以降 (春)	情報社会論 a	担当者	柴崎 信三
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>近代社会は石炭や石油というエネルギーの発見によってもものつくりの生産性が向上し、それが経済社会を動かす新しい価値を作ってきた。そこでは資本と設備や労働力の規模が、企業の価値を測る物差しとなった。</p> <p>二〇世紀後半にいたって、コンピューターの登場による情報技術の進展は、こうした産業社会の枠組みを劇的に変えてゆく。それは単に生産、流通、消費という経済のプロセスの効率化ばかりでなく、産業活動の主役が「モノ」から「情報」へ転換することにより、規模の拡大を目指す経済から「差異」を作り出す経済へと転換する過程でもあった。</p> <p>人類の歴史が狩猟社会から農耕社会を経て、工業技術を核とする産業社会へ推移し、さらにそれが情報社会へと移り変わる局面をアルウィン・トフラーは「第三の波」と呼んだ。この授業ではこの情報化の波が経済社会をどのように変えつつあるのかを、企業組織や法規範、取引や政策とのかかわりなど、さまざまな角度から考えてみたい。</p> <p>ここでは情報化がもたらした光と影を、さまざまな具体的事例を通して考えたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 はじめに</li> <li>2 「第三の波」</li> <li>3 電子商取引と社会</li> <li>4 ニューエコノミーの虚実</li> <li>5 バブル経済と I T</li> <li>6 企業組織の転換</li> <li>7 知的財産と企業経営</li> <li>8 著作権・特許権にみる保護と利用</li> <li>9 規制緩和と情報化</li> <li>10 事例・エンロン破綻</li> <li>11 情報格差と消費社会のゆくえ</li> <li>12 グローバリズムと金融危機</li> <li>13 メディアの役割</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
各回、参考資料を配布する。吉川元忠『情報エコノミー』（文春新書）を参考文献とする。		定期試験の成績に加えて、通常の授業時間で行うレポートの実績を勘案して評価する。	

01 年度以降 (秋)	情報社会論 b	担当者	柴崎 信三
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>情報社会の進展は、さまざまな局面でそれまで産業社会を支えてきた個人と国家や社会をつなぐ規範やルールの大きな変更を迫ることになる。</p> <p>産業社会における「私」と「公」の関係は、国民国家とよばれる枠組みの下で、個人の権利や利益をどのように社会の公共性と調和させるかという点に基調が置かれてきたが、それが大きな見直しを迫られている。</p> <p>情報を独占することで維持されてきたピラミッド型の組織の構造は、個人が自由に情報化をやりとりする国境を越えたネットワークの広がりによって揺さぶられる一方、社会システムのなかの「私」と「公」を巡る安定した関係が崩れ、新たな秩序が模索されている。</p> <p>インターネットによる個人の情報発信の高まりは、行政機構や企業、メディアなどによって代行されていた民主主義や市場の機能を変化させている。個人の「表現の自由」が飛躍的に高まる一方、「プライバシー」や個人情報の流出のリスクが増大する。</p> <p>情報のグローバルなネットワークの広がり、大規模なテロ事件や世界的な金融危機と密接にかかわっている。個人の自由と社会的監視という矛盾を抱えた情報社会の秩序のありかたを問う。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 はじめに</li> <li>2 電子政府と個人情報</li> <li>3 「表現の自由」とプライバシー</li> <li>4 ネット犯罪とリスク</li> <li>5 情報化と社会規範</li> <li>6 電子マネーと取引をめぐる信用</li> <li>7 民主主義における政治と情報化</li> <li>8 情報格差 (デジタルデバイド)</li> <li>9 NPO と互酬という仕組み</li> <li>10 国の安全保障と情報</li> <li>11 情報と個人とメディア</li> <li>12 自由と監視社会</li> <li>13 情報社会のなかの「私」</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
各回、参考資料を配布する。名和小太郎『情報の私有・共有・公有』（N T T 出版）などを参考文献とする。		定期試験の成績に加えて、通常の授業で行うレポートの実績を勘案して評価する。	

01年度以降（春）	情報通信ネットワーク b	担当者	三宅 真
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>情報通信のデジタル化は、産業革命に匹敵する大きな変革であり、情報通信革命とも呼ばれます。21世紀の今日、情報通信のデジタル化は、第二段階を迎えています。現在、国際電気通信連合において、次世代の移動通信システムの国際標準化が進められています。野村総合研究所のITロードマップでは、2012年度からワイヤレスブロードバンドの普及期が始まると予測されています。加えて、次世代送電網など、従来の通信ビジネス以外の多くの分野においても、情報通信技術が重要な役割を演じようとしています。これからも、新しい情報通信技術が、さまざまな形で私たちの生活と社会の中で活用されてゆくことでしょう。</p> <p>講義では、無線（ワイヤレス）通信を中心に、情報通信ネットワークのシステムとテクノロジーの基本的なことから、事例に則して、例題を交えながら解説します。情報通信ネットワークの人的・社会的な側面にも言及しながら、全体像と動向を述べます。受講生諸君が、進化を続ける情報通信ネットワークの本質を理解し、正しく、有効に活用するための知識を身に付けることを期待します。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 情報通信ネットワークと社会の発展（1）</li> <li>2. 情報通信ネットワークと社会の発展（2）</li> <li>3. 情報通信信号（1）：デジタル信号と2進数</li> <li>4. 情報通信信号（2）：正弦波信号とフーリエ変換</li> <li>5. 情報通信信号（3）：電波と周波数</li> <li>6. 情報通信システム（1）：衛星通信の実際と発展動向</li> <li>7. 情報通信システム（2）：移動通信の実際と発展動向</li> <li>8. 情報通信システム（3）：パケット通信とネットワークプロトコル</li> <li>9. 情報通信技術（1）：シャノンの通信系モデル</li> <li>10. 情報通信技術（2）：信号のデジタル化とPCM</li> <li>11. 情報通信技術（3）：情報量と情報源符号</li> <li>12. 情報通信技術（4）：伝送誤りと誤り訂正符号</li> <li>13. 情報通信技術（5）：暗号とセキュリティ</li> <li>14. まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>講義中に資料を配布しますので、教科書は指定しません。参考書として、総務省『情報通信白書』、坂村『グローバルスタンダードと国家戦略』（NTT出版）を推薦します。</p>		<p>出席とレポートによって評価します。講義中に小テストを行うことがあります。小テストを行った場合は、テストの結果を出席点に反映します。</p>	

01年度以降（秋）	情報通信ネットワーク a	担当者	今福 啓
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>複数のコンピュータを接続して、相互にデータの送受信を行うためのネットワークを構成して利用することは容易に実現できます。しかし、コンピュータを設置する環境に応じて使いやすいネットワーク環境を構築する際には、さまざまな知識が必要となります。</p> <p>この授業では、環境にあわせたネットワーク環境を作る際に必要となる基礎的な知識を身につけることを目標とします。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. コンピュータネットワークについて</li> <li>2. ネットワークの構成—LAN、WAN、インターネットとは</li> <li>3. TCP/IPによる送受信</li> <li>4. ネットワーク上で使用されるアドレス—IPアドレス、MACアドレス</li> <li>5. グローバルIPアドレス、プライベートIPアドレス</li> <li>6. IPアドレスの変換—NATとNAPT</li> <li>7. DNSの役割と構成</li> <li>8. パケットのルーティングについて</li> <li>9. ルーティングのプロトコルについて</li> <li>10. ネットワークのセキュリティ—ファイアウォール、電子署名、SSL</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
なし		授業時間内の課題と期末試験により総合的に判断します	

01年度以降（春）	コンピュータネットワーク	担当者	大和田 勇人
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義目的： 近年、コンピュータやインターネットの技術進歩は目覚しく、次々に新しい技術が提案、実現されている。しかしながら、その基本原理はコンピュータネットワークが登場したときとそれほど大きく変わっていないことも事実である。本授業では、コンピュータネットワークの基本技術として至る所で利用されているTCP/IPに焦点を当て、その概要、特徴、利用方法等を講義する。その際、理論や方法に終始するのではなく、その技術の意味するところやどのように利用されているか、また日常・ビジネスでの活用事例についてわかりやすく解説することに留意する。そして、最終的には「日経NETWORK」等で話題となる内容が理解できるように、基礎を固めることを目標にする。</p> <p>講義概要： はじめてコンピュータネットワークを学ぶ学生のために基礎知識からTCP/IPの主要なプロトコルまでの内容を網羅し、パソコンによる演習を交えて講義を行う。また、そうした内容が現在どのような状況で有効利用されているか事例を挙げながら説明し、提示した事例に対して自分の考えをレポートにして提出することで理解が深められるよう、授業を進めていく。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ガイダンス</li> <li>2 情報の表現（1） 整数のコンピュータでの表現</li> <li>3 情報の表現（2） ブール代数、情報の単位</li> <li>4 情報の表現の演習</li> <li>5 ネットワークモデル</li> <li>6 物理層、データリンク層</li> <li>7 ネットワーク層のIPプロトコル</li> <li>8 TCP、UDPプロトコル</li> <li>9 TCP、UDPによるデータ伝送</li> <li>10 プライベートIPアドレスとDHCPプロトコル</li> <li>11 制御用プロトコルICMP</li> <li>12 アドレス解決、名前解決</li> <li>13 TCP/IP事例研究（1）</li> <li>14 TCP/IP事例研究（2）</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
授業中に配布する。		出席20%、試験40%、レポート40%	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

01年度以降（春）	コンピュータアーキテクチャ	担当者	今福 啓
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>コンピュータがどのような構造で、どのように動作しているのかを知らずとも、市販されているソフトウェアの機能を使ったデータ処理は可能です。しかし、コンピュータによって何がどこまでできるのかを正しく把握するには、ハードウェアの詳細について知ることが不可欠です。</p> <p>この講義では、コンピュータを構成する各要素を詳細に見た上で、全体的な構造とその動作原理を学びます。そして講義内容を通じて、コンピュータを幅広く使用するための手助けとなる知識を身につけることを目標とします。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. コンピュータの構造－5大装置</li> <li>2. コンピュータの動作</li> <li>3. 演算 1－算術演算</li> <li>4. 演算 2－論理演算</li> <li>5. 演算 3－シフト演算</li> <li>6. 演算装置の構成</li> <li>7. 記憶装置の構成</li> <li>8. コンピュータの命令</li> <li>9. 構成要素の制御</li> <li>10. コンピュータ全体の構造</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
なし		授業時間内の課題と期末試験を総合して判断します	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

01年度以降（春）	情報と職業 a	担当者	富田 幸弘
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>情報化社会の急激な進展と、その社会の中で働くことについて考え、学習する。情報の獲得・利用する職業についての関わり方を学習し、情報に関わる職業人としての勤労観・倫理観などについても考える。</p> <p>（1）報化社会での各種情報の開示と、個人情報の保護や危機管理について学習する。</p> <p>（2）情報産業で関心の高い業界・業種・職種と変動する生活・ビジネスについて学習する。</p> <p>（3）数人のグループを編成し、「情報と職業」について各種のテーマを設定し、研究成果を発表し、討論する。</p> <p>高等学校の「情報科」の教員の免許取得に必要な法定科目であるので、必ず、第一回目の講義に出席し、履修可能であるかどうかを判断すること。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 情報について</li> <li>2 情報化社会の情報システム・情報化社会の信頼性</li> <li>3 基盤技術・開発技術・生産技術・新利便</li> <li>4 インターネット・通信・衛星放送・災害と情報</li> <li>5 情報開示の実態と責任・リスク管理</li> <li>6 情報の収集と発信・個人情報の保護と責任</li> <li>7 新時代の社会と職業・情報産業の職種</li> <li>8 インターネットで変わる生活・ビジネス</li> <li>9 情報の収集と発信にかかわる職業人の勤労と倫理</li> <li>10 教育現場での情報教育・教育方法の新規試み</li> <li>11 研究課題の発表（1）</li> <li>12 研究課題の発表（2）</li> <li>13 研究課題の発表（3）</li> <li>14 情報と職業のまとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>参考文献などは、必要に応じて紹介する。</p> <p>毎回の講義概要については、プリントを配布する。</p>		<p>研究発表の内容、レポートの内容、出席状況などを考慮して総合評価する。</p>	

01年度以降（秋）	情報と職業 b	担当者	小林 哲也
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>情報社会の歴史的意義を解説した上で、インターネットをはじめとする情報技術が、社会に与えた影響について、議論していく。</p> <p>Web2.0 ともいわれる情報社会の新しい意義を理解するには、ある程度ネットワークの仕組みやインターネットの特性などの技術的な側面にも立ち入って議論する必要がある。また、インターネットの普及とともに、情報倫理や知的財産権をめぐる制度や法についても変容が迫られている。</p> <p>こうした技術的知識や制度的な議論をいとわない学生の参加を望む。参加者は、授業中に情報に関するテーマでのプレゼンテーションが課せられる。</p> <p>なお、本講義は高等学校「情報科」教員の免許取得に必要な法定科目である。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 序論：情報と職業について</li> <li>2. インターネットの「爆発」</li> <li>3. インターネットの歴史と仕組み</li> <li>4. インターネットの分権制と公開性</li> <li>5. IT革命と企業組織</li> <li>6. IT革命後のビジネス環境</li> <li>7. 国境を越えるITおよびビジネス空間</li> <li>8. Web2.0 クラウド・コンピューティング</li> <li>9. 知的財産権をめぐって</li> <li>10. 知的財産権とパブリック・ドメイン</li> <li>11. デジタル・デバイド 情報をめぐる諸格差</li> <li>12. 情報化社会の諸問題</li> <li>13. プレゼンテーション</li> <li>14. プレゼンテーション</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>近藤勲『情報と職業』丸善 ニコラス・カー『クラウド化する世界』翔泳社 ランダル・ストロス『プラネット・グーグル』NHK出版</p>		<p>授業参加（プレゼンテーション）およびレポート</p>	

01年度以降（春）	アルゴリズム論 a	担当者	木村 昌史
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>アルゴリズムとは、狭い意味ではコンピュータを用いた問題解決のための処理方法のことであり、プログラミングを行う際の前段階のものになる。コンピュータによる処理は、必ずしも人間の思考による処理のプロセスとは同一ではなく、コンピュータに特有のものである場合も多い。ここでは比較的処理方法が確立されている、コンピュータ科学の基礎をなす決定的アルゴリズムについて学ぶ。</p> <p>前期 a では、「問題解決とは何か」の考え方から、結果が予測できる問題について、処理の視覚化、図示化を行いつつその方法を理解する。基本的アルゴリズムは、大きな問題を扱う上での要素的手法でもあり、多くの分野に適用できる。授業では可能ならば PC の実習も一部取り入れたい。プログラミングの経験は前提としないが、Excel の基本的操作（関数やグラフの利用）の知識は前提とする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 コンピュータとアルゴリズムの役割</li> <li>2 インターネットとアルゴリズム</li> <li>3 論理表現とアルゴリズム</li> <li>4 グラフ表現とアルゴリズム</li> <li>5 アルゴリズムの図示化</li> <li>6 データ構造とアルゴリズム スタックやキュー、リスト、木構造</li> <li>7 探索のアルゴリズム 線形探索法、二分探索法</li> <li>8 文字列の探索 KMP 法、BM 法</li> <li>9 整列のアルゴリズム クイックソート、ソートの手法の評価</li> <li>10 アルゴリズムと計算量 アルゴリズムの効率の評価</li> <li>11 ハッシュ法とアルゴリズム 探索法、暗号化への適用</li> <li>12 木構造と索引付け 二分木、B 木</li> <li>13 最短経路問題 PERT、ダイクストラアルゴリズム</li> <li>14 春学期のまとめと補足</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
特に指定しない。 授業時に Web 資料などを提示する予定である。		授業内試験または実習レポート、および出席状況から総合的に評価する。	

01年度以降（秋）	アルゴリズム論 b	担当者	木村 昌史
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>春学期 a では狭い意味での決定的アルゴリズムを扱ったが、秋学期 b ではやや広い意味での問題解決へのアプローチとして非決定的アルゴリズムを中心に採り上げる。</p> <p>コンピュータの処理による解決が困難な問題に対しては、処理を適用する以前に問題に対する正しい分析や深い洞察が必要である。こうした例としてゲームの必勝法や現象の将来予測などを採り上げるが、それぞれのルールや条件を深く分析する必要がある。そして困難となる要因とアルゴリズムの関係を明らかにする。問題解決へのアプローチには、分析的手法に加えて、コンピュータ特有の発見的手法やシミュレーションなどの方法が加わる。困難な問題に対して、これらは近似的な方法でありながらも、十分に実用的価値を持つことを理解する。また例として経済・経営分野に関連したアルゴリズムの例題も取りあげる。春学期と同様に、人数に余裕があれば、一部実習も取り入れる予定である。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 決定的アルゴリズムと非決定的アルゴリズム</li> <li>2 ゲームとアルゴリズム</li> <li>3 最適配置問題と枝刈り探索</li> <li>4 囚人のジレンマとゲームの理論</li> <li>5 乱数とモンテカルロ法 乱数の種類、シミュレーションの適用</li> <li>6 株価変動の問題 株価グラフとブラウン運動</li> <li>7 巡回セールスマン問題 複数都市を最短コスト訪問ルート</li> <li>8 ナップザック問題 動的計画法と分割統治法</li> <li>9 困難な問題とアルゴリズム P 問題と NP 問題、指数問題の類別</li> <li>10 複雑な問題とアルゴリズム 現象予測とカオス・フラクタル</li> <li>11 現代暗号の問題 暗号のしくみ、公開鍵方式の暗号</li> <li>12 在庫管理の問題 定期発注方式と発注点方式</li> <li>13 待ち行列の問題 サービス窓口の効率、ネットワーク通信量</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
特に指定しない。 授業時に Web 資料などを提示する予定である。		授業内試験または実習レポート、および出席状況から総合的に評価する。	

01 年度以降 (春)	オペレーションズ・リサーチ a	担当者	正道寺 勉
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>オペレーションズ・リサーチ(Operations Research: 一般には、略して OR と呼ばれる)は、軍事目的を達成させるために研究され始めたが、現在では限られた制約条件のもとで効率よく目的を達成するための手段として、広く利用されている。OR の範疇に入る手法はたくさんあるが、現実の問題を解くにあたっては、その問題をいかにしてモデル化するかが大変重要である (OR 手法の出番は、モデル化の後である)。本講義では、OR の基本となる考え方 (モデル化の重要性を含む) とその応用について分かりやすく講義する。特に、経済学部 of 学生に興味のある話題を提供する積りである。</p> <p>受講者への要望: 本講義を受講するにあたり、統計学、経営数学、コンピュータの知識を持っていることが望ましいが、なければ授業中にフォローする。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. OR の概要: OR の歴史、OR の発展、OR の定義</li> <li>2. OR の考え方とモデル化の概念 モデル化の例、OR 手法の紹介</li> <li>3. ランチェスターの法則 第二次世界大戦とランチェスター</li> <li>4.-5. アルゴリズム アルゴリズムの重要性、再帰式と逐次近似、フィボナッチ数列と黄金分割</li> <li>6. AHP【ゲーム感覚意思決定法】(1) AHP の概要 (曖昧な状況下での意思決定)</li> <li>7. AHP【ゲーム感覚意思決定法】(2) AHP の整合性、応用例</li> <li>8. AHP【ゲーム感覚意思決定法】(3) 演習</li> <li>9.-10. マルコフ過程 マルコフ過程の概要、マルコフ連鎖、推移確率、例題、演習</li> <li>11.-13. 線形計画法 (1), (2), (3) 線形計画法(LP)の概要、図による解法 主問題と双対問題の関係、LP の一般形 整数計画法</li> <li>14. 講義のまとめと今後の展望</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト/小田中敏男、正道寺勉:『初等オペレーションズ・リサーチ』, コロナ社 (2008) 参考文献/開講時に随時紹介する。</p>		出席(30%)とレポート(70%)を考慮して評価を行う。	

01 年度以降 (秋)	オペレーションズ・リサーチ b	担当者	正道寺 勉
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>春学期の講義科目である「オペレーションズ・リサーチ a」に引き続き、経済学部 of 学生にとって有用な手法を選び、分かり易く講義する。また、講義の中では効率よく目的を達成するために必要な「最適化の考え方」や最新の OR (Operations Research) の研究動向についても触れる。</p> <p>右の授業計画欄に示したトピックス以外にも OR の手法はたくさんあるが、時間の許す限りそれらの手法についても紹介する積りである。</p> <p>講者への要望: 本講義を受講するにあたり、統計学、経営数学、コンピュータの知識を持っていることが望ましい。また、「オペレーションズ・リサーチ a」を履修していることが望ましいが、秋学期から受講しても理解できる講義を心掛けるので心配は不要である。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 線形計画法 (1) 線形計画問題の復習及び一般形</li> <li>2. 線形計画法 (2) シンプレックス法</li> <li>3. 線形計画法 (3) 線形計画問題と輸送問題、輸送問題の解法</li> <li>4. 線形計画法 (4) シンプレックス法の演習</li> <li>5.-7. 最短経路問題 (1), (2), (3) 最短経路問題の概要、グラフによる表現、最適性の原理、作図による解法及び演習</li> <li>8. ゲームの理論 (1) ゲームの理論の概要、利得行列の戦略</li> <li>9. ゲームの理論 (2): 混合戦略の考え方及び演習</li> <li>10. ゲームの理論 (3) 囚人のジレンマ、チキンゲームほか</li> <li>11.-13. PERT/CPM (1), (2), (3) PERT、CPM の概要、アローダイアグラム クリティカルパスの求め方、完全 PERT</li> <li>14. 講義のまとめと今後の展望</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト/小田中敏男、正道寺勉:『初等オペレーションズ・リサーチ』, コロナ社 (2008) 参考文献/開講時に随時紹介する。</p>		出席(30%)とレポート(70%)を考慮して評価を行う。	

01年度以降（春）	システムズエンジニアリング a	担当者	天笠 美知夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経営・経済や社会において、企業機密の漏洩や温暖化あるいは非正規雇用労働者の増加や成果主義への移行など、さまざまな現象が現れている。このような現象の本質を把握するためには、現象をひとつの問題として認識し、その本質を明らかにし問題解決へ導くことは大変重要なことである。このような問題を解決するためのひとつのアプローチとしてシステム論的なアプローチとそれを支援する方法論がある。</p> <p>本講義では、問題（現象）の本質を把握するための認識プロセスと具体的な方法論を学習するとともに、情報システムとその効果的な活用法について理解を深めることを目的とする。</p> <p>尚、理論を実証する意味で、実際問題を通しての演習を行い、その報告書を作成する。本講義を受講するための前提となる必修科目はない。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 オリエンテーション：受講者の確認・決定 年間予定、授業方法等の注意事項についての説明</li> <li>2 システムズエンジニアリングの概念</li> <li>3 システム、環境、特性とシステム分類（1）</li> <li>4 システム、環境、特性とシステム分類（2）</li> <li>5 システム認識プロセス</li> <li>6 システム基礎演習</li> <li>7 グラフ理論によるシステムモデリング（1）</li> <li>8 グラフ理論によるシステムモデリング（2）</li> <li>9 システムモデリングの実際問題への適用</li> <li>10 システムモデリング演習</li> <li>11 問題の定義と基本モデル</li> <li>12 問題解決法のフレームワークー人事評価への応用</li> <li>13 問題解決法と構造モデル事例演習(1)</li> <li>14 問題解決法と構造モデル事例演習(2)</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
天笠美知夫・崔冬梅著『経営システムの考え方』（創成社、2009年）		事例演習およびそのレポートと出席、ならびに期末試験の結果を考慮して総合的に評価する。	

01年度以降（秋）	システムズエンジニアリング b	担当者	天笠 美知夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経営・経済や社会において、企業機密の漏洩や温暖化あるいは非正規雇用労働者の増加や成果主義への移行など、さまざまな現象が現れている。このような現象の本質を把握するためには、現象をひとつの問題として認識し、その本質を明らかにし問題解決へ導くことは大変重要なことである。このような問題を解決するためのひとつのアプローチとしてシステム論的なアプローチとそれを支援する方法論がある。</p> <p>本講義では、問題（現象）の本質を把握するための認識プロセスと具体的な方法論を学習するとともに、情報システムとその効果的な活用法について理解を深めることを目的とする。</p> <p>尚、理論を実証する意味で、実際問題を通しての演習を行い、その報告書を作成する。本講義を受講するための前提となる必修科目はない。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 システムと科学的アプローチ システムズエンジニアリングと方法論</li> <li>2 システムの評価と意思決定—効用理論</li> <li>3 価値と評価</li> <li>4 価値工学によるシステム評価</li> <li>5 価値と評価演習</li> <li>6 予測：デルファイ法とファジィデルファイ法</li> <li>7 予測：移動平均法</li> <li>8 在庫管理：ABC分析</li> <li>9 スケジューリング：PERT,CPM</li> <li>10 統計的手法によるシステム構造分析(1) —主成分分析法</li> <li>11 統計的手法によるシステム構造分析(2)</li> <li>12 統計的手法の基礎演習</li> <li>13 システム構造分析演習 - Questionnaire の作成と調査</li> <li>14 システム構造分析演習 - データの整理・分析と報告書の実作成</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
天笠美知夫・崔冬梅著『経営システムの考え方』（創成社、2009年）		事例演習およびそのレポートと出席、ならびに期末試験の結果を考慮して総合的に評価する。	

01年度以降（春）	経営システム工学 a	担当者	日下 泰夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>経営システム工学は、社会に出て役立つ「問題解決・意思決定」の考え方と方法を学ぶ極めて実践的な学問です。本講義では、文系の人を対象に、企業経営をはじめとして実社会で遭遇する諸問題を実践的に解決する基本的な考え方と方法を分かりやすく解説します。「汲めども尽きぬ問題解決の泉」を開発することを目指しています。</p> <p>変化の時代には、新たに出てくる問題を解決したり、新たな問題を創造する必要に迫られるでしょう。ここでは、時代の潮流を洞察し、重要な問題を発見・創造し、これらの問題の解決策を出来るだけ科学的・合理的・客観的な方法で具体的に提案し実施する能力、いわゆる、「問題解決能力・意思決定能力」が重要になります。</p> <p>前期は、外部環境変化と経営システムの課題、意思決定の要点、経営システム工学の概念、経営学・経済学との違いなどの基本的な考え方、経営システム工学で使われる典型的な問題解決技法などを学びます（基本的な考え方を理解することが本講義の主な目的ですので、技法の紹介は必要最小限にとどめます）。講義では、最新の経営トピックスも出来るだけ紹介します。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 外部環境変化と経営の課題</li> <li>2 イノベーション・マネジメント</li> <li>3 経営活動の体系的理解 1</li> <li>4 経営活動の体系的理解 2</li> <li>5 経営の問題解決・意思決定</li> <li>6 経営システム工学とは 1</li> <li>7 経営システム工学とは 2</li> <li>8 経営システム工学における問題解決技法：技法の概観、モデルの概念、最適化とシミュレーション</li> <li>9 QC 7つ道具 1</li> <li>10 QC 7つ道具 2</li> <li>11 在庫管理の考え方と技法：考え方、方式、最適化とシミュレーション、POSシステムの本質</li> <li>12 線形計画法 1：資源配分問題、問題の構造、定式化</li> <li>13 線形計画法 2：単体法（逐次改良法）の考え方、単体表による解法、アルゴリズム</li> <li>14 線形計画法 3：グラフによる解法を用いたアルゴリズムの理解、Solver による解法（デモ）</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：日下泰夫『経営意思決定－価値創造へのアプローチ』中央経済社、2009年4月。</p>		<p>前期末に実施する試験を中心に、出席状況、レポートなどを加味して評価します。</p>	

01年度以降（秋）	経営システム工学 b	担当者	日下 泰夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>講義目的は前期と同じです。後期は、資源配分のもう一つの有力な意思決定技法として知られている動的計画法（DP）、経済的な意思決定の局面で広く応用されている投資の経済計算技法（EE）、定性的・多目標的かつソフトな意思決定技法として実社会で広く利用されている階層分析法（AHP）を学び、簡単な演習を行います。</p> <p>次いで、春学期・秋学期の諸概念と諸技法の理解を基礎として、本講義の中心的な課題である「<b>問題解決法の体系的理解</b>」を学び、意思決定における経営システム工学の役割を考察します。さらに、情報化・創造化、技術経営、環境経営の分野で、経営システム工学が挑戦すべき問題解決・意思決定の新たな課題を明らかにします。</p> <p>最後に、将来、社会人として問題解決・意思決定の諸局面に遭遇する皆さんへ、キャリア開発に向けた問題解決能力向上への取り組みの重要性とその実践的行動指針を述べます。講義は春学期の講義の履修を前提に進めます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 動的計画法 1：資源配分問題、多段決定過程、最適性の原理</li> <li>2 動的計画法 2：定式化と解法</li> <li>3 経済的な意思決定 1：経済性分析の基礎概念</li> <li>4 経済的な意思決定 2：投資分析の基礎手法</li> <li>5 多価値基準下の意思決定-階層分析法 1</li> <li>6 多価値基準下の意思決定-階層分析法 2</li> <li>7 問題解決法の体系的理解 1</li> <li>8 問題解決法の体系的理解 2</li> <li>9 意思決定と経営システム工学 1</li> <li>10 意思決定と経営システム工学 2</li> <li>11 情報化・創造化と意思決定</li> <li>12 環境経営と意思決定</li> <li>13 問題解決能力向上に向けた実践的取り組み 1</li> <li>14 問題解決能力向上に向けた実践的取り組み 2</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>テキスト：日下泰夫『経営意思決定－価値創造へのアプローチ』中央経済社、2009年4月。</p>		<p>期末試験を中心に、出席状況、レポートなどを加味して評価します。</p>	

03年度以降(春) 01~02年度(春)	法学a 法学(通年)	担当者	小川 佳子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>法学及び憲法の基礎について学ぶ。 講義は、法、法律、裁判とは何か、という基本から行い、具体的な裁判制度、各種法律についても触れる。受講者には、憲法、法律、権利、契約、裁判といった法律的概念について具体的なイメージを掴んでもらいたい。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 法とは何か。</li> <li>2 私法と公法</li> <li>3 法と裁判</li> <li>4 憲法と法律</li> <li>5 憲法の原理</li> <li>6 憲法：人権（1）</li> <li>7 憲法：人権（2）</li> <li>8 憲法：人権（3）</li> <li>9 憲法：統治機構（1）</li> <li>10 憲法：統治機構（2）</li> <li>11 憲法：統治機構（3）</li> <li>12 憲法上の諸問題</li> <li>13 憲法上の諸問題</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
特に指定しない。		原則として期末試験で評価する。ただし特段の事情のある場合はその他の方法で評価を行うことがある。	

03年度以降(秋) 01~02年度(秋)	法学b 法学(通年)	担当者	小川 佳子
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>前期に続き、法について学ぶ。後期は、民事や刑事の具体的な事件を題材として、法と裁判について学習する予定である。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 法と憲法</li> <li>2 民事法概説</li> <li>3 民事事件（1）</li> <li>4 民事事件（2）</li> <li>5 民事事件（3）</li> <li>6 刑事法概説</li> <li>7 刑事事件（1）</li> <li>8 刑事事件（2）</li> <li>9 刑事事件（3）</li> <li>10 憲法・行政法概説</li> <li>11 行政事件</li> <li>12 憲法訴訟（1）</li> <li>13 憲法訴訟（2）</li> <li>14 憲法訴訟（3）</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
特に指定しない。		原則として期末試験で評価する。ただし特段の事情のある場合はその他の方法で評価を行うことがある。	

03年度以降(春) 01~02年度(春)	政治学概論 a 政治学総論(通年)	担当者	杉田 孝夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>政治学は古来、教養の学として長い伝統を築いてきました。近代以前においては統治者の教養の学あるいは統治の技術でした。政治学が役人や政治家になるための学問であるという見解が生まれた原因はそのような伝統に起因します。しかし統治者=被治者であるデモクラシーの現代においては、政治学はまず第一にすべての市民の教養の学でなければなりません。本講義はこのような観点に立って、市民のための政治学を目指します。</p> <p>「政治学概説 I」では、(I) 近現代の政治構造を理解するための基本概念を学び、ついで (II) 近代日本の政治構造の特質を学びます。</p>		<p>I&lt;政治学的理解のための基本概念&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 政治と政治学</li> <li>(2) 国家・主権・国民</li> <li>(3) 主権国家と国民国家</li> <li>(4) 自由と自由主義</li> <li>(5) 平等と民主主義</li> <li>(6) 公と私</li> <li>(7) 市民社会と国民国家</li> <li>(8) 国民国家と福祉国家</li> <li>(9) ナショナリズムとコスモポリタニズム</li> </ol> <p>II &lt;近代日本の政治&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(10) 明治憲法体制下の政治システム</li> <li>(11) 明治憲法体制の変質</li> <li>(12) 日本国憲法体制下の政治システム</li> <li>(13) 55年体制</li> <li>(14) ポスト55年体制と政権交代</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>&lt;参考文献&gt; 久米・川出・古城・田中・真淵『政治学』(有斐閣, 2003年), 川崎・杉田『現代政治理論』(有斐閣, 2006年), 飯尾潤『日本の統治構造』(中公新書, 2007)</p>		出席と期末試験による。	

03年度以降(秋) 01~02年度(秋)	政治学概論 b 政治学総論(通年)	担当者	杉田 孝夫
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>政治学は古来、教養の学として長い伝統を築いてきました。近代以前においては統治者の教養の学あるいは統治の技術でした。政治学が役人や政治家になるための学問であるという見解が生まれた原因はそのような伝統に起因します。しかし統治者=被治者であるデモクラシーの現代においては、政治学はまず第一にすべての市民の教養の学でなければなりません。本講義はこのような観点に立って、市民のための政治学を目指します。</p> <p>「政治学概説 II」では、まず(I) 国際政治の構造と変容を学び、ついで(II) 現代日本の政治制度と政治過程の主要な論点を学びます。</p>		<p>I &lt;国内政治と国際政治&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 国内社会と国際社会</li> <li>(2) 国際政治のイメージ</li> <li>(3) グローバル化と国際社会</li> <li>(4) 国際社会の政治</li> </ol> <p>II &lt;政治過程&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(5) 議院内閣制と民主主義</li> <li>(6) 議会</li> <li>(7) 政府</li> <li>(8) 官僚制と官庁システム</li> <li>(9) 政党と政党政治</li> <li>(10) 利益団体と政治</li> <li>(11) 選挙制度</li> <li>(12) 投票行動</li> <li>(13) 世論とメディア</li> <li>(14) 政治の質</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
<p>&lt;参考文献&gt;久米・川出・古城・田中・真淵『政治学』(有斐閣, 2003年), 川崎・杉田『現代政治理論』(有斐閣, 2006年), 山口二郎『政治のしくみがわかる本』(岩波ジュニア新書, 2009年)</p>		出席と期末試験による。	

03年度以降(春) 01~02年度(春)	民法 a,b 民法(春学期週2回開講)	担当者	遠藤 研一郎
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>【春学期週2回開講】</p> <p>本講義は、「民法総則」および「物権(担保物権を除く)」に関する諸制度、各条文の理解を深めるとともに、民法の導入科目として、民法の全体像をも理解させることを目的とする。</p> <p>なお、授業の具体的な進め方などは、受講者数を考慮して最終決定するが、いずれにせよ、具体的な事例(設問や判例)を素材として、受講者の問題発見能力・分析力・論理的思考力を養うことに主眼を置く。</p> <p>07年度以前入学者は、全学共通授業科目の民法 a、民法 b、08年度以降入学者は、民法 1、民法 2 のいずれかを既に修得していることを受講の前提とします。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ガイダンス, 民法導入(1) 契約</li> <li>2. 民法導入(2) 所有権, 人</li> <li>3. 民法導入(3) 債務不履行, 強制執行</li> <li>4. 民法導入(4) 担保</li> <li>4. 民法導入(5) 相続</li> <li>6. 総則基礎(1) 自然人①</li> <li>7. 総則基礎(2) 自然人②, 物</li> <li>8. 総則基礎(3) 法律行為総説, 無効・取消</li> <li>9. 総則基礎(4) 意思表示①</li> <li>10. 総則基礎(5) 意思表示②</li> <li>11. 総則展開(1) 総則における諸問題</li> <li>12. 総則基礎(6) 代理①</li> <li>13. 総則基礎(7) 代理②</li> <li>14. 総則展開(2) 総則における諸問題</li> <li>15. 総則基礎(8) 法人</li> <li>16. 総則基礎(9) 時効①</li> <li>17. 総則基礎(10) 時効②</li> <li>18. 物権基礎(1) 物権の基礎概念</li> <li>19. 物権基礎(2) 物権変動①</li> <li>20. 物権基礎(3) 物権変動②</li> <li>21. 物権展開(1) 物権法上の諸問題</li> <li>22. 物権基礎(4) 占有権①</li> <li>23. 物権基礎(5) 占有権②</li> <li>24. 物権基礎(6) 所有権</li> <li>25. 物権基礎(7) 用益物権</li> <li>26. 物権展開(2) 物権法上の諸問題</li> <li>27. まとめ①</li> <li>28. まとめ②</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
教科書は指定しない。各自が選定した基本書を使用すること。毎回、プリントを配布する。		受講者数が比較的少ない場合は、ある程度双方向の授業を行うことを前提に、平常点+レポートで評価する。受講者が多い場合には、期末テストを実施する。	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降(春) 01~02年度(春)	商法 a 商法(通年)	担当者	潘 阿憲																												
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>																													
<p>本講義は、会社法のうち、主として株式会社に関する法的規制を取りあげる。本講義の目標としては、初学者が会社法について基本的、体系的な理解を得られることを主眼とする。したがって、まずは会社法上の諸制度について、その基本的な内容と果たすべき機能を理解し、個々の制度をめぐるこれまでの解釈論を把握しておくことが必要となる。それと同時に、会社法上の諸制度は、実際にどのように運用されているのか、当該法制度は果たして企業社会の実態に合致しているのか、問題点があるとすれば、これを如何に克服すべきであるのかといった視点から、会社法上の諸制度を動的にとらえることも必要だと考えられる。そこで、講義時には、関連する資料や重要な裁判例を適宜に取りあげ、会社上の諸制度をめぐる具体的な議論や紛争の事例を検討し、「生きた会社法」の修得を目指したいと考えている。</p>		<table border="0"> <tr><td>第1週</td><td>企業形態と会社</td></tr> <tr><td>第2週</td><td>会社の設立(1)</td></tr> <tr><td>第3週</td><td>会社の設立(2)</td></tr> <tr><td>第4週</td><td>株式(1)</td></tr> <tr><td>第5週</td><td>株式(2)</td></tr> <tr><td>第6週</td><td>株式(3)</td></tr> <tr><td>第7週</td><td>株主総会(1)</td></tr> <tr><td>第8週</td><td>株主総会(2)</td></tr> <tr><td>第9週</td><td>株主総会(3)</td></tr> <tr><td>第10週</td><td>取締役と取締役会(1)</td></tr> <tr><td>第11週</td><td>取締役と取締役会(2)</td></tr> <tr><td>第12週</td><td>取締役と取締役会(3)</td></tr> <tr><td>第13週</td><td>監査役と監査役会(1)</td></tr> <tr><td>第14週</td><td>監査役と監査役会(2)</td></tr> </table>		第1週	企業形態と会社	第2週	会社の設立(1)	第3週	会社の設立(2)	第4週	株式(1)	第5週	株式(2)	第6週	株式(3)	第7週	株主総会(1)	第8週	株主総会(2)	第9週	株主総会(3)	第10週	取締役と取締役会(1)	第11週	取締役と取締役会(2)	第12週	取締役と取締役会(3)	第13週	監査役と監査役会(1)	第14週	監査役と監査役会(2)
第1週	企業形態と会社																														
第2週	会社の設立(1)																														
第3週	会社の設立(2)																														
第4週	株式(1)																														
第5週	株式(2)																														
第6週	株式(3)																														
第7週	株主総会(1)																														
第8週	株主総会(2)																														
第9週	株主総会(3)																														
第10週	取締役と取締役会(1)																														
第11週	取締役と取締役会(2)																														
第12週	取締役と取締役会(3)																														
第13週	監査役と監査役会(1)																														
第14週	監査役と監査役会(2)																														
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>																													
平出慶道＝山本忠弘＝田澤元章編『商法概論Ⅱ会社法』(青林書院)		筆記試験の成績による																													

03年度以降(秋) 01~02年度(秋)	商法 b 商法(通年)	担当者	潘 阿憲																												
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>																													
<p>本講義は、会社法のうち、主として株式会社に関する法的規制を取りあげる。本講義の目標としては、初学者が会社法について基本的、体系的な理解を得られることを主眼とする。したがって、まずは会社法上の諸制度について、その基本的な内容と果たすべき機能を理解し、個々の制度をめぐるこれまでの解釈論を把握しておくことが必要となる。それと同時に、会社法上の諸制度は、実際にどのように運用されているのか、当該法制度は果たして企業社会の実態に合致しているのか、問題点があるとすれば、これを如何に克服すべきであるのかといった視点から、会社法上の諸制度を動的にとらえることも必要だと考えられる。そこで、講義時には、関連する資料や重要な裁判例を適宜に取りあげ、会社上の諸制度をめぐる具体的な議論や紛争の事例を検討し、「生きた会社法」の修得を目指したいと考えている。</p>		<table border="0"> <tr><td>第1週</td><td>株式会社の計算(1)</td></tr> <tr><td>第2週</td><td>株式会社の計算(2)</td></tr> <tr><td>第3週</td><td>株式会社の計算(3)</td></tr> <tr><td>第4週</td><td>募集株式発行(1)</td></tr> <tr><td>第5週</td><td>募集株式発行(2)</td></tr> <tr><td>第6週</td><td>定款の変更</td></tr> <tr><td>第7週</td><td>資本の減少</td></tr> <tr><td>第8週</td><td>社債</td></tr> <tr><td>第9週</td><td>事業譲渡等</td></tr> <tr><td>第10週</td><td>会社の合併</td></tr> <tr><td>第11週</td><td>会社の分割</td></tr> <tr><td>第12週</td><td>株式交換・株式移転</td></tr> <tr><td>第13週</td><td>会社の解散・清算</td></tr> <tr><td>第14週</td><td>持分会社</td></tr> </table>		第1週	株式会社の計算(1)	第2週	株式会社の計算(2)	第3週	株式会社の計算(3)	第4週	募集株式発行(1)	第5週	募集株式発行(2)	第6週	定款の変更	第7週	資本の減少	第8週	社債	第9週	事業譲渡等	第10週	会社の合併	第11週	会社の分割	第12週	株式交換・株式移転	第13週	会社の解散・清算	第14週	持分会社
第1週	株式会社の計算(1)																														
第2週	株式会社の計算(2)																														
第3週	株式会社の計算(3)																														
第4週	募集株式発行(1)																														
第5週	募集株式発行(2)																														
第6週	定款の変更																														
第7週	資本の減少																														
第8週	社債																														
第9週	事業譲渡等																														
第10週	会社の合併																														
第11週	会社の分割																														
第12週	株式交換・株式移転																														
第13週	会社の解散・清算																														
第14週	持分会社																														
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>																													
平出慶道＝山本忠弘＝田澤元章編『商法概論Ⅱ会社法』(青林書院)		筆記試験の成績による																													

03年度以降(春) 01~02年度(春)	著作権法 a 著作権法(通年)	担当者	長塚 真琴
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>著作権という言葉を知らない人は今や少ない。しかし、著作権を正しく知るには、著作権法の条文を読まなければならない。それが独学ではなかなか難しいため、この講義が用意されている。入門講義としてあらゆる学部の学生を歓迎するが、履修制限を避けつつ、関心のない学生にご遠慮いただくため、今年度から成績評価が厳しくなるような評価方法を採用する。</p> <p>レジュメ集と新書を用い、裁判例に関する画像・音声やウェブサイトなど、視聴覚情報も重視しつつ講義を進める。レジュメ集は、講義開始後数週間以内に販売する。著作権法の条文はレジュメ集に収録してある。講義情報を掲載するサイトはこちら。<a href="http://www2.dokkyo.ac.jp/~less0080/">http://www2.dokkyo.ac.jp/~less0080/</a></p> <p>【今年度変更した点】←先輩からの情報は古いので注意！  (1)小テストの廃止。  (2)定期試験を持込一切不可とする。  (3)定期試験は全範囲から出題し、択一式を重視する。択一式はビジネス著作権検定初級と上級の間ぐらいのレベルである。記述式は説明問題が中心となる。  (4)定期試験結果の授業レポートシステムを通じた早期個別開示は、廃止する。</p>		1 ガイダンスと導入 2 著作物 1 3 著作物 2 4 著作者と著作権者 5 著作者人格権 6 著作権 1 7 著作権 2 8 著作権 3 9 著作権の制限 1 10 著作権の制限 2 11 著作権の譲渡とライセンス 12 著作隣接権 13 著作権の侵害 14 質問への回答と復習	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
教科書：長塚真琴『著作権法 a レジュメ集』 教科書：福井健策『著作権とは何か』（集英社新書） 参考書：大淵他『知的財産法判例集第 2 版』（有斐閣）		持込一切不可の定期試験のみによる。択一式の問題 25 問と記述式の問題を出題する。 出席は重視しない。	

03年度以降(秋) 01~02年度(秋)	著作権法 b 著作権法(通年)	担当者	長塚 真琴
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義では、著作物の種類や利用局面ごとに、著作権とその隣接分野で実際に起こった紛争や、法改正に向けてなされている議論を詳しく解説する。法学部の講義として、著作権法の基礎知識のある学生に向けておこなう。毎回、次週の前習のための文献が指定され、講義はそれを読んできたことを前提におこなわれる。</p> <p>レジュメの他に新書と判例集を用い、裁判例に関する画像・音声やウェブサイトなど、視聴覚情報も重視しつつ講義を進める。</p> <p>レジュメと予習文献は、毎回配布する。講義情報を掲載するサイトはこちら。<a href="http://www2.dokkyo.ac.jp/~less0080/">http://www2.dokkyo.ac.jp/~less0080/</a></p> <p>【今年度変更した点】←先輩からの情報は古いので注意！  上記著作権法 a の(1)~(4)と同様。ただし(3)について、択一式の問題はビジネス著作権検定上級レベルとする。記述式には事例問題の出題もありうる。</p> <p>○履修上の注意：この講義は応用編である。著作権に関する予備知識なしでこの講義をいきなり履修しても、単位を取得できない可能性がきわめて高い。</p>		1 ガイダンス 2 映画 3 ゲームソフト 4 インターネット 1 (アップロードとダウンロード/侵害の責任主体 1) 5 インターネット 2 (侵害の責任主体 2) 6 インターネット 3 (著作物性/引用) 7 音楽と放送 8 キャラクター 9 デザイン・応用美術 10 編集著作物 11 肖像権・パブリシティ権 12 高校教育と著作権 13 いわゆる二次創作 14 いわゆる擬似著作権	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
教科書：福井健策『著作権の世紀』（集英社新書） 参考書：大淵他『知的財産法判例集第 2 版』（有斐閣）、 中山他編『著作権判例百選第 4 版』（有斐閣）		持込一切不可の定期試験のみによる。択一式の問題 25 問と記述式の問題を出題する。 出席は重視しない。	

03年度以降（春） 01～02年度（春）	総合講座 a 総合講座（1） a	担当者	経済学部
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>「今後の社会を展望する」というタイトルの下で、学外から著名な方々を招き、講義をしていただきます。少子高齢化や情報化、グローバル化、地球環境問題の顕在化などによって、これからの社会は大きく変動していくと考えられます。世界や日本がどのように変化していくのか、そして私たちはそうした変化に同対応していけばよいのかを考えていきます。</p> <p>総合タイトルの性質上、社会経済文化など広範なテーマが取り上げられます。それぞれの分野の研究者・専門家・実務家の豊富な経験に基づく知見や最新情報のエッセンスをうかがえる貴重な機会です。</p> <p>学外からの講師をお招きするので、時間厳守で出席のこと。講義中の私語は厳禁。受講態度の悪いものは退室を命ずることがあります。</p>		第1回講義で説明します。	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
講師により参考文献が指示されることがあります。		授業中の態度およびレポートをもとに総合的に判断します。詳細は第1回授業で説明します。	

03年度以降（秋） 01～02年度（秋）	総合講座 b 総合講座（1） b	担当者	経済学部
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>「今後の社会を展望する」というタイトルの下で、学外から著名な方々を招き、講義をしていただきます。少子高齢化や情報化、グローバル化、地球環境問題の顕在化などによって、これからの社会は大きく変動していくと考えられます。世界や日本がどのように変化していくのか、そして私たちはそうした変化に同対応していけばよいのかを考えていきます。</p> <p>総合タイトルの性質上、社会経済文化など広範なテーマが取り上げられます。それぞれの分野の研究者・専門家・実務家の豊富な経験に基づく知見や最新情報のエッセンスをうかがえる貴重な機会です。</p> <p>学外からの講師をお招きするので、時間厳守で出席のこと。講義中の私語は厳禁。受講態度の悪いものは退室を命ずることがあります。</p>		第1回講義で説明します。	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
講師により参考文献が指示されることがあります。		授業中の態度およびレポートをもとに総合的に判断します。詳細は第1回授業で説明します。	

03年度以降（春）	特殊講義 a(経済学入門)	担当者	阿部 正浩
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義では、現実の経済社会を概観しなから、ツールとしての経済学を学習します。</p> <p>経済学は社会科学の女王とよばれています。経済学を用いた議論では、論理的厳密性が要求されます。この講義では、経済学を用いて議論できるように、経済学の基本的ツールを学べるようにしたいと考えています。</p> <p>また、経済学は実社会で生じている種々の問題を解決するためのツールでもあります。この講義では、経済学の基本的ツールを利用して、現実の問題をどのように分析できるようになるのか、についても学べるようにしたいと考えています。</p> <p>春学期はミクロ経済学の分野の基礎の基礎を学びます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. この授業の概要(オリエンテーション)</li> <li>2. 豊かさの誕生とその背景 (その1)</li> <li>3. 豊かさの誕生とその背景 (その2)</li> <li>4. 経済学者らしく考えるためには</li> <li>5. マーケットの仕組み (その1)</li> <li>6. マーケットの仕組み (その2)</li> <li>7. 働くとは (その1)</li> <li>8. 働くとは (その2)</li> <li>9. 消費の仕組み (その1)</li> <li>10. 消費の仕組み (その2)</li> <li>11. 企業の仕組み (その1)</li> <li>12. 企業の仕組み (その2)</li> <li>13. マーケットの失敗 (その1)</li> <li>14. マーケットの失敗 (その2)</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストはありません。参考文献は授業中に紹介します。		出席、レポート、期末テストで評価します。詳細は第1回目の授業で説明します。	

03年度以降（秋）	特殊講義 b(経済学入門)	担当者	阿部 正浩
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>秋学期はマクロ経済学の分野の基礎の基礎を学びます。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. この授業の概要(オリエンテーション)</li> <li>2. 三つのマーケット</li> <li>3. 経済の大きさをはかる (その1)</li> <li>4. 経済の大きさをはかる (その2)</li> <li>5. 経済が成長する理由 (その1)</li> <li>6. 経済が成長する理由 (その2)</li> <li>7. 経済が成長する理由 (その3)</li> <li>8. 経済が成長する理由 (その4)</li> <li>9. 経済が変動する理由 (その1)</li> <li>10. 経済が変動する理由 (その2)</li> <li>11. 経済が変動する理由 (その3)</li> <li>12. 経済が変動する理由 (その4)</li> <li>13. 失業と物価について (その1)</li> <li>14. 失業と物価について (その2)</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
テキストはありません。参考文献は授業中に紹介します。		出席、レポート、期末テストで評価します。詳細は第1回目の授業で説明します。	

03年度以降(春)	特殊講義 a(経営学科で何が学べるか)	担当者	経営学科
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義は、経営学科の新生に対して、4年間で学ぶ学問領域や学習対象についての見通しを立ててもらうことを目的としています。</p> <p>現在3年生後半から始まる就職活動までの時間は、残念ながら多くありません。1人1人が経営学科学生として何を・どのように学ぶか、その学問は将来どのように役に立つのか、などを考えながら教科を選択していく必要があります。経営学科生にふさわしい教養や体系的な学問を身につけ、勉強の仕方やプレゼンテーションの作法なども、自分のものとしなくてはなりません。</p> <p>経営学科には、マネジメント、ビジネス、情報、会計の4つのコースが用意されています。各コースごとに設定された科目を履修していくことで、それぞれの学問分野を効率的に履修できるように構成されています。この科目では、各コースの経営学科教員が、それぞれのコースの特色や各学問分野の話題を解説します。どのような学問分野があるのか、どのように勉強を進めていったらいいのか、どのゼミを選択したらよいか、など知りたいことがたくさんあると思います。そんな戸惑いや不安を解消するためにも、この講義に積極的に参加してください。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ガイダンス</li> <li>2 ビジネスコース(1)</li> <li>3 ビジネスコース(2)</li> <li>4 ビジネスコース(3)</li> <li>5 情報コース(1)</li> <li>6 情報コース(2)</li> <li>7 情報コース(3)</li> <li>8 情報コース(4)</li> <li>9 マネジメントコース(1)</li> <li>10 マネジメントコース(2)</li> <li>11 会計コース(1)</li> <li>12 会計コース(2)</li> <li>13 会計コース(3)</li> <li>14 まとめ</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
		出席および定期試験  各回の担当者ごとに2問出題	

		担当者	
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	

03年度以降(春) 01~02年度(春)	特殊講義 a(金融資産運用論) 特殊講義 B(金融資産運用論)	担当者	山崎 元
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義は、金融資産の運用について、理論と実際の両面の基礎知識と考え方を伝えることを目的とする。</p> <p>現在、世間的にもアカデミックにも個人の資産運用に関しては、十分な理論的基礎と実際に応用可能な方法とが組み合わせられた方法論が存在しないように思われ、誤った内容が「投資教育」と称して金融機関などを通じて一般に広まっているのが実態である。そこで、「正しくて体系的な個人の資産運用の手法と知識」の内容を確立することを、本講義の第一の目的としたいと考えている。</p> <p>また、個人の資産運用の他にも、年金や投資信託など機関投資家の運用の実態や、運用ビジネスのビジネス・モデルなど、現実生活に関係するテーマがあり、投資に関する理論的な研究は、モダンポートフォリオ理論や金融工学を経て、近年は行動経済学の影響も受けて、現在、流動的で、知的にも非常に面白い局面を迎えている。本講義では、できるだけこうしたトピックにも触れて、学生が金融市場をめぐるファイナンス(金融論)の研究に興味を持つようなガイダンスをして行きたい。</p> <p>個人のお金の運用に興味のある方、金融機関への就職を考える方、金融論の一分野としての投資理論に興味のある方などの参加を期待する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「金融資産運用論」の概要(ガイダンス)</li> <li>2. 運用常識の嘘と本当</li> <li>3. 割引現在価値と債券投資</li> <li>4. 株式の投資価値とモダン・ポートリオ理論</li> <li>5. 「市場の効率性」の本当の姿</li> <li>6. 行動ファイナンスと投資</li> <li>7. 資産配分(アセットアロケーション)の基礎</li> <li>8. 資産配分(アセットアロケーション)の実際</li> <li>9. 個人の資産運用計画</li> <li>10. 株式ポートフォリオの運用方法</li> <li>11. 投資から見る外国為替とデリバティブ</li> <li>12. 年金と投資信託の商品と運用</li> <li>13. 運用業のビジネスモデル</li> <li>14. 個人の資産運用の再論</li> </ol>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
参考文献として、『お金をふやす本当の常識』(拙著、日経ビジネス人文庫)、『新しい株式投資論』(拙著、PHP新書)。参考であって必須ではない。その他講義で適宜紹介する。		原則として期末試験の結果(100%)によって評価するが、試験にかえてレポートを評価する場合がある。試験はテーマ選択式の記述問題を予定している。	

03年度以降(秋) 01~02年度(秋)	特殊講義 a(金融資産運用論) 特殊講義 B(金融資産運用論)	担当者	山崎 元
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>この講義は、金融資産の運用について、理論と実際の両面の基礎知識と考え方を伝えることを目的とする。</p> <p>基本的に、春学期と同じ内容をカバーしますが、春学期の講義内容に対する反省を反映させて、適宜内容を入れ替えることがあります。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「金融資産運用論」の概要(ガイダンス)</li> <li>2. 運用常識の嘘と本当</li> <li>3. 割引現在価値と債券投資</li> <li>4. 株式の投資価値とモダン・ポートリオ理論</li> <li>5. 「市場の効率性」の本当の姿</li> <li>6. 行動ファイナンスと投資</li> <li>7. 資産配分(アセットアロケーション)の基礎</li> <li>8. 資産配分(アセットアロケーション)の実際</li> <li>9. 個人の資産運用計画</li> <li>10. 株式ポートフォリオの運用方法</li> <li>11. 投資から見る外国為替とデリバティブ</li> <li>12. 年金と投資信託の商品と運用</li> <li>13. 運用業のビジネスモデル</li> <li>14. 個人の資産運用の再論</li> </ol> <p>(春学期の反省を踏まえて、適宜変更します)</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
参考文献として、『お金をふやす本当の常識』(拙著、日経ビジネス人文庫)、『新しい株式投資論』(拙著、PHP新書)。参考であって必須ではない。その他講義で適宜紹介する。		原則として期末試験の結果(100%)によって評価するが、試験にかえてレポートを評価する場合がある。試験はテーマ選択式の記述問題を予定している。	

03年度以降(春) 01~02年度(春)	特殊講義 a(会社と社会の歩き方) 特殊講義 B(会社と社会の歩き方)	担当者	山崎 元
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義は、「働く社会人の常識」について学生が考察を深めることを目的とする。</p> <p>(注；学生も社会的存在であるという意味では立派な「社会人」であるが、ここでは「学校教育を終えた大人全般」の意味で「社会人」という言葉を使う)</p> <p>毎回の講義は、いわゆるキャリア・プランニング(職業人生設計)を考え、会社・官庁などで働くに際して、知っておきたいこと・考えておきたいことを伝えるパートと、講義に近い時点で起こっている経済・社会的問題を考えるパートとを併設する形で行いたい。</p> <p>前者に関しては、講師の職業人生経験(講師は会社員として12回転職した)を通じた会社と社会に関する考察を提示したい。</p> <p>後者については、その時々トピックに関する講師の論考等を題材にして議論してみたい。議論の素材は、「JMM」(<a href="http://ryumurakami.imm.co.jp/">http://ryumurakami.imm.co.jp/</a>)、「ダイヤモンド・オンライン」(<a href="http://diamond.jp/series/yamazaki/bn.html">http://diamond.jp/series/yamazaki/bn.html</a>)など無料購読が可能な媒体に講師が書いた原稿などを利用する。</p> <p>就職について考える材料を求める学生、現代の経済問題についてコメントしてみたい学生などの参加を期待する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 私、山崎元の職業遍歴(+ガイダンス)</li> <li>2. お金を稼ぐ立地条件の考察</li> <li>3. 仕事のやり甲斐とは何か</li> <li>4. 会社を評価することはどの程度可能か</li> <li>5. 職業人生設計の基本(「28歳」と「35歳」)</li> <li>6. 陽気な成果主義・陰気な成果主義</li> <li>7. 会社は誰のものか？</li> <li>8. 会社員の自由と不自由</li> <li>9. 人材採用の際の評価のポイント</li> <li>10. 転職の目的</li> <li>11. 転職の具体的手順とコツ</li> <li>12. ビジネスパーソンの情報収集</li> <li>13. 「評論家」のすすめ</li> <li>14. 社会・会社・個人について考える</li> </ol> <p>(上記は、キャリアプランニングを考えるパートで予定するテーマを記したものですが、予定は流動的で変更があり得ます。時事問題は毎回異なるテーマを取り上げます)</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
参考文献として、『会社は2年でやめていい』(拙著、幻冬舎新書)、『僕はこうやって11回転職に成功した』(拙著、文藝春秋社)など。参考であって、必須ではない。		原則として期末試験の結果(100%)によって評価するが、試験にかえてレポートを評価する場合がある。試験はテーマ選択式の記述問題を予定している。	

03年度以降(秋) 01~02年度(秋)	特殊講義 a(会社と社会の歩き方) 特殊講義 B(会社と社会の歩き方)	担当者	山崎 元
<b>講義目的、講義概要</b>		<b>授業計画</b>	
<p>本講義は、「働く社会人の常識」について学生が考察を深めることを目的とする。</p> <p>毎回の講義は、いわゆるキャリア・プランニング(職業人生設計)を考え、会社・官庁などで働くに際して、知っておきたいこと・考えておきたいことを伝えるパートと、講義に近い時点で起こっている経済・社会的問題を考えるパートとを併設する形で行いたい。</p> <p>キャリア・プランニングに関して取り上げる内容は基本的に春学期と同じだが、時事問題に関しては、春学期と異なる内容を取り上げる。</p> <p>議論の素材は、「JMM」(<a href="http://ryumurakami.imm.co.jp/">http://ryumurakami.imm.co.jp/</a>)、「ダイヤモンド・オンライン」(<a href="http://diamond.jp/series/yamazaki/bn.html">http://diamond.jp/series/yamazaki/bn.html</a>)など無料購読が可能な媒体に講師が書いた原稿などを利用する。</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 私、山崎元の職業遍歴(+ガイダンス)</li> <li>2. お金を稼ぐ立地条件の考察</li> <li>3. 仕事のやり甲斐とは何か</li> <li>4. 会社を評価することはどの程度可能か</li> <li>5. 職業人生設計の基本(「28歳」と「35歳」)</li> <li>6. 陽気な成果主義・陰気な成果主義</li> <li>7. 会社は誰のものか？</li> <li>8. 会社員の自由と不自由</li> <li>9. 人材採用の際の評価のポイント</li> <li>10. 転職の目的</li> <li>11. 転職の具体的手順とコツ</li> <li>12. ビジネスパーソンの情報収集</li> <li>13. 「評論家」のすすめ</li> <li>14. 社会・会社・個人について考える</li> </ol> <p>(上記は、キャリアプランニングを考えるパートで予定するテーマを記したものですが、予定は流動的で変更があり得ます。時事問題は毎回異なるテーマを取り上げます)</p>	
<b>テキスト、参考文献</b>		<b>評価方法</b>	
参考文献として、『会社は2年でやめていい』(拙著、幻冬舎新書)、『僕はこうやって11回転職に成功した』(拙著、文藝春秋社)など。参考であって、必須ではない。		原則として期末試験の結果(100%)によって評価するが、試験にかえてレポートを評価する場合がある。試験はテーマ選択式の記述問題を予定している。	

03年度以降（春） 01～02年度（春）	特殊講義 a(モノ作りと環業革命 2010) 特殊講義 A(モノ作りと環業革命 2010)	担当者	山根 一眞
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>文明が直面している最大の課題は、地球温暖化です。温暖化によって地球上のあらゆる生物が絶滅の危機に瀕しています。温暖化問題、生物多様性とは何か、危機にどう対処すべきかは、社会人、企業人となってから絶対に避けて通れない課題です。しかし、その中身は複雑多岐で、全体像を把握するのは簡単ではありません。</p> <p>そこで、一人一人がしっかりと「地球温暖化」や「生物多様性」の「基礎知識」を身につけ、目から鱗の「視点」が身につくための一助となるよう努めましょう。</p> <p>低炭素化社会という新しい文明の創造は、若い皆さんがこれから担う生きがいのある熱い仕事でもあります。その仕事は、まったく新しいモノ作りであり、わくわくする新しい社会の創造です。モノづくり企業や自治体などの現場では、新しい時代を見据えた挑戦が続いています。私は日々、その先端現場の取材を続けているため、そのホットな成果を最優先でお伝えします。</p> <p>私は10年以上にわたり「環境を基軸とする新産業革命＝環業革命」を提唱してきましたが、皆さんがその「環業革命」の担い手になってほしいと願っています。</p> <p>なお、この講義では、ノンフィクション作家として40年以上にわたり取材執筆、テレビ報道してきた体験を元に、日々の事件やニュースの深層も解き明かしながら、「映像や写真」を駆使し大学の講義とは思えないダイナミックな90分を構成します。</p>		<p>(1) 世界一わかりやすい地球温暖化問題</p> <p>(2) 低炭素化社会実現のための「環業革命」への道</p> <p>(3) 今、最も熱いエコ最先端技術の現場報告</p> <p>(4) 昆虫や動物たちが醸す生物多様性と地球生命の世界 (生きたままの生物を教室に持参することもあります)</p> <p>(5) 台風、集中豪雨、洪水、氷河溶解、巨大地震など巨大災害の現実と克服（現場取材報告）</p> <p>(6) 特別ゲストを招いてのスペシャル講義 出版社マガジンハウス社とのコラボレーションで、時事テーマに応じた最もホットな著名ゲストを招き、特別講義と私のトークショーを行う計画が進んでいます。年間4～5回行うこのスペシャル講義内容を、それぞれ1冊のブックレット形式の本にまとめ一般向けに出版していくプロジェクトです。このスペシャル講義では、著名ゲストと学生との質疑応答も大事な要素です。皆さんが「獨協大学から社会へ情報発信」の一翼を担いながら、価値ある本づくりに参加して下さい。</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
山根一眞著『環業革命』（講談社）講義はこの本の流れに沿って進めます。講談社の在庫がなくなりましたがこの講義のために必要な部数の再版が実現しました。ぶっくぎやらしいDUOで申し込んで下さい。		期末のレポートで評価を行います。出席回数が多い者は評価に加味します。なお、講義中に他学生の迷惑になる「私語」が目立つ者は、単位取得は不可とする決意です。	

03年度以降（秋） 01～02年度（秋）	特殊講義 b(モノ作りと環業革命 2010) 特殊講義 A(モノ作りと環業革命 2010)	担当者	山根 一眞
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義目的は春学期と同じですが、内容は春学期とは異なるため春学期とは別個の単位取得対象となります。</p> <p>春学期と秋学期を通して受講することを希望します。</p>		<p>春学期の講義目的を引き継ぎますが、秋学期の授業内容は春学期とは異なります。</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
春学期と同じです。		春学期と同じです。	

03年度以降(春) 01~02年度(春)	特殊講義 a(知のデジタル仕事術 2010) 特殊講義 A(知のデジタル仕事術 2010)	担当者	山根 一眞
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>インターネットを中心とする巨大な新メディアを通じて、私たちはどんな知識でも簡単に手に入れられます。しかし、その全ては「誰かが」「すでに記した」ものにすぎず、ネット時代に暮らす私たちは、かえってモノやコトの真の姿が見えなくなっています。</p> <p>一方、知ろうとしているモノやコトの正しい姿、本質を理解するために、どうパソコンやインターネットを使いこなせばいいのか…。デジタル時代ならではのきちんとした「知の仕事術」のノウハウもほとんど語られていません。</p> <p>そこで、ノンフィクション作家として40年以上にわたり取材・執筆、報道活動を続け、また約20冊の「情報の仕事術」関連の本を執筆してきた経験をもとに「山根流の情報の仕事術」の最新ノウハウを披露します。</p> <p>また、JAXA(宇宙航空研究開発機構)の嘱託職員や内閣府の宇宙関連委員としての立場を活かし、人類のフロンティアである「宇宙」、「しんかい6500」に搭乗して見てきた「深海」の驚異の世界、40年にわたり通い続けてきた「アマゾン」など、パーチャルではない過酷だが何ともしずきなリアルワールドも紹介しましょう。</p> <p>講義では、「映像や写真」を駆使し、また情報通信やコンピュータの歴史を物語る現物の機器、歴史的なメディアも教室に持ち込み、大学の講義とは思えないダイナミックな90分を構成します。</p>		<p>(1) 初めて知るインターネットの思いがけない検索術</p> <p>(2) 体験で語る相手を引き込む取材インタビューの方法</p> <p>(3) 1週間の重大ニュースを元に最新情報を徹底解明</p> <p>(4) 人の心を揺り動かす美しい文書の作成法</p> <p>(5) 究極の書類の整理法「山根式袋ファイル」とデジタルメディアの最終整理法「デジタル袋ファイル」を披露</p> <p>(6) 「現物」で語るコンピュータと情報通信の50年史</p> <p>(7) 巨大大事故、災害の現場で学んだこと。</p> <p>(8) 小惑星イトカワ、月や金星など日本の惑星探査の最新情報を随時解説。</p> <p>(9) 「しんかい6500」が深海にみつけた地球生命の原点。</p> <p>(10) 特別ゲストを招いてのスペシャル講義</p> <p>獨協卒業生のマスコミ人がつくる会には150人ものメンバーが参加しています。こういった卒業生を中心とした魅力あふれるゲストを招き、特別講義と私とのトークショーを行う計画を進めています。</p> <p>また、「知識」ではなく皆さんが求めている「生き方」への助言が得られるゲストもお招きして、膝を交えた対話ができる機会も設けたいと考えています。</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
山根一眞著『賢者のデジタル』(マガジンハウス刊) 日本経済新聞で10年にわたり連載執筆した記事をまとめた本で、講義で随時使います。ぶっくぎやらしいDUOで注文して下さい。		期末のレポートで評価を行います。出席回数が多い者は評価に加味します。なお、講義中に他学生の迷惑になる「私語」が目立つ者は、単位取得は不可とする決意です。	

03年度以降(秋) 01~02年度(秋)	特殊講義 b(知のデジタル仕事術 2010) 特殊講義 A(知のデジタル仕事術 2010)	担当者	山根 一眞
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>講義目的は春学期と同じですが、内容は春学期とは異なるため春学期とは別個の単位取得対象となります。</p> <p>春学期と秋学期を通して受講することを希望します。</p>		<p>春学期の講義目的を引き継ぎますが、秋学期の授業内容は春学期とは異なります。</p>	
テキスト、参考文献		評価方法	
春学期と同じです。		春学期と同じです。	

		担当者	
講義目的、講義概要		授業計画	
テキスト、参考文献		評価方法	

03年度以降（秋） 01～02年度（秋）	特殊講義 b(資本市場の役割と証券投資) 特殊講義 B(資本市場の役割と証券投資)	担当者	経済学部
講義目的、講義概要		授業計画	
<p>本講義では、毎回「野村証券グループ」の講師陣がリレー方式により、今日の資本市場に求められる役割と証券投資に関する基礎的な事項や考え方について、理論と実務の両面からわかりやすく解説する。証券・金融業界の第一線で活躍する「プロ」の生の声を聞けることは、単なる金融リテラシーの習得にとどまらず、今後の社会人としてのキャリア形成に向けて、自らの職業意識を醸成するうえでもきわめて有用な機会であると考えます。</p>		未定	
テキスト、参考文献		評価方法	
<p>本講義での資料は、毎回受講者自身の手により事前に本学サーバー上の dainet 共有フォルダからダウンロード・印刷のうえ持参すること。アクセス方法は初回に説明する。</p>		定期試験の成績により評価する。	

## 〈外国人学生・帰国学生〉

外国人学生・帰国学生が履修する科目のシラバスは、『全学共通授業科目』のシラバスに掲載されています。該当ページを参照してください。

※履修登録にあたっては、『授業時間割表』、『シラバス』、各種掲示をよく確認してください。

### 〈2001～2007年度入学者〉

科目名 (07以前入学者用)	担当教員 (春学期 / 秋学期)	曜時	全学共通授業科目 シラバス該当ページ
日本事情a,b	守田逸人 / 守田逸人	木4	134
日本語Ⅰ a,b	各担当教員 / 各担当教員	—	287
日本語Ⅱ a,b	斎藤 明 / 斎藤 明	月3	288
日本語Ⅱ a,b	江添 真紀子 / 江添 真紀子	水3	289
日本語Ⅱ a,b	武田 明子 / 武田 明子	水4	290
日本語Ⅱ a,b	桂 千佳子 / 桂 千佳子	木2	291

### 〈2008年度入学者～〉

科目名 (08以降入学者用)	担当教員 (春学期 / 秋学期)	曜時	全学共通授業科目 シラバス該当ページ
歴史と文化2(日本事情1,2)	守田逸人 / 守田逸人	木4	134
日本語(総合Ⅰ Aa,b/総合Ⅰ Ba,b/総合Ⅰ Ca,b/)	各担当教員 / 各担当教員	—	287
日本語(総合Ⅱ a,b)	斎藤 明 / 斎藤 明	月3	288
日本語(総合Ⅱ a,b)	江添 真紀子 / 江添 真紀子	水3	289
日本語(総合Ⅱ a,b)	武田 明子 / 武田 明子	水4	290
日本語(総合Ⅱ a,b)	桂 千佳子 / 桂 千佳子	木2	291

シラバス 経済学部

---

2010年4月1日発行

獨協大学教務課

〒340-0042 埼玉県草加市学園町1-1

電話 048-946-1657



DOKKYO UNIVERSITY

学 科	学年	氏 名
学科	年	